富本及新内全集

緒　言

人間には誰でも持つて生れた趣味性と云ふものがある。この趣味性を滿足せしめんが爲には藝術を欲求する。その藝術の中でも最も痛切に憧れるものは音樂である。

音樂の憧憬は常に趣味性の滿足からばかりではない。人間の勞を醫する上に於ても、音樂は無くてならないものである。勞働に疲れて歸つて來たものも音樂の慰めを欲求する。腦髓を荒して歸つて來たものも音樂の慰めを欲求する。斯くして尖つた神經は快く常態に復し、弛んだ筋肉も亦引き緊まつて、茲に再び新しい精力を充實して來るので

ある。

されば何れの時代にも、人間の生活と離るべからざるものは音樂である。音樂が無ければ人間は樂しく生を保つことが出來ない。まだ文學や美術の何物たるかを解し得ない時代にさへ、逸早く鄕土藝術としての音樂を到る所に見ることの出來たのは是れが爲である。

鎖國時代には自分の生れた鄕里のみの鄕土音樂に滿足してゐた日本人も、今では國民藝術としての日本音樂を、普ねく解し且つ樂しむのでなければ滿足出來なくなつた。さうなると、乏しいのは日本音樂の文献である。

音樂の歌詞と節調とは固より離るべからざるものである。先づ其歌

詞を理解することが出來てこそ、節調の妙味は更に一層の面白さを増すのである。而かも日本の音樂に在つては、この歌詞を理解することが頗る困難である。

私達は日本音樂の研究に從事してからもう二十年にも餘るけれど何時も〳〵弱らされるのはその歌詞の難解なことである。同好者の間にも此の嘆を同じうするものが多い。況して一般の日本音樂愛好者に取つてこの不便不自由はどんなに甚しいものだか知れない。

日本音樂の歌詞は頗る難解である上に、それを生命としてゐた人たちの不注意から、散逸したものも尠くはない。私たちは何とかして此散逸しつゝある日本音樂の文献を保存したいものだと考へた。啻に保

存するばかりでなく、これを文學上から研究して、所謂日本音曲の全集を大成したいものだと志した。

さう考へもし志しもしたものゝ、偖この事業は容易なことではない。莫大な費用もかゝる。長い時間を要する。それ等の困難な條件に對して費用の上に於ては、私達の先輩である矢野正世氏や、文献事業の功勞者である小川菊松氏が後援を與へて呉れることゝなつた。又研究の上に於ては、日本音曲各流各派の權威者や、文學的に斯道の研究を續けて居られる笹川臨風博士や岡野知十氏が監修の任に當つて下さることになつたので、どんなに心强いかも知れない。

たゞ困つたのは時間の問題である。此種の仕事はとても一定の時期

を劃して大成さるべき筈のものではない。死ぬるまでかゝッて諄々倦まずに、研究を續けても、これで十分だと誇るに足るものは到底出來つこはない。さればと云つて、時期を限らなければ何時まで經つても世に發表することの出來る機會には到達し得なからうと思ふ。

其處で最初に刊行した『日本音曲全集』十二卷は、長唄、淸元、常磐津、河東、一中、薗八、荻江、富本、新內、小うた及歌澤、端唄、地唄及箏曲、義太夫、琵琶、流行唄、謠曲の各種に亙る全集で、あらゆる方面から涉獵した古本、新本を對照して歌詞の校合を嚴密にし、其由來と筋に就ての解說や、其難解の文句に就ての註釋や、それ等を出來得る限り正確に且つ妥當に施すことに努めた。更に續篇として、

長唄、義太夫、臺辭全集の三卷を增刊し全十五卷となつたのである。無論これで十分なものとは信じてゐない。足りないところも多からう。誤れる點も尠くはなからう。それ等に就いては大方諸賢の叱正を仰ぎ、また自からも研究を重ね〳〵て、補足訂正を怠らない考へである。たゞ此全集の發刊によつて、日本音曲を味ふ上に幾分たりとも貢献するところが有り得たならば、私達の目的の一分は達したものと謂つてもいゝ。

昭和三年三月

中内蝶二
田村西男

凡例

◇……本卷は現今最も一般に流布されて居る富本節の淨瑠璃三十五曲と新内節の淨瑠璃四十五曲とを合輯し、嚴密に章句を校訂し、なほ難解の章句には、一々鼇頭に小註を施して、一見何人にも辭句の意味がわかるやうに努めました。

◇……排列順は、すべていろは順によりましたが、いとゐ、おとを、えとゑは音讀に便あるために同一の部門に組入れました。

◇……題名は捜索に便あらしむるために、本題の下部に括弧して通俗的な略稱をも添へて置きました。例へば『若木仇名草』（蘭蝶）とい

ふが如きであります。

◇……淨瑠璃の作者、作曲者、初演の太夫、三味線、上演當時の劇場及主役の俳優、其の年代等は、主として正本並びに東京音樂學校編纂の『近世邦樂年表』『歌舞伎年代記』『續歌舞伎年代記』『續々歌舞伎年代記』『歌舞伎狂言細見』等を參照し、解說の中に掲げて置きましたが、年代其他に就て、些か疑問のありますものは、前掲の諸書の中に見えましても、わざと省いて置きましたのもあります。

◇……卷末の富本節及び新内節の歷史に就ては、町田博三氏の『江戶時代音樂通解』、岡本文彌氏の『新内軟派』雜誌『歌舞音曲』等を參照し、尙ほ富本、新内兩派の古老方の談話をも取入れて記述いたし

ましたから、從來傳へられてゐるものよりはやゝ正鵠に近いものと思ひます。

◇……本全集の編纂に就いては、小泉迂外氏の努力を煩はしたものが尠くありません。同氏の勞を謝して置きます。

富本及新内全集目次

富本の部

い

幾菊蝶初音道行（忠信）……三
徒髪戀曲者（松風）……九

は

母育雪間鶯（山姥）……一六
春夜障子梅（夕霧）……二四
花川戸身替の段（身替お俊）……三〇
俠容形近江八景（小いな）……三八

に

拙筆力七以呂波（乙姫）……四三

ほ

蓬萊宮……四五

と

歳朝嘉例壽（長生）……四六

ち

ちらし書仇命毛（お菊幸助）……四九

お

老松……五四

た

田面雁露手枕（お浦新三）……五六

達模様吾妻八景（小ぎく）……五八

そ

其俤淺間嶽（あさま）……六三
染幟菖蒲の彩色（色法印）……六九

つ

月柳廓髮梳（新萬歳）……七一

な

茂懺悔睦言（扇寶高尾）……七四
七重咲浪花土産（稽古娘、又、浪花土産）……八五
名酒盛色中汲（お菊幸助）……八八
那須野……九三

く

草枕露の玉歌和（玉川）……九六

や

柳糸繼苧環（お三輪）……九八

ま

まゐらせ候連理の橘（蟲賣）……一〇一

こ

艶容錦繪姿（新お七）……一〇八

さ

濡紫色水上（船の高尾）……一一三

咲初花振袖（道成寺道行）……一一八

ゆ

雪解松操織（常磐）……一二〇

め

女姿酒替ぬ中仲く（鞍馬獅子）……一三〇

み

道行念玉蔓（長作）……一三四

道行戀飛脚（梅川忠兵衛）……一四二

し

十二段君が色音（碁盤忠信）……一四六

新曲神樂獅子（神樂獅子）……一五五

新曲高尾懺悔（高尾懺悔）……一六一

も

百夜菊色の世中（檜垣又關寺）……一六五

せ

全盛操花車（木遣り、又、花車）……一七二

新内之部

い

一の谷嫩軍記（一の谷）……一七七

組打の段……一七七

妹脊の門松（お染）……一八四

は

初日の松（御祝儀）……一八九

花衣いろは縁起（良辨杉）……一九一

を

男作出世貝唄（白藤源太）……一九五

わ

若木仇名草（蘭蝶）……二〇五
榊屋口説の段……二〇五

か

歸咲名殘命毛（尾上伊太八）……二一六
苅萱桑門筑紫轢（石童丸）……二二七
高野山の段……二二七
加賀見山舊錦繪（加賀見山）……二三一
草履打の段……二三一
釜淵双級巴（紙子責）……二三八
紙子責の段……二三八

よ

與話情浮名横櫛（源氏店）……二四四

た

道中膝栗毛（彌次喜多）……二五一
組打の段……二五一
富士川の段……二六一
市子口寄の段……二六九
安部川の段……二七四
赤坂並木の段……二七八
卵塔場の段……二八四

な

浪枕浮名高橋（高橋お傳）……二八九
浪之助毒殺の段……二八九

う

浮名初紋日（小七菊の井）……二九六

く

廓文章（夕霧伊左衛門）……三〇三

や

八重霞浪花濱荻（お園六三）……三〇七
新屋敷の段……三〇七

ま

眞夢血染抱柏（花園平三）……三一八

け

傾城音羽瀧（音羽丹七）……三二八
傾城三度笠（梅川）……三三四

ふ

二重衣戀占（花咲綱五郎）……三四一
雙紋刀銘月（お花半七、露時雨裳浪）……三五三
不斷櫻下總土産（佐倉宗吾）……三六二
宗吾住家の段……三六三
子別れの段……三六七
藤葛戀の柵（早衣喜之助）……三七三

こ

戀娘昔八丈（お駒才三）……三七八
城木屋の段……三七八
鈴ケ森の段……三八二
戀衣對白無垢（哥波義助）……三八六
子寶三番叟（御祝儀）……三九二

あ

茜染野中隠井（梅の由兵衛）……三九四

明烏夢泡雪（明烏）……四〇三

浦里部屋の段……四〇三

浦里雪責の段……四〇九

明烏後正夢（正夢）……四一四

浦里時次郎道行の段……四一四

さ

里空夢夜櫻（夜櫻）……四一九

き

鬼怒川物語（累身賣）……四二四

かさね身賣の段（上の卷）……四二四

かさね身賣の段（下の卷）……四二八
鬼怒川昔噂（法印場）……四三四
め
名物姥ケ餅（姥ケ餅）……四四一
せ
關取千兩幟（千兩幟）……四五〇
稻川內の段……四五〇
相撲場の段……四五五
千日寺名殘鐘（三勝半七）……四五八
三勝緣切の段……四五八
富本節の歷史……四六七
新內節の歷史……四七八
索引……四八九

富本全集

茂みのまがひ道　草が茂り生ふので方向を間違ふ意
弓手　左手のこと
馬手　右手のこと
あさる雉子　餌をあさる雉子をいふ
ほろゝうつ　ほろゝは雉子の啼聲、うつは羽を打つ音
刎ね袴　得意になる様子
宇迦の御魂　稻荷の神をいふ
甕の原　山城國木津

幾菊蝶初音道行（忠信）

〽戀と忠義はいづれが重い、かけて思ひは量りなや。静に忍ぶ都をば、後に見捨てゝ旅立ちて、大和路さして、行く野路も、合〽馴れぬ茂みのまがひ道、弓手も馬手も若草を、分けつゝ行けば、あさる雉子のぱつと立つては、合ほろゝけん〳〵、合ほろゝうつ。合〽汝は子故に身を焦がす、我は戀路に迷ふ身の、合ア、浦山しねたましや。合〽初雁がねの女夫連、合つま持ち顔の刎ね袴、合人よりましの眞柴さす、合〽宇迦の御魂の御社は、いと尊とくも晃々と、合霞の中に甕の原、合〽わきて、筐の鼓の可愛い、可愛い〳〵の睦言も、人にはつゝむ帛紗物。合〽夫を便りに突く杖の、心細野を打ち過ぎて、合〽谷の合鶯、合初音の鼓、合〳〵、合〽調べ綾なす音に連れて、連れて招くさ音につれて、後れ走なる忠信が、吾妻からげの旅姿、合〽脊に風呂敷確とせたら負うて、合野

道畦道ゆらり、合ゆらり、輕い取姿いそ〳〵と、合目だゝぬやうに道隔て、忠〽イヤ申し靜樣、テモ早いお足、さぞお待兼なされましたでござりませう。靜〽忠信殿、道すがらの心遣ひ、御君樣の御隱れ家、吉野の里へも今宵しと、聞いて心は急かるれど、道はかどらぬ女子の足。忠〽ハテ其やうにきな〳〵と思召さぬがようござります。やがてめでたうお二人の、縁は盡きぬ妹脊川。靜〽かはらぬ春を三吉野の、山も霞みて、両人〽今朝は見ゆらん。〽見渡せば四方の梢も綻びて、梅ケ枝うたふ歌姫の、里の男が聲々に、合〽我妻の、天井拔けて据ゑる膳、晝の枕はつがもなや。合天井拔けて据ゑる膳、晝の枕はつがもなや。可笑し烏の一節に、〽我も初音の此の鼓、君の榮を壽きて、合二上り〽德若に御萬歲とは、君も榮えてましんます、合愛嬌ありける柳腰、よい中村の櫓幕、櫓太鼓の賑〳〵と、商ひ神の若戎、繁昌まします其德に、御田の稻には穗に穗をさかえ、合寶御船へ萬石船、色の實入に、合今年綿、誠にめで

の東北に在り「みかの原わきて流るゝ泉川いつみきとてか戀しかるらん」(百人一首)

初音の鼓　解說のところに詳しく述べてある

調べ綾なす　鼓を上手に面白く打つこと

吾妻からげ　裾を端折つて帶に挾む事

せたら負うて　脊負うてと云ふに同じ

輕い取姿　身輕な扮装をいふ
我君様　義經を指す
きな〳〵　くよ〳〵と心配する意
妹背川　夫婦の仲を妹背山を流れる吉野川に譬ていふ
綻びて　花が咲くことをいふ
梅ケ枝唄ふ歌姫　鶯の異名
我妻が　俚謠の文句
柳腰　美人の譬
中村の櫓幕　中村座

たうさむらひける。合へやしよめ〳〵、京の町のやしよめ、賣つたる物は何々、蛤々、合蛤〳〵、合〳〵〳〵、蛤見さいなと、賣たる物は、何々、蛤早き貝合せ、合三下り へ彌生は雛の妹脊中、合へ女雛男雛と並べて置いて、詠めに飽かぬ三日月の、へ宵に寝よとはきぬ〳〵に、急かれまいとの戀の慾、櫻は酒が過ぎたやら、へ桃にひぞりて後向き、羨ましうはないかいな。へまして女子の果敢なさは、男の嘘と露知らず、へ誠明しの恨なく、そして明かすが實の實、合其眞實も知らずして、仇惚れらしい何ぢやいナ。合へ早や東雲の時鳥、今日ぞ皐月の花あやめ、加茂の葵に藤の森、代々の例しの競べ馬。はい合はい〳〵〳〵。へそも〳〵馬に七箇の祕所、三個の手綱、五箇の鞍、眞先かけて合乗り出だす、合運べ小足に千鳥早に、合木の根岩角乗り越えて、天晴見事や派手らしや。忠へせめては憂さを、オ、幸々、へ姓名添へて給はりし、御着長を取り出だし、君と敬ひ奉ろっ へ静は皷を御顔と、よそへて上に

沖の石。人こそ知らね西國へ、御下向の御海上、合波風あらく御船を、住吉浦に吹き上げられ、夫より吉野にましますよし、合やがてぞ參り候はんと、互に形見を取をさめ、實に此鎧を給はりしも、兄繼信が忠勤なり。靜〽何繼信が忠勤とや。〽誠にそれよ、越し方を、ウタイ〽思ひぞ出づる、〽浦波に、ひらり、合ひらり、ひらり、合ひらめく太刀先三保の谷が、行くを遣らじと景清は、合長刀小脇に掻い込んで、兜の錣を引き千切り、合別つて左右へ別れ行く。合〽何れも働き、兄繼信が、八島の戰ひ、我君の御馬の矢表に、駒を駈け据え立ち塞がる。合〽オ、聞き及ぶ其時に、平家の方にも名高き強弓。合〽能登守教經と、合名乘りもあへずよつ引いて、〽放つ矢先は恨めしや、兄繼信が胸板に、堪りもあへず眞逆樣、合アハブシ〽敢なき最期は武士の、合忠臣義士の名を殘す、思ひ出づるも涙にて、袖は乾かぬ筒井筒、合〽いつか御身も伸びやかに、春の柳生の絲長く、合枝を連ぬる御契り、などかは朽ちしかるべきと、

の櫓に下した定紋の幕をいふ

徳若に　賣つたる物は何々まで、萬歲の唄

今年綿　其年に作つた新綿をいふ

やしよめ　京の町の物賣の女をいふ。八瀬女を訛つたもの

貝合　雛祭の行事

彌生　舊暦三月

きぬ〴〵　朝の別れ

櫻は酒が　櫻の色の

薄紅 いをいふ

ひぞり　拗ること

加茂の葵　加茂の葵祭をいふ

藤の森　藤の森神社の祭には騎馬武者行列がある

競べ馬　加茂の競馬

千鳥早　飛ぶ形容

御着長　大將の鎧

上に沖の石　鎧の上に鼓を置くことをかける

住吉浦　攝津の海邊

互に形見　靜は鼓、

互ひに諫めいさめられ、急ぐとすれどはかどらぬ、蘆原峠鴻の里、雲と見紛ふ三吉野の、麓の里にぞ着きにける。

【解説】　此の曲は延享四年竹田出雲と並木千柳が書卸した『義經千本櫻』の四段目で、吉野へ落ちた義經の隱家へ、忠信に化けた源九郎狐が靜御前を伴つて行くといふ怪異な道行の淨瑠璃である。初めは專ら義太夫で行はれたが文化五年五月江戸中村座で『千本櫻』の通し狂言を上演した際、『幾菊蝶初音道行』の外題で鳥羽屋里長が節付けし、二代目富本豐前太夫、同大和太夫、同和泉太夫、三味線三保崎兵助、鳥羽屋里長等によつて演奏されたので、瀬川路考の靜御前、中村歌右衛門の源九郎狐も好評であつたが、分けて富本連中の淨瑠璃が大評判であつた。それ故後年清元でも上演するやうになつたが維新前迄は必ず富本の出語りと定まつてゐた。この吉野山の道行は、『忠信』とは稱してゐるものゝ、實は狐の化けた忠信と、靜御前との道行で、吉野山の御殿には、それより前に既に、本統の佐藤忠信が來てゐたのであ る。そこ

で、狐は直ぐに見あらはされたが、何故狐が化けて静御前の供をしたかと云ふに、それは、静が義經から形見として貰つて、大切に所持してゐた初音の鼓の音にあこがれてゞある。その鼓にはつてある皮は、この忠信狐の親狐の皮であつた。子狐はそれ故親を慕ふ心持で何處までもと附いて來たのであつた。義經も不憫に思つて、初音の鼓を其狐に與へ、源九郎狐と云ふ名まで附けてやつた。狐は喜んで、その通力によつて、今宵一山の悪僧共が館へ押し寄せて來ることを敎へ、自分も防ぎの軍勢の中にまじつて、悪僧共をなやましたのであつた。

忠信は鎧を義經から形見に貰つたのでいふ

強弓　強弓を引く達人をいふ

胸板　胸の正面をいふ

枝を連ぬる　連理の枝の譯で契りの濃かなこと

蘆原峠　はかどらぬ足を蘆にかける。八木街道から吉野山に登る道を蘆原峠越と云ふ

徒髪戀曲者（松風）

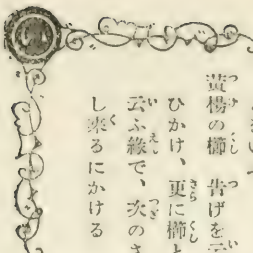
へ松島や、小島の蜑の月にだに、影を汲むこそ心あれ〳〵。運ぶは遠き陸奥の、へ千賀の鹽竈、松の村立ち霞む日に、汐路や遠く鳴海潟、こゝは鳴尾の松影に、月こそさはれ芦の家、合へ袖を結んで肩にかけ、汐汲む爲と思へども、離れがたなや、合行平の中納言、合三歳はこゝに須磨の浦、合歸洛の裝ひ御立烏帽子狩衣の、元の、合雲井にかへり咲き、花のお姿見る嬉しさも、また悲しさも、君と連理の松風が、かたへはあとに思ひ草。合その戀草の、葉末に結ぶ露の間も、忘れねばこそ味氣なや。合包めど空に有明の、月は一ツ、合影は二人が馴れ染めは、汐汲む憂身、合見つ見られ、合つひには寄る邊渚漕ぐ、お情のほど棚なし小舟、苫を敷寢や梶枕、一夜、合二夜と重なりて、最早二歳今宵まで、人には誰も黄楊の櫛。さしくる涙汲み分け給ふ中納言、あり合ふ硯引き寄せて、筆

松島や小島　鴨長明の歌に「松島や小島の海士の秋の袖月は物思ふ習のみかは」とある。小島は雄島とも書いて松島の一嶼

運ぶは遠き云々　嵯峨天皇の御時に融の大臣が千賀の浦の景を自邸に模造し難波から京都まで汐を運ばせて燒かせた故事をいふ千賀の浦は陸前國

に、筆に云はする御名殘。〽立ち別れ、因幡の山の峯に生ふる、松とし聞かば今歸り來ん。そんならこれが。〽遺物の一首、迎ひの輿を待つて居や。〽さらばといふも未練の繰言。〽否えいえ／＼殿御の心は飛鳥川、淵が、合瀬となり照り降り知れぬ譬へ言。〽ハテ村雨と聞こえしも、引き寄せて見れば合やつぱり松風合〽變はるまいぞや、〽變はらじと、〽仰せ嬉しく答さへ、何う言うて宜からうやら、合思ひ直せば喞つ身を、祈れど更に神さんも、〽惚れた(好いた)同士は是非がない。只世の中は誠と誠、夫れを樂しむ私が心、必ずやいのと寄り添うて、潮馴衣の濡初めて、わりなき仲や盡きぬ名殘の折しもあれ、歸洛を急ぐ鐘の告げ、いとゞ別れの今更に、緣も花の仇嵐、千々の思ひや籠るらん。〽波こゝもとや須磨の浦、つらや隱れん袖笠を、片敷く末は手枕に、一人寢るにはきぬ／＼知らぬ、合知られ知られぬ仲ならば、合からはなるまい捨草の、合ヨイサヨ、合僧都の身とや笑はれん。色に狂ふが可笑とて、合う

鹽釜浦へのこと
松の村立ち　松が磯邊に林立してゐるのをいふので金葉集の歌から引く
鳴海潟　尾張の地名
鳴尾　攝津武庫郡の地で須磨と浦續き
行平の中納言　在原行平をいふ
歸洛　都へ歸ること
雲井　雲井の御所即ち帝の御所
連理　木目を連ぬる枝にたとへて情交

の濃いことをいふ
味氣なや　今更つまらない
汐汲む憂身　鹽汲む賤しい業を卑下していふ詞
棚なし小舟　船子が踏んで漕ぐ板（セカイ）の無い小舟
梶枕　船中で寢ることをいふ
黄楊の櫛　告げを云ひかけ、更に櫛と云ふ線で、次のさし來るにかける

なゐ子が〳〵、合石をつぶてのから〳〵と。〽オ、笑ふ笑ふ、ほんに何が可笑いぞ。〽笑はゞ笑へ、ちつともそつとも大事ない、エ、大事ないものを、濡れて添寢の戀衣、そも此程の御情、また何時の世に音信を、松風が身に及びなき、戀に心もこりずまの、鳴いてさわたる浦千鳥、アゝ羨やまし、あの鳥さへも、女夫、合女夫の諸翅、二世と誓ひし我夫を、など、合情けなの沖の波、しづめはやらじ、合怨めしと、彼方へ走り、合此方へ狂ひ、合思ひ亂るゝ藻鹽草、音にこそ立てめわれからと、あこがれ焦れ、合伏し轉ぶ。合〽爰に此頃戀知りの、日向染みたる汐馴男、合酒もなる口磯ぜせり、飲まねば須磨の松に寄る、機嫌上戸の松兵衛さ、合二上り〽さつと寄る浪合點ぢや。合〽コレハサひよいとせい。合アノ波越えてこの浪こえて、足は蹣跚ちろ〳〵っと、げんぢよ見る目の色より可愛い、酒の奴と浮かれくる。〽ヤア松風かいやい、〽フゥ汝は誰ぢや。〽船頭の松兵衛ぢや。〽汝の持つたはそりや何ぢや。〽是か、是

はな、〽是が今年の手造り酒、合 飲んだる達磨の縁でがな、合 様にほの字の帆が見えた、合 帆かけて走ろと慕ひよる。〽フウこの狩衣が欲しいか、欲しか夜さりの星守りや。〽ハア、、可愛や汝は氣違ぢやの。〽オ、氣違ぢや〳〵。わが身は氣違か。〽わが身も戀に迷うたか。あたらし船の、合 船頭殿、合 やれ〳〵やつとよい男。〽フウさては行平様に捨てられて、汝は氣が違うたの。〽ヤなに行平様はあれあれ彼處に。〽どれ〳〵、フウありや松ぢやわい。〽愚の人の云ひ事や。あの松こそは我夫よ。〽暫へ暫しは別るゝとも、記念は今も在原の、其面影は行平の、合 ひと木の松に、合 衣着せて、烏帽子參らせ紐しめて、かりの殿御と傅けば、此方は呆れて逃げ水の、いなしはせじと引き止めて、似氣なき戀の千草染、風情をかしく見えにける。〽已れに此樣なものを着せて、行平樣にして、心の丈を云ふのか。そんなら行平ぢや、行平ぢや、エヘン〳〵、御臺所の松風〳〵。〽その樣な事仰つた事もあつたわいなア。 クドキ

立ち別れ云々　古今集にある行平が離別の歌で因幡の山は行平が因幡守であつた處からいふ

飛鳥川　變り易い譬へに引く大和の川

必ずやいの　必ず變るまいの意

潮馴衣　海女の衣

波こゝもとや　波音の近く響く意で源氏物語にある語

うなゐ子　髮を頂に垂らしてゐる子

石をつぶて　石を投ぐること
大事な妹　村雨をいふ
こりずまの　こりもせずの意を須磨にかけていふ
藻鹽草　海草
日向染みたる　日向臭いこと
磯ぜせり　磯邊の女を戯ふこと
げんぢよ　美しい女をいふ
様にほの字　君様に

〽ほんに思へば形見こそ、今は仇なれ忘られぬ、三歳の昔此郷へ、雲井に近き御方の、合〽さすらへとやら憂き月日、お茶の通ひや酒事の、合に召されておほけなく、合引手數多のその中に、相ひ馴れ合初めし恥かしさ。朧月夜も憎からぬ、言葉咎めや胸づくし、鷄がうたへば別がいやで、離れともない仲直り、それが戀路の常かいな。合〽戀にや歌よむお定まり、しやもその時この己が、ア、何とやら、わくらはに、合藻汐たれつゝわび言も、背かぬ癇癪、合羽織もそこに、扇おつとり刀さいて、去なうよ戻らうよと、いうては小腰に抱きついた、(この身に戯れた)、いつそかり寢の此儘爰で、われ等も情にあひたいなア。〽そりや誰に。〽松風さんに。〽それで常磐の深緑、松を太夫といふはいな。〽太夫とは傾城の。〽否々この烏帽子狩衣で、萬歳の太夫ぢや〳〵。〽そんなら我等も幸若の。〽幸先よしの、〽壽は、二上り〽徳若に、御萬歳とは、御代も榮えてまします、愛嬌ありけるぽつとりもの、合色の菊蝶結ひ綿

惚れるの意

千草染　萌黄色

さすらへ　流謫の身をいふ

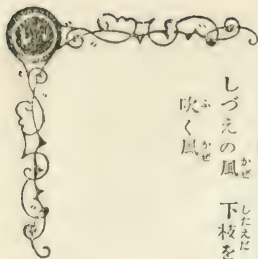
合　合手の略

おほけなく　恐れ多いことをいふ意

わくらは　古今集の行平の歌「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ」を引いたので、わくらはは稀れにの意

や、比翼に添た鶴の丸、寶結ぶの齋さんへ、戀の願の誓文たてゝ、合さらばこれから我等が思はく、そろ〳〵、やれ〳〵、合かやう申す、才藏なんぞは、夜も晝も、合押付きやつて、合くつ付きやつて、くつ付きやつて、おつゝきやつて、合二人添ひ寢の床の內、千夜を一夜の睦言も、盡きぬ妹脊の緣中を、振り捨てられし、捨小舟、共に亂るゝしづえの風の、現し心や果てしなき。〽咲きつれて、合色にまじへし十返りの、花の顏、花吹雪、松に吹き來る風も狂じて、合須磨の浦波どう〳〵〳〵、合岩根を洗ふ村雨も、痕なく晴れて須磨の浦、松風許りや殘るらん。

【解說】此の曲は、在原行平が帝の御勘氣を蒙つて、三年の間須磨の浦邊にさすらつてゐる中に、海士の松風と馴染みを重ねたが、御勘氣がゆりて歸洛する際、烏帽子狩衣に「立ち別れ因幡の山の峯に生ふる、松とし聞かば今かへり來ん」と詠んだ歌を添へて形見に殘して行くので、松風は每日形見を抱いては別れを歎き終に發狂するといふ謠曲の『松風』などの趣向を取り、漁

師等を絡ませて色彩にした淨瑠璃である。寬政八年十一月江戶桐座の顏見世狂言に、瀨川菊之丞の松風、嵐龍藏の此兵衞、坂東彥三郎の松兵衞で、書卸されたもので、出語りの太夫は二代目富本豐前太夫、同延壽齋、同安和太夫、三味線は名見崎喜惣治、富本兵助等であつた。

情にあひたい　關係したいの意

幸若　德若と共に萬歳の太夫の名

ぼつとりもの　美しい女をいふ

菊蝶　瀨川菊之亟の定紋

結ひ綿　髮の名

鶴の丸　坂東彥三郎の定紋

しづえの風　下枝を吹く風

母育雪間鶯（山姥）

〽四面峨々たる足柄山、麓に通ふ松のもと、巖に染むる蔦かづら、〽君命受けて壯夫の、扮裝も氣儘の山賤が、曲げたる肱の高枕、實に一瓢の樂しみの、眠を覺ます山おろし。〽山高うして雲行客の跡を埋む。山がつ〽君命受けて此日頃、斯く山賤と態を替へ、深山幽谷嫌ひなく、行なり次第の一寢入、睡氣覺ましに、どりや一杯やらかさうか。〽酒はかりなき盃に、注げば映ふ星の影。山がつ〽アヽラ怪しやなア、客星變にたんだくなし、我盃中に影さすは、來べき宵なり蜘蛛の、悅び告ぐる心の辻占。扨ては此山中に、勇猛力士の隱れ住むとの知らせなるか、何んにもせよ賴光公へはよき土產、心當りは女が連れた何時もの小僧、若しや彼奴が。フウ一服喫んで待ち合はせ、二人が身の上。オヽ、それがよい〳〵。ドリヤ一服やらかすべいか。ウタイ〽よし足曳の山姥（際）も、

四面峨々　東西南北どちらを見ても高い山が聳えてゐること

足柄山　相模から駿河に亘り箱根山に連なる

君命　賴光の命令

山賤　木こり、杣びと

一瓢の樂　瓢箪の酒を飲む樂

行客　旅人のこと。

和漢朗詠集に「山遠くして雲行客の

跡を埋む」山中の有様
酒はかりなき盃　酒が澤山入る大盃
客星　時に臨んで現はれる星
たんだく　北極星に向つて客星が禮をすることで、何か暗示を與へる前表
來べき宵　衣通姫の「我が背子が來べき宵なり蜘蛛の、くもの振舞かねてしるしも」の歌から

白髪と見ゆる雪吹雪、積もれは老の鶯も、今日ぞ初音と花に來て、ウタイ〽一洞空しき谷の聲、風か谺か呼子鳥、夜寒の月に埋もれて、鬼女がありさま山姥と、見る目いぶせき村紅葉、昔の道の指折ぞと、おほつかなくも辿り來る。山がつ〽オヽお袋、今日はまだ逢ひませぬな。姥〽オヽ斧藏殿かいなう。山がつ〽時に小僧は何うしましたの。姥〽サアあとの麓迄連立つて來ましたが、大方猪猿を相手に、角力がな取つて居ませうわいなア。山がつ〽イヤそりや浮雲い〳〵、早く此處へ呼ばつせい〳〵。姥〽ほんにおとましい事ではある。コリヤヤイ快童、快童丸やアい。合〽神樂月とて片山里も、笛や太鼓で賑はしや。足の冷めたいに草履買うてたもれ。雪やこん〳〵、霰やこん〳〵、積もれば寺の茶の木の枝に、おゝ寒む、小寒む、山から小雀ちゝつくわいのくわい、くせる鶉も鷲づかみ、わやく盛りの笑顏よさ。山がつ〽オヽ小僧か、よく歸つて來たのう。童〽かゝ様何んぞ下されや。姥〽オヽ遣りませう〳〵、そな

たに遣りたさ着せたさに、山路巡らぬ其の暇に、五百機立つる窓の内。二上り〽枝の鶯絲繰る、綿くる、機つて着せたる母のほんそ子。里へ下れば、里の土産に、でん／＼太鼓に振鼓、打つや空蟬の唐衣。千聲萬聲の砧に合はせ、鼓の拍子合〽面白や。姥〽サア是からは何時もの通り、お馬事して遊びやいなう。ドレ母が囃してやりませう。〽月毛にあらぬ斧の駒。取るや手綱も凛しげに、先退け先退け先退けろ。姥〽お月様いくつ。〽童〽十三七つ。姥〽お供はいくつ。山がつ〽八十八つ。童〽ほんにそりや若いな。合〽振出す大力、大鳥毛、轡の音はりんがら／＼、りん／＼がら。合〽母の胎内蹴破つて、産所も産屋も山なれば、取り上げお婆に事を缺き。道具屋節〽産湯の代りに、四方の赤、醉ひが廻つてきた山の、踊りにあらでをとりくどきは、何と何うた。二上りおんらが在所はナ、奥山の、て〻打の、でんぐり／＼、栗の木の、木の根を枕にござれ、醉うて轉び寢。〽コナ小女郎が戀する、山家の品物で、息急い

取る
よし足曳　善惡にかけていふので足引は山の枕詞
山姥　山に住む女
一洞空しき　谷が洞になつて空虛になつてゐるところへ反響の満ちわたるを云ふ
いぶせき　晴れやかでない意
おとましい　疎ましいの轉。世話の燒けるといふ意

神楽月　十一月
雪やこんく　童謡の句
おゝ寒　同じく童謡の句
わやく盛り　わんぱく盛り
五百機　数の多い絲で織る機
枝の鶯　枝の鶯のやうに山姥も絲を繰るといふこと
ほんそ子　秘藏息子のこと
空蟬　蟬の脱殻を云

てござれ、横に轉び寢。童へかゝさま乳呑みたい。へ乳呑みたいと足摺りは、頑是なき子の習ひかや。姥へこれはしたり、そのやうなわやく言やると、母が抓めくしますぞよ。童へ否やだくく。山がつへヤレそんなに叱らねいものだ。しかし他日からは邪慳のやうに見ゆれども、へ間立てなさに親心、老を忘れて山遊び、四季折々は目のあたり。三下りへ春は梢に咲く花見事え、折りておまそか手折てやろか。桃や櫻の花色衣、誰に着せうとて山姫織ろぞ、衣紋揃へて和子に着せう。和子に着せうとて三重八重一重、霞を分けて山巡り。合へはや立秋の盆踊り、戯れ遊べよんやさ。人の心の花の露、濡れにぞ濡れし撥水も、どうで流れの身ぢやものと、梢の苗にまでかけられて、頑是なき子の手を引いて、月に浮かれて山巡り。二上りへ冬は後生の願ひ月、十夜参りに孫子を連れて、ウタイへいたらぬ寺の奧もなし。合へおらが在所はなア、鼻をつかむやうな晩にや、背戸や小納戸で、互ひ違ひのお手枕。今は十五夜の

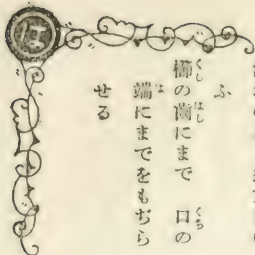
ぎの唐衣のからに云ひかける

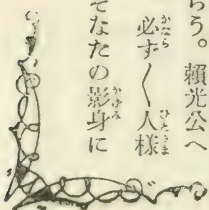
千聲萬聲の　白氏文集の夜砧を聽く詩に「八月九月正に長夜、千聲萬聲止む時なし」

砧　木槌で衣を打つこと

月毛　白に桃色さした毛色の馬

斧の駒　山賤の持つてゐた斧を借りてお馬にするのである

晩も、はなぐれ枕の一人寢。色氣はなれて老木の柳、雪もつ枝はなきものを、我も子故に山巡り。山がつ〽時にお袋、いつぞは聞かう〳〵と思つて居たが、此方衆二人が身の上を。姥〽サアお咄し申すも面目ない。わらはが夫は坂田藏人時行、柔弱非力の身を悔み、一生それを無念の最期、それよりわらはは身を隱し、此足柄山へ分入りて、山神に誓ひを立て、產み落せしは此の快童。〽そだつる年も早や七歲。姥〽名將見立てゝ奉公させうと夫の遺言。山がつ〽扨は藏人が忘れ形見であつたよナ。某事は、三田の仕。快童丸が勇猛力、靈夢によつて遙る〴〵と、賴光公の仰せを受け、召抱へに參つたり。力の程が見たい〳〵。姥〽ア、嬉しや、喜ばしや、賴光公の家臣となれば、父時行も嘸や冥途で喜ばれん。これ〳〵快童。そなたの力の程が見たいと有仰る故、いつもの通りの力業、かならずともに負けまいぞ。〽神變不思議の快童丸。此方はあしらふ勇力士。快童いらつて傍なる、松を根こぎに引拔いて、莞爾と笑うて

四方の赤　江戸時代四方（酒店）で賣た銘酒
おんらが在所　盆踊の唄
おまそか　あげやうか
山姫　山の神女
鬢水　鬢を梳づるに用ひる水
流れの身　遊女をいふ
櫛の歯にまで　口の端にまでをもぢらせる

立つたるは、人も恐るゝばかりなり。山がつ〽オ、松の根こぎ面白い。サア打つて來い快童。童〽合點だ。〽勝負〳〵と打ちかゝるを、すかさぬ豪氣の力瘤、幹より枝の節くれて、しつかとつかめば、めり〳〵。ゑいや〳〵と捻ぢ合ひしが、中よりふつつと捻ぢ切つて、左右へ別れて立つたりしは、目覺ましかりける次第なり。山がつ〽オ、力の程が見えた、〳〵。これより直ぐに同道し、賴光公へ見參させ、父が苗字を其儘に、坂田の金時と名乘らせん。喜こべ、〳〵。童〽そんなら是から侍になるのかや、嬉しい〳〵。姥〽オ、嬉しうなうて何んとせう。〽去りながら今別るれば此母に、もう逢ふ事はならぬぞや。これが別れか、これ快童、夫の記念と見るにつけ、そなたの大事さ大切さ。〽今日別るれば今宵より、母ひとり寢の閨の內、嘸俤がなつかしからう。賴光公へ御奉公、勤むるうちの明暮も。姥〽武術を勵み立身せよ。必ず〳〵人樣に、〽山姥が子と笑はれな。今別るゝとも此母が、姥〽そなたの影身に

十夜参　十月六日から十日間淨土宗の寺で行ふ法會に参詣すること

靈夢　夢で神が暗示を與へること

いらつて　面倒臭いといふ容子で

根こぎ　根ぐるみ引拔くこと

山姥が子　山で育つたので人間で無いと卑下した意

暇申して　謠曲山姥の切に謠ふ句

付添うて、なほ行末を守るべし。〽とはいふもの丶是がまア、〽モシ、名殘惜しや、いとしやと、抱き上げ抱き着き、思はずわつと一聲は、梢に響きいぢらしき。〽かくては果しじと快童丸、〽お賴み申すは仕樣。〽名殘りは盡きじ、早やおさらば。ウタイ〽暇申して歸る山の。舞が丶り〽尋ねし花の春過ぎて、姿は夏の雲の峰、晴れて源氏を守るらんと、山又山に山巡りして、行方も知れず失せにけり。

【解說】此の曲は、近松門左衛門作の『嫗山姥』を土臺として趣向を立てたもので、兼冬館で煙草屋源七といつた坂田の藏人が腹を切つて血潮を妻の八重桐に飲ませると、ドロ〲の鳴物で忽ち大力の女となり、大立廻りの揚句、足柄山に分け入つて怪童丸を產み落し坂田家の再興を計つてゐると、賴光の家來の三田仕に見出されて坂田金時となり、賴光の四天王となると云ふ筋。所作としては、山姥の山巡りの件が眼目となつてゐる。この山姥の淨瑠璃を一番最初に書卸したのは天明五年十一月瀨川如皐が江戸の桐座で、『四天王大

雲の峯　雲の形狀が峯のやうになる夏の空をいふ形容
山又山　深山に分け入ること

江山入』と題して、常磐津兼太夫が出語りをしたもの。それから、寛政十二年七月市村座に富本の『冴山路菊月』、文化元年十一月河原崎座に常磐津の『雪振袖山姥』が上場され、その次が此の曲で文化二年十一月、江戸中村座の顔見世狂言『淸和源氏二代將』の大切淨瑠璃に『母育雪間鶯』の外題で、坂東三津五郎が山姥、岩井半四郎が怪童丸、市川男女藏が山賤を勤め、二代目富本豐前太夫、大和太夫、常太夫、三味線三保崎兵助、名見崎喜惣治、鳥羽屋里長の出語りで、節付は名人里長の手に成つたのである。其後、嘉永元年に作曲された常磐津の『新山姥』は此曲を模倣して出來たもので、淸元の『月花茲友鳥』（山姥）も此曲の換骨奪胎である。

冬編笠のあかぼり 廓へ通ふ人は洒落に編笠をかぶるけれど、こゝでは零落の意味で、夏かぶれる編笠が、冬になつて赤茶けて來ることを云ふ

紙衣 紙を貼つて作つた衣服

火打 紙衣の腋がゆるりとなるやうにつ付けた火打袋形の切

膝の皿 膝頭の形が

春夜障子梅（夕霧）

〽冬編笠のあかぼりて、紙衣の火打膝の皿、笠吹きしのぐ忍草、忍ぶとすれど古への、花は、合嵐の頤に、今日の寒さを喰ひしばる、はみ出し鍔も神寂びて、鐺詰りし合師走の日、〽うさんらしくも吉田屋の、内を覗いて、伊〽喜左衛門宿にか、喜左〳〵と鼻に扇の横柄なり。〽喜左衛門は立出て、喜〽お珍しや伊左衛門様、いざお通りと袖を引けば。伊〽ア是々喜左、さりとては紙衣ざはりが荒い〳〵。〽引けば破るゝ、握めば跡に、師走浪人、昔は鎗が迎に出る、今はやう〳〵長刀の、合草履をぬいで編笠の、中の座敷に通りける。〽奥の様子を伊左衛門、腹立ちまぎれ床の間の、三味線引きよせ調子さへ、あはゞ何うして斯うしてと、胸は二上り三下り、歌の唱歌に合の手や、合ウタ〽可愛男に逢坂の、關より艱い世の習ひ。伊〽ア、合誠にそれよ、あの歌で思ひ出す、去年

紙衣に皿のやうに
ついてゐる
寒さを喰ひしばる
寒さに慄へる形容
はみ出し鍔　小脇差
に鍔が少しばかり
付いてゐるのを云
ふ
鐺詰りし　刀の鐺の
詰つてゐるのを年
の暮の詰まつたこ
とにいひかける
師走　舊暦十二月
うさんらしく　怪し
いそぶり

の月見に太夫とおれが連彈、彈いた時の面白さ、彈くその主は變はらねど、變つたはおれが身の上、あいつが心底あの樣にあらうとは。ウタ〽思はぬ人に堰き止められて、今は野澤の一つ水。合伊〽ア、いかさま、左うぢやいなア、戀も誠も世にある時、人の心は飛鳥川、變るは勤めの習ひぢやもの、逢はずといつそ去んで呉れうか、ア、イヤ〳〵、逢はずに去んでは此胸が、ウタ〽すまぬ、合心の中にもしばし、澄むは由緣の月の影。〽むざんやな夕霧は、流れの昔なつかしき、夫の音締め身に應へ、飛び立つ心奥の間の、首尾がくちせぬ緣と緣、合胸と心の間の山、間の襖の工合よく、〽明暮戀しい夫の顏、見るに嬉しく走り寄り、抱き付いたるきり〳〵す、泣くより外の事ぞなき。〽伊左衞門は夕霧を、突き退けて立ち上り、伊〽コリヤモウ共涙に懲りたもの、傾城の心の底と猫の鼻は、冷たいと、世間の譬へに違ひない。イヤこゝな萬歲傾城め、萬歲ならば春おぢや、通りや〳〵通りや。〽と言ひければ、夕〽ムウ此夕

鼻に扇　鼻に扇を當てゝ遊客の氣取つた風つき
師走浪人　紙衣が皺になるを師走にかけていふ
鎗が迎ひに　遣手が迎ひに出る事を鎗にかけていふ
長刀の草履　尻切草履のこと
奥の樣子　奥の間で夕霧が他の客と逢つてゐる樣子
二上り三下り　胸の

霧を萬歳とは。伊へオ、萬歳傾城の因緣知らずか。アノ侍の足にかけて蹴らるゝを、萬歳傾城といふぞや。誠に目出度う侍蹴る、しかも足駄はいて蹴るやら、合へ年立かへる足駄にて、誠に目出度う、さむらひける。へナント聞こえたか、左りながら何も身すぎ、彼の樣な宜い業に蹴られては、損はいかぬ、慾を知らねば身が立たぬ、慾若に御萬歳とや、年立かへるあしたにて、まことに目出度う侍蹴る、町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、ヤ、蹴る〳〵。へと蹴散らかし、烟草引寄せ吹く烟管、さらぬ體にて居たりける。合クドキへ夕霧涙諸共に、怨みられたり喞つのは、色の慣ひと、合言ひながら、夫れは浮氣は水淺黄、合逢ひ初めた其日から、ウタこんな緣が唐にもあろか、合派手な浮名が嬉しうて、人の譏りも世の義理も、合白紙にかく文の傳手、返事、合取る手も心急き、口說の床の、合よしあしも、嬉しいにつけ、悲しいに、つれて忘れた合事はない。合夫にお前の惡性を、わしが案じは移り氣の、外に若しやと

悩ましいのを調子の上つたり下つたりするのにかけていふ

可愛い男　宮薗節の「ゆかりの月」から取つたものか。これを相の山節でうたふ

太夫　夕霧をいふ

飛鳥川　古今集に「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬になる」

言ひがゝり、合しまひつかねば小夜更けて、脊中合せて寢て見ても、つい夫なりに張弱はく、仲直りすりや明の鐘、エヽ〳〵憎うてならぬ、合鷄の聲、何んの烏が意地惡るで、合啼くぢやなけれどきぬ〴〵の、云なせとむない心から、合まゝに成らぬが色の意地。そこを樂しむ粹な仲、合夫が嵩じて内方の、首尾は不首尾と結ぼふれ、勘當の身と楢の葉や、兒の手柏の二人が中、暇乞さへ、合泣くばかり。〽去年の暮から丸一年、二年越しに音づれ無く、夫はいくせの物案じ、夫れ故にこそ此の病、疲せ衰へたが目に見えぬか。アヽ煎藥と練藥と、針と按摩でやう〳〵と、命つないでたまさかに、逢うてこなさんに甘やうと、思ふ所を逆さまな、こりやむごらしい何うぞいの、心强や胴慾な、憎くやと膝に引寄せて、さすりつ泣いつ聲を上げ、譯も性根もなかりける。伊左衛門涙を押へ、伊〽今日來たは彼の里の悴、これを繼ぎ立て母人へ、訴訟して藤屋の家を取立てる、談合最中、其悴取返す思案がしたい。〽といふ所へ、喜左衛

侍蹴る　候ひけるの洒落
年立ちかへる足駄　萬歳の唱歌の「年立ちかへる朝」を綟つていふ
身すぎ　稼業のこと
慾若に御萬歳　徳若に御萬歳の洒落
水淺葱　水つぽい事と淺い心とをかけていふ
惡性　質が惡いこと
移り氣　多情なこと
脊中合せて　拗ねた

門は立出で、喜へ申し／＼伊左衛門樣、お前の御勘當も赦りまする。里の御子息樣も、母家へお引取り、夕霧樣の身受けもさらりと、埒明けました。サア／＼日出たいわ／＼。へと、家内が勇む勢ひに、つれて浮き立つ伊左衛門。喜びの眉を開くや扇屋夕霧、名を萬代の春の花、見る人袖をぞつらねける。

【解説】此の曲は、寶永七年正月（或は同年七月とも云ひ、又正德二年正月との說もある）竹本座に近松門左衛門が書卸した『夕霧阿波の鳴渡』の一節を骨子としたもので、遊蕩の爲め紙衣姿にまで零落した藤屋伊左衛門が昔懷かしさに吉田屋を訪れて夕霧に邂逅すると、其夜勘當が許りて夕霧も身受されるといふ日出度い筋である。最初は、專ら義太夫で舞臺に上されたが、天明四年正月江戸森田座で四代目松本幸四郎が伊左衛門、三桝德次郎が夕霧を勤めた際、『春夜障子梅』の外題で、富本に改作され、富本齋宮太夫、同飛佐太夫、同登美太夫、三味線佐々木市四郎等の出語りで、上演されたの

情景をいふ
内方　お内の人々
楢の葉　なるといふにかけていふ。兒の手柏の枕詞
兒の手柏の　二面と云ふので二人と受けたが、又、子まで出來た二人が仲と云ふ意にも掛る
針　鍼を身に刺して療治すること
たまさか　偶々の事
繼ぎ立て　跡取りにすること

であつた。この富本が評判が好かつたので、後に常磐津でも作曲し、續いて清元でも、新内でも拵らへるといふ風になつた。

實説によると、夕霧はもと京の島原の扇屋の遊女であつたが、その扇屋が大阪の新町へ移轉した時、一緒について來たもので、寛文十二年、十九歳の折であつた。京都でも既に盛名を唱はれてゐたので、大阪でも待ち構へてゐたと云はぬばかりに全盛ならびなく、一人では廻りきれないので圍ひ女郎を連れて歩いた。それが引舟女郎の初まりであると云ひ傳へられてゐる。その夕霧も延寶六年正月假初の病ひがもとで果敢なく二十五の花を散らした。それが又噂の種になつて、その翌二月三日には『夕霧名殘の正月』と云ふ狂言が出來た。『夕霧阿波鳴渡』が出來たのは、それから三十餘年過ぎてのことである。

花川戸身替の段（身替お俊）

〽雨の降る夜は一入ゆかし、合冴えては月になほゆかし。お俊は一人湯がへりの、浴衣をちよつと抱へ帯、紅葉袋にうつろひて、柵ならぬ横櫛に、つい髱あげの平元結ひ、顔にかゝれば仇名草、夜るは嵐の花川戸、馴れにし潜り押し明けて、内に入るさへ物案じ。俊〽きのふ傳兵衛さんの云はしやんした事を思へば、關破りといふは、此お俊が爲めには、大事の〳〵のお主様、何處に何うしておいでなさるゝことぢややら、其お主様の御難義を、我身に替へてお救ひ申したい心故、アノ傳兵衛さんにも、心に思はぬ愛想づかし、嘸腹が立つたでござんせう、傳兵衛さん堪忍して下さんせエ。イヤ〳〵此やうな事云うて、ひよつと人に聞えては一大事、ドリヤ身粧ひして仕舞はうか。合〽昨日より今日は思ひの増す鏡、曇るとならば花の空、上野の鐘か淺草か、無常を告ぐる風のあや。

一入ゆかし　一層落ついていゝ氣分だといふ意

抱へ帯　前で結ぶと

紅葉袋　糠袋の異名

柵ならぬ横櫛　前に紅葉といつたので横に挿した櫛を柵に見立てゝいふ

夜るは嵐　其の晩死ぬので嵐に逢つた落花に譬へていふ

花川戸　隅田川の西岸にある淺草の地

愛想づかし　絶縁を

宣告すること
花の空　花時分に空の曇り勝の事をいふ
無常　佛經の語で生滅定まりなきことをいふ
目覺え　見覺えに同じ意
秋葉　向島の秋葉神社の事で、轉じて秋葉境内の茶屋の意
秋葉の素振　秋葉の茶屋で傳兵衛に對

〽浮名が中に傳兵衛は、お俊が心疑ひて、忍ぶ姿の頰冠り、佇む軒は目覺えの、慥かに此處ぞと門の戸を、叩くうちにも心急き、傳〽こゝ明けて貰ひませう。俊〽さういふ聲は傳兵衛さんかいな。傳〽オ、傳兵衛ぢや。俊〽マアこつちへござんせ。お前はまア何しにござんしたえ。傳〽何しに來たとは、お俊、此傳兵衛は、おぬしが心を聞きに來たのぢや。昨日秋葉で彼のやうな愛想づかし、何うも合點が行かぬわい。何ういふ事ぢや、それが聞きたい。俊〽もし私が心聞きたくば傳兵衛さん、お前の心から先へ云うたがよいわいな。傳〽ソリヤ何を。俊〽傳兵衛さん、お前はほんに、アノ園生の前樣とやらを尋ね出して、お首を打たしやんす心でござんすかえ。傳〽オ、そりや知れた事ぢや。アノ駿州淸見ケ關を越えたる園生の前は、關破りの科人、今宵の中に尋ね出し、首打つて出さねば、此傳兵衛が身の上の願ひが叶はず、ぢやによつて、草を分けても詮議するのぢや。俊〽それさへ聞けば、何にも聞く事はござ

した暴動をいふ

水さして　邪魔をすること

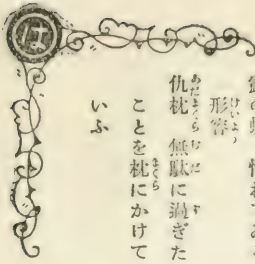
反古　無駄の意

占問へば　カマをかけて聞くこと

切れ文　縁を切つて以後關係が無いといふ證文

身を切り文　暗に切れと云ふことを切れ文に譬へていふ

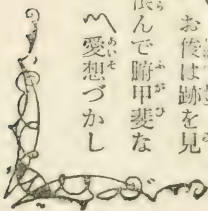
染模様　染模様の振袖でお俊が小袖とは違ふといふ意

んせぬ、サア〳〵早う歸つて下さんせ。傳〽コレお俊、今思ひ出したやうに、此傳兵衛に歸れ、戻れとは。エ、聞えた、昨日秋葉の素振といひ、わりや心變りだな。俊〽アイ知れた事いな。傳〽エ、おのれはな、〳〵變はる心に傳兵衛は、急き立つ胸を押し靜め、思ひ直ほして凭れ寄り、女心は疑ひの、深い中にも猶深かい、二人が中に水さして、たとへ退かしてあるとても、言ひ替したを反古にして、そなたは添はぬ心かと、無理に引寄せ、占問へば。俊〽傳兵衛さん、切れて下さんせ。傳〽何がどうした。俊〽傳兵衛さん、何時まで云うて居やうより、お前に愛想が盡きたといふ證據は、お前の紋の付いた私が小袖、お前の見る前で、ずた〳〵に引裂いてしまふ程に、心の殘らぬやうに、それから見て居やしやんせ。〽と、押入の戸を引きあくれば、以前忍びし園生の前、顔見合せて吃驚し、俊〽ヤアあなたは。〽と、いひさま戸棚の戸を引たて、俊〽ほんに私としたことが、未練らしう小袖を引裂かうの何うのといふ事

飛鳥川　古今集に「世の中は何か常なる飛鳥川、きのふの淵ぞ今日は瀬になる」

まゐらせ候も跡や先き　心が惱んでゐるので筆が亂れて文句が前後することをいふ

露の蝶　悄れてゐる形容

仇枕　無駄に過ぎたことを枕にかけていふ

もないわいな。傳兵衞さん、たつた今、切れ文書いてもらひませう。傳〽何が、何うした。俊〽サア今の戸棚の小袖の替りに、私が身を切り文、サ私へきれ文かいて下さんせ。傳〽ハテ心有り氣な詞の端し、今のは慥かに染模樣、小袖替りの切れ文を。俊〽早うかいて下さんせ。傳〽そんなら切文、今かくぞよ。俊〽アノマ仰山な顏わいな。〽世の中を何にたとへん飛鳥川、きのふの淵は今日の瀬と、變りやすさよ人心、硯引よせ傳兵衞は、墨さへ薄き縁ぞと、思ひあきらめ書く文の、まゐらせ候もあとや先き。〽傍にお俊は見ぬ振も、風に難面き露の蝶、今は此身にあいそもこそも、月夜の空や鷄鐘を、恨みしことも仇枕。傳〽ソレ望みの切文書いたぞ受取れ。俊〽これで心が清爽としたしたわいな。傳〽お俊もう此の世では逢はぬぞよ。〽更けて砧の音さへゆかし。〽お俊は跡を見送り〳〵、俊〽傳兵衞さん、變る心のつれなさを、嘸や恨んで腑甲斐ない、女心と思はんしようが、云ふにいはれぬ身の願ひ、〽愛想づかし

更けて砧　上方唄の文句
人丸　お俊の前名
壁に耳　洩れ易いことをいふ諺
邪慳　頑固の意で色氣の無いことをいふ
二世まで　夫婦は二世の縁といふ佛説をいふ
讀めた　意味が解つたといふこと
變つた色事　奇妙な戀をいふ

のありやうは、胸に涙を押入れの、傍へそろ〳〵立寄つて、俊〽お前様のお行衛を、方々とお尋ね申しましたに、ようこそお出で下さりました。園生の前様。園〽人丸。俊〽申しお聲が高い、壁に耳。〽人や聞くとも白藤が、暖簾の内より、白〽お俊ばう。俊〽エヽ。白〽ハテ強い肝のつぶしやうの。イヤ膽がつぶれるといへば、アヽよく見れば、見る程美しいものだ。この愛嬌で傳兵衛と色事だもの、有難いわえ〳〵。俊〽申し白藤様、やつぱりお前は邪慳かえ。白〽ナニサたとへ邪慳でなければとて、誰も構ひ人は無えのサ。俊〽そのやうに云はしやんすな、構ひ人があるまいものでもござんせぬぞえ。申し白藤様、アノ昨日秋葉でちよつと云うたこと、何うして下さんすえ。白〽コレサ〳〵、そんなことを云うて、己に困らせる事はねえわな。お前は、アノ傳兵衛さんと、二世までといふ仲ぢやござんせぬか。俊〽サア傳兵衛さんと切れてしまうたわいな。白〽ナニ傳兵衛どんと切れて仕舞うたとは。俊〽切れてしまうた

憎く　悪くてらしいの略

まつて居た　言ひ寄つて呉れるのを待つてゐた。戀して居たといふ意

有馬の松　攝津の有馬の地にある松。

「松になりたや」は俗謠

しなし振　色つぽい動作

それと一と目　譯が有ると直ぐに感付く瞬間の光景を叙

と云ふ、慥かな證據は、この切れ文、これ見て下さんせ。白へなる程こりや傳兵衛どんの切れ文、そんなら遂うに切れたのかえ。俊へ何うして嘘に切れ文が、取れる物でござんすぞいなア。白へこれで讀めた。アノ傳兵衛殿と緣を切つても、アノ押入の内の命が助け度いとの事か。俊へエヽ、サア、それは。白へハテ變つた色事でごんすの。傳兵衛殿に成りかはり、戸棚の内を。俊へコレ待たしやんせ。白へ何故止める。俊へオヽ憎く。白へソリヤ誰れが。俊へ白藤様が。白へ悪くいとは。俊へ私やお前に。白へ何が何うした。俊へまつて居たわいなア。へ松になりたや、有馬の松に、寢て見て譯も白藤に、這ひまつはるゝ嬉しさは、菜種の花も山吹も、云はぬ色なるしなし振。へそれと一と目に關取は、お俊を突き退け、切る物を、抱へながらに立上り、行かんとするを引据えて、見て見ぬ振の背と背、男の髪を簪で、掻き撫でながら、聲曇り、そりや素氣ないぞえ白藤様、源太様、いかに關取さんぢやとて、力計りか心ま

で、その様に強い物かいな。ほんに角力の噂にも、手取々々と聞きなれて、思ひ初めたる其の日より、氣に癖つけて忘られず、心の丈を打明けて、結うて島田の縺れ髮、取上げられぬ仇惚れに、女子の道が立つ物か。憎からうとも渡り合ひ、なげの情と一と夜さを、語り明かして下さんせ。やいの〳〵と顏かくす、深き思ひは小野川に、濡れて戀増す風情なり。

白〽それ程までに此白藤を、思うてくれる志。忝ない、そなたの願叶へてやらう。俊〽そんなら叶へて下さんすか。白〽イヤそりやならぬ。俊〽シテ又何の願ひを。白〽傳兵衛どんの切文、そなたを切れ文、叶へて遣らう。俊〽エ、嬉しうござんす。〽目と目のうちに心解け、義理と忠義の假枕、思ひは二つ二筋の、帶こそ戀の命ぞと、いふうち粹な風吹いて、消ゆる燈火暗きより、心の闇の屛風山、内に思ひや籠るらん、内に思びぞ籠るらん。

【解說】この曲は、天明三年江戸中村座の春狂言に櫻田治助が書卸した淨瑠

した詞
切る物　刀のこと
脊と脊　脊中合せになることをいふ
手取　角力の技の上手な事をいふ
氣に癖つけて　胸が始終かき亂れると云ふこと
結うて島田　云つて仕舞ふにかける
仇惚　片戀をいふ
なげの情　情をかける意
深き思ひは小野川に

力士の小野川にかける。解説を見よ

心解け　互に意味が了解すること

粋な風　形式だけでも戀と見えるので行燈を消す風を粋な仕打に見立ていふ

屏風山　屏風を立て廻すことを山に譬ていふ

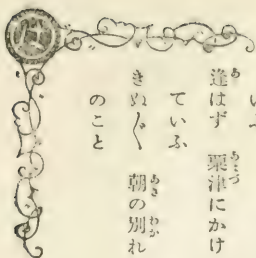
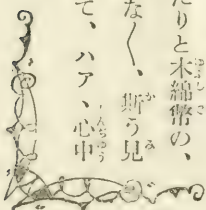
璃で、花川戸の藝者お俊は、井筒屋傳兵衛と深い仲であつたが、駿河清見ケ關の關所破りをしたお尋ね者の園生の前を大切な故主だと知つたお俊は、相愛の傳兵衛に僞つて愛想づかしを云ひ、主人の身替りに自分が殺され、傳兵衛に功を立てさせるといふ筋で、義侠氣質の白藤といふ相撲を配して情趣を出し、富本でも代表的なものゝ一つに數へられてゐる名曲である。初演當時の役割は四代目岩井半四郎のお俊、市川八百藏の傳兵衛、二代目市川門之助の白藤源太で、出語りは、二代目富本豐前太夫、同齊宮太夫、同豐志太夫、三味線名見崎德治、同仙調等であつた。

因に、この當時小野川喜三郎と云ふ力士が、日下開山横綱の谷風を土俵に倒して非常に評判であつた。その小野川の容貌が門之助に似てゐると云ふので白藤源太と云ふ角力の役を門之助に嵌めたところ、それが果して大當りであつたと云ふ。

俠容形近江八景（小いな）

へ小夜更けて、八つか七つか明六つの、かねが敵の世の中に、半兵衛が身の落度、今更惜しむ様なれど、命一つを捨てぐさの、合露の情に引かされて、共に冥土の道連と、戀に小いなが心根を、不愍とうるむ目に涙、暫時詞も無かりしが、半へよく／＼思ひ廻はして見れば、女房お才が誠といひ、兄の手前、世間の聞こえ、死なねばならぬ此の半兵衛、縁に引かれて和女まで、何うも手にかけ殺されぬ。跡に殘つて一遍の、回向を頼むこれ小いな。クドキへいふ顏ぢつと打ちながめ、合そりや何言はんす半兵衛さん、そもや二人が馴れ初めは、思ひ大津の、合柴屋町、合こがれ寄る邊の矢走船、岸に合離れて、合力なき、合へ憂きが中にも樂しみは、初會に惚れて怨みわび、乾さぬ袖だにあるものを、合へ堅い約束、石山の、その突き出しの始めから、合しつほり雨の居續けに、合濡れて

八つか七つ　八つは午前二時、七つは午前四時
明六つ　午前六時
かねが敵　金と鐘とをかけて兩方を怨む意
落度　失敗
柴屋町　大津の廓
矢走船　矢走へ通ふ船を廓に通ふことに譬へていふ
初會　廓に登樓して初めて女の容となる事をいふ

乾さぬ袖　涙に濡れることをいふ
突き出し　女郎が初めて見世へ出る事と石山寺で鐘を突き出すこととにかけていふ
居續け　翌日も歸宅せずに遊ぶこと
待つ夜　松にかけていふ
逢はず　粟津にかけていふ
きぬ〳〵　朝の別れのこと

色ます唐崎の、待つ夜は辛らい、合床の内。ほんに思へば片思ひ、堅田に落つる、合雁がねの、〽文の便りですましても、逢はずに居れば氣にかゝり、合逢うて嬉しき夜な〳〵に、〽睦言つもる比良の雪。下紐解けて(心も解けて)、合肌と肌(語る間も)、早やきぬ〳〵の、合三井の鐘。いつか廓(苦界)を離れてほんに、世帯を瀬田の女夫橋。〽まことは里の音に聞く、琵琶の湖(水)にや、合ひたすらん。半〽此上は死なば一所、人目に立たぬ其うちに、サアおぢや。カヽリ〽互ひに覺悟の身づくろひ、手に手を取つて行きかゝる。向ふの方の人音に、しばし小蔭の袖屏風。合ウタカヽリ〽戀といふ、その水上を尋ぬれば、合こしより下の名にし負ふ、合加田、合淡島は紀の路なる、神をまもりの修行者が、おしよぼからげに布頭巾、我身世にふる、合鈴を振る、合浮世わたりと木綿幣の、道を早めて、合來りけり。淡〽おつと待つたり、うまいな〳〵、斯う見たところが、大津柴屋町あたりの、おやま風、男を連れて、ハア、心中

三井の鐘　三井寺で撞く明方の鐘

音にきく　名高いことを琵琶の音にかけていふ

小蔭の袖屛風　小蔭へ隱れること

加田　加太とも云ふ地名

紀の路　紀伊國

おしよぼからげ　棲先高く上衣を腰で端折る風俗

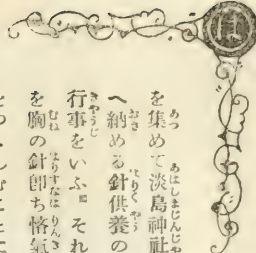
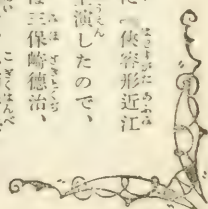
布頭巾　白木綿で端を垂らした頭巾

ぢやな〳〵。半〽ア、これは滅相な、心中ではない、連れて走つて夫婦に成る氣。〽それ〳〵苦界離れて女夫にならば、縫針する身は守る神さん、〽雛をさめる、緣あらば、妹脊を結ぶぎえんもよし、小〽何うぞ女夫に成られる樣に、御祈禱を賴むわいなア。淡〽ム、妹脊を結ぶ神雛とは、そりや大きな了簡違ひ、淡島の紙雛は、夫婦にあらぬ親子の形代。小〽そりや又なぜにえ。淡〽袖振り合ふも他生の緣、其紙雛の故事來歷、さらば語つて聞かさうか。小〽そりや宜からうわいなア。〽そも〳〵紀州名草の郡、加田淡島明神の、由來を尋ね奉るに、〽昔々その昔、神功皇后筑紫にて、皇子を誕生ましませば、都に謀叛の族、之を討たんと待ちうける。〽武内が計ひにて、皇子を小船にまゐらせて合〽密かに紀の路へ送らるゝ。浪のあはれや淡島の、本社といふは是なりと、あらあら斯くと敬つて申す、半〽いはれを聞けば有難い、とは言ひながら折角ぎえんを祝うたに、小〽夫婦でないと言はしやんすからは、エ、モ、腹

浮世わたり　商賣にすることをいふ
木綿幣　木綿幣を夕暮にかけていふ
おやま風　遊女風
縫針する身は守る神さん　淡島明神に祈ると裁縫が上達するのでいふ
他生の緣　何かの緣といふ意
筑紫　九州をいふ
針を納めて　陰曆二月八日婦女か年中使用して折れた針

の立つ淡島さん、この様な事聞かうより、ちつとも早う、サアござんせ。
淡へコレ〳〵、さりとては氣の短い、正直にやつてのけたは、野暮の始まり、ぎえん直しの神いさめ、どりや敬つて申さうか。二上りへされば廓の色くらべ、緣を結ぶの紙雛は、加田淡島の御利生に、無理な口說も折れ安き、合針を、合納めて女氣の、合へ君に藻拔けのうつほ船、流れの里に彈く三味の、藝者さん方旦那衆、或は神樂の大鼓持、へ綾の卷紙かきくどく、へ逢はれぬ首尾も淡島が、女子の好くなひことは、嘘でござらぬ本社の神の、誓ひに洩れぬ女夫仲、名草のこほり、合解け安き、水の出ばなの若い同士、戀の濡手で淡島は、足を早めて急ぎ行く。へ見送る野邊に蝶々の、比翼の翅これもまた、番ひ放れぬ女夫仲、花の小いなに半兵衛が、浮名をこゝに書きとゞむ。

【解說】此の曲は妻子のある半兵衛が大津柴屋町の遊女小稻に馴染み、遊びの金に窮した末駈落して心中しやうとする筋で、淡島の言立などが搦み派手

な浄瑠璃である。初演は寛政六年二月江戸都傳内座の春興行に「侠客形近江八景」の外題で、瀬川菊之丞の小いな、澤村宗十郎の半兵衛で上演したので、太夫は二代目富本豊前太夫、同延壽齋、同大和太夫、三味線は三保崎徳治、鳥羽屋里長等であつた。尚ほ此際は「達模様吾妻八景」の外題で、小菊半兵衛を出し、此の浄瑠璃と初日、二日目毎日替りに上演して好評を博したものである。

を集めて淡島神社へ納める針供養の行事をいふ。それを胸の針即ち悋氣をつゝしむことにかける

うつほ船　うつろ船のことで木をくり拔いて作つた丸木船

綾、卷紙　手管の手紙をいふ

好くなひこな　淡島の本體の少彦名尊を綟つていふ

拙筆力七以呂波（乙姫）

〽日の本は、合歌に和らぐ國の風、合龍の都に吹傳へ、合地神四代に當らせ給ふ、合彦火々出見の尊より、情交はせし妹と脊の、合縁は深き豐あし原、豐玉姫の産みたまふ、合産家に鸕鷀羽葺不合尊の御末長しへに、治まる御代こそかしこけれ。〽其うまし國古郷の、合文七カヽリ〽丹波の國の水の江を、忍び兼つゝ出で行きし、人の行衛の覺束かな。合そなたの空も、合雲霧も、浪も、合一つに見渡せば、合雲路の雁の女夫連れ。合〽ア、羨まし唯一人、捨てられし身の何を花、何を便りに告げ遣らん、合心一つに沖の石、乾く間もなき袖の露、合契り替らぬしるしには、別れに送る、合玉手箱、合又逢ふ迄は必ずや、開るな開けそ、恨詫びにし夜半の鷄鐘おぼつかな。合堅い心にいつ迄も、花の都の姫御寮、合君の睦言聞きなれし、譯知る里もたくさんな。三下り〽京に島原難波潟、合

龍の都　龍宮をいふ

情交はせし妹と脊　夫婦の關係をいふ

豐あし原　日本の古名豐葦原瑞穗國の古名

うまし國　美しい國の意

雁の女夫連れ　雁が翅を並らべて空を行く光景をいふ

沖の石　古歌に用ゐられた句で常に濡れてゐることに譬へていふ

新町とやら色所、合東に富士の姿よき、花の吉原、合よしそれとても、合よもや悪性はあるまいと、思ひ捨てゝも、合男の心、合愚痴よ未練よ羞かしや。合へ佛の罪障とく上に、八歳の龍女成佛の、悟れば玉の、合都へいざと夕風に、差し來る潮のどう／＼、浪を蹴立てゝ入りにけり。

【解說】此の曲は、文政十一年三月江戸中村座の彌生狂言の大切に中村芝翫（四代目歌右衛門）が傾城、ごみ太夫、供奴、浦島、瓢箪鯰、石橋と共に踊つた七變化の所作事の一つで、乙姫の口說きを山とした淨瑠璃である。作者は瀨川如皐で、出演の連中は、午之助改め三代目富本豐前太夫、同齋宮太夫、同大和太夫、三味線名見崎德治、同金升であつた。

姫御寮　娘を敬つて呼ぶ語

譯知る里　戀を知る里の意で遊里の事

惡性　淫蕩の意

罪障　往生の障りとなる罪

八歳の龍女成佛　八歳の龍女が釋尊に如意寶珠を捧げた功德で男子と生れ代り成佛した故事をいふ

玉の都　龍宮をいふ

住の江　住吉の古名

始皇の御爵　秦の始皇が泰山に登つた時遇かに夕立がしたので松の木の下で雨を凌ぎ、其禮心に松を五大夫の爵に封じたといふ故事をいふ

垂跡　佛が衆生濟度の爲に種々の身を現ずること

老せぬ門　不老門

蓬萊山　仙人の住むところ

蓬萊宮

〽君が代の。久しかるべき例しには、かねてぞ植えし住の江の、松は常磐の色深く、掻けども落葉の盡きせぬは、實にや始皇の御爵に、大夫と四方に末廣き。竹は端々賑はひて、その程よく素直さは、實に神國の根も強く、竹に生るゝ鶯の、ほう法華經の垂跡に、天地和合の土も木も、老せぬ門の鶴の聲、千代に八千代をさゞれ石の、巖となりて苔の蒸す、祝ひの水の玉川の、流れを汲んで相生の、夫婦妹脊の尉と姥、戀と色との金銀の、玉をつらねて我宿の、五百重錦の瑠璃の壺、蓬萊山も他所ならず、君の惠みぞありがたき。

【解説】この曲は謠曲の「老松」と「鶴龜」とを搗き交ぜたやうなもので、辭句も生硬で支離滅裂である。作詞者は不明であるが、作者曲は四代目富本豐前太夫だと傳へられてゐる。

新玉の云々　古來書初に用ひた和歌
千代紙　西の内に花模様を色刷にしたもので女子の書初に用ひた紙
堆高く　鮮明の意
雲紙　雲の模様を現はした紙
三つ物　連歌師や俳諧師が三句の付合ひをすること
長生　唐の宮殿の名
老いせぬ門　不老門
若水　元朝汲む水

歳朝嘉例壽（長生）

〽新玉の、歳の始に筆とりて、萬の寶かきぞ集むる倭歌、筆試むる、千代紙に、墨色實にも堆高く、雲の空色、雲紙の、色紙、短冊詠み初の、三つ物連歌俳諧も、つきせぬ言葉眞砂なり。濱の眞砂は詠みつくすとも、盡きせぬや、我が國と、君が代の、　ウタヒ　〽長生の家こそ、老いせぬ門の若々と、若水汲のあさ若き、御湯殿始め庭竈、烟ぞ今日の初霞。たなびきにけり一刷毛に、繪の書初の熨斗寶珠、〽玉の櫛笥に髪飾る、白紅と繪元結、〽結ぶ縁の妹と脊も、命長掛諸白髪まで、變らぬ仲と睦まし月の着衣始、流行模様の伊達小袖。〽あだと色とを濃い紫の、十九や二十は色盛り。〽なまめく風を姿見に、〽うつせば戀の眞澄鏡、月の黛花の顏、雪の肌の、衣紋つき。〽裲襠しとと振る袂、ゆらな手元に爪琴の、二上り〽菜蕗といふも草の名、茗荷といふも草の名、富貴自在、德

熨斗寶珠　狩野派で
試筆に描く畫
白紅　底紅の元結
繪元結　金銀地に鶴
龜松竹等描た元結
長掛　長髱のこと
濃い紫　紫にかける
眞澄鏡　よく澄んで
明るい鏡
菜露云々　箏曲の菜
蕗組の第一の組唄
春の花云々　同じ組
曲の第二の歌詞
松囃子　高砂、老松
等を謡ふ謡ひ初

ありて冥加あらせ給へや。春の花の琴曲、花風樂に柳花苑、柳花苑の鶯は、同じ曲を囀る。〽弾き初うたふ連れ歌や、〽その色絲の音に通ふ、峯の松風松囃子、四海波風靜にて、國も治まる代のためし、射初のどかに弦の音、射垜も菫鼓草、春の姿も山笑ふ、笑ふ家には、福引の、手に絲遊ぶ綱手繩、深紅の色の厚總や、飾り立てたる黑の駒、誰いはねども御召ぞと、對の口取鮫鞘を、踵うたせて落し差し、揃ふ奴の聲揃へ。二上り〽二人つん／＼連立ち、さあ／＼行くべい、さあ行くべい、嬉し日出度の日の出まばゆき金覆輪の、鞍は梨子地の鐙に泥障、手綱かい繰りしつとん／＼、立鼓、ちきりを乘廻し、くるり、／＼くる／＼／＼と、車にあらぬ輪乘の拍子と、轡の音がりん／＼がら／＼、りんがら／＼、はいどう／＼、はい／＼／＼、さて／＼見事な御馬乘初勇ましき。勇む春駒葦原の、國に羽をのす鶴の丸、鶴の齢の千代八千代、久しき御代こそめでたけれ。

四海波　高砂の文句
射垜も菫鼓草　射垜は弓の的場で太平の代は弓は袋に藏るので的場には若草が生えてゐる意
山笑ふ　春山の形容
對の口取　服裝が同じの二人の口取
立鼓　鼓の胴のやうに中のくびれた形に馬を乘廻す
ちきり　立鼓に似た乘り方
鶴の丸　富本の定紋

【解說】此の曲は、寛延二年正月、初代豐前掾が富本流を興して旗揚した最初の春興に、雲州松江城主松平宗衍(南海)侯から賜つて節付をしたものだと傳へられてゐる。富本の祝言物の中では第一に指を屈すべき名曲で、初春の嘉例である書初、三つ物、若水、御湯殿初、庭竈、熨斗實珠、着衣始、彈初、松囃子、射初、乘初等を一篇の中に綴り込んで、文句が上品で、艷めかしい句も巧みに按配されて、醜惡た感じを起させない點は流石にお大名の作歌だとうなづかれる。一に長生と稱へるのは一般に語り出しの數行を省いて、「長生の家」といふ所から語り出す風になつてから名付けられたのである。因に、長府侯の作だと稱せらるゝ清元の『梅の春』が、その實狂歌師眞顏の代作らしいと傳へらるゝやうに、この『長生』も、南海侯の自作ではなくて誰れかの代作ではないかとの說もある。一說として揭げて置く。

加賀　加賀屋の略
白菊紅菊つけて　白い顔へ紅をつけたといふ意
またなき　二人とない最愛の女の意
中汲　中を濁酒の中汲にかけて云ふ
菊坂　本郷にある
道芝　道芝を芝浦の芝にかけていふ
飯倉　道行の途中の地、麻布の町の名
よぎりて　通り過ぎての意

ちらし書仇命毛（お菊幸助）

〽加賀のお菊は酒屋の娘、顔は白菊紅菊つけて、よいこの〳〵よい此娘、嫁入り盛りとうたひにし、昔を今に菊酒や。〽またなきおきくに幸助も、いつか妹脊の、合中汲と、言ひかはしたる二人連れ、人目籬の菊坂を、忍びて、合心一と筋に、合今宵ぞ死出の道芝を、誰が女夫と飯倉に、はつとさすがは恥かしく、よぎりて顔を三田の郷、〽つまづく足も、合アイタヽヽ、憎や小石がころ〳〵と、合つい轉び寢の合枕にも、合〽夢に三里の近路さへ、徒歩ひつけざるお身にマア、合さぞや辛らしとゆふべまで、芝居噺や淨瑠璃も、よそに聞きしが明日はまた、〽我身の上を道行に、路考、合粂三がするならば、淫亂者よませた奴、なんの心中せいでもを、皆な浮氣と日々の、見物方のお譏りを、思へば夫が此世から、心がかりと口籠る。クドキ〽なぜそんな事くよ〳〵と、たとへ此方等が

三田の鄕　見たにかけて三田に着いたことをいふ
路考　お菊に扮する菊之丞の俳號
粂三　幸助に扮する粂三郎の略
ませた　早熟の意
朝夕の拵へ　朝夕の食事拵への略
一つ身　一歳二歳の赤兒の着衣
水入らず　親子夫婦遠慮の無い意
あどなさ　罪のない

死んだ後、悪う言はりよとまゝにして、早う未來で遠慮なう、世帯事して朝夕の、合〽拵らへ仕たり縫ひ仕事、そして其方によう似たる、お腹の赤兒を産んだなら、一つ身着せて抱き抱へ、ねん〳〵ねんよ、ねんねがお守りは何處へ行た、お守りにもよし女房にも、添乳の床の水入らず、〽暮らそと死にもせぬうちに、合樂しむ詞あどなさに、〽幸助いとゞ胸くもる、〽月の岬も名殘ぞと、暫時は此處に彳むも、仇な浮世の道廻り。

夜番〽火の用心さつしやりませう〽と、呼ぶ聲も、合男勝りに、合割竹を、引ずりならぬ、我勢嫁。よそぢやお祭早や濟んで、八つか七つか白河夜船、そこを夜番は、合あたり前、番所火鉢に夫婦して、うまい最中も時が來りや、可愛男に代り役、横素つ頬を、合はる風の、寒さいとはぬ窓の梅、見向きもやらず廻り來て、夜番〽そこに居るのは誰ぢやえ誰ぢやえ。幸〽ハイ〳〵私共は目黒の不動樣へ參詣の者、時を取り違へて、あまり夜深に出ました故、それでしばらく此樣に。番〽夫ならよいがマ

事をいふ
割竹　竹の先を割つた杖
我勢婦　勢のいゝ鐵火な女房をいふ
八つか七つ　八つは午前二時、七つは午前四時
夜番　町内の夜警
うまい最中　熟睡最中のこと
横素つ頰　横頰をいふ江戸詞
はる風　攉るに春をかけていふ

ア美しい娘御に、お若衆さん、こりやお前、もし心中とやらぢやないかえ。菊へその樣な者ぢやござんせんわいなア。番へイヤもう、若い時には誰しも覺えのある習ひ、死んで花實は咲かぬぞえ。とかく命が物種、何處になと暮らされぬといふことは、ござんすまい、モシ私らとても、聞かしやんせ。ウタカヽリへ雪の故都合二人連れ、つッと奔りて、合北國から、合お江戸へ出てづう國の、搗や樣のお世話にて、合こゝの番屋が明た口、合餅は無けれど菓子玩具、合何や茅町の合仕入物、合へ何う線香に蠟燭も、夏干炭團、合オ、アッ、手の付けられぬ八里半、へ草履草鞋合取交ぜて、名もよろづ屋の番太郎、合夜なべに姫糊引き合臼に、合へ其日を送り拍子木は、氣樂な世帶ぢや、合ないかいな。へ問はず語りに身の上を、夫と意見も眞實に、しやべり散らして、番へ火の用心ぢやない、身の用心さつしやりませう、へと、行き過る。幸へ今の女中の詞と言ひ、よく／＼思ひ廻はす程、此幸助は道知らず、へ親にもまさる大恩

時を取違へ　時間を間違へたこと
雪の故郷　降るに洒落ていふ
北國　越後地方
づら國　同國の意
搗や様　米屋様の意
餅はなけれど　あいたロに牡丹餅にしやれて云ふ
茅町　淺草の地で昔駄菓子問屋の多かつた場所
何う線香　どうせうからせうにもぢら

を、仇で報じて御主人い、娘と不義いその上に、心中と言や言ふものゝ、手もなう此身は主殺し、これを思へば貴女とは、〽一所に死なれぬ此幸助、何卒あなたは身二つに、日出たくお成り遊ばして、親御様のお詞に、御付きなさるが御孝行、もしお菊様、何うぞまあ。クドキ〽言ふに答へも泣いじやくり。あれ又そんな無理ばかり、まだお主ぢやと思うてかいな、エヽ、合憎らしい、わしや始めから殿御ぢやと、心で定めて様付に、合〽晴れて言はれぬ辛氣さが、積りて癪の合度毎に、合その手をちよつと合脇明けの、内外の手前懐中で、抱〆合られてつい癒ほる、合針合お藥より利のよい、お前ぢやものを何のその、〽むごいわいのと縋がり付き、怨み涙ぞ誠なる。幸〽スリヤ何う有つても私と。菊〽知れた事イナア。ちつ共早う袖が浦の、露と消えたい、早う殺してたもいなう。幸〽夫程までに被仰る事、未來はおろか奈落へも、一所にお供致しませう。菊〽エヽ嬉しいわいナア。幸〽最早明方お菊様、〽いざと互に身繕ろひ、

せる
八里半　燒芋のこと
味が栗(九里)に猶や足らぬ意
番太郎　江戸市中の木戸の番屋、又は番人の稱
拍子木　夜番の柝
身二つ　兒を產む意
腋明け　八つ口
針　錢で身を刺す治療法をいふ
袖ケ浦　高輪の沖
奈落　地獄のこと

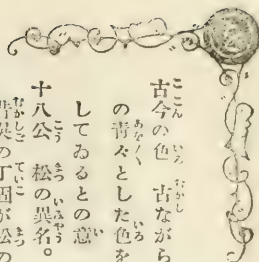
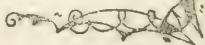
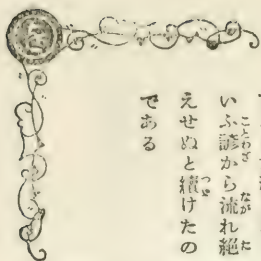
手に手を袖が浦風の、吹き越す方へと急ぎ行く。

【解說】この曲は、文化十三年正月江戸河原崎座の二番狂言「封文めでたくかしく」の大切淨瑠璃に、瀨川菊之丞のお菊、岩井粂三郞の幸助、五代目岩井半四郞の夜番夢のお市で上演したもので、本鄉菊坂加賀屋の樽拾幸助が主人の娘お菊と割なき仲となつたが、お菊の母の後家おいまは、娘を他に嫁に遣らうとするので、幸助と駈落して芝浦で心中するといふ筋で、作者は櫻田治助、出語りは二代目富本豐前太夫、同齋宮太夫、同綱太夫、三味線鳥羽屋里長、同里夕であつた。

富本で「お菊幸助」で通つてゐるものには、これより前に寬政五年二月に出來た『名酒盛色中汲』があつて、其方が流行してゐる。

老松

イロ〽そも〳〵松の目出度きこと、萬木に優れ、十八公の粧ひ、千年の綠を成して、古今の色を見す。〽秦の始皇の御狩の時、天俄かにかき曇り、大雨頻りに降りしかば、帝雨を凌がんと、小松の蔭へ寄り給ふ。〽此松忽ち大木となり、枝を垂れ、葉を重ねて、木の間透き間をふさぎて、その雨を洩らさゞりしかば、帝大夫といふ爵を、贈り下し給ひてより、松を大夫と申すとかや。〽斯やうに、〽めでたき松が枝に、巣をくふ田鶴の齢をば、君に捧げて御子孫は、龜の萬劫ふる川の、流れたえせぬ金銀珠玉、どうどう〳〵と御藏の內へ、をさまる家こそ目出たけれ。

【解說】此の曲は、史記の始皇本記に『秦の始皇が東方の郡縣を巡幸して泰山といふ大きな山に登り、いざ歸らうといふ時、遽かに天氣が變つて、風雨が烈しく起つて來た。雨具の用意もなかつたので、傍の松の木の下に立つ寄

古今の色　古ながらの靑々とした色をしてゐるとの意

十八公　松の異名。昔吳の丁固が松の樹が腹の上に生へた夢を見て『松の字は十八公である吾も十八歳で必ず公に成るであらう』と他に語つたが果して其通り出世したとある

秦の始皇　支那の秦の世の天子の名

大夫といふ爵　五大夫といふ爵

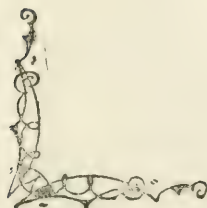
田鶴　鶴といふに同じ

萬劫　かぎりない世と云ふ意。龜は萬年と云ふので、つけたのである

ふる川　萬年を經るを古川にかける、古川に水絶えぬといふ諺から流れ絶えせぬと續けたのである

つて雨を凌ぐことが出來た。その功によつて、この松を五大夫に封ぜられた』とある故事を引いて、謡曲の『老松』が作られ、更にそれを淨瑠璃に移したのが延享四年に作られた常磐津の『老松』であるが、寛延元年八月、常磐津小文字太夫が文字太夫と分離して、初めて富本の一派を立てた際、常磐津の歌詞通りの『老松』を富本風に節付けして、翌寛延二年の初春封切したのである。

田面雁露手枕（お浦新三）

〽聞き馴れし、雁も去年より久し振、聲新しく菊月や、落つる田の面に富草の、花咲き實る日の惠み。〽稻葉に波のうねりなく、靜けき風に空晴れて、富士を向ふに駿河路の、田子の名偲ぶ裏田甫。象潟町に誰が家か、浮いた端唄の一と節は。〽待ち侘びて、寢るともなしにまどろみし、枕に通ふかね言も、夢かうつゝか、現か夢か、さめて淚の袖袂、アレ村雨が降るわいな。〽小春に近きうらゝかに、昨日の雨の水落ちて、田川の流れ淺くとも、深き契りに水鳥の、翼かはして二世三世、結びし露の濡れ初めて、放れぬ仲の女夫鴨、ほんに他目も羨まし。〽文の千束の里をば越えて、首尾も吉原裏道傳ひ、通ひ廓の客人しげく、往さ來るさの雁燕。ヨイ〳〵、ヨイ〳〵、ヨイヤサ。合 ヨイヤーサ。〽今まで晴れし中空も、秋のならひに雲立ちて、雨脚早く吹き送る、（風ぞはげしく。）

聲新らしく菊月　四代目家元が五代目歿後六代目として再起した意を含めといふので、菊月は聽くにかけて九月をいふ

富草　富本のこと

田子　田子の浦の略

裏田甫　吉原裏の田甫のこと。田子の浦を裏にかける

象潟町　淺草の地

端唄　うた澤節

かね言　男女が互ひ

に契る言葉
小春　陰暦十月頃
田川　田甫を流れる小川
女夫鴨　番ひの鴨
千束の里　淺草の古名を文の往復の繁しきにかけていふ
雁燕　雁の渡り初める時分には燕が南國に去るので去來の譬にいふ
秋のならひ　秋は天氣が變り易いのでいふ

【解說】この曲は明治十五年十一月新富座（其年一月燒失した猿若座の名義で）で菊五郎、左團次、仲藏、家橘、秀調一派で『僞甲當世簪』といふ、朝鮮長屋の鼈甲屋京屋の娘お浦が同業和國屋の新三郎を聟に貰つたが、慾張の兩親は聟を追出して、唐木屋の息子が二千圓の持參金を持つて聟に來るといふので心が傾いて居るのを見て、新三郎とお浦が前後して家出をするといふ筋の、當時の朝鮮事件を當て込んだ三幕八場の世話物の中の序幕の濡場に河竹默阿彌が書卸した淨瑠璃で、當時四代目豐前掾が、其の子五代目豐前太夫に早逝されたので、再び六代目として立つた時、作曲されたのであるから唄ひ出しに其の意味がほのめかしてある。この淨瑠璃を舞臺に演じた時は、五代目菊五郎の口上があつて、非常な大入だつたと傳へられてゐる。

達模樣吾妻八景（小ぎく）

へ戀風の、いとゞ身に沁む雨催ひ、霧に紛れてやう／＼と、飛沫を拂ふ袖袂、濡れて嬉しき二人連。三下りツタへあれ春雨が降るわいな、畦に烏が濡れ羽鳥、戀に濡るゝといふことが、合可愛いと啼くは久しいものゝよの、さりながら、合可愛いといふもほんに浮世であるわいな。へ唄の唱歌も身の上を、思ひつゞけて長繩手、我名は花に春霞、野にも山にも立ち滿ちて　文七へ一と足づゝに消えて行く、合小ぎく半兵衛が相合の、傘に比翼の濡れ翅、仲よし原と言はれしも、昔となるも因果ごと、道路にしばし休らひぬ。小へ半兵衛さん、道々もいふ通り、心に思はぬ愛想盡かし、嘸腹が立つたでござんせう、堪忍して下さんせエ。半へ然うい ふ深い心と知らず、一圖に色に迷うたる、若氣のあやまり、一人ならず二人まで、殺した此身は心から、たとへ折紙手に入つても、所詮逃れぬ

戀風の　戀に惱む身をいふ

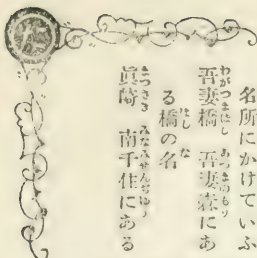
霧に紛れて　霧中を夢中になぞらへていふ詞

畦　田と田との境の細道

唄の唱歌　唄の歌詞

長繩手　長い田甫道

比翼の濡れ翅　翅を重ねた鳥の樣に寄添うて居るが傘が一つで袖が濡れること

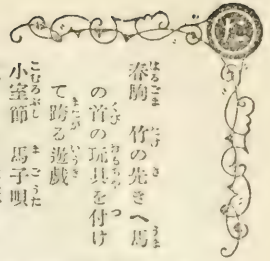
心に思はぬ愛想盡か

し
半兵衛に寶物を手に入れさせる爲に惡侍に靡くと見せて男に難面く當つた前幕の場面のこと
折紙　鑑定書の紙
そりや聞こえませぬ　そりや御無理ぢやと怨む詞
三囲　見るを向島の名所にかけていふ
吾妻橋　吾妻森にある橋の名
眞崎　南千住にある

我が命、其方は何うも殺されぬ、思案し變へて廓へ歸り、我が亡き跡は存命へて、思ひ出す日は一遍の、必ず回向を頼むぞよ。〽エ、モ何故に其樣な事いうて下さんす、遊者となりし始めから、色にも戀にもお前一人、死なば一所の約束を、今更そんな水臭い、そりや聞こえませぬ半兵衛さん、ウタ　カ、リ〽同じ勤めといひ 合 ながら、座敷ばかりの交際に、そのお客を三囲の、夜の 合 雨より濡れ 合 かゝり 合 吾妻橋と夕日指す、顔に照りはの 合 新枕、合 嬉しい逢ふ瀬 合 眞崎、後の月見の夜も 合 すがら、馴れ初めてより増す戀に、思ひのたけを庵崎の、晩に忍ばゞ鐘四つなうと知らせ文、首尾を小宿に 合 待乳山、薄雪と積る言の葉も、人目の關や、雁金の、渡る橋場の 合 青嵐、晴れぬ心も隅田川、むごい歸帆と取りついて、離れ難なきその風情。半兵衛小ぎくが顏を見て、〽それ程までに思ひつめ、二世を 合 かけたる三下り、遊子げいこで內證は、合 三味線枕の 合 睦言も、てんじゆにあらば比翼の鳥、合 また乳ぶくらは連理の枝、

誓ひは何とて海老尾、合誓紙に書きし紙駒の、撥が當ろと何のその、合まゝの川竹胴据えて、抱いて音締の中田圃、〽最期の場所と覺悟して、連れ立つ向ふへ拍子取り。合〽日出たや〳〵春の始めの、春駒なんぞは、夢に見てさへよい殿御振。詞ドウ〳〵ドウ、朝の出がけにや小室節、浮世渡りはさま〴〵に、大鼓たゝいて猿廻し、來かゝる向ふへ二人づれ、行かんとするを引きとめる、猿に恐れて飛び退く小ぎく。猿まはし〽アア何にも怖い事はごんせぬ、恐いといふはお前方、まだ夜の明けるか明けねうち、合點の行かぬ扮裝素振、色ぢやな〳〵、心中と見た日は違はぬ。小〽イ、エ何うしてまあ。〽ハテさりとはさりとは、二上り〽のほよ、さんな〳〵又あろかいな。合 猿まはし〽お前方は未來で、女夫にならうと思はつしやらうが、先の世の便宜は知れぬ。死んで花實は咲くまいし、さりとは〳〵、二上り〽のほよ、さんな〳〵又あろかいな。合 聟入姿ものつしりと〳〵、嫁御の機嫌が直つたぞ、くるりと返つて立つた

地で稲荷がある
庵崎　向島小梅邊
鐘四つ　夜十時の鐘
待乳山　淺草山の宿にある名所
橋場　隅田川の西岸の地
青嵐　青葉の頃に吹渡る風
てんじゆ　三味線の絲巻、天に在らばにもぢらせる
乳ぶくら　乳脹で三味線の絲座下の左右へ圓く脹れた所

りな、コレ〳〵〳〵コレ〳〵戻らんせ。かへつたり、のぼよ、さんなさんな又あろかいな。合ついでに日和を見てたもれ、日和を見たなら落ちてたも〳〵。半へだん〳〵の御意見、きつと聞き届けました。小へ嬉しうござんす。猿廻しへオ、然うぢや〳〵、へお猿はお目出たや、心の駒に引とむる、小ぎく半兵衛の戀中の、浮名をこゝに書きとゞむ。

【解説】此の曲は、寛政六年二月江戸都座の二の替狂言『初曙觀曾我』の二番目大切淨瑠璃に、「倭容形近江八景」と一日替にて出し、瀬川菊之丞の藝者小菊が、「近江八景」にては澤村宗十郎の稻野屋半兵衛にて小いな、「吾妻八景」にては市川八百藏の若松屋半兵衛にて藝者小菊を勤め、此の二役替りが當時大評判となつて頗る好評を博したものである。此の曲の筋は吉原藝者小菊が、紛失した主家の重寶を手に入れる爲めに人を殺して半兵衛と心中しやうとする處を、猿廻しが來かゝつて意見をするといふ筋で、松井由輔、吉御し、二代目富本豐前太夫、同延壽齋、同大和太夫、三味線名見崎德治、鳥羽

海老尾　三味線の絲巻に近い上部の後方へ海老の尾のやうに曲つてゐるのをいふので變らうの語に通はせていふ

撥　三味線の撥を罰に云ひかける

川竹　廓のこと

胴据えて　三味線の胴を、腰を据ゑることに云ひかける

音締　寢るにかけていふ

屋里長等が二曲とも出語りしたもので、節付は里長であつた。

春駒　竹の先きへ馬の首の玩具を付けて跨る遊戯

小室節　馬子唄

色ぢやな　戀仲ぢやなと云ふ意

のほよさんな　猿を廻はす際唄ふ拍子

日和　天氣工合

落ちてたも　心中をせず落ち延びて下さいといふ意

あはれ古を　許曲松風の句を借る

宵々毎の白雪　宵々毎の積る話を雪に擬らへていふ

離れ鴛鴦　男女の離れ〴〵になる事を譬へていふ

命毛　筆の穂先を命にかけていふ

香のかをり　反魂香の意で、漢の武帝が之れを炷いて死せる李夫人の魂を再現させた故事が

其俤淺間嶽（あさま）

ウタヒ〽あはれ古を、思ひ出づれば懐しや、ゆく歳月に關あれば、花に嵐の關守も、出〽宵々毎の白雪は、茜さす日に解けて行く、妹脊の仲の恨事、かたくも岩に離れ鴛鴦、京の小次郎祐俊が、名殘雄鹿の命毛も、昨日の露と果敢なくも、消えて此世に亡き妻の、胸に思の煙とは、香のかをりに引かれくる、魂は昔の一つ前、在りし廓の其の儘に、奥州が立姿。二上り〽恨も戀も殘りねの、若しや心の變りやせんと、思ふ 合 疑ひ晴さん爲の誓紙をば、何故に 合 煙となし給ふ、怨めしや、合 はやくも變る飛鳥川、昨日の誠今日の嘘、なげの情の恨みをも、合 云はで焦がるゝ胸の火の、煙くらべん淺間山。祐〽ヤア〳〵、そなたは奥州ぢやないか、何うしてマア此處へはおぢやつたぞいなう。奥〽たゞ忘られぬは互の戀路、お顔が見たい、戀しい、床しい、懐しい、思ひ焦れてこれ迄

ある
一つ前　上着と下着の裾前を一つに合せて着ること
飛鳥川「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀨になる」古今集
なげの情　投げ遣りにする情の意
起請　起請文の略
ありしながら　昔のまゝといふ意
比翼莫蓙　二枚合はせてかゞつたござ

參りましたわいなう。諸〽オヽ、よう來てたもつたなう。アノそなたは人手にかゝつて死にやつたと聞いたによつて、おりやもう大ていや大方案じてゐたのに、マアよう顏見せに來て、たもつたなう。奥〽わたしは此樣に思うてゐれど、水臭いはお前の心、ほんにあんまり。諸〽ソリヤ何がいのう。奥〽何がとはアレあの。諸〽エヽ起請の事か。奥〽アイナア。歌ガカリ〽淺い心と白絲の、染めて口惜しき馴れ衣、ありしながらの一つ前、小褄揃へて、しどけなく、風に柳の、〽吹くまゝに、まかせる筈の勤ぢやとても、いやな客にも比翼莫蓙、思ふ男の山鳥の、〽をろの鏡の影をだに、見ぬ日に曇る薄月夜。〽閨の障子に俤もれて、濡れて浮名の流れて末は、終ひの寄る瀨の浪枕、〽變るまいぞや、〽變らじと、〽筆に誓の神かけて、墨と硯の濃い仲を、誰が水さして濡れ衣の、無き名を立てゝ無理な事、〽昨夕の床の夜すがらに、背中そむけて物云はぬ、〽無言の鐘の煙草盆、煙管に科のあるかいな。こち向かんせと寄

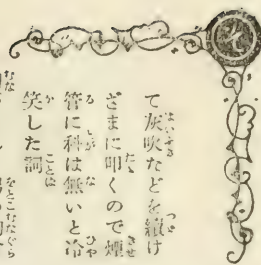
をろの鏡　山鳥は自分の尾の美しい姿を水鏡にうつして喜び舞ふ。それをろの鏡と云ふ

筆に誓ひ　起請を取り交はすこと

水さし　邪魔をすること

無言の鐘　拗ねて無言で居る裡に鐘が鳴つてるといふ靜寂な情景をいふ

煙管に科　拗ねた餘憤を煙管に洩らし

り添へば、ひんとふりきる袖の香は、〽誰と寢て來た移り香と、〽しらべの絲の胸づくし、雞の啼くまで口舌して、〽抓りし痕がこれ此處に、〽紫式部が筆の草、女の上の品定めも、悋氣は下品、下生ぞや、いたらぬ〱。　結〽コレ〱奥州、そなたもその野暮は拔けさうなものぢやぞや、ちつと粹になりや、粹になりや、マヽ。　奥〽なんぼ其樣に言はしやんしても、打捨つて置いたなら、惡性の仕飽きであらう、ほんに油斷がならぬわいなア。　結〽ソリヤ誰がいなう。　奥〽アノお前が。　結〽なんと。　奥〽これ。　クドキ〽じつと引寄せ、引寄せて、ほんにまあ、〽につくいおさんがあるわいな。此頃のしなしぶり、〽聞いたよすがもよしそれとても、花染の、うつろひ易き癖ぢやもの。合露の喞言の樂みならば、だんない〱急きやせぬと、たしなんで見ても落ち付かぬ、〽心の駒の亂れ髮、結ふに云はれず、いへばえに、かける、かけると口癖に、云うたお前にかけられて、登りつめたる戀の山、浮名厭ふも初手の事、〽云

て灰吹などを續けざまに叩くので煙管に科は無いと冷笑した詞

胸づくし　男の胸倉を取つて怨むこと

紫式部　抓つた痕の紫になつたのをかけていふ

筆の章　源氏物語のこと

下品下生　女の一番惡い階級

にっくいおさん　惡い女に同じ

ひ立てられて、〽歌はれて、〽わざくれ橋の名にたどる、首尾の相圖の箱梯子。合手管に馴れし裲襠の、下に流るゝいさや川、我が名漏らすな告げ渡る、八聲の鷄のとり〳〵に、合他所はきぬ〳〵是からが、間夫の晝ぢやと短夜を、夢も結ばぬ睦語に、恨み云うたり笑うたり、別れに立てし誓文は、千も二千も三千も、世界に一人の男ぢやと、樂しむ中を、むら雲の、合憎や思はぬ疑ひに、飽かぬ別れの浮世の名殘、鴛鴦の劍羽我からと、合貫きとめし玉の緒の、〽苦しい、〽悲しい、〽口惜しい、誑された身は、何がなる。しかも其日の廻ぐり來て、今日と知らでや忘れてや、せめて未來は違ひなく、蓮の臺に二人寢の、合〽誓を頼む起請をば、煙となして後の世は、添はぬ心か胴慾や、情無いぞと身を悶え、慨けば共に涙ぐみ。〽聽て此身も葉末の露と、消えて行く身ぞ、二世かけて、誓ひし起請はこれ、合此の胸に有明の、月は曇らぬ西の空、遠い國で添はうぞや、待つてゐやいと手を取れば。〽恨みも晴れて身の上を、

しなしぶり　そぶりに同じ

ようすが　便りのこと

花染　古今集の「世の中の人の心は花染の移ろひ易き色にぞありける」から出たので、花染は露草の汁で染めた衣

だんない　大事ない

かける　手管にかけるの意で欺すこと

わざくれ橋　舊吉原の近所にあつた橋

語るも恥かし淺ましや、未來の罪は現在の、科によるものをさなきだに、重きが上の小夜衣、變る枕の數々に、〽指切り、〽髮切り、〽偽の、起請の血汐は紅蓮の波、噓の涙の水增さる、三途の川の唐紅、劍の山は此の世から、我と貫ぬく刄の苦しみ、合人の思ひにあこがれて、此身を焦がす焦熱の、合炎の責も諸共に、奈落の底の底までも、合離れはせじと附きまとひ、くるりくる／＼くる／＼と、追ひめぐり追ひめぐり、合輪廻の車、煩惱の、絆に引かるゝ我が魂を、結び止めよしたがひの、合夫よ妻よと呼び交はす、聲も亂るゝ朧影、見えみ見えずみ、合まぼろしの、姿は消えて陽炎の、花壇に飛び交ふ秋の蝶、合手にも取られずちらちら／＼、合風に亂るゝ白粉も、翼に殘して草隱れ。

【解說】此の曲は安永八年、江戸市村座の三月興行に二代目瀨川菊之丞の七回忌追善劇として出した淨瑠璃である。作者は增山金八であるが歌詞はそれより以前に出た一中節の『淺間嶽』の數々の曲のつぎはぎである。趣向も無

論借り物で、京の小次郎が傾城奥州と取交した起請文を火鉢に投げ入れると煙の中から奥州の立姿が現はれて、様々の怨を述べるといふ俗に奥州の執念場を浄瑠璃にしたものである。初演の役割は小柴掃部實は京の小次郎が澤村四郎五郎、傾城奥州が三代目瀬川菊之丞で、出語は二代目富本豐前太夫、同齋宮太夫、同曾根太夫、三味線名見崎徳治、同三保崎東巴等であつた。此の曲は富本浄瑠璃の中でも屈指の語り物で、一中節にも、河東節にも、常磐津にも、清元にも「淺間」を作曲したものは澤山あるが、此の曲ほど顯著れて居ないので「淺間」と言へば直ぐに富本を連想し、富本といへば直ぐに淺間を連想するといふ位賣り込んだものである。

で、捨鉢の意にかけていふ

箱梯子　東梯子

裲襠の下　裲襠の下に間夫を潜ませて伴ふ意

鴛鴦の劍羽　鴛鴦の背片に立つてゐる銀杏の形の羽のこと。これを劍羽に通はせる

さなきだに　新古今集の十戒の歌の上の句を引いて遊女の身の上を云ふ

染幟菖蒲の彩色（菖蒲の彩色の内色法印）

色法印

〽籬々に佇みて、色と情の金胎兩部、色法印と人毎に、呼ばれて今日も、此處彼處、寒の師走も、日の六月も、暑さ寒さのなき坊主。歸命ちよんがれとゝづくし、今は氣輕な世渡りの、戀の初山約束も、互ひに堅き男氣に、石尊樣へ納め太刀、腰の錫杖振り立てゝ。紀伊の國音無川の水上に、立たせ給ふは船玉山、船玉十二社大明神、一の間天照大神宮、二の間が八幡の正八幡、三の間春日の大明神、右の小べりが金剛界、左の小べりが胎藏界、加持がな之れきり不動明王にくじきじや、こちの辨財天女、歸命頂禮、さんげ〳〵、お襁褓に八大金剛童子、敬つて申す、神祇釋教、戀無常、粹も甘いも嘗めつくし、甘茶新茶の行水を、ざつぷり

籬　女郎屋の格子
金胎兩部　佛法でいふ金剛界胎藏界。金剛は智體、胎藏は理體
色法印　色つぽい修行者の意
寒の師走　寒い十二月をいふ
日の六月　暑い日盛りの六月
歸命ちよんがれ　佛語の歸命頂禮を綟つてちよんがれ節をいふ

初山　初めて富士とか大山とかの靈山へ登る事をいふ
石尊様　相模大山の石尊大權現
納め太刀　江戸の職人連が技術の上達を祈願の爲め太刀を納めに登山した
錫杖　行者の持つ環が先きに付いてゐる短い金棒
加持　病氣災難を除くための佛法の祈禱

産湯のお釋迦さん、本尊かけたは時鳥、八千八聲啼くと聞く、森の小鳥我色と、尾羽をからすの羽根ばたき、一もんも無し、一家も無し、梨の礫も無いお女郎に、此方少しも食ひやひなし、いつ袖口の綻びも、綿さへ足にかゝり人。へそもそも色の初まりは、源氏の君の昔にも、戀には窶す行平様、海女にも三年の契をこめて、松としきかば又もや來んと、それを便りに磯馴松、粹な仕打ちやあるまいか。へ赤いらしいと名に立つとても、したがよいぞえ、緋縮緬ちらり、白い肌に見ゆるのは、雪の中なる紅梅と、いうてたもるのこれナウ、いうてたもるの、逢う〳〵着たりや、とうきたり、鶴の毛衣、けんけの毛衣、けれんと打かけ、ぬつくり、そつくり、こつくり、くゝめる、くらひつ、ずつしつ〳〵と、小米の生噛み、こん小粒の二分金か、聞かう〳〵、共に引かるゝ億兆や、萬歳、〳〵〳〵〳〵萬々歳、どつかり、ずつしり、詰め込む顏、金はずつしり〳〵、向ふの小藏の小溝に鰌がちよつと、によろり、踊る拍子の

さんげ　懺悔を産氣にかけていふ
神祇釋教　神佛の意
梨の礫　反響のない譬にひく
食ひやい　關係
かゝり人　食客
行平様　須磨に流浪へた在原行平
緋縮緬ちらり　緋縮緬の腹巻がちらりと見ゆる意
ばさら者　物にかまはぬ氣輕者をいふ

而白や。わけもなき。へ色氣はなれたばさら者、一人浮かれて走り行く。

【解說】この曲は、天保三年江戸河原崎座の五月興行に『昔語黄鳥塚』の通し狂言を出した際、大切に『染織菖蒲の彩色』の外題で澤村訥升（後五代目澤村宗十郎）が神子、いさみ、娘、桃太郎と共に上演した五變化の所作事の一つで、出語は三代目富本豐前太夫、同齋宮太夫、同志名太夫、三味線名見崎德治、同市十であつた。

なほ、この時の五變化は「色法印」と「いさみ」とが富本で「神子」と「娘」と「桃太郎」とは長唄であつた。

月柳廓髪梳（新萬歳）

〽豊國が筆に書きたる繪兄弟、虎祐成が俤と、人や岩崎權六が、姿をうつす氷面鏡。　文七節〽寫せば映る顏と顏。〽互ひに三升三つ扇、離れぬ中も晴れやらぬ、雨の柳のみだれ箱、櫛笥に露や置きぬらん。昔〽それいつぞやの流連に、床の梅をば手活にと。〽云はしやんしたを忘れてか、勤めの身にも投げ入れて、心の底の根締めさへ、八千代をかけて契りしに、外に増す花あればとて、ようまアそんな事いうてと、喞つ涙ぞ道理なる。〽茅花蒲公英つゞみ草、まだ若草の御萬歳、猿若に御繁昌とて、芝居も榮えてましんます、愛嬌ありける御贔負様へ、今日始めての御目見えに、うつや皷の三つ橘、しらべのかゝり八つ花形、櫓めでたき若太夫、連れて來つれて幸若も、恰度似合のよい春に、うかれ囃して來りける。〽一本の柱は魚市、江戸に名高き日本橋。二本の柱は二軒の芝

豊國　二世歌川豊國といふ當時有名な浮世畫師
人や岩崎　人がいふ事を岩崎にかけていふ
氷面鏡　氷が鏡のやうに張つてゐるのを云ふ
三升　團十郎の紋
三つ扇　粂三郎の紋
櫛笥　櫛箱
流連　翌日まで遊び續けること
投入れ　心を打ち込

むことを、生花の投入に云ひかける
若草の御萬歳　若い萬歳といふ意
猿若に御繁昌　德若に御萬歳の洒落。
猿若は芝居町の名
三つ橋　和三郎の紋
若太夫　長十郎にかけていふ
二軒の芝居　大阪道頓堀の中座角座をいふ
山王祭　日枝神社の祭禮をいふ
四天王寺　大阪

居、難波に聞こえし道頓堀、ヤツチヨンチヨン〳〵、ヤツチヨンチヨンヤツチヨンチヨン、ヤツチヨン〳〵、大手さゝせの手打連、三本の柱は山王祭、木遣り音頭の花の山車、ヨイサ、ヨイサ、コレワノサ、ヨイサヨイサ、コレワノサ、ヨンヤサ、曳けや曳け〳〵中の綱。四本の柱は四天王寺、石の舞臺の舞樂殿。五本の柱は五丁の廓、よしや吉原伊達競べ、揃ふ拍子の柱立て。莟の花に色氣より、喰ひ氣の方が德若と、口合いうて入りにける。〽惚れた同士に雲となり、雨と成田屋大和屋が、巫山の契りぞ睦しき、むつましき。

【解説】この曲は、嘉永五年正月江戸河原崎座の初芝居で二番目に『戀衣雁金染』を出した際、序幕に岩井粂三郎の傾城岩崎、市川團十郎の山川屋權六實は雁金文七、澤村長十郎の萬歳、尾上和三郎の才藏で上演した淨瑠璃で出語りは富本豐前椽（三代目豐前太夫）、四代目豐前太夫、同阿波太夫、三味線名見崎勇三、同與惣治であつた。「始めての御目見得」の意は和三郎等が初めて下つた際なので言つた文句である。

滔々　水のひろ〳〵と流れる形容
宮戸川　今の厩橋から吾妻橋附近の隅田川を部分的に稱へた名
山谷船　吉原通の船
待乳山　淺草聖天町に在る山
日本堤　山谷から吉原へ往復する土手
閼伽の水　佛に供へる水
墨染　黒く染めた衣
高尾が苦患　高尾が

茂懺悔睦言（扇賣高尾）

へ流れは常に滔々と、盡きぬながめの宮戸川、東の間絶えぬ山谷舟、誰を待乳の山彿え、日本堤を通ふ駕籠、憂きをさとりし左金吾が、世を遁れたる草の庵。へ以前の姿引かへて、高尾が菩提の閼伽の水、身を住佗びし墨染の、袖のかをりぞ奥床し。へ逢ふことのなきを浮田の森に住む、呼子鳥こそ我身なりけり。　女へ思ひ出せば昔ぢやなア、二世と誓ひし三浦屋の、高尾が苦患助けんと、記念の小袖、此の黒髪、切つても切れぬ凡夫心、ア、不憫の最期で有つたなア。へ扇子召しませ〳〵。　合へ粋な浮世のいとなみを、仇に暮らせし戀風の、間夫に扇と謎かけて、浮氣な風に招かれて、色に要の手取もの。　合めぐりくるくる、　合舞扇、男扇も迷ふなる、女扇と御影堂。へこれも跡から月に柄を、さすがに輕き、合團扇賣。我も昔は色柄を、握つた腰の辨當も、しめねば邪魔に奈良團

冥途での苦しみ
凡夫心　愚鈍で悟り切れぬ心
間夫に扇　間夫に逢ふの洒落
手取もの　客扱ひの上手な者
御影堂　京都の扇屋
月に柄を「月に柄をさしたらばよき團扇かな」といふ古句から取る
色柄　廓通ひに差した伊達作の刀の柄
握つた腰の辨當　柄

扇、心も有頂天地金、彼の文さへも今は早や、反古團扇とも深草の、靡き易さよ風と風、時に扇と團扇賣、輕い商賣氣もかるく、頭にやどる紙細工、張つて見る氣か、合のりが來て、何んと結綿久し振り、割花菱とは、合團どてごんす、〽と、しなだれかゝれば其の手を拂ひ。扇〽何の事でござんすぞいな、最前から後になり前になり、肝腎の商賣物の團扇は賣らしやんせいで、お前もよつぽどなまくら者ぢやわいな。團〽なまくら者とは情ない、隨分わしも精を出さうと思ふところへ、うつゝい姉さん、お前はまア何處から出なさる扇賣だえ。〽問はれて何と庵崎の、ほとりに一人隅田川、扇〽しづといふ扇賣ぢやわいなア。團〽したが、しづ心なくとは奥床しい、わしは三輪の四季の庄兵衛と云ふ團扇賣、團扇をお召なされませ。扇〽イエ〳〵扇をお召なされませ。團〽イヤ團扇を召しませ。扇〽イエ〳〵扇をお召なされませ。團〽どうぞ扇を買うて下さりませ。扇〽いへ〳〵團扇を。團〽これさ、あんまりかつかちめく故、賣

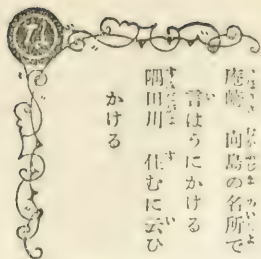
を提つたのを腰につけた辨當の結飯にかけていふ

奈良團扇　奈良で作る茄子形で鹿の模様が透してある團扇

有頂天地金　心が有頂天に逆せ上ることを天地に金箔を蒔いた地紙にかけていふ

反古團扇　反古で貼つた團扇

深草　京都の深草で

物が間違うた。扇〽ほんにこれは麁相な。しかし團扇も扇も逃れぬ物、これから中よう一所に商ひしやうぢやないかえ。團〽それ〳〵、そんなら斯う荷を一處にして、坊主持にせうではないか。扇〽ぼんさん持はよからうわいな。團〽先づ斯う荷を一とつにした所が、扇や〳〵、團扇や團扇やと、いうてあんまり横つ倒しではないか。扇〽ハテ何うなと云はんせいなア。〽心も合ひし荷ひ賣、打擔げてぞ歩み來る。庄兵衛庵の內を見て、團〽サアサア替りませう〳〵。扇〽そりや又何故にえ。團〽なぜと云ふことがあるものか、彼の庵の內に坊主が居るから、此方の番ぢや。扇〽イエ〳〵行き逢はぬうちは、坊主持ぢやござんせぬ。團〽イヤイヤ何でも坊主を見たからは此方の番ぢや。扇〽そりやお前無理でござんす。〽と爭ふ二人がその中へ、道哲內より立出て、道〽ア、これ〳〵、最前から聞いて居れば、坊主々々と愚僧に當て付けた二人の商人、何をそのやうに爭ふのぢや。扇〽ホ、、、、、こりやなんでござります、

作られる藍の吹繪で秋草が付いてる團扇

時に扇　時節に逢ふの洒落

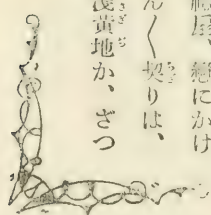
結綿　菊之丞の結綿熨斗の定紋をいふ

割花菱　高麗藏の定紋

うつゝい　美しいに同じ

尾崎　向島の名所で言はらにかける

隅田川　住むに云ひかける

あなたへ扇を召させませうと存じまして。道へ成程扇も團扇も時分の物なれば買うて遣らう。へサア〳〵こちへと招かれて、二人は内へ入るよりも、團へサア團扇を先へお召なされませ。扇へイエ扇から先へお召なされて下さりませ。道へア、これ〳〵、そのやうに爭はふよりは、マア此世で扇子が先へ始まつたか、團扇が先か、何でも先へ始まつた方から買うてやらう、どちらが先ぢや。團へ、サアこれは難かしくなつた來た、おしづとやら何が先か知るまいがの。扇へサアそれはな。團へ知つて居るなら云うて見やれ、何うぢやの、何うぢやの。へ東西々々。三下りへ扇子は漢土が濫觴にて、夫婦の約も合歡扇、合源氏に櫻の三重重ね、班女が閨にも扇の風、合月重山に入りぬれば、これをあげて月に譬へ、角はあれども眞ん丸に、合見えて開けば初霞、立てるや門に禮扇、縁にかけては目せき笠、へ浮氣々々で逢馴初めて、合色で扇のちん〳〵契りは、合それが眞實であるぞいの。いつか浮名が立つや白地か淺黄地か、ざつ

かつかちめく　競走する意
逃れぬ物　類似な物といふ意
坊主持　坊主に會ふ度に甲乙が變つて荷を持つ事をいふ
横つ倒し　ぶつきら棒で曲が無いといふ意
漢土　支那のこと
合歡扇　班女の詩の中にある。團圓明月に似たりとあり
櫻の三重重ね　表が

と墨繪の一筆鴉、戀の地紙ぢやないかいな。〽イヤ〳〵おしやますな、そも團扇は天竺に、白月と云ふ異人あり、清秋の三五夜に、心も澄みし月を見て、始めて團扇を、合製しつゝ、三伏の暑さを拂ふ便とて、法界の空理をさとる。唐土にてはしゆんのりほつ、日の本にては信濃なる、小柴の翁が皺苦茶に、澁い顔して張つた故、澁團扇とは申すなり。〽話聞居る道哲に、しづ心よく寄り添ふを、合點行かずと振切つて、〽こりや〳〵女、寄るまいぞ、假にも三衣を身に纏ひし此道哲、とは云へど、見れば見る程はてよう似たわ。扇〽エ、あの私が誰に似ましたえ。道〽二世と誓ひし三浦屋の高尾太夫に生寫しぢや。團〽似たこそ幸ひ、あの女中を相手にして、高尾太夫の馴れ初の、お話が承りたうござります。道〽成程懺悔に罪も消ゆる道理、形見にのこる襠補を、見るにつけても思ひの種。〽シテその馴れ初めは受給ふ、しもは合しだいの天王なり、合いで其頃は正月二日の事なりしが、廓はあと着の着衣始、合船乘初

白で裏が蘇芳色の薄葉を三枚重ねて檜扇の親骨を卷いたもの

班女が閨にも　漢の成帝の寵姫班婕妤が趙飛燕といふ美人の爲めに寵を奪はれて閨中で扇の詩を作り自ら心を慰めた故事

禮扇　正月禮者の遣ふ白扇

色で扇　色で逢ふの洒落

と縒を解き、柳橋より押出だし、北へ〳〵と急がるゝ。〽そも〳〵その日の扮裝は、羽織は羽二重三所の、紋日物日の嫌ひなく、通ひ馴れても衣紋坂、どつと云うて囃された。もしもそれかと見返り柳、まだうら若き仲の町、茶屋が見付けて手を取つて、打連れ立ちし揚屋入。〽其大寄は廓の名とり、端から端へ橋立の、〽數も千山引つれて、茶屋の床几に立並び、〽誰を鶴町、〽間夫を雛松、〽松山に若紫を染之助、打かけ九重、綾越の、〽小棲をしやんと斯う取つて、合ナゲブシ〽袖にかをりを瀧姫や、渡りに丁度瀧橋わたし、てんと、合玉菊たをやぎ姿、〽其鶴の尾に釣られぬうち、さらばお暇いたさうか。〽是まつた。クドキ〽わしが心を、合疑はさんすか、お惡かろ、合此の陸奥は戀故に、細くやつれし絲瀧や、深くぞ思ひ染川の、いつか氣儘に花扇、逢はぬ夜たゞは一夜も千春、逢うたその夜は妹山、合背山、合たんと話も在原なれど、あれみさ山の明わたり、合空に一とすぢ小紫、口舌篠原つひに住の江、又

地紙　まだ骨を付けない扇面

おしやますな　述べ立てますなと負けて居ぬ詞

三伏　夏の暑氣の酷烈な時をいふ

三衣　僧侶の着る三種の衣服

着衣始　新しい衣裳を着初めること

紋日物日　紋所を席の物日にかける

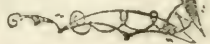
茶屋　茶屋の女の略

揚屋　遊女を上げて

の御見を松の戸を、開けるは茶屋の、合朝迎ひ、寝覺の顔鳥、機嫌とり、おつ付あなたい花妻と、瀬川たゝいて詞の八汐、つれて巣立の、合鱗鶴や、梭機ならでばた〳〵と、廊下を傳たふ瀧川の、流れは深き山谷舟、合押せやれ男子、合二挺立、合三挺立、合椎の木ぢや、合點ぢや、合拍子とり〳〵、合下り船で合〽見れば見渡す、棹さしや届く、なぜに届かぬ我思ひ、ほんにサア。〽差す手も潮に濡れ初めて、君の心を取梶や、氣の重舵をわつさりと、さつと捌いて奥座敷、茶屋船宿の、合若い者、遣手禿を取込み勝負、まあ〳〵〳〵こゝへと、合むりやりばなしの取持ち顔、〽二枚屏風の風凌ぎ、如何なる夢をや結ぶらん。〽冥途の道を教へ鳥、合死出の田長と聞く時は、實に味氣なき短夜や、わかれの鳥は里ばかり、鳴いてぞ人に告げわたる、去りし高尾が立姿。二上り〽消えず消えずみ水の月、うつり心はあるなれど、思切らせと、合氣強うも、君間にとんと碎かれて、流れ寄る瀬の、合波枕、合過ぎしかね言忘れて

あそぶ家
橋立　次ぎの千山、鶴町、雛松、松山、若紫、染之助、九重、綾越、瀧姫、瀧橋、玉菊、鶴の尾、陸奥、糸瀧、染川、花扇、千春、妹山、在原、みさ山、小紫、篠原、住の江、松の戸、籬鳥、花妻、瀨川、八汐、雛鶴、瀧川、等當時の遊女の名
二挺立三挺立　吉原

か、花は根元へ歸り來て、現に見え候ふぞや。高〽申し〳〵左金吾さん。道〽やアそなたは。高〽高尾ぢやわいなア。道〽未だそなたは迷うて居るか。高〽迷うて居るとはえ。道〽頼兼公の計らひとて、浮世戸平が手にかゝり、此世を去ッたぢやないか。〽此世を去つても去りやらぬ、輪廻の絆形見の小袖諸共に、お前に預けし山鳥の印迄、何故に川へ沈めて下さんした、恨みを云ひに來たわいなア。道〽ヤ、何と。高〽コレ。〽あはれ此身は浮き川竹の、沈みもやらず、浮きもせず、變り果てたる三つ瀨川、昨日今日まで肌と肌(隔てなく)、合〽鴛鴦の衾の羽を並らべ、塒離れぬ一つ夜着、重羽うしと二人寢て、未來は蓮の臺ぞと、形見に殘す、合〽唐衣、着つゝ馴れにし甲斐もなく、此荒川の藻屑とは、添はれぬ心か情なや、氣強いお方と身を背け、恨み喞つぞ誠なり。〽よし我とても何時迄か、憂きを浮世に存らへん、あの世は上品上生の、二人暮すが極樂と、引寄せられて、クドキ〽心で笑ひ。たとひ嘘でもそのやうに、云

はんす人を殘し置き、何のこの身は浮ぞえ、合それ故水に誘はれて、合色の世界に隅田川、合深い淺いはよう波分けて尾崎の、合いつか廓を花川戸、合待乳に殘す里詞、三浦兵庫も、合投島田、合結うて見たいが山の宿、無理な願ひも金杉の、毘沙門さんへ朝參り、浮氣心に撰された、女子心はさうぢやないわいな。片時逢はねばくよ〳〵と、涙をかくす薄化粧、泣けばこそ向ふ鏡の影曇り、逢ふとはすれど物云はず、見ずや知らずや味氣なき、心ぞ心迷はすれ。へ思ひ掛なき後より、兼ねて忍びし國連が、左金吾やらぬと隙間なく、ひらりと見せし電光石火、み山おろしに吹きおくる、冥途の使の責皷、悶え苦しむありさまは、恐ろしなんど愚かなり。猿へ左金吾さんのお身の上に、凶事ある時は、此高尾が附添うて、冥途へつれ行く、覺悟しや。國へ事をかしや罪人め、山鳥の印を渡せばよし、妨げなさば目に物見するぞ。高へ小癪な來れ。へどつこい。へ煩惱業果苛責の杖、劍の山も今眼前、ありと見ゆれば、合水の月、

遊の猪牙船を早く漕がせる爲め手代りの船頭を雇ふ符號で例へば二挺立ならば二人で交互に艪を押させるをいふ

椎の木ぢや　舟が横網河岸の松浦邸の椎木の前まで漕ぎ下つたといふ意で船頭同士が呼掛け合ふ詞

取込み勝負　見る人見る人を連れて一

雲を彩る稻妻の、手にも取られず、見れば又、昨日今日迄作りなす、合牛王誓紙の血の烏、可愛い〳〵と啼きもせず、吸附け煙草焦熱の、炎となつて身を焦がし、別れの酒は三途の流れ、白粉忽ち紅蓮の氷、合紅は則ち阿鼻地獄、打てば飛びのき、合拂へば開き、合くるり〳〵くる〳〵と、合まとひ着たる輪廻の絆、離れがたなき妄執の、冥途の罪障西方寺、彌陀の光に晴れわたり、印に一樹ぞのこりける。

【解説】此の曲は、享和元年、江戸市村座の四月狂言の大切に、瀬川菊之丞の扇賣お靜後に高尾の幽魂、市川高麗藏の團扇賣四季の庄兵衞、市川八百藏の土手の道哲で上演した淨瑠璃で、高尾の情人左金吾が、高尾の死後出家して山谷の西方寺に道哲と改めて念佛三昧に暮らしてゐると、扇賣の女に扮した高尾の亡魂が、團扇賣の男と連立つて立寄り、過ぎし昔の戀語を所望するといふ筋である。當時出語の人々は、二代目富本豐前太夫、同大和太夫、同齋宮太夫、三味線三保崎兵助、鳥羽屋里長等で、節付は里長であつた。

座させる意

死出の田長　子規の異名

消えず消えずみ　消えたり現はれたり

かね言　約束ごと

輪廻の絆　迷ひの心をいふ

三つ瀨川　身を冥途の三途川にかけていふ

唐衣　綺麗な衣裳。着るの枕詞

上品上生　好い所へ往生の出來る

こと
三浦兵庫　髷の名で遊女が結ふ立兵庫
投島田　素人の結ふ低い島田髷
願も金杉　願も叶ふを下谷の金杉にかけていふ
煩悩業火　胸の苦しむ形容
牛王誓紙　熊野午王に誓ふ起請
吸付煙草　客に吸付けて渡す煙草
西方寺　道哲の寺

高尾の懺悔物では、この曲より以前天明二年中村座の八月狂言に『新曲高尾懺悔』の所作が、矢張富本の浄瑠璃で演ぜられたことがある。これを新曲と稱したのは、既にその以前寛保四年の正月に、市村座で『高尾さんげ』が演ぜられてゐるのに對してゞあらう。尤も、これは長唄の所作事であつた。

七重咲浪花土産（稽古娘、又、浪花土産）

深窓の振袖

〽梅が香を櫻の花に匂はせて、柳の枝に咲かせしと、思ふばかりの麗人の、年も三五の月の眉、雪の膚の富士額、裾野に狂ふ駒下駄の、音はやはらぐ春風に、招く姿の柳橋、稽古歸りのしどけなや。〽まだふみも見ぬ戀の道、露の情に濡れ初めぬ、色氣白歯の生娘なれど、惚れた殿御に思ひの丈けを、薄墨にかく雁の文字、主様まゐるかね言に、いつか子の日の松葉蝶、菜種を離れしほらしや、ほんにしんきと歩み來る。〽梅が枝に初音ころがす鶯の、長閑き春の眺めかや、空にも戀のあればこそ、東風吹く風に誘はれて、霞の幕を打ち破り、曾我の五郎時致が、縁にしがらむ凧のぼり。またも吹き來る風に連れ、はづみに是れはと云ふ間も

梅が香云々　理想的な美しい女を形容した俗歌

三五　十五歳

月の眉　三日月のやうに細い眉をいふ

富士額　額の毛の生へ際が富士山のやうな形である

裾野に狂ふ駒下駄　富士の縁語で裾を裾野にかけ駒下駄を駒に見立てる

柳橋　神田川の川口に架てる橋

しどけなや　艶かしい風をいふ

ふみも見ぬ　踏みを文に云ひかける

白歯　昔は男を持つと歯を染めたもので白歯は處女の看板である

かね言　約束

松葉蝶　多見藏の紋

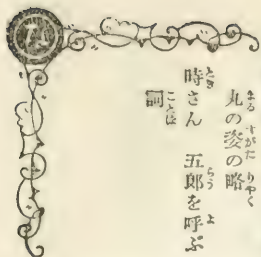
曾我五郎時致　凧に描いた繪

しがらむ　絡みつく

松朝　多見藏の俳名

異見曾我　淨瑠璃の

なく、あれ〳〵。エ、何とした。あれアノ枝に懸りたる、凧繪も似たる松朝の、面影さへもなつかしや。ほんに習ひし異見曾我、アノお師匠樣の節付に、此の本を見るにつけ、化粧坂の少將さん、勤めの身にも一筋に、慕ふ心の戀の意地、時致さんと打ち解けて、逢うた其夜の五月雨に、思ふお敵と取組んで、思ひの丈を通し矢の、張りの强ひぢやないかいな。〽つい深入りの奥二階、屛風の陰に忍び居て、被衣目深に御所姿、時さんやらぬと抱きとめ、互ひに劣らぬ戀咄し。早夕風に梅が香の、持てくる〳〵と袖袂、抱へながらに走り行く。

【解說】この曲は弘化三年三月、江戸中村座の彌生興行に、大阪から尾上多見藏が下つて來て、お目見得狂言として『當館扇伊達寫繪』の通しの大切淨瑠璃に、「東路へ根こじて植えし梅は」といふ文句を冠せて、『七重咲浪花土産』の外題で淺妻船、文賣、豆打の桃太郎、及石橋を長唄、國奴と瘤翁を常磐津、稽古娘を富本で上演した七變化の所作事の一つである。凜々しい國奴の槍踊

外題

化粧坂　相模の遊里

勤めの身　遊女の意

お敵　敵手のこと

通し矢　三十三間堂で行はれた矢數の儀式である爰ではたゞ矢のやうに思ひを通した意

張　遊女の意氣地

御所姿　御所の五郎丸の姿の略

時さん　五郎を呼ぶ詞

から引拔いて窈窕たる娘姿になつて踊る處が山で、出語りの連中は、三代目富本豐前太夫、志賀太夫改め齋宮太夫、阿波太夫、豐紫太夫、粂太夫、三味線名見崎安治、富本豐齋であつた。

名酒盛色中汲（お菊幸助）

二上りへ咲く花の、散るとは豫ねて知りながら、合もなかの中の心なく、おとすは風かや春雨の、合晴れぬ思ひをしよんぼりと、袖うち交はす籠の鳥、雲を戀路の身ひとつに、定めかねたる胸の闇。幸へ思ひまはせば我ながら、悪いと知つて浮か〱と、大恩のお主様、そのお娘御を唆かし、合今更何と言譯も、内證知つたおさく殿、今日の手詰を身に替へて、救うて下さる志、何と仇には思ひませぬ。迚てもお暇受けし身で、國へとても歸られず、旦那様への申譯、お菊様へお詫ながらに、此身の咎を書殘し、今宵の中に此處を立退き、人知れず淵川へ、身を沈めるがせめてもの申譯、幸ひ床に見えるは硯箱、さうぢや〱。へ墨と硯の色濃ひ中も、水の出ばなのすみ濁り。ウタカヽリへ其水莖の數々は、筆の命毛惜しからぬ、合心のたけを、合かき曇り、跡や先なる文の綾、此世を

もなかの中　盛りの最中をいふ
籠の鳥　思ふやうにまゝならぬ身
雲を戀路　鳥が雲を戀ふ如く主人の娘即ち目上の者を戀したといふ意
おさく殿　朋輩の女中の名
水の出ばな　血氣盛んの若い者
水莖　筆の跡
筆の命毛　筆の穂先
文の綾　文體

返す書　手紙の終りに書納める文句
裏傳ひ　裏庭傳ひ
漾　水溜り
振りの袂　振袖
手燈火　雪洞
染手拭　髪を覆ふ手拭
しどけなさ　姿の亂れたさま
柴折戸　柴を折り曲げて編んだ戸、轉じで華洒に作つた庭の木戸
無い昔　關係の無い

夢の返す書。へ同じ思ひに日も合はで、お菊は闇を忍び路の、勝手覺えし裏傳ひ、合漾にも薄氷、戀の素足に褄からげ、振りの袂に手燈火の、合影さへ慄ふ夜半の風、木々にも合宵の一と時雨、染手拭に露いとふ、娘心のしどけなさ、我が影にさへ驚かれ、火影を袖にやう〳〵と、藏を目當てに立ち寄れば、へはつとばかりに上書も、そのまゝ彼處へ隱すうち、へおきくは柴折戸押し開き、菊へ幸助そこにか。幸へヤ、さうおつしやるはお菊樣か。菊へ幸助逢ひたかつた〳〵、逢ひたかつたわいなう。幸へモシ〳〵、お聲が高うござります、どうして此處へはお出でなされました。菊へ私しや其方の事が案じられ、ちよつとなりと逢ひたいと思ふ程、なほ意地悪い父樣まで、今宵にかぎり私しが傍にお寢ると云ふ、奥座敷には傳三さんが寢て居やしやんす故に。幸へそれでお前は勝手から庭を廻つてお出なされましたか。それ程までに私しが事を、お案じなされて下されまするお志、何の忘れはいたしませぬが、最前から

昔の略

羽抜鳥　翅の折れた鳥を失望した意に譬へていふ

胸につかへの體　癪を起こして苦悶すること

筆始　正月の書初

白木綿　神に誓ふを受けて知らないことを白木綿の御幣にかけていふ

白山　加賀の名山で比咩神社の在る地

立山　越中の名山で

とつくりと、思案を極はめて置きましたれば、もう此上はふつゝりと、私しが事は思ひ切り、無い昔ぢやと思召し、云號の聟様と、お添ひなさるが御身の爲め、へ思ひまはせば世上の戀路に引替へて、道に背きし恩知らず、朋輩衆の情さへ、云ふにいはれぬ身の落度。幸へその申譯は細ごまと、認め置きしを御覽なされ、只何事も今までは、夢の浮世とあきらめて、お免しなされて下さりませ。へ拜みまするど手を合はせ、顔も得上げぬいぢらしさ。へお菊は始終伏し沈み、心をあせり身を悶え、轉けし若間の羽抜鳥、聲を袂に隠し泣、へ言ひたい事の數々の、あれども胸につかへの體。へ幸助大に驚きて、手洗鉢なる水をくゝみ、抱き起して口移し、幸へ申しお心が付きましたか。へと、云へばお菊は泣いじやくり、クドキへ恨み顔さへ差かしい、合色といふ字はいろはより、外に習はぬ筆始、原はといへば父さんが、合私に隠して世の人の、結納とやらの約束は、ほんに誓文白木綿の、神と合親とが合結ばぬ縁と、合言譯

雄山神社を祀る地
露の玉さか　露の玉のやうに暫しばかり偶々逢ふ事をいふ
黄菊　氣持に擬ふ
翁草　菊の異名
友白菊　友白髪に擬していふ
故郷の花　幸助の郷里に女があると妬む意
かね言　約束
一重　一夜に擬ふ
輪廻　めぐりめぐる

ながらせめてもの、合〽白山様へ願かけて、茶断ちするのも私しやそなたに添ひたいばつかり、合〽立山様へ願かけて、煙草断つのも私やお前に添ひたいばつかり、合〽誠を言はゞ此道は、親の儘にもならぬが慣ひ、女の好いた女夫事、それさへ今日の今までも、人目籬に隔てられ、心ばかりを亂菊の、合露の玉さか逢ふたびに、合〽私が黄菊を打明かし、岩に堰かるゝ菊水の、合割れても末に相生の、契はつきぬ翁草、〽友白菊の千代までも、變らぬ仲を何ぢややら、いかに殿御の癖ぢやとて、やゝともすれば御主人の、お主様のと憎くて口、いたづら菊と振り捨て、合故郷の花の嫁が萩、合いとしらしさに見替へられ、かへる羽音の鷄、合かね言も、いつか丸寢の菊襲ね、一重はおろか百夜菊、輪廻は盡きじ忘れ霜、〽消えなば共に消もせで、難面い事をと寄り添ひて、胸の焔は紅菊の、花の合露吸ふまさなごと、短き春の夜半の鐘、鳴るかならぬか産神の、あはれを結ばせ玉の絲、つなぐ女夫の延命酒、合情に二人が中汲

分けて、親の心を本直し、末は夫婦ときく酒ならば、夫こそ家の保命酒、やんがて嬰兒を梅酒と、つもる話のいろいろの、菊の葉盛を描きたる、屏風の内にや忍ぶらん。

【解説】此の曲は、寛政五年二月、江戸市村座の二の替狂言の二番目大切に、瀬川如皐が書卸した淨瑠璃で、戀中のお菊幸助が主從の間柄で添ひ遂げられないのを悲観して心中して果てるといふ筋で、文化十三年に出來た『ちらし書仇命毛』は此の曲を粉本にして改作された淨瑠璃である。初演當時の役割は瀬川菊之丞のお菊、市川門之助の幸助で、出語りは、二代目富本豊前太夫、同齋宮太夫、同安和太夫、三味線、名見崎德治、鳥羽屋里長であつた。

思ひ
忘れ霜　別れ霜に同じ
産神　我が生れた土地の神
中汲　濁り酒の上ずみとよどみとの間を汲み取つたもの
本直し　燒酎に類似の酒
保命酒　備後の名物
梅酒　梅で作つた酒

那須野

梟松桂云々　白氏文集の「梟鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」を取つて用ひたので物凄き叙景

野邊の狐火　野原で燃ゆる燐火で、俗に狐の尻尾から發散する火だと云ふ

玉藻　玉藻前の靈

僞言　眞のない言葉

飛鳥川　深淺の變り易い川で心の變ることにたとふ

面なの面伏せ　面目

次第〽梟松桂の枝に鳴きつれ、亂菊の花に隱るゝ野狐の臥床、荻吹きおくる夜嵐に、いとも凄ぐ更け渡る。　二上り〽野邊の狐火思ひに燃ゆる、燃ゆる思ひも白露と、消えし玉藻が立ち姿。　カヽリ〽風に亂るゝ絲萩の、花こきたれし白妙や。　琴唄〽紅深く月影に、うつし心や僞言の、〽早くも變る飛鳥川、あした面なの面伏せに、かざす扇も隱れ笠。〽都を他所に見なしつゝ、秋風ぞ吹く陸奥の、關の白河知らざりき、那須野の原に世をぞ經ぬ。〽そも我こそは天竺にて、斑足太子が塚の神、唐土にては幽王の、側女とめでゝかしづかれ、さて日の本に渡りしは、七十四代に在します、鳥羽の帝に宮仕へ。　クドキ〽夜毎に君が枕つく、寢屋のひまさへ離面な、明くる間惜しき鴛鴦の、重ね衾の明け暮に、〽洩れぬ情もいつしかに、秋風立ちし枯蘆の、ねにこそ泣かめ我ながら、憂き

ないの意

扇も隱れ笠　檜扇を笠に代へて顔を隱すことをいふ

秋風ぞ吹く　能因法師の歌「都をば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く白河の關」から取る

那須野の原　下野國斑足太子の塚の神斑足太子が千人の首を取つて祀つた邪神。その神が卽ち妖狐である

世の中や變らじと、千歳をかけて契りつる、つひの寄邊も今更に、流れて早き瀧川の、われて後こそ果敢なけれ。〽過ぎし雲井の御遊びに、司つらねし宮人の、聲々すみてさしのぼる、月待つ闇にあらはし〻。〽ナウ淺ましや我こそは、三千歳經にし野狐の、形を變へて今爰に、あらぶる神のかしこくも、祈りた〻へぬ烈しきに、俄に荒る〻眼のあたり、手にも取られぬ恐ろしの、雲を蹴立て〻庭の面に、きらめき渡る稻妻の、光を放ちて失せにしが、唄〽終に矢先に果敢なくも、か〻るこの身ぞ恨めしき。〽殺生石といでや世に、名のみ著くぞ下野の、那須野の原に降りみだす、時雨に匂ふ紅の、木の葉をおろす小夜風に、拂ひし露の玉藻の前、消えにし跡をやのこすらん。

【解說】此の曲は、鳥羽帝に仕へた玉藻前が、帝を惱まし奉つたので、時の陰陽師安部泰成に命じて御惱平癒の祈禱をさせたところ、金毛九尾の狐の正體を現はして、御殿を飛び去り、下野那須野原に隱れたのを、三浦之助、上

幽王　周の王の名側女は褒姒といふ美人、即ち妖狐である

雲井の御遊び　清涼殿での管絃の御遊をいふ

祈りたゝへぬ　安倍泰成が調伏の祈りをした事をいふ

終に矢先　三浦上總の兩介の矢先で射伏せられたをいふ

名のみ著く　名ばかり高くなつたこと

總之助の兩人が騎射に事寄せて射伏せる。その妖狐の靈が石魂となつて、行人を惱ますといふ、謠曲「殺生石」の筋を取つて作り上げたものである。元より素淨瑠璃として出來た曲であるから、富本としては淡々たるものであるが、三味線に皮肉の手が澤山付いて其の方面から見て難曲の一つに數へられてゐる。

傳說によると、この玉藻前に化けた妖狐は、下界を魔界になさんと企てゝ、唐土では殷の紂王の宮に入つて妲妃となり、天竺に渡つては華陽天人となつて斑足太子をたぶらかし、更に唐土に歸つて周の幽王の妃褒姒となつたが、それから日本に飛來して玉藻前となつたのを安倍泰成に見あらはされ、那須野へ逃げ去つたものだと云ふのである。

草枕露の玉歌和（玉川）

江戸がゝり〽鳥が鳴く東からげの草枕、ウタイ〽急がぬ旅も敷島の、道をたどりて六玉川、〽筆につゞりて昔殘す、景色は歌の徳ならん、〽足曳の山踏み分けて遙る〴〵と、霞棚曳く遠近の、詠めは飽かぬ七重八重、花の柵影添へて、色には井手の山吹に、蛙も歌の風情あり。〽かゝる名所に紀の國の、高野の奥の流れをば、汲みやしつらん旅人の、ア、忘れても、 二上り〽野路はゆかりの色深く、錦の萩の下葉まで、洩れてぞ置ける白露に、月は宿りて夜もすがら、戀しき人は鈴虫の、ふり捨られて機織の、夜寒を佗びる閨の戸に、つゞれさせてふきり〴〵す、誰を松虫焦れて集く、我も思ひに堪へかねて、〽いとゞ心の遣る瀬なや、迫まる悋氣の津の國や、傑けてしつぽり合ひ槌の、それさへなくて小夜衣、濡れる袂や袖の露、一人こがれて繰返へす、打つに砧の音づれも、絶え

鳥が鳴く　東の枕詞

東からげ　裾を高く端折る風俗

敷島の道　和歌の道

六玉川　六つの玉川の意

足曳　山の枕詞

花の柵　柵に花の散り集ること

井手　山城の井手の玉川をいふ

高野の奥　高野の玉川をいふ

汲みやしつらん　高野の玉川を詠んだ

歌から引く
野路　近江の野路の玉川
松蟲　待人の意
津の國　角にかけて攝津の三島の玉川をいふ
調布　武藏の調布の玉川
網代木　宇治川で魚を捕る仕掛の杭
野田　陸奥の野田の玉川
里の長　里長を讀み込んでいふ

て梢の松風は、憂き妻琴の音に立ちて、夜ごと調べる床しさに、仇な浮名も調布や、ツドミウタへ照る月の、浪に漂よふ玉川に、ほしてさらさら晒らす白布。へ立つ浪が、〱、瀬々の網代木さへらて、流るゝ水を堰きとめよ〱。へ馴れし手業の賤の女は〱、いざやかへらん賤の戸へ、へ實に面白き陸奥の、野田の苫屋の浪枕、千鳥は歌の友なれや。ウタヒへ筆のすさびを家づとに、殘す言葉は富本の、榮え久しき里の長、目出度くこそは聞えけれ、

【解說】此の曲は箏唄の「六玉川」を土臺にして歌詞を文案し鳥羽屋里長が節付した淨瑠璃で、寬政三年十一月里長が常磐津文字太夫と絶縁して富本に入つた際、『惠方萬歳』『寳船三組盃』と共に此曲を土產に持つて來たので寬政十一年正月江戸市村座で『六玉川衛欄』の外題で、家元二代目豐前太夫によつて上演されたのが流行の端緒であつた。

柳絲戀苧環（お三輪）

二上り〽戀をする身は若葉の楓、そまぬ緣なら詮事もないが、色になる間に散る思ひ。〽つゝめど香り橘姫、俤かくす薄衣を、それと求女が慕ひ來て、互にはたと行合ひの、星の光りに顏と顏。橘〽求女さんか。求〽コレ。橘〽ヤア戀人か。〽何故に此處まで跡追鳥は、もしや塒の契りをば、叶へてやろとのお心かと、胸にはいへど詞には、面羞げなる袖几帳。〽お三輪は後に遅れ咲き、菜種に蝶のせかれ行く、姿愛らし、可愛いらし。嬉しき中に繰言も、いとし〳〵を苧環に、たえぬ思ひを隔れ合ひ、柳の髮も影うつる、鏡が池や河原町、北斗の辻も名のみして、鶴の日南を浮か〳〵と、道もせ、氣もせ心さへ、おのが羽風におどさるゝ、雀の森か宮が辻、人目なければ立留り、三〽これ申し求女樣、此處まで一緒に來て下さりましたは、橘〽妾が戀路を叶へてやろとの、三〽お心

若葉の楓　色づかぬ事をいふ

香り橘姫　橘の薫が高いのを身分の高いにかけていふ

薄衣　高貴の上﨟が外出の際用ゐた被衣

塒　鳥の寢床、それを閨にかける

袖几帳　袖で顏を隱す。羞恥の姿態

遅れ咲き　遅れて來ることをいふ

苧環　苧を卷いてあ

る絲巻
鏡が池　河原町、北斗辻、雀の森、宮が辻等と共に奈良附近の名所
道もせ　道の狹くなること
氣もせ　氣の狹くなること
胴慾な　むごいの意
館　入鹿御殿
惡性　移り氣
三輪　大和國
葉越の月　葉の間から透いて見ゆる月

かいなア。求へサア其志仇には思はねど、二人一緒に伴うては、行先の妨、此處から二人歸つてたも。三、橘へすりや何う有つても。求へ目立たぬうちに。クドキへそりや胴慾な求女樣、姫は思ひに堪へかねて、館を出でし其日より、君故ならば露と消え、花と散りなん、我が命、惜しからぬとは思へども、解けぬ貴方のお心は、あんまり結ぶの神さんを、祈り過ごした咎めかと、恨みつ、泣いつ寄り添へば。へお三輪は中を押し隔て。エ、聞えませぬ求女樣、そりや氣の多い惡性な、そもや私が初戀は、思はで三輪の過ぎし夜に、葉越しの月の面影は、お公家さんやら侍さんやら、知れぬ姿振すつきりと、水際のたつよい殿御、ほんに女子の名聞に、契り交はせし嬉しさの、袖を油の新枕、其の移り香の身に添ひて、外の女子は禁制と、しめて固めし緣結び、主ある殿御を大膽な、斷りなしに惚れるとは、何んな本にもありやせまい。女庭訓躾方、よう見やしやんせ、コレナアエ、たしなみなされ女中さん、離れはせじと

縋り付く。〽イヤそもじとて父様の、許せし中でもないからは、戀は仕勝よ我殿御。〽イーヤ私が。〽イヤわしがと、此方が引けば、彼方が留め、そちよこちよと、互ひに顔も朱奪ふ、これも浮世の習ひかや。二上り〽月雪花を名所に、なぞらへいへば嬉しかろ、何れの月が氣に入らしやんす、何れの花が氣に入らしやんす、雪に戀路を鴫立澤の、昨夕の文を槇立つ山に、のぼるも戀の習ひぢやものを、浦の苫屋と思はんせ、名に負ふ三つの名所かや。〽つれるも緣の綱手繩、戀のしがらみ蔦かづら、つき纏はれてくる〳〵、廻はるや、三つの小車の、われから先きとせぐり來る、緣の苧環いとしさに、あまるお三輪が悋氣の針、男の裾につけるとも、知らずしるしの絲筋を、慕ひしたうて尋ね行く。

【解說】此の曲は、文政十一年八月、江戸中村座で『妹脊山婦女庭訓』を上演の際、操淨瑠璃の道行のくだりを富本に直し、三代目富本豊前太夫一派が出語で勤めたので、當時の役割は烏帽子折求女實は藤原淡海が坂東彦三郎

水際の立つ　綺麗なこと

名聞　名譽の意

袖を油　袖を頭髪の油で汚すこと

新枕　初めて交す枕

女庭訓　婦人の修養を說いた書

女中きん　他の女を呼ぶ詞。こゝでは橘姬を呼ぶ詞

そもじ　そたたといふ意

戀は仕勝　戀をするのは勝手氣儘の意

朱奪ふ　昂奮して顏色が紫色になる意で、紫は朱を奪ふといふ諺がある

鴫立澤　相模の名所

苫屋　漁人の住居

綱手繩　船につないで引く繩

戀のしがらみ　戀着してからみつくこと

三つの小車　三人の持つた苧環の糸車をいふ

橘姫が坂東大吉、お三輪が中村芝翫で、人形振で演じて大出來だつたと「歌舞伎年代記」に記されてある。

元來操淨瑠璃の『妹脊山婦女庭訓』は、明和八年正月、大阪竹本座に上演されたもので、作者は近松半二、三好松洛等。結構、辭句共に優れて、義太夫では傑作の部に屬するものである。この道行のくだりは、烏帽折求女の優雅な姿に戀ひこがるゝ二人の女、入鹿の妹橘姫と、杉酒屋の娘お三輪とが、求女を眞中に口說立てる。求女實は藤原淡海は、入鹿をほろぼさんとの下心があるので、その手段のために二人の女をあやなす。この三人が苧環の糸車を持つてゐて、互ひの裾にその糸を付け、糸筋をしるべに後を追ふところが面白い趣向である。

連理の橘（蟲賣）

〽色かへぬ常磐の里に住みなれて、琴の音に聴く松の風、螢と雪の窓の前、月に讀むなる文月に、若衆盛りを三津五郎、〽錦の絲を懸け卷くも、星祭る夜は梶の葉に、言の葉草を書き添へて、深き願ひと白露も、奥ゆかしくぞ見えにける。合〽粋な浮世のなん〳〵中を、合野暮に暮らして町々の、得意を廻る、合影燈籠。なれも戀路に身を窶しごと、合二十四日は愛宕樣、月の八日は茅場町、大師參りや、合不動樣、離れぬ仲の御縁日、色には仇な八つ橋を、江戸紫の由縁とて、引手あまたの花あやめ、家橘に似たる荷ひ賣、その取なりも拍子よく、氣轉も菊の上手者、打連れ立て歩み來る。〽二人の商人技折にかゝり、燈〽ハイ私は今度仕出しの燈籠賣でございます、燈籠の御用はございませぬか。蟲〽ハイ私は秋を音に鳴く虫賣りでございます、虫の御用はございませぬ

常磐の里　三津五郎が住居深川常磐町を匂はせていふ

螢と雪　苦學をした支那の學者の故事

文月　七月の異名

野暮に暮らして　眞面目に稼ぐ意

影燈籠　走馬燈

愛宕樣　芝の愛宕神社をいふ

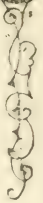
茅場町　藥師如來をいふ

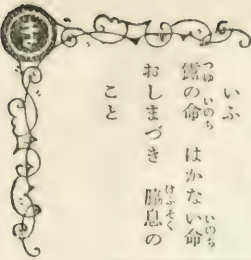
江戸紫　紫色の名。

八つ橋やあやめに

縁があるので云ふ
家橘　羽左衛門の俳名
取なり　容子
菊の上手者　菊之丞にかけていふ
枝折　枝折戸の略
梶の言の葉　七夕の夜、梶の葉に歌を書いて祈る
室町殿　足利将軍家をいふ
暮れて花咲く　燈籠は暮れてから灯すからで、灯す事を

か。燈へ燈籠の御用はござりませぬか。蟲へ虫の御用はござりませぬか。

兩人へお求めなされて下さりませ。權へ七夕の祈る手向や受けつらん、上げて數へる梶の言の葉、物數ならぬ、白井權八、室町殿より下し置かれし吉岡一文字の刀、武士の冥加と難有く、たゞ家の長久を願ふが第一と、星へ手向けの色紙短冊、只一心に認め居るに、表の方に物音するは、何者ぢや。蟲へハイ私共は、此お邸をお見かけ申しまして、參りました、商人でござります。燈へオヽ、夫々、色を音に鳴く虫賣と、暮れて花咲く燈籠賣と、思ひ思うて參りましたわいな。權へ二星偶々逢うて別所に恨を述べず、偶々ことゝふ二人の商人、ハテ珍らしい營みぢやなア。どれ〳〵、身共が求めて與れうか、マ此方へ入れ〳〵。ハテ見れば見る程奥床しい女子商人、そなたの商ふ虫の數々、其名が一々聞きたいわいの。蟲へそんなら私が商ひます虫の數々、お恥しながら、東西々々。三下りへ商ふ虫の數々は、千草に集く武藏野の、鐙にあらぬ轡虫、蝗鈴虫

花の開くに譬へる
二星　牽牛織女をいふ
東西〳〵　言ひ立てに懸る前に静聴しろと頼む言葉
父よ　簑蟲の啼く音
片釣　半分釣つて半分外して置くこと
あきつ蟲　蜻蛉の異名
女たなばた　女のたなばた即ち織女星
乞巧奠　女の手工の巧みならんことを

黄金虫、合 馬追虫の遣る瀬なや、我は及ばぬ簑虫なれど、合 父よと鳴かで縋に身を、合 やつれ果てたろきり〳〵す。合〽 蚊帳も思ひの片釣りに、ひとり焦るゝ螢籠、濡れなんものと松虫の、合 あだに日ぐらし鳴き明かす、長きその夜にあきつ虫、逢ふ瀬も 合 あらば天の川、帯さへ雲の綾錦、きりはたりてふ〳〵機織虫や、合 賤の業、つらねし露の玉虫に、詞の花や結ぶらん。 權〽 浮草に浮かれ遊ぶや女たなばた、今の虫盡しを聞いては、滅多に此の邸の内へは置かれぬ、サア〳〵早う其方へ出てたも。 蟲〽 そりや又なぜでございますえ。 權〽 サ其次第は、今日は大切なる乞巧奠の星祭、家内を清浄潔白にせねばならぬ、早う歸りや〳〵。 蟲〽 そんなら何と被仰ります、今宵は七月七日の夜、七夕祭をなされます故、御尤でございます、とてもの事に鵲の、渡せる橋の二つ星、そのお話をどうぞお聞かせなされて下さりませい。 權〽 アノ七夕の星祭りを。 蟲〽 アイナア。 權〽 サアそれは。 蟲〽 お願ひ申しますわいな。 上るり〽

こ 乞ひ祈る七夕の祭
鵲の渡せる橋 鵲が翼を延ばして織女を渡す橋
銀河 天の川のこと
涙翼を染め 紅涙で赤く染まる意
二世 夫婦のこと
秋の扇 不要になるたとへ
やもめ鳥 獨身者をいふ
露の命 はかない命
おしまづき 脇息のこと

昔々唐土に、遊子、合伯陽といふ夫婦あり、明暮月を念じつゝ合つひに天上に果を受けて、牽牛織女の、合二星とあらはれ、合銀河を渡る烏鵲の橋、別れの涙翼を染め、紅葉の橋とも言ひ傳ふ。その鵲の假寝にも、〽水も洩らさぬ天の川、それも及ばぬ事ながら、只の女子の心から、包み合兼たる胸の中、これ此の、合帛紗にもお前の手跡、楊枝さしにも藻塩草、二世と言はれて嬉しさに、秋の扇と捨てやらず、合人目といふも知らばこそ、ぢつと身に添へ抱締めて、果敢なき戀の力草、何うで女房にや、持ちやさんすまい、合私ばかりが惚れて居て、嘘の合返事を合誠と思ひ、塒定めぬやもめ鳥、長き月日をうか〳〵と、欺されたさの身の願ひ、笑はしやんすな、合叱らしやんすな、合せめて一と夜のお情けに、露の命も捨小舟、合楫を絶えたる涙川、行衛も知らぬ風情なり。
〽我もまかする水馴棹、下ゆく水と心には、思へどさすが前髪の、亂れもやらぬ武士氣質、合色に立つ名をおしまづき、寄る汐もなく見えにけ

寄る汐　そばへ寄る

機會

糊細工　糊細工で出來た燈籠をいふ

燈籠鬢　兩鬢を張出して毛筋を透したもの

御見もじ　逢ふこと

星合　七夕の星の會合すること

妹脊の橋　男女が逢ふ意

三つ大の字　三津五郎の紋

結綿　菊之丞の東尉

る。燈へこれ〳〵〳〵〳〵そこを我等が商賣柄、照らすところを取持つて、ちよつと拍子に糊細工、放しはせじと押遣りて、好いた女の燈籠鬢、ほつれかゝりし御見もじ、憎からぬとの挨拶が、聞かまほしゝと星合に、妹脊の橋の渡り初め、サア〳〵〳〵と手を引けば、合心は溶けし顏と顏、三つ大の字に結綿の、その中々に橘や、二上り〽今の浮世の名取草、合牡丹燈籠の軒のつま、合焦れて通ふ船燈籠、合前渡りする舞燈籠、文の綟張り指髪を、切子燈籠の眞實は、變らぬ中の花燈籠、簾の中を戀草の、妻籠れりと夕日影、あせや思ひの種ならん。夢や枕に殘るらん〳〵。

【解說】この曲は、天明元年七月江戸市村座の盆狂言『室町殿榮華舞臺』の大切淨瑠璃に『道行瀨川の仇浪』と一日替りに上演されたものである。役割は瀨川菊之丞の蟲賣、市村羽左衛門の燈籠賣、坂東三津五郎の白井權八で、白井權八の隱家へ蟲賣と燈籠賣が訪れて商賣物の言ひ立てや、七夕祭の由來

斗の紋が結綿に見えるのでいふ
橘や　羽左衞門の屋號
軒のつま　軒先
船燈籠　屋根船の形の燈籠
舞燈籠　走馬燈をいふ
指髪を切子燈籠　女郎が心中立に指や髪を切る事を燈籠にかけていふ

を踊り抜くといふ筋である。出語りは二代目富本豊前太夫、同齋宮太夫、同安和太夫、三味線名見崎徳治、同登蝶であつた。

艶容錦繪姿（新お七）

へ昔男ありけり、合彼の伊勢の御が筆の跡、三河の澤の燕子花、蜘蛛手に結ぶ八つ橋の、夫にはあらぬ顔よ花、色も由縁の通ひ路や、こゝにも通ふ幻の、合焦れあこがれ漂ひ來る、夢の浮橋これならん。へ小姓吉三に浮名立つ、八百屋お七が戀ばなし、その世語を寫し繪の、江戸紫に、合染めて濃き、色も盛りの若衆振。娘盛を一對の、閨の關取花相撲、杉が行司に、合奈良團扇、似顔團扇の愛嬌も、合祇園守りに封じ文、菊蝶つけて二つ紋、可愛らしいと結綿の、合やつちや、やたらに譽め詞、お二人さんを月と雪、譬への節の、合花に風、散りても殘る移り香の、現心ぞわりなけれ。へ杉は不思議の袖引とめ、杉へあれお七樣見なさんせ、彼のお方によう似たお若衆樣、もし卒爾ながらお前樣は。ウタへ成る程戸倉吉三郎、お七殿よう逢ひに來て下されたのう。へオ、ほんに矢

昔男ありけり　伊勢物語には、皆「昔男ありけり」と書き出してある

伊勢の御　伊勢物語の作者と云ひ傳へらるゝ伊勢守繼蔭の娘伊勢のこと。御は尊敬した詞

三河の澤　三河の牛橋村の澤邊をいふ

蜘蛛手　縱横に水が流れてゐること。其處に八つ橋が架かつてゐる

顔よ花　燕子花の異名

江戸紫　紫の色

杉が行司　お杉が媒介するをいふ

祇園守　歌右衛門の紋

菊蝶　路考の替紋

結綿　路考の定紋の丸に束ね熨斗が結綿番に見えるので其意を含ませていふ

譽め詞　觀客が役者を譽めること

つ張吉三さん、エ、お前はなア。クドキ〽ようも氣強い何故疾うから、お顔見せては、合下さんせぬか、合私やあんまり逢ひたさに、杉をせがんで物詣、物見遊山や寺參り、若い女子の誡めは、女今川庭訓を、合お師匠さんの朝夕に、叱らしやんした筆の跡、十一の書初に、戀といふ字を書き習ひ、早や十三の正月は、始めて月の障りとなり、小癪な娘と浮名立つ、浮名の立つは厭はねど、合思はぬ夢の仇枕、枕に咎は無けれ共、勿體ないお寺の內、色で穢した身の因果、佛の御罰今日の前、合若い盛りの娘御樣、私が身の上よい手本、合歌舞伎芝居の色事の、合話當じて痴話となり、合てんがういふがつい誠。合いたづら事の橋渡し合と御異見なさるゝ合その辛さ、合よしなさんせ、エ、合何ぢやいなア。〽わけもお杉が氣あつかい、合殿御大事とお二人が、合互ひに心磨き合せて、さつても〳〵、よう〳〵。合お七樣。合吉三樣。合おかしらし、合せめて一と言口でなと、合堪能させて上げなさつたが宜いと、合こんな事い

女今川庭訓　女の修養を說いた書
月の障り　月經が來潮すること
小癪　生意氣に同じ
てんがう　戲言
氣あつかい　心配
堪能させ　滿足させること
袖屏風　袖で掩ひ隱すこと
墨の袂　黑い衣の事で僧侶をいふ
辨長　吉祥寺の所化
片瀨　相模の地、日

うたら、親爺さんに睨まれう。杉〽おゆるしえ。なんのいな。よう〳〵、旦那さん。合どうで、合ございます。梅も美くし櫻も惜し、ひとつ合謎めに二人をならべ、杉が氣轉の袖屏風、招かぬ袖に招かれて、墨の袂の辨長が、合〽戀の闇とは氣が利かねども、わしも、合片瀨へ道連れに、合南無や妙法蓮華經、ほうやほうと、合はやされて。杉〽エ、何ぢやいな辨長樣、此面白い道草に、道を立てぬく合かた法華、ほう〳〵ざいと叱つてか。合辨〽イイヤ我等が宗旨にも、〽色は妙音辨才天、合晩の泊りはお杉女郎、合觸れて涅槃の法文を、こゝで岩木橋本町、合〽奇妙頂來寢釋迦さん。辨〽ヤレ〳〵聞きねい、わつちが生れは、酢いと甘いの梅の難波に、何にも知らねえ氣まぐれ御所化の、剽輕者だに、しかも新町九軒の揚屋に、菩薩の來迎、藝子の音樂、鈍な太鼓の無洒落がいやでな、去年の春からお江戸へ下つて、水道のお茶漬、味を覺えた田町の通ひ路、やれ〳〵〳〵、合〽おつくり返つて、ちよつくり返つて、吃驚返

蓮宗の龍口寺がある

涅槃　釋迦の入寂を寢ることに洒落ていふ

岩本橋本町　云はうを岩に掛けていふので岩本町橋本町は共に神田にある町で、昔時願人坊主の住んでゐた地

新町丸軒　大阪の廓

菩薩の來迎　女郎の揚屋入を譬ふ

鈍な太鼓　愚な幇間

へつて、反くり返つた大門口まで、四ッ手の寢心、あつたものでは内外清淨、合ぞつこん眞から、吉原理屈に遂う／＼嵌つた銅鑼が、にやうらい、へうるさいこんだに、ホヽヽ、へ佛も元は凡夫にて、いづれ浮世のわざくれや。合ウタヒカヽリへくらべこし振分髪も肩過ぎぬ、井筒にかけしうなゐ子が、合幼な遊びの古へは、合手鞠、合遣り羽子、合殿様事や、合裸體人形身に添へて、わたしやこんなこんな、何とよい子で有らうがの、その癖に賢こい者でな、七つで絲を取りはじめ、八つで、合布機合織りそめて、晒しの布や筬の手拍子。そつこでせい。合三下りへ羽根を休むるなア、袖ならばねらなん、合いざゝらば寢よもの、合それをこそ思へばさても焦れます、雛面なや蝶の何故に雛面なう、ふるは羽色た櫻か雪か、飛び廻り、合く、花の盛りの若い同士、堰き止めらるゝ冥土の使、合修羅の太鼓の報い來て、合二人が姿雲霞、合あるか無きかの魂呼ばひ、合結ぶあとなき褄重ね、憂きは夢とぞ覺めにける。

を太鼓の音にかけていふ
お江戸へ下つて三十郎が大阪から下つたのを合せていふ
水道のお茶漬　水道の水を沸せてお茶漬を喫べること
田町　吉原の街道
反くり返つた　大門口を反り身で氣取つて行く光景
四つ手　四つ手駕籠

【解說】此の曲は、文化六年江戸中村座の三月狂言の二番目『八百屋お七物語』の大切に、瀨川如皐が書卸した新淨瑠璃で、お七吉三の幻影が現はれて道行の所作事に、辨長が絡んで當時流行の願人坊主の手振で笑はせるといふ筋である。當時の役割はお七が瀨川路考、吉三が中村歌右衞門、お杉が瀨川仙女、辨長が關三十郎で、出語りは二代目富本豐前太夫、同安和太夫、同大和太夫、三味線三保崎兵助、名見崎喜三治であつた。

澤紫色水上（船の高尾）

〽茂り生ふ芦の若葉に潮滿ちて、影澄む月の船遊び、淺き緣は淺妻の、流れも同じ波枕。頼〽春宵の殘月空に帶び、雁鳴いて風情を添ふると、斯く見渡せし川の面、月に一入春景色、何と好い眺めではないかいの。高〽サア月は晴れても晴れやらぬ、わたしが胸の薄曇。頼〽ハテ何としたものであらうな。〽仇にうつらふ兼ね言も、戀と情の二道に、苦界に離れ三叉の、立添ふ胸の川岸を、時雨紅葉の色まさる、宵の儘なる酒機嫌。頼〽コレ太夫、何故に今宵はその樣に、物思はしき顏の色、もう打解けたが好いわいなう。〽寄り添ふ枝も吹く風につれ、高〽エヽでも。頼〽ハテこちら向いたとて好いではないか。高〽わたしや何ぢややら氣合が惡いわいな。頼〽何ぢや、氣合が惡い、そんならさうと早う云うたが好い事に、こりや誰そ參れ〳〵。侍〽ハヽ、御用で御座りまするか。

淺妻　船の遊女に因んでいふ詞

春宵の殘月云々　白樂天の詩句の一節

胸の薄曇　胸の煩悶をいふ

仇にうつらふ　戯言にいふことが實となるをいふ

兼ね言　約束

苦界　遊女の境界

三叉　潮流の三筋に別れる處で今の新大橋中洲邊をいふ

宵の儘　際にかける

太夫　遊女の高級なものを呼ぶ名稱
氣合　氣分に同じ
典薬　お抱への醫者をいふ
袖の香　袖の移香をいふ
忍ぶの亂れ　忍ぶ文字摺にかけて云ふ　古今集に「陸奥の忍ぶ文字ずり誰ゆゑに亂れんと思ふ我れならなくに」
付け廻す　挑むこと
彼の人　間夫の島田

頼へ典薬を呼べ〳〵。侍へハツ。高へア、夫れには及ぬわいな。頼へでもそなたが。高へもう好いわいな。頼へム、。へまださめやらぬ袖の香も、拗ねてひとりで陸奥の、忍ぶの亂れ誰かまた。へ深き思ひは戀衣、内ぞ床しとかけ言葉、他目わびしくやるかたも、付け廻す程彼の人を、いとど思ひの增鏡、曇り勝なる戀の闇、晴るゝ景色もなか〳〵に。頼へこれは如何な事、ちと浮きうきとしやいの。高へサア、その仰せは嬉しいけれど、云ふに云はれぬ妾が心、おほけなき譬へなれど、建禮門院は誰あらう、やんごとなき御方ながら、御舟の中にて憂き苦勞、又祇王祇女、佛御前は卑しき白拍子の遊女なれど、淸き操を後の世まで、殘すも同じ女の身、此の上のお願ひには、何うぞこの身を、廓へ返して下さんせいな。頼へハ、、成程そちが廓にありし時は、情夫もあらん、深間とやらも有りつらんが、今頼兼が心を偲び、もう打解けたが好いわいなう。高へえゝもう置いへ指折に言の葉折添へて、さすがにいつか寢屋の花。

重三郎をいふ

おほけなき　恐れ多きの意

建禮門院　平清盛の娘で高倉天皇の中宮。壇の浦で安徳帝を抱いて入水したが、義經に助けられて大原に隱棲した方

祇王祇女佛御前　清盛に召抱えられた白拍子

深間　深く言交した男をいふ

て下さんせいな。頼へハテ何がその樣に腹が立つぞいなう。高へアイ妾しやお前が厭で〳〵ならぬわいな。頼へ夫れやこれ程に申しても。高へオオくど。へあたら櫻も夜嵐に、さわ立つ心取直し、頼へ酒を持て、早う持て、早くせい。廓へ通ひ初めしより、心をかけし傾城高尾、流れを立つる卑しき女に執心深く、これ迄我に難かりしが、夜毎に變はる勤めにも、重三とやらに操を立て、我に靡かぬ上からは、是非に及ばぬ思ひ切つた。今取り上し盃は、浮氣を散ずる船中の良藥、禁酒を破つて一つ飲まん。高へ待たしやんせ。三年此の方愼みの、禁酒をお破り遊ばして、お氣が逆ひなされましたか。頼へ氣も違はひで何んとせう、由なき事を申さずと、そなたも一つ返しやいなう。へ色にほのめく花の粹、誰が名をそれと付ざしに、そむける顏の仇名草。頼へハテ、コレ高尾、何でそなたは泣きやるのぢや。高へサア、これは云ふに云はれぬ胸の中、五十四郡の殿樣が、この身をそれ程迄に思うて下さんすは、冥加な事やら悲

言の葉折添へ　圓滑に徐ろに口説く意

さわ立つ心　騒ぐ心をいふ

付けざし　思ひ差しの盃

仇名草　櫻の異名。婀娜なを云ひかける

五十四郡　伊達領の郡の數

曲が無い　無情だと怨じる詞

腰元婢女　皆召使だとの意

しいやら、嬉し涙がこぼれますわいな。賴へ何をマア、それを泣く事か、ハテ傍へ寄つても好いではないか、こりや何んぢや。高へア、それはイナ。賴へイヤ／＼見せともないはなほ不審、ソレ。侍へハツ、これやこれ、備前播磨美作三ケ國の大守、赤松満祐が息女歌染姫。賴へサア一ツ注ぎやれ。高へア、イ。へ花のさはりに雲晴れて、影もきらめく三日月の、空に音を鳴く時鳥。賴へ何も驚く事はない、肌身離さぬそなたの守、取上げ見たるあの者を、手打にせしはそちへの心中、斯程に心を碎く賴兼を、難面なうしやるは、太夫そりやあんまり曲がないぞや。高へ何の様に云はしやんしても、妾は厭やで御座んすわいナ。賴へそりや何が。

高へアイお館へ行く事がサ。是れ程に云はれたお前は、腹が立たうがな。なんぼお大名さんぢやと云うて、客と思へば厭になり、又貧しい暮しのお方でも、情夫と思へばいとしうなり、二世も三世も先の世と、云ひ替した大事の男、その情夫のある妾が身、それぢやに依つてお前は厭であ

刀の錆　人を斬ると其の血で刀が錆るから、殺す事の意にいふ

卯の花　初夏に白い花を開く卯つ木

紅葉葉　高尾の縁に因む

りんすわいな。頼へチエ、、おのれはな、廓に有つて君傾城、館へ連れゝば腰元婢女、最前よりの悪口も、女と思ひ猶豫なせしが、最早是迄頼兼が、刀の錆、思ひ知らせん思ひ知れ。へ短夜の契りも、戀慕の闇の相約も、卯の花雪の肌そむる、閨に色づく紅葉葉の、後の浮名となりぬらん。

【解說】此の曲は、文政十二年三月江戸河原崎座の彌生興行に『伊達競阿國戲場』の通し狂言を出した時、三立目隅田川船中の場で、澤村源之助の左金吾頼兼、岩井紫若の傾城高尾で上演した淨瑠璃である。頼兼が高尾を廓から連れ出して船中で酒宴を開き、靡かぬ上に惡態を吐いたために慘殺するといふ所謂高尾の釣し斬といふ筋である。當時出語りの連中は、三代目富本豊前太夫、大和太夫、豊美太夫、三味線名見崎與三治、同德治であつた。因記、この狂言は非常な評判になつたが、同月廿一日七つ時近所からの失火で堺町、葺屋町、木挽町の三座共悉く烏有に歸したので、約二週間しか上演されなかつた。

咲初花振袖（道成寺道行）

〽月は程なく入汐の〳〵、烟り滿ち來る小松原、急ぐとすれど戀風の、振袖重く吹きたまり、ぴらり帽子のふわ〳〵と、合〽しどけなり振オ、恥かしや、緣を祈りの神ならで、鐘の供養へ物好き參り、合あぢな娘と人毎に、笑はゞ笑へ百千鳥、君と、合寢し夜のきぬ〴〵の、飽かぬ別れの悲しさを、思へば憎や世の中の、鐘も碎けよ撞木も折れよ、さりとては〳〵、戀を知らざる鐘撞きの、情けないぞや怨めしと、忘るゝ隙も涙川、戀の氷に閉ぢられて、身を切り碎く憂き思ひ、二上リ〽戀をする身は濱邊の千鳥、合夜毎夜毎に袖絞る。しよんがえ。君に逢ふ夜は梢の鴉、合可愛い〳〵と引寄せて、しよんがえ。交はす枕のかねごとに、合又の御見をいつかはと、心盡しの年月は、門に松立つあしたより、合梅ヶ香にほふ窓の內、櫻も散りて早苗取る、螢の夕べ五月雨に、蚊遣りふすぶ

ぴらり帽子　前髮に懸ける裝飾布
しどけなり振　小褄の亂れた姿
鐘の供養　新らしい鐘の撞き初をする供養
あぢな娘　變つた娘
戀の氷　戀が嵩じることを譬へていふ
袖絞る　泣き明すことをいふ
かねごと　約束
又の御見　又逢ふことをいふ

る軒のつま、秋風そよと音づれて、田の面に落つる雁の聲、合 實に月ならば十三夜、合 菊の下露濡れ初めて、つま戀ひかぬる小男鹿や、鴛鴦の衾の薄氷、これ皆戀の色と香に、うつるや四季の折ごとに、君と比翼の床の内、語り明さぬ夜半もなし、別れ惜しめど曉の、鐘早や鳴りて鳥の聲、合 たゞ我をのみ追ひ來るかと、科なき鐘を恨みにし、此罪科の數々は、讀むとも盡きぬ眞砂路を、一人かこちて行く道も、急ぐ心も法の道、供養の庭にぞ着きにけり。

【解說】 此の曲は、寬政九年五月、江戶桐座で瀨川菊之丞が白拍子に扮して『京鹿子娘道成寺』を上演して、花道から舞臺まで掛る間の道行を富本で語つた折、作曲された淨瑠璃で、當時の出語は二代目富本豐前太夫、同大和太夫、三味線名見崎安治、同市十郎であつた。

早苗　苗代から田に移し植える頃の稻の苗

軒のつま　軒の端

鴛鴦の衾　鴛鴦は常に雌雄相連れて浮んでゐる。それを男女の睦ましいことにたとへる

比翼　翅を並らべることの意。一緒に臥すこと

恨みにし　恨んだといふこと

法の道　佛法をいふ

雪解松操織（常磐）

ウタヒ〽行方定めぬ道なれば、行方定めぬ道なれば、越し方いづこ白雪の、積る軒端の伊豫簾、風の誘うてさら〳〵と、窓音づるゝ雪白き、常磐の松の操さへ、時世に今は遠近の、山路の雪に呉竹の、伏見の知邊尋ねんと、紫竹を出でゝ後や先、歩み習はぬ道芝も、降積む雪に裳さへ、

地節〽身をさす劍紅の、袖に涙の玉霙。世を牛若を懐に、凍る乳房を抱き寢の、宿もがなと夕顔の、軒端眞近く佇めり。〽折しも奥より玉琴が、年も三五の玉簪、廂の雪を掻き落し、落せば襟や袖口も、濡れて色づく窓の梅、花の笑顔のなほ柔し。〽雪やこん〳〵、降れ〳〵小雪、つくや手元にいたいけ盛り、鯛つる蛭子の、これ〳〵見さいな、面白たへの雪丸げ。 二上り〽此處までござれ、歩く者には何々やろぞ、打つや太鼓に春の駒、引かれて共に此方へと、歩みかゝれば降りしきる、二上

行方定めぬ道　謡曲「鉢木」の謡ひ出しの文句から取る

伊豫簾　伊豫守義經の縁にかけて出す

遠近　落ちにかけていふ

呉竹　伏見の枕詞

紫竹　山城愛宕郡の小邑

世を牛若　憂しを牛にいひかける

夕顔　云ふにかけていふ。夕顔の軒と云へば、實は夏の

風情である
三五　十五歳、珊瑚にかけていふ
雪やこん／＼　童謡
面白たへ　面白いに白妙をいひかける
鵞毛　雪のこと
深草の里　山城の地名に雪の深きをかけていふ
塵の浮世　俗な世界といふ意
弓取　武士のこと
矢屏風　弓矢を屏風のやうに並べるこ

り＼母は二人を濡らさじと、打蔽ひたる笠の中、深き情や籠るらん。＼此方の庵に聲あつて、宗＼鵝毛緑水に浮み、白雪清波を發く、降れば又訪ひ來る人の跡もなし、降りつむ雪も深草の里。＼塵の浮世に弓取の、猛きを隱す矢屏風や、孫呉が書の栞さへ、常のすさみと宗清が、鶴の毛衣それならで、浮世を佗びし此身すら、宗＼ハテ風情ある景色ぢやなア。＼心を澄ます折柄に、常磐は見るより、常＼申し申し御女郎、世を忍ぶ譯あつて、大和路へ下る子なるが、幼き者を連れ、此大雪に道を失ひ、後へも先きへも參り難し、情と思し只一夜の、宿りをお頼み申しまする。＼わりなき頼みに玉琴は、玉＼幼連の旅のお女中、此大雪に嘸かし御難儀、お宿は申したけれ共、此程平家の沙汰として、義朝殿の由縁を詮議嚴しく、夫れに人々の樣子といひ、折角のお頼みなれど、お斷り申しまする。常＼イヤ／＼何も疑はしい者では御座りませぬ。白は女子のこと、伴ひ連れしは幼き者、見ますれば彼れに御いでなさるゝは、定めて

主の御方か、何卒只管お頼み有つて、簀子の端が軒のつま、〽假りの宿りも情ぞや。玉〽サア主と申すは妾が父、御念晴らしにお頼を、〽尋ねて見んと玉琴は、父の前に手をつかへ、其儘様子打ち語る。いなや鸚鵡の返り言。宗〽不憫なりとは思へども、只今そちが云ふ通り、掟嚴しく、殊には奥の客の手前といひ、峠を越えて町に行き、宿を求めらるゝやう、斷り云うて早や歸しやれ。〽愛憎もなげに云ひければ、玉琴技折へ立寄つて、玉〽お頼の其由を、主に申しましたれ共、御覽の通り賤が伏家に劣りし庵、殊に掟も嚴しければ、この山の峠を南へ越え、十丁餘り彼方には、善い泊りも候へば、暮れぬ間に一足も、急がせ給へ。〽と、云ひ捨てゝ、取合はざりし其風情。〽アラ曲もなや世の人の、斯く難面も傾きし、運の末とぞ思ひ子を、連れたる二人も雪に逢ひ、歩み疲るゝ風情なり。〽宗清は聲しぶき、宗〽コリヤ娘宿りを求めし今の女中、聞き濟んで歸つたか。玉〽ハイ聞き濟んでは歸りましたが、〽不憫の事と

と
孫呉が書　支那孫子呉子が著した兵書
常のすさみ　日課の意
鶴の毛衣　仙人が鶴の毛衣を被て雪中を徘徊して居る風をいふ
御女郎　女を呼びかける詞
わりなき頼　餘義ない頼み
沙汰　お觸れ
簀子　緣側のこと

立ち上る、門に落ちたる守を取上げ、玉へほんにこりや守袋。宗へムム今の女子が取落せし物であらう。へ玉琴拾ひ持來るを、手に取上げて思案の體。暫しあつて宗清が、宗へ斷りは申したれど、幼きを連れ難儀致さん。玉へそんなら今のお女中を。宗へ早う呼んで泊めてやりやれ。へ父の許しに玉琴は、又も外の面に立出でて、玉へなう〳〵旅の女性、御宿參らせうなう、餘りの雪に申す事も聞こえぬか、へいたはしの有樣や、もと降る雪に道を隱し、一つ所に佇みて、二人の和子に袖屏風、身は濡鷺の御風情、迷ひ勞れ給はんより、見苦しくは候へ共、一夜を明かさせ給へやなう、旅の女中、旅の女中と招かれて、聲を便りにふり返り、見やれば此方の庵の口、玉へお宿いたしませうわいなア。へ心嬉しく立つ足も、雪打ち拂ひ戻り來て、常へ世にも嬉しきお志、宿りをお貸し下さりまするか。玉へいたはしく存ずれば、お宿申すも値遇の緣。へ一樹の下の旅枕。常へ御遠慮なしにお女中樣。へ塒に迷ふ親子鳥、止

軒のつま　軒下
鸚鵡の返り言　鸚鵡返しにいふ言葉
奥の客　瀬尾のこと
枝折　枝折戸の略
善い泊り　善い旅宿の意
曲もなや　思ひやりもなやと云ふ意
もと降る雪　最前から降る雪の意
袖屏風　袖で圍ふことの形容
値遇　出逢ふこと
留木　薫衣香をいふ

茅屋　あばら屋

法の薪　釋迦が修業中に薪を採つたりして艱難辛苦したのをいふ

由あるもの　由緒ある身分の者

薄の穗にも云々　薄の穗を化物かと神經で咎めること

笹蔓　源氏の紋所笹龍膽にかけていふ

しがらむ　からむこと。模樣が證據になつて絡む意

り木得たるも主のお情、かりの臥床も盡きせぬ御縁。玉〽父の許しの出る上は、サ、これへ〳〵。〽これへとこそは請じける。宗〽折からの此大雪、嘸かし御難儀なされつらん、娘には此和子二人、奥の別間へ伴うて、心をつけて御介抱申してくりやれ。常〽是れはまあ、いかいお世話にあづかりまする。玉〽サアサア和子様、奥へ御出でなされませ。〽花か櫻か白梅の、拂ふ袂に留木や香る。宗〽さてはやお留めは申したれ共、もてなすべきものとても、心に任せぬ此の茅屋。常〽雪に凍へし親子三人、おやさしう御介抱、難有うございまする。宗〽せめては寒氣を凌ぐ爲め、焚火なりとも。〽法の薪にあらなくに、柴折くべてもてなしぬ。宗〽最前より見受くる所、只人ならぬ御扮裝、其樣子承りたい。常〽コレはまあ思ひも寄らぬ、私は由あるものではござりませぬ、此の程夫を先立て大和路へ參る者。宗〽諺に申す通り、薄の穗にもをぢるとやら、世を忍ぶ御身故、お隱しあるも道理ながら、おことが戻りしその跡に、

無下には致さぬ　悪くははからはぬの意

保元の亂　藤原の頼長が崇德上皇に勸め奉つて兵を擧げた事件をいふ

信頼　後白河上皇の寵臣藤原信頼

新院　崇德上皇

待賢門の夜戰　平治元年の戰をいふ。此の時の敗戰で源氏が全滅したのである

落ち散りありし此の守。〽取得し守懷中より、常磐が前に差し出だす。〽赤らむ顏も紅の、錦の模樣笹蔓の、しがらむ此身の果敢なさと、詞なければ、此方にも、宗〽御身の素性お明しあるとも、無下に致さぬ拙者が心底、包まず仰せあられよ。〽と、樣子問はれて塞がる胸、包むに餘る淚を拂ひ、常〽何をお隱し申しませう、過ぎし保元の亂れより、信頼殿のお勸によりて、是非なく一味を新院方、待賢門の夜戰破れ、身は尾張路にさまよひて、遂に果敢なく世を去り給ふ、義朝が妻常磐、伴ひ連れしは今若、乙若、是れに抱きし牛若も、皆之れ君の筐故、何卒再び世に立ちて、源氏の家を興さんと、思ふにまかせぬ此身の因果、〽推量あれとばかりにて、後は淚に袖絞る。宗〽我が推量に違はぬ常磐殿、昔に變る御身の上。〽腹心の家の子さへ、見返る人のすげなさに、いたはり深き主の言葉、如何なる人と尋ぬれば、宗〽それがし事は平家の御內、彌平兵衛宗淸。〽と、其名も聞いて驚くを、此方は見て取り押し止め、

逢に果敢なく　義朝が尾張の内海で長田に謀殺されたのをいふ

君の倅　義朝の遺子といふ意

腹心　大事の佐になる家來

侘びし身　世を遁れてゐる身

鷲摑み　鷲が小鳥を摑んだやうにギウッと摑む意

了簡　疎忽の意

寸志　ほんの少しば

宗へアイヤたとへ平家の御内にせよ、今は浮世を侘びし身で、御身を害する事ござらう、御心安く思召されよ。へ世に頼もしき其の風情。へ折しも一間騒かしく、こは何事と伺ふ所へ、瀬へ義朝が小悴らせ居らう。へ幼き二人を鷲摑み、出で來る瀬尾に娘は縋つて、玉へ是はしたり瀬尾様、まあ〳〵待つて下さりませ。瀬へア、要らざる女郎め、其處退け。へと、行かんとするを宗清押し止め、宗へ了簡めさるな、是なる女は大和路へ下る者、雪に凍えて難儀を見兼ね、宿申せしは我が寸志。常へ主の仰せらるゝ通り旅の者、宥してたべ。へと詫びけるを、瀬尾は尚も聲ふり立て、瀬へ餓鬼が衣服の模様といひ、小蔭で様子殘らず聞いた、うぬ等二人も今若、乙若、サアキリ〳〵とほざき居れ。へ夫れと指圖に荒しこ共、幼き二人を引き据ゑるを、母はあるにもあられぬ思ひ。宗へ瀬尾殿まあ待たれよ。瀬へ留るは矢張かばうのか。宗へアイヤかばひは致さぬ、尤もながら、窮鳥懐に入る時は、獵師も之を捕らずとの本文。

かりの志
餓鬼　子供を罵つていふ詞
ほざき　白狀せよといふ意
荒しこ　雜兵のこと
窮鳥　逃げ場を失つて難儀する鳥
心を運ばぬ　援助をしないといふ意
御連枝　身分の偉い血緣の者を指していふ詞
心ありげな　意味が深長なといふ意

瀨へぢやと申して助けるは、扨は源氏へ二心か。宗へ源氏へ對して聊かも、心を運ばぬ身の潔白、清盛公へ一つの忠義を、立つる印を御目にかけう。ハテ何をがな。へ打案じ、始終を胸に宗淸が、へ庭に下り立ち此方なる、若木をそれと指し示し、へ宗へ是れなる若木は閑居の暇、養ひ育てし梅、櫻、松、あるが中にも此梅は、花の兄にて咲き初むるは、取りも直さず今若君、殘る二木は御連枝の、まだ幼き乙若、牛若。常へ心ありげな宗淸殿、三人の和子に譬へし若木。瀨へイヤ植木に寄せて、餓鬼の命の瀨戸際延ばす二心。宗へアイヤ切るは若君三人を。常へどうでも和子のお命を。瀨へいよ／＼御へんが。宗へイヤ和子に譬へし此の若木。瀨へ何と。ウタヒガヽリへ切るともよしや惜しからじと、雪打ち拂ひて見れば面白や如何にせん。二上りへ先づ冬木より、咲き初むる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも。へ櫻を見れば春每に、花少し遲けれど、此木やわぶると育てつる、其家櫻如何にせん。扨松はさしもげに、

御へん　貴公に同じ
切るともよしや　鉢木の謡の文句を全然取つていふ
窓の梅の北面は　和漢朗詠集の藤原篤茂が何で北側の窓の梅は雪に埋められて花が遅いといふ意
かゝりあれと　かゝりは鞠を蹴る庭。そこには松を植ゑるが古實
今は嵐吹く　今は零

枝を矯め葉を透かし、かゝりあれと植置きし、その甲斐今は嵐吹く、嵐に木の葉あらしこ共、左右へ一度に雪礫。松は元より常磐木の、常磐御前の操の枝、軍扇持つてはつしと切り、手早く松が枝差出せば、常へそりや操を破つて清盛公へ。宗へ如何にも。へ返事も何と夕暮や、早や入相の鐘の聲。へ折しも響く入相は、祇園精舎の鐘の聲、沙羅双樹の花の色。宗へ花咲く春を待ち召されよ。へしめす詞に我武者の瀬尾、抜き放したる氷の刃、峯の吹雪に照り誘ふ、光りは夜半の月代と、見紛ふうちに瀬尾が肩先、血潮の汚れに唐紅、あたり輝く光明の、うちにあり〳〵黄金の鍬形。常へヤ、コリヤ、これ御先祖經基公より、源氏に傳はる驪龍の鍬形。宗へ源氏の血筋の公達へ此場の引出。常へ忝けない。へいざ御供と宗清が、詞に松の雪解けて、つい濡れ勝る小夜衣、辿る夢路ぞ浮世なる。

【解說】此の曲は、弘化二年正月、江戸中村座の初芝居で『玉瓶椿源平曾我』

の通し狂言を出した際四立目に上演した浄瑠璃で、文政十一年に出來た常磐津の『恩愛瞶關守』の木幡の關を座付作者の藤本吉兵衛が改作し、宗清の庵室へ常磐が遺孤を連れてさまよつて來て一夜の宿を借るのを、瀬尾が現はれて拒むので、瀬尾を斬つて常磐を福原に送るといふ筋。謡曲『鉢木』に義太夫物の『布引』の趣向を取入れた隨分こみ入つた珍らしいものである。當時の役割は彌平兵衛宗清が市川九藏、宗清娘玉琴が岩井粂三郎、瀬尾太郎が中村鶴藏、常磐御前が岩井半四郎等で、出語りは三代目富本豊前太夫、豊紫太夫、組太夫、三味線富本豊梛、名見崎忠治であつた。

落したといふ意で鉢木の常世の身を叙べたのであるから宗清には些か無理な譬へである

祇園精舎　天竺に在る寺、爰では單に寺の意に用ゆ

沙羅雙樹　天竺に在る。はかないことにたとへらるゝ木

鍬形　兜の眉庇の上の二本立ち

嵐の誘ふ花の雪　風が吹くと落花する光景をいふ
柳髪嫋々とした亂れ髪をいふ
雪は飛んで云々　白氏文集の「雪は鷺毛に似て飛んで散亂し」の意
公達　名門の子弟
綾の狩衣　綾を織り出した狩衣
細眉　三日月形の眉
鐵漿　おはぐろ
鞍馬　京都市の北方

女婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）

二上り〽嵐の誘ふ花の雪、散れば狂じて柳髪、合雪は飛んで散亂し、羽風に似たる白妙も、狂ふ狂女の姿かや。狂〽その人にもの問はう、妾が尋ぬる公達の、〽綾の狩衣優婉に、十六七の細眉に、鐵漿黒々と粧ひし、お稚兒の旅に逢ふことの、もしやちらりと三日月ならば、教へてたべの里人と、うつゝ涙にわけもなき。狂〽やゝ、何ぢや、吾君さまは鞍馬にぢや。三下り〽鞍馬の里は八瀬大原、合大原木可愛いゝ〳〵。合大原女が引く牛に、合戀しき人を打ち乘せて、引いて行きましよ我故鄕へ、合大原木可愛い〳〵〳〵な。可愛い〳〵と啼く鳥に、憎くや添ひ寢を起した。狂〽オホヽヽヽ、オヽ可笑し、逸足早う遁げていたか、ホヽヽホヽ、ホ笑へ〳〵。〽妾も人が笑はなん、合さもし羞かし此の姿、小春へ殘る亂れ菊、とりなり映す水鏡、御裳濯川や八十瀬川、所は伊勢のかみ、合

に聳ゆる名山
八瀬大原　八瀬も大原も比叡山の西の麓に在る
大原女　大原から黒木を頭に戴せて都へ賣りに出る女
大原木可愛い　大原女は男女共に細い四尺ばかりの名を記した杖を持つて居て、男は其木を女の門口に立てると女が木を取れば男の意が通じたの

神風に、合つれて聞ゆる神樂歌。太へ惡魔を拂つてそつこでせい。合へ諸國廻りに、合天照らす、神を商ふ、合すぎはひに、襟にかけたる曲太鼓、合頭に獅子の二人前、合一とつに寄せて、合打つたり舞うたり、月の朔日十五日、合大晦日も元日も、股引がけの旅神樂、我と浮れる道草に、獅子の眞似して來りける。狂へコレ〱里人々々、此處へ來てたもや。へ太神樂は側へ寄り、太へ見ればお若い女中のたゞ一人、お前方のやうな美しいお方のお傍へ寄つたなら、どんな太鼓の撥があたらうも知れぬ。狂へヤこれ〱、そなたの頭のはそりや何んぢや。太へエこれかえ、これは獅子さ。狂へフウその獅子わしに貸してたも。太へエ、これを貸して呉れえ、是をお前に上げては、私が鼻の下が干上る。狂へそんなら我身舞うて見や。太へ合點々々、お望にまかせつゝ、さらば神樂を囃さうか。二上りへ抑神樂の其初め、天の岩戸の屏風の内の、合天の鈿女の魂膽に、神の合心を合取りはやし、合手練手管の眞實に、合正木の葛よ

で鉾ともなり嫁ともなるので「可愛い」とは戀に狂ふ女が男を慕ふ詞である。

御裳濯川　伊勢大廟の社前を流るゝ五十鈴川の別名

神を商ふ　神樂を商賣にすること

すぎはい　生業

旅神樂　田舍を廻つて步行く神樂師

鼻の下が干上る　稼ぐ事が出來ないの

りかけて、しなだれ蔓玉蔓、長鳴鳥の常闇に、しつぽり汁を角兵獅子、獅子はお家のてれつくてん、つくぐ見れば、合へてんと堪らぬ品物め。へ誰と寢てきた(こはした)亂れ髪、何處の岩戸の睦言を、問はまほしやと寄添へば。もとより狂氣のうろくと、へ長刀取つて打ちかゝる。へオツトあぶない鼻の先、へ受ける曲撥三尺の、劍にひやうす、業物は、是ぞ千卷の玉鉾に、追ひ立られて太神樂、逃げる拍子に狂ふ獅子、此方は戀の物狂ひ、合へ狂ふは獅子の冬牡丹、獅子團亂旋の、合どふく共、逢はで果てなん、へ我夫の、鞍馬の方と聞くものを、鞍馬の方は何處ぞと、そこはかとなく、走れば走るうつゝなさ。止むる男を振袖に、拂ふ羽袖や、飜る。合賤の小田卷繰り返し、昔を今に戀しさの、合へ戀には翅も有るものを、添うて行きたや逢はせてと、口說いつ泣いつ正體なく、へ取り縋られて太神樂、乘りかゝつたる灘の船、寄る邊かねにし風情なり。

で食べるに困る意
天の鈿女　天の岩戸で神樂を奏した女神の名
常闇　晝夜分ちなく暗くなること
堪らぬ品物　堪へられない別嬪の意
曲撥　太神樂の撥捌の手
獅子團亂旋　舞樂の名で獅子の狂ひに使ふ相方
賤の小田卷　靜の八幡社頭で詠つた唄を引いていふ

【解說】此の曲は、義經の愛妾靜御前が、鞍馬に隱れた義經の跡を追つて狂亂する。それを心配して、太神樂に扮して御厩喜三太が追うて行く。薙刀を振廻はす狂女にからんだ獅子舞が見ものである。これは安永六年十一月、江戸市村座の顏見世狂言『稚兒鳥居飛入狐』の二番目に中村重助が書卸した淨瑠璃である。當時の役割は靜御前が瀨川菊之丞、太神樂獅子實は御厩喜三太が中村仲藏で、中村富十郎と市村羽左衛門の雌狐、雄狐が出たものである。出語りは二代目富本豐前太夫、同齋宮太夫、同津賀太夫、三味線名見崎德治、宮崎秀五郎であつた。

道行念玉蔓（長作）

〽槃特が愚痴にはあらで魯鈍なる、身は木津川の渡し守、鼾の聲も苫洩れて、笑ふ雲雀に濡れ燕。姫と蘭部の左衛門は、心急かれて旅立に、日のよしあしも夏衣、うらなき戀の誠と誠、いつか女夫と奈良坂や、あれ〳〵、あれに懐かしき、柞の森の陽炎も、當麻を出でて昨日今日、飛鳥もあとに遅れ咲、椿も藪の渡りより、狛の船場に着きにけり。薄〽コレ申し左衛門樣、此處は何といふ所でござりするぞ。左〽此處は山城大和の境、木津川といふ所ぢやわいの。薄〽そんなら早う渡しを渡りまして、彼の妻平を待ちませうかいな。左〽なるほどそれが宜からう。〽と、二人は船場へ立よりて、船よなう、船よ〳〵と起されて、寝耳に水の船頭が、苫おしあげて、どつちやう聲。長〽どいつだえ、何のべらぼうめだ、渡し錢なら、五文か十文出すといつて、あたやかましい、折角面白

槃特　釋迦の弟子中で愚物といはれた男の名
木津川　山城に在り
うらなき戀　駈引の無い眞實の戀
奈良坂　奈良の外れの坂道
柞の森　山城の地
當麻　大和の地
飛鳥　大和の地
狛　山城、木津川のほとり
妻平　二人の從者
寝耳に水　睡を急に

起された形容
どつちやう聲　太く濁つた相撲取のやうな胴間聲
夢の胴ぶくら　夢の高調に達したのをいふ
符がわるい　辻占が惡いと同じ意
佛頂面　あいその無い顏
大膳樣　秋月大膳といふ敵役
梅川もどき　梅川氣取といふ意で梅擬

く見て居た夢の胴ぶくらを起しやアがつた、見かけた夢を返しやアがれ。〽あた符がわるいと佛頂顏。左〽それは何とも氣の毒千萬、腹が立たうがこれ舟人、早う渡してたもいの。〽賴む二人が風姿素振、ためつすがめつじろ〳〵見て、外記〽長作はたと手を打つて、長〽それよ、それよ、オ、それよ。大膳樣からお尋ねの、薗部薄雪ござんなれ。外記節〽搦め捕らんと身拵へ、鉢卷しめて櫂押つとり、振上げながら思案顏。イヤ待てしばし我心、つく〴〵見れば姿そぶり、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、梅川もどきで日を送り、二十日あまりに四十兩、遣ひ果して二歩殘る。長〽なぞと二人がやりかけて、すつぽらほんと逃げる氣か。〽但し舟にて仇厭らしい道行と、出て死ぬる氣で此處らまで、ござつたであらうがの、〳〵〳〵〳〵。長〽そりやならぬ。〽ならぬと息急き引ぱり、櫂をかまへて立つたりしは、日もおもながに見えにける。我身の上と左衞門は、はつと思ひて、左〽ア、これ〳〵、其のやうな者ではない、こちら二

の洒落にもかける
日も面長　日永の意
札所　三十三所の寺院の觀音の靈場を云ふ
報謝渡　錢を取らぬ報謝の渡し
御詠歌　巡禮が歌ふ哀調を帶びた唄
粉河寺　紀州粉河町にある西國第三番の札所「父母のめぐみも深き粉河寺ほとけの誓ひ賴もしの世や」

人は、オ、それ〳〵、札所を廻る巡禮ぢやわいの。長〽何んぢや巡禮ぢや、巡禮ならば報謝渡、御詠歌唱へて乘らつしやれ。〽と、律義一遍正直に、早く〳〵とおだてられ、詮方もなく御詠歌も、後や前なる、父母の惠みも深き粉河寺。不孝者よと我々を、さぞ未來から、三熊野の、たきつ思ひに胸せまり、昨夕のまゝで帶さへも、結び棄てたる藤井寺、南圓堂かゆく先も、案じ過ごして賴もしき、佛の誓ひ願ふにぞ、〽イヤ仰たりな。〽その自墮落やの二人連、合點の行かぬ美濃の國、親と賴みし媒酌人にも、沙汰無で惚れた帆掛船、長〽おりや駈落と見てとつた。ちん〳〵加茂へもう一里、サア梅谷へ廻るがよい。〽舟には乘せぬ渡しやせぬ、ならぬならぬと枕箱、煙管で叩き立つたるは、思ひの外の悋氣坊。二人は返へす詞なく、人の情けを待つばかり。〽住み馴れし菅原村に夏の來て、干すてふ布の女子業。二上り〽色氣無いとて苦にせまいもの、見やれ茨にも花が咲く、このえいこのえい、背戸や河原で袖褄引き

三熊野　紀州の熊野三社

たきつ　瀧津瀨の樣に烈しいこと

藤井寺　南河内にある第五番の札所。葛井と書くのが正しい

南圓堂　大和興福寺にある觀音堂

ちん／＼加茂　仲のよいちん／＼鴨を地名の加茂に云ひかける

枕箱　船頭が枕の代

やる、引田生れの氣散じは、〽般若寺あたりで一口に、なりそに見えてぶつきら棒、晒し盥を引抱へ、笑顏作りて走り來る。長作それと見るよりも、長〽これ／＼およし坊、およし坊、金儲けが出來た／＼、褒美は二人が山分。〽と、云へどおよしは合點行かず。よし〽そりやマア何の事ぢやぞいな。長〽サア何の事やら知らねども、薗部の左衞門、薄雪姫、束ねて出せば御褒美の金、濡手で哀れや二人連、慥かに其れと極まつた、繩掛けやうではあるまいか。〽と、船の纜を解きかゝる。およしは驚き押とゞめ、よし〽これはしたり、わつけもない、此木津川は伊賀守樣の御領分、其伊賀守樣の御姫樣、薄雪姫樣を、何うして其のやうな事があるものかいの、嗜ましやんせ。〽と、長作は、およしに云はれ、悄氣になり、長〽いかさま、其處もあるかいの、サアこれからは何うなりと、好いた同士の戀話。〽聞かまほしやと立寄れば、およしと共に身の上を、問はれて二人は憂き事の、薄〽始めおもへばそれいなア。クドキ〽逢ひ

用にする煙草箱
菅原村　大和の地
ぶつきら棒　色氣の
　薄い女をいふ
濡手で哀れや　濡手
　で粟の洒落
纜　纜綱の略
わつけもない　飛ん
　でもないの意
地主の櫻　京都の清
水の地主權現の境
内の櫻
籬　垣根と仲人をし
た籬といふ腰元の
名をかけていふ

見し時は過ぎし春、地主の櫻の花盛、ほんに思へば清水の、觀音樣の御仲人に、互ひに人目つゝましく、文七節〽忍ぶ籬が橋渡し、解けて寢よとの判じもの、書いた此手が我ながら、いたづらものぢやないかいな。其の憂き事も今ははや、我身の曇り晴わたり、家の寶も手に入れば、小枝の笛を尋ね出し、二つ揃はゞ幸崎の、家をも立てたき身の願、そのお心のうれしさに、離れがたなの雉子ぞと、つま戀詫ぶる風情なり。〽アレ聞かしやんせ長作さん、羨しうはないかいな。わたしやお江戸の勢ひ肌、聞けば地廻り節とやら、手拭取つて斯う冠り、ソヽリ節〽可愛男の顏がすりや、蝶々の簪が飛んで出る、こりや又何のこつた、〳〵、下駄で長屋の前渡り、こんな勇みが、たゞし又、野暮で律氣で、御贔負の、今澤山ある役者なら、三津五郎に似たものあれば、鈍くなりたい願ひとは、チトはね者ぢやないかいな。〽オヤ〳〵どうせう、そりや嬉し、ちよつと聞いても初松魚、よく時鳥と氣が合うて、焦れし舟の舵枕、横か

小枝の笛　小枝と銘のある名笛
幸崎　伊賀守の姓
勢ひ肌　勇み肌
地廻節　廓を素見す地廻が唄ふ小唄
蝶々の簪　女郎の事
長屋　公許されない間場所（密娼）の女郎屋
前渡り　家の前を往復する意
ヤッシッシ　艪を押す掛聲
瀬々の網代　宇治川

ら見ても半四郎、こちから見ても半四郎、そんな嫁衆が持ちたさに、待てば燗酒茶碗酒、ぐつと一ぱい遣りかけて、おつとまかしよと一日を、横に暮らして渡し守。へそんならそなたは。へヤッシッシ、漕がいでどうしやう、お前はえ。へさうして振を見せ参らせう〳〵。へヨイ女夫、晒しの水仕事。へ立浪が〳〵。瀬々の網代に支へられて、流るゝ水を堰きとめよ〳〵、所がらとてな、所柄とてな、布を手技に、槙の里へと打ち連れ立ちて、戻らうやれ賤が家へ、賤の手業も面白や。へと、見やる間も情けなや、およしは忽ち物狂はしく、アツと倒れて伏轉ぶ。ヤアヤア是はと驚く長作、藥よ水よも唯おろ〳〵、うろたに騒ぐ其うちに、正氣づきしも物の怪の、業とも知らず左衛門は、左へどうぢや、心が付きしか。へと、尋ぬる南部が顔つれ〳〵、ぢつと見やりて流し目に、へ忘らろゝ身には何がある。　ウタカヽリ　へ京内参りせし時に、アノ清水の觀音で、逢見し時の羞かしさ、又その折の嬉しさを、忘れぬものを去りと

で水中に竹の柵を拵らへ冬季小魚を取る網代木のこと
槙の里　宇治の槙の島を巻きにかけていふ
京内参り　内裏を菲みに行くこと
船玉様　船人が祭る水神
修羅の奴　冥途で責めらるゝ身をいふ
はやち風　疾風
角組む蘆　蘆の芽が角の如く尖るのを

ては、薄雪姫に見かへられ、添はれぬのみか、あまつさへ、邪慳の刄にかゝりしぞや。それほど迄に此のはなを、思ひ給ふかこりや有難い。〽そもじ故なら船玉様かけて、水も汲みましよ手鍋も提げよ、さんやれ〳〵、せめて私が心なと、思ひやつて下さんせ。〽修羅の奴となり果しも、皆殿御故妬ましや、恨みは盡きじと寄添へば、驚く二人、長作は、〽サア〳〵舟で好いた同士。〽可愛がらうと手をとれば、俄かに吹き來るはやち風、若葉の闇の冥々と、いと物凄く見えにける。〽あやしき物と左衛門は、姫を圍うて伺ひ居る。　鼓ウタ〽われはお美津が亡き魂の、浮みもやらで髣髴と、宙宇に迷ふも淺ましや。邪淫の罪に犯されて、角組む芦は劍の山、肌への卯の花紅躑躅、鳥も八汐の血の涙、我と我身を責めくる鬼百合、落る椿も眞逆さま、此の世からなる苦しみを、思ひ知らせん、思ひ知れ、恨みの笞打ち寄する、紅蓮の藤浪どう〳〵、烈し恐ろし何時の間にかは妻平が、二人を圍ひ立ちふさがり、怨敵退散〳〵と、お

いふ
卯の花　初夏白い花が咲く卯つ木。肌の白いことにたとへる
鬼百合　黒百合をいふ　鬼の緣語で
怨敵退散　憑き者を追拂ふ呪文の經
紫の杜若　半四郎の俳名杜若の意
解脱　惡魔が佛心に歸るをいふ
解城偸品　法華經の經文の名

美津に家のかざし草、寶揃へば雲晴れて、皆紫の杜若、今こそ解脱の花衣、解城偸品の敎への道、有難かりける次第なり。

【解説】此の曲は、寛保元年文耕堂が書卸した『新薄雪物語』を櫻田治助が改作して『還供養妹脊緣日』の外題で、文化二年四月江戸中村座で上演の際大切に出した淨瑠璃である。薗部左衞門が薄雪姫と驅落して木津川の渡し場で渡守の長作に見咎められ、渡す渡さぬの問答最中、長作女房およしが來合はせ、晒しの振り事から五平次の妹お美津の亡魂が乘移つて嫉妬の荒れになるといふ筋で、瀨川龜三郎の薄雪姫、尾上紋三郎の薗部左衞門、市川八百藏の妻平、坂東三津五郎の長作、岩井半四郎の女房およしといふ配役に、出語りは二代目富本豐前太夫、大和太夫、和泉太夫、三味線名見崎喜總次、同市十郎が勤めた。

道中戀飛脚（梅川忠兵衛）

〽落人の爲かや今は冬枯れて、薄尾花はなけれども、世を忍ぶ身の後や先、人目を包む頬冠り、隠せど色香梅川が、馴れぬ旅路を忠兵衛が、いたはる身さへ雪風に、凍える手先懐中へ、温められつ温めつ、石原道を足曳の、大和路さして行く空や、木々の梢も紅葉して、色で逢ひしも早や昔、今日は親身の夫婦合、頼まば願ひ庚申、庚申堂やせうまんの、二十六夜も影くらき、〽身の繰言は愚痴なれど、大恩受けし養子親、妙閑樣へ一日も、孝行らしい事もなく、御苦勞かけし其の上に、翌日の歎きの數々に、倂くにとかれぬ三度衙の、重き不孝の罪科と、喞ち涙に目もうるむ、　クドキ〽顏つれ〴〵と打守り、それ其のやうに云はんすほど、この梅川が身のつらさ、惚れた女子のせうがには、仇な勤を實にして、お前に逢ふ夜は曉の、鷄の啼くまで繰り返し〳〵、同じ話の其の中に、

落人の爲かや　落人の爲に恰度誂へたやうだといふ意

隠せど色香　手拭で顏を隠してもあでやかな姿が掩ひ切れない意

石原道　石ころが多くて歩き難い路

足曳　山の枕詞大和のやまにかゝる

庚申　願ひを叶へにかけていふ

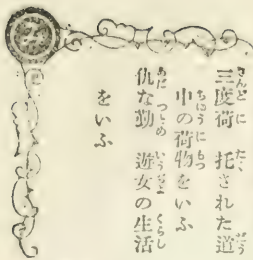
せうまん　勝曼のことであらう。舊曆

六月朔日、大阪島の内で勝曼愛染會と云ふ祭禮を行ふ

廿六夜　舊暦七月二十六日夜の月待。其月の出は三尊の彌陀の像を現ずると云ふ

養子親　忠兵衛は亀屋の養子の身なので養母をいふ詞

三度荷　托された道中の荷物をいふ

仇な勤　遊女の生活をいふ

末は夫婦と云ひ交はし、幾代變らぬ戀仲と、堅く契りし嬉しさに、常の女子とうつゝなく、取亂したる眞實が、なまなか屆いて木津川の、ほんに渡しがある故に、今のお前の憂き難儀、堪忍してとばかりにて、後は涙の村時雨、のべのみつをりしをるにも、裾に窶るゝ小笹原、行悩みては立上り、梅へ申し忠兵衛さん、よしない私故お前の心遣ひ、何かのことを思うて見れば、此梅川に愛想が盡きやうと思うて、それが悲しうござんすわいな。必ず〳〵死ぬるとも、私も一緒にお前の手にかけ殺して下さんせえ。忠へそれ程まで思ひつめたるそなたの事、どうして愛想が盡きやうぞ。道々もいふ通り、新口村の忠三郎といふは、百姓でこそあれ、頼もしい男、頼んで一夜逗留して、ハテ梅川も此の忠兵衛も、へ死ぬるとも故郷の土、産みの母の墓所へ一緒に埋もれ、嫁姑の未來の對面させたいと、目もうろ〳〵と泣きければ、梅へそれは嬉しうござんせう。去りながら、私が父さん母さんは、京の六條の珠數屋町、定めし此

間は詮義に逢うて居さんせう。母さんは目まひ持ち、若しもの事はあるまいかと、我身の上より案じられ、今一度せめて京の兩親に、一日逢うて死にたいと、又も涙に咽び入る。〽われもそなたの二親に、聟ぢやと云うて逢ひたいと、人目なければ抱き付き、涙の霰、ばら〳〵と、袖より落つる雨や小雨、富田林の村鴉、せめて一夜の心なく、咎むる聲の高間山、あの葛城の神ならで、晝の通路つゝましく、我から狹き世の中や、竹の内峠岩屋越、野越え山越え里々を、急げば早き故郷の、新口村にぞ着きにける。忠〽此處がこの忠兵衛が生れ在所、向ふに見ゆるは、先刻話した忠三郎の居宅、ヤ、、、、アレ〳〵〳〵、あれへ見ゆるは、これ〳〵この忠兵衛が實の親の孫右衛門様ぢやわいの、此の世の別れお暇乞、せめて餘所ながら拜まうと、遙〴〵と此處まで來た念願が届いたか、エ、有難い〳〵。梅〽モシ〳〵、彼の親子の肩衣が、お前の父さん孫右衛門様かいな。ほんにマア親子は爭はれぬもの、目元なら鼻筋なら、お前

常の女子　素人の女といふ意

木津川　大和の國境近き所を流るゝ山城の大川の名

渡し　木津の渡を私にかけていふ

のべのみつをり　三つに折つた延べ紙のこと

新口村　大和の地

未來の對面　冥途で逢ふこと

目まい持　頭痛持に同じ

によう似た事わいなア。忠へサアそれ程よう似た親と子が、詞さへえゝ交はさぬは、マア何とした此身の因果。へお年もよる足もとも、いかうお弱りなされた。もし、これが今生のお暇乞でござりまする。梅へほんに今がお顔の見初めの見納め、私は嫁の梅川でござんすわいなア。へ夫婦は今をも知れぬ命、百年の御寿命過ぎて後、未來で孝行いたしませう。あなたへ御苦勞かけまするも、皆な私ゆゑ、此梅川ゆゑ。忠へア、コレ〳〵ひよつと人目に懸つては二人が身の上、彼の辻堂に隠れ居て、他所ながら親父様へのお暇乞、梅川おぢや。

【解說】この曲は、安永九年七月、江戸市村座の盆興行の大切淨瑠璃に、大谷友右衛門の孫右衛門、瀨川菊之丞の梅川、松本幸四郎の忠兵衛で上演されたので、出語は富本豐前太夫、齋宮太夫、安和太夫、三味線名見崎德治、同喜惣治であつた。義太夫の『戀飛脚大和往來』新口村を書改めたものである。

涙の霰　涙の烈しく大粒になること

富田林　南河内の地

葛城の神　葛城の一言主神が久米の岩橋を架けるのに晝は貌の醜きを恥ぢて夜のみ出でゝ働いた故事

綟子の肩衣　綟子は麻絲の目をあらく織つた布。肩衣は肩から脊に掛けて着る袖無しの上衣

今生　此の世の意

十二段君が色音（碁盤忠信、又十二段）

へ袖薫る霜夜の床の中〳〵に、結ぶ調は夢ならで、初音ゆかしく宿直守。虫の音も、薄も茅も枯々し、野風身に沁む狭莚に、夜たどうつなる忠信が、鼓の音に誘はれて、心の蝶をうかれ出で、所體つくろふ水鏡、我が姿と白菊の、眞葛ヶ原や庭の面、音に聞きとれし其風情、思ひありげに見えにける。忠信は鼓を止め、忠へコリャ女、其方は何者ぢや。女へエヽ、ハイ、私は、オ、それ〳〵、染井と申す所に、四季折り〳〵の花を手折まして、營みに致します菊と申す女商人で御座りまする。忠へナニ菊といふ女子、われら共菊といふ字が強つい好きさ。女へあの、お前は菊がお好きで御座りまするかえ。忠へサア好きなればこそ中屋敷が菊坂、指添が菊一文字、印籠が菊壽、鼻紙が小菊、酒が菊酒、茶屋が上總屋の菊とぢ、三味線が菊岡、小袖の小紋が重ね菊、何んでもよいことをきく

霜夜　霜の降る寒夜

結ぶ調　鼓の胴にまとうて結んである紐を調の緒と云ふ　それを引き締めたり緩めたりして調子を合はせる

初音ゆかしく　初音の鼓なのでいふ

宿直守　宿直の武士

狭莚　狭い敷物

心の蝶　氣が浮々することをいふ

所體　姿振をいふ

水鏡　水に姿を映し

[illegible]見ること
染井　巣鴨の一部で
江戸時代菊の名所
菊坂　本郷にある地
指添　小さ刀のこと
菊一文字　後鳥羽天皇時代の鍛工備前則宗が鍛ひつくつた名刀
印籠　藥を容れて腰へ提げるもの
菊寿　蒔繪師の名
小菊　小菊判紙の略
菊岡　三味線を作る名匠の名

ぢや〳〵。女〽そんならお前はどうしても、菊と云ふ字がお好きかえ。

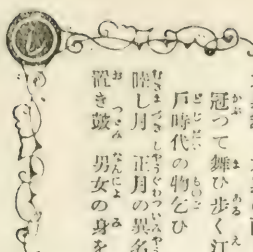
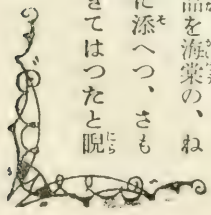
ウタカヽリ〽及ばぬ花の梢さへ、陰は袂にとめもする、露の仰言のたまさかに、見初し頃は編笠の、内ぞゆかしき褒言葉、數ならぬ身を彼樣に、云うておくれた其人に、似たお姿が嬉しうて、お側へ寄るも縁のはし。

忠〽こりや有難い、コリヤどうぢや。〽じたい我等はずんど〳〵、田舎の野暮助、君には初の御見もじ、コリヤ初會から乘せられて、跡で憂目を三津五郎、さうは虎の尾踏む如く、恐いおさんぢやあるわいな。

オヽそれ〳〵、今のは嘘の皮、川柳は水に揉まるゝ、ふくら雀は竹に揉まるゝ、藪鶯は振袖の、娘盛りに揉まれたく、來る程に〳〵、座敷は人に揉まるゝ、茶臼にあらぬ廻り氣は、戀に馴れたるひぞり言。女〽忠信樣を今迄は、堅い(不粋な)お方ぢやと思うたに、粋も粋、大通さんぢや。忠〽イヤもう斯う成つては、武士も刀もサラリと捨てゝしまうて、何と我等と色事に(よい仲に)なつてくれる氣はないか(なつてたもるま

喞言　かこち言
たまさかに　偶々に
野暮助　不粋な人間をいふ
御見もじ　お目にかゝるといふ意
初會　初めて女に逢ふ夜をいふ
三津五郎　見るにかけていふ。忠信に扮する役者
さうは虎　然うは取らぬを虎の尾に云ひかける
虎の尾を踏む　恐は

いか）。女〽そりや有難う御座りまする。其御心ならどうなりと。忠〽そんならとてもの事に盃を致さうか。女〽初めてお目にかゝりました忠信樣、そんなら鳥渡酒事を。忠〽幸ひ爰に銚子土器、此扇をかう開けば蓬萊山。女〽こりやどうも云へぬわいな。忠〽これ此鏡臺の鏡は、則ち鏡餅。女〽此羽織はコレ大黒舞。忠〽サア正月ぢや、正月ぢや。三下り〽うれしさを、重ね土器汲み交はす、屠蘇の機嫌の色見えて、睦じ月の睦言も、夢ばかりとは戀の慾、其手枕の春の夜を、二ツ枕に置き皷、樣が調べの緩めつ締めつ、合締めつ、合緩めつ床の帶、綻ろびかゝる冬の梅。合徳若に御全盛と、手練も榮えましんます、合愛嬌有ける瀨川の君の、男蕩しの仇つきを、誠と思ひさむらひける。幸若なんぞは、だまくふがお好きで、まつちやらこ〳〵、猪牙に乘初め、馬乘初めに、さてもお馬が參るわ〳〵、參るぞ〳〵、それそれ〳〵、中にも仇つきの女馬なんぞは、彼處の隅ではごろり、此處の隅ではごろり、合ごろり〳〵〳〵と、

恐はの譬
恐いおさん　恐い伯父さんといふ意
川柳は水に云々　放下僧の謡の文句
ひぞりごと　拗ることをいふ
色事　夫婦の意
蓬萊山　俗にいふ島臺の事
大黒舞　大黒の面を冠つて舞ひ歩く江戸時代の物乞ひ
睦し月　正月の異名
置き鼓　男女の身を

ごろつく所を此方から、大夫なんぞが、ばつと蹴りや、そりや腹が立つ程に〳〵、隣で悪性を爲足らいで、我よ誑くらかいて、引つかけて、合ちよ〳〵らにしほでか、大きに鐙が違ひましよ。合此方の腹帯の伸びる事は中〳〵に、悪性なお馬は二千疋も、合三千疋も、あれあれあれ百萬疋のお馬の色は、誠に嬉しうさむらひける。參るや馬の數々は、甲斐の黒駒鹿毛糠毛、手綱かいくりしとしと〳〵、轡の音がりんがら〳〵、揃ふ足並さゞなみや、流し落しに反り手綱、鞭に鐙を合はせつゝ、拍子揃へて乘り出す、合さながら雪をさくらかげ。忠へア、草臥れた〳〵。女へオ、さぞお草臥れで御座りませう、おみ足を擦つて上ませう。へと、馴れ馴れしくも側へ寄り、裾を擦すりつ撫子の、葉末に結ぶ露の間も、あらば夫の顔見たや、刀見たやとさま〴〵に、身を換へ品を海棠の、ねぶる忠信喜ぶ女子、傍なる刀にしがみ付き、顔に當て身に添へつ、さも懷し氣に見えけるを、忠信目覺めて心付き、むつくと起きてはつたと睨

めば、ちやつと飛去り、女〽忠信さん、私や吃驚仕たわいな。忠〽そなたより恂りは此忠信、よも〳〵とは思へ共、宗近が名劍に牽かれて爰へ來りしか。女〽エヽ。忠〽マア滅多に傍へ寄るまいぞ。女〽さうおつしやれば私も意地、どうぞお側へ。忠〽イヤ〳〵、男女七才にして席を同じうせず、オヽ幸ひ〳〵、せきといへば此碁盤、とりも直さず吉野川、妹脊にあらぬ男女の隔て。女〽そんならこれが互ひの關、さし向ふたる物好は、名に負ふ碁盤忠信樣。忠〽打ちおける手並の末のいかなれば、女〽取るべき濱も渚なるらん。忠〽さてはそもじも碁がなるか。女〽そんならお前もお好かえ。忠〽碁盤と見れば碁盤なれども、用ふる時は軍の懸け引。女〽色と戀との仲立ちは、此碁に優る物あらじ。忠〽軍の勝負になぞらへて。女〽戀をする身を碁によそへ。忠〽相手になつて。女〽話そかえ。〽源氏の卷や繪合せの、勝負は知らぬ身ながらも、碁をうつせみの故事を、思ひ出だして語るにぞ。そも〳〵圍碁の初りは、昔々

鼓に譬へていふ

冬の梅　室咲をいふ

德若に　以下萬歲の謠ふ唄にもぢらせたもの

瀨川の君　小女郎狐に扮する瀨川菊之丞をいふ

幸若　德若と同じやうに萬歲を舞ふ男

だまくふ　欺される

猪牙　吉原通の猪牙舟の略

馬乘初め　廓通ひの馬の乘初をいふ

仇つき　妖艶の意
太夫　女形を稱へる詞で爰では菊之丞をいふ
悪性　氣の多いこと
しほで　しやうでかといふことを馬具の四方手にかけていふ
鐙　馬具を逢ふ身に洒落ていふ
黒駒　甲斐産の馬で以下鹿毛、糟毛とも馬の種類
夫の額　小狐丸を雄

の其昔、堯王作りて愚かなる、丹朱に教へ給ひしより、唐にての始とかや。扨日の本へ渡りしは、人王四十五代の帝、聖武天皇の御宇かとよ、吉備大臣の歸朝の折柄、碁の賭祿こそ初めなり。碁盤に盛りし目の數は、四方に四季の九十日、合せて三百六十目、これ一年の日の數にて、是を兵書に引くときは、氣行日取の第一なり。白と黒とは夜と晝、二人は陰陽女夫合、抱いてねばまやよい中手、二丁に並ぶ石二ツ、枕ならべて大挂馬、四ツ目殺しは其場の打死、合劫を立てんと渡り合ひ、互に打つたり打たれたり、惚れたおさんは伸びる手に、つい繼ぎ落しに口説れて、へ切つて押へて刎ねかけて、離々たる馬牧連々たる、合空行く雁に譬へしも、假にも欺すは碁の法度、譬はゞ征にかゝる共、唯一目の打方にて、碁盤に石の備へ立、合軍の手段に異ならず、其爭ひに引替て、女子心を碁によそへ、打ち明かしたる事ながら、人目の關に支へられて、同じ浮世のすみの手を、あぢに入れたる片思ひ、戀のだめではないかいな。ま

狐に擬へていふ
宗近　三條の小鍛冶
吉野川　大和の妹山
　脊山の間を流る川
打おける　圍碁を說
　いた古歌
源氏の卷　紫式部が
　著した源氏五十四
　帖
繪合　繪を合はせて
　勝負をする
うつせみ　打つを源
　氏の空蟬の卷に云
　ひかける
賭祿　品物を賭けて

づ一手打、二手打、八重九重もおのづから、といちの里の碁の勝負、〽打つや、〽鍛の、兩人〽とり〴〵に。三下リ〽離すてふ、離れぬ中を他目には、鷺と鴉の羽根打交はし、雪といふ字に筆染めて、白と黑との二た思ひ、これが碁石ぢや有まいか。實にもさうよのさま〴〵に、扨こそ鏡にうつる影を見れば、髑髏を薄に貫きしは、思ひ出でたる小町が一首、秋風の吹くにつけてもあなめ〳〵、小野とはいはじ薄生ひけり、小野とはいはじ我身の上、有やうに物語るまいか。サ、何んと〳〵。〽我恥しき其影を、映し留めたる身の上は、藻をかづぎ、北斗を禮して、人間に交はり結びし我こそは、狐〽大和の國に年を經ぬる、小女郎狐で御座んすわいナ。忠〽オ、扨は小女郎狐で有りしよな。狐〽先年勅を蒙りて、三條小鍛冶宗近が、打たる所の一振は、大和の國に年經たる、其男狐の血潮にて、燒刄をわたし、名付て小狐丸と、今も源氏の重寶なれ共、妾が爲には連添ふ男狐、劍のために殺されし、後に殘りし女狐子狐、飽

勝負を爭ふこと
はま　碁の上げ石
よい中手　よい中を闘碁の術語の中手にかけていふ。以下大桂馬、四つ目殺し、劫、渡り、繼ぎ落し、征、せき、すみ、だめ等同じく闘碁の手をいふ術語
離々たる馬牧　離れ〴〵の牧場の馬のやうに碁石を置く
連々たる　雁の翅を

かぬ別れの尙悲しく、今まで蔭身に附き添へ共、義經公の位に恐れ、近寄ることも叶はずして、近き頃忠信樣の拜領有りし其名劍、今こそ心安かれと、姿を變へて入込みしは、其一振を手に入れんと、思ひしことも情なや、小女郎狐と知られし上は、願ひ叶はぬ此身の因果、お察しなされて下さりませ。忠〽ハテ不憫なることが有樣、聞きつたへし小狐丸の昔語、忠信が拜領せし名劍、おことに與へたき物なれども、源氏の爲には換へがたし。たつて妨げなすならば、一刀の下に命を絶たうか。狐〽サアそれは。忠〽サア〳〵何と。〽一ト間の内より御大將。義〽早まるな忠信、小女郎狐が貞節を感じ、義經が肌身離さぬ初音の鼓に我名を付け、汝が子狐を大和の國源九郎と、末の代迄も傳へよや。狐〽ヘエ、有難き義經公のお志、此上共に蔭身に添ひ、義經公を守護なさん、返す〴〵も嬉しやすア。義〽望み足りぬる上からは、疾く〳〵此場を立歸れ。狐〽人目にかゝるも恥かしの、森へ急がん御大將。義〽早かへれ。

連ねたやうに碁石を並べること

髑髏を薄に貫き　在原業平が奥州八十島に宿つた夜小町の髑髏が歌を詠んだ故事を引く

あなめ〳〵　あなやと感ずる詞

北斗　北斗七星、天の北極に近い所へ出る星

禮して　拜むこと

狐〽おさらば。義〽さらば。狐〽去なうやれ我住む里へ、かへろやれ我住む里へ、かへれども、名は名劍に留まりて、三條小鍛冶が打たりし、小狐丸を今も尚ほ、源氏の守りとなりにける。

【解説】此の曲は、雄狐の血潮で鍛へられた小狐丸の名劍を、我が夫と慕うて、美女に姿を變へて來た小女郎狐が、忠信を色仕掛で欺さうとしたが、却つて見顯はされ、既に身も危くなつたところを、義經の爲めに救はれ、初音の鼓を貰つて古巣へ歸るといふ筋である。初演は、安永九年十一月江戸市村座の顔見世興行一番目『群高松雪旛』の大詰の淨瑠璃として上場されたもので、作者は櫻田治助、重なる役割は、小女郎狐が瀬川菊之丞、忠信が坂東三津五郎、義經が市川門之助、卿の君が中山富三郎、辨慶が市村羽左衛門で、出語の太夫は二代目富本豐前太夫、同齋宮太夫、同安和太夫、三味線は名見崎徳治、同與總治であつた。

大磯　相模の遊里

晝見世　女郎の晝客に出ること

半切　杉原紙を横に半ばに切りたるもの。手紙を書くに用ひる

十二銅　十二文の錢

角兵衛獅子　越後蒲原郡の神社で執行する里神樂の獅子舞が端緒で、角兵衛といふ名工が刻んだ獅子を冠るので其名を冠したの

新曲神樂獅子（神樂獅子）

〽神樂囃して大磯、合大門、合化粧坂女郎さん方の晝見世に、文の半切十二銅、誰が言ひそめて角兵衛獅子、合〽頭にふける鳥の毛も、合厭な客をば振り亂し、好いた蝶々仲もよき、相生連れて道もせを、招いて、合呼んで吳れ竹の、雀の聲や忍ばしく、囁き合うてぞ來りける。〽これやこなたへ御免なさんせ、これは大磯小磯化粧坂、廓を廻はる、獅子舞でござんす。〽お望みならば十二銅、十二神樂の二人連れ、舞ひまうて見せ申すが、一年の惡魔拂ひ、〽女夫揃ひの獅子舞を、舞はせて御覽なさせんかいなア。〽ヤアこりや宜かろ。牡丹の花を眺めて居る處へ、獅子舞とは何うも言へぬ。サア〳〵早う舞つて見せい。所望だ〳〵。合〽扨獅子と申すは、合〳〵、これ西天の一じうにて、彼の石橋の浮橋や、をのこと化して色好み、合妻を慕うて峰を越え、逢うて戻るが洞返り、

合花に戯れ、合岩に隠くれ、合狂ひくる〳〵枝にころ〳〵、風にひらひら、合おのが毛衣身を洗ふ、瀧の絲もて繋ぎつながれ、脊に子獅子を、合乘せて渡るぞ文珠の智恵の輪、合抜けるか潜るか、習うたら戻らう、笛にてひよつくり刎ね返る、一つも抜け目は内證中の間、下から上まで、どんどゝ囃せや鼓太鼓の、合音もよし原、牡丹の花房、匂ひ滿ち〳〵、花魁おいらが、姿競べや仇競べ、實に獅子王の意氣張りに、靡かぬ客も仲の町、禿新造引連れて、紅ゐまとふ毛氈の、獅子の座にこそ直りけれ。

〽イヤ何うも言へぬ、サア〳〵茶でも呑んで行きやれ、〳〵。ヤ、何うか見たやうな振袖、たしか化粧坂の少將ではないか。〽ほんにお前は強い見通し。私が今日こゝへ來たのは、三日三夜揚詰のお客があつて、身まゝに主と連れ立つて、來たのぢやわいな。お前樣は何方樣ぢやえ。〽なにおれか。忝くも當時一﨟別當、工藤左衛門祐經が近臣、近江八幡之介だわ。殊にこの八幡之介は、大福神だぞ。その曾我のやうな貧乏

である。
頭　獅子頭
好た蝶　五郎が紋所
れ生連　相婦のやうに繋がつての意
西天　西天竺の意か
一じう　一獸の意か
石橋　宋の衡州天台山にある石橋
洞返り　獅子の舞の手
文珠の智恵の輪　文珠菩薩の知恵を智恵の輪の遊戯にかけていふ

内證中の間　女郎屋主人の居る部屋
獅子王　獅子を花魁になぞらへて云ふ
振袖　新造のこと
强い見通し　よく知つて居るとの意
揚詰　玉を付けて女を買切て置くこと
主　五郎時致をいふ
大盡舞　元祿頃から吉原の遊里で行はれたもので二朱判吉兵衛の作と云ひ傳ふ

神とは違ふ、ア、ちと福神の仲間へ入れてやりたい。コレ少將、そもじは入れてやる。先づ斯う見た所が、さし詰そちは辨財天女、此の八幡之介は大福神、コレ大盡舞を見さいな。〽名も、〽傾城伽羅うんそはか、我等は古風なまん丸頭巾で、出かけやす。一に俵や踏んまへて、合二上り彈くは、二丁目の、丁子車に廻されて、三枚肩で押せたり。既に其夜の大持ては、福壽海の盃に、圓滿無量福地の酒、七福合郎生の手を出だし、紫摩黄金の肌と撫でれば、合後ろ向きの地藏でも、忽ち、合文箱地藏と和らぎて、通ふ神の封じ目と、ひつたり糊付百福百壽の屛風山。起請書いたり入れぼくろ、扨指切りの始りは、かたばみ屋のかた岡が、高安彥太に贈らるゝ。また髮切の始りは、九郎助稻荷につまゝれて、合此樣な扮裝になられた。元より福德自在の身なれば、合文福茶釜に毛が生えた、合生えたが大事か云うてたも、なう吉祥天女と寄り添うて、抱いて巳待と戲るゝ。〽エ、見つともない、置きやがれ。此時致は福の神

は嫌ひだ。おれが信ずる福徳は。〽その福徳は。〽それよ、〽寶の山に入ればとて、何か益なし。名を萬天に揚げるこそ、人の福とはいふべけれ。我れ竹馬の頃よりも、小弓に小矢と取添へて、障子襖の破れ次第、疊の藁的目當ては工藤。〽何工藤とは。〽サア工藤これ。〽くどう言ふのがお前の癖か。なんぼそのよにせかしやんしても、逢ふに逢はれぬ仇仲を、どうがな首尾を拵へて、合逢はしましたら合恨みの丈けを、言うて見たなら氣も解け、結ぶ緣者の末かけて、合長いこちらも女夫事、樂しみにする合憂き勤、年の明くのを必ずエ、合間違へまいと言交はし、無理約束に否やとも言はれず、つい合斯う成つた深見草。ぬしの心は末なし川の薄氷、さうとは知れど私が胸は、那智のお山の苔清水、洩らさぬ二人が仲ぢやもの。誓紙書かずと指切らずと、何の互ひに心がすまぬ、明かし合ふのが誠と誠、こんな女夫が何處にも有ろか、合忘れたまふな忘るなと、言はしやんしたを覺えがあらう。あの白々しい顏をして、

名も云々　南無何々といふ經文に擬した語呂

まん丸頭巾　大黑の冠る樣な巾着頭巾

丁字車　華車の意で遣手をいふ

三枚肩　三人で擔ぐ急ぎの駕籠

福壽海の盃　福壽海といふ字の一字宛書かれてある三つ組盃

福地の酒　江戸で名代の酒肆で賣つた

え丶憎らしい、さりとは難面い心やと、かぶり振るこそわりなけれ。傍で見て居る八幡之介、自體そさまの稚兒の舞、覺え有りやと取付けば、へ放せ。へ留めた。へ放せ。へ留めた／＼留めたわいなア。ウタへ留めて見たさよ、へ時雨降る／＼霰降る、振りの袖、振袖、合いつそ年増が羨ましうて、お齒黑獅子の、合かね言や。待つたり／＼謝つた。合張りが強よても君にはもろい、待つたり／＼謝つた。合色と間夫とは何方に惚れる、色に惚れるが浮氣な色で、合しば／＼これが樂しみに、舞つたり舞つたり謝つた。嘘と手管の二た瀨川、三人茂みの三度の松、鐘掛け松、鞍かけ松の枝を垂れ、葉を重ねたる年々の、いく代の春をや數ふらん。

【解說】この曲は、寬政五年江戸市村座の二月狂言『貢曾我富士着綿』の大切に、書き卸ろした淨瑠璃で、曾我五郎時致と手越の少將が獅子舞の女夫に扮して大磯の廓を廻り、工藤祐經の穴を行つた近江八幡之介に絡んで大盡

酒にかけていふ

紫摩黃金の肌　紫摩は上等の精金で肌の美しいに譬へる

屛風山　部屋の屛風

入れぼくろ　互ひの腕に名を入墨することをいふ

指切　小指を切つて心の變らぬを誓ふことをいふ

髮切　髮の毛を一部切つて誓を立てる

九郎助稻荷　吉原五十間にある稻荷

巳待　巳の日の夜に行ふ辨財天の祭
深見草　牡丹の異名
那智のお山　紀州那智山をいふ
お歯黒獅子　獅子の歯の黒いのを年増が漿鐵を付けたのに譬へていふ
かね言　約束の意

舞を踊るといふ古風な筋である。配役は坂東彦三郎の時致、松本米三郎の少将、大谷徳次の近江八幡之介。節付は鳥羽屋里長で、出演の太夫は、二代目富本豊前太夫、同斎宮太夫、同安和太夫、三味線は名見崎徳治と作曲者の里長であつた。

一度清容云々　美しい姿は何時までも續かない。必ず衰ふる時が來るといふ意を叙べたもの
八文字　遊女が歩く脚の踏み方
松の位　太夫の位のある女郎をいふ
柳の姿　柔しい物腰
梅が香とめし後朝　移り香のまゝ別れる朝の情景
奈落　地獄の底
閻浮　閻浮提の略で

新曲高尾懺悔（高尾懺悔）

〽一度清容を見てそもんにかなひ、又或時は聲を聞き、哀憐の心いと深し。ぞつと素顔の流し目も、馴れし廓の八文字、ナゲブシ　松の位に柳の姿、梅が香とめし後朝も、まだ覺めやらぬ暖め鳥、雪の朝の白無垢は、消ゆる思ひと謎かけし、心のたけをいふならく、奈落の底に入る時は、閻浮の昔なつかしく、これ迄顯はれさむらふなり。高〽申し〳〵、御出家樣。道〽ハテ合點の行かぬ、申し〳〵、御出家樣と呼んだは誰ぢや。高〽こゝぢやわいなア。道〽ヤ、ヤ、そなたは三浦の高尾ぢやないか。高〽アイ高尾ぢやわいなア。道〽南無阿彌陀佛、〳〵、〳〵、〳〵。高〽六道四生の巷に迷ひ、浮かみもならぬ此身の上、頼兼樣がなつかしいわいなア。道〽不愍や〳〵、喜怒哀樂は人情の常、勤めのうちの憂さ艱さを、何と話して聞かせまいか。高〽サア妾もお話し申したく、是れ

南贍部州といふ處　娑婆世界の意
三浦　三浦屋の略
六道四生の巷　六道は業果として必然到るべき六種の境界。即ち天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄で、四生とは卵生、胎生、濕生、化生の生類をいふ。冥闇の巷の意
川竹　廓の生活
憂き節繁き　憂き事

まで參りましたわいなア。道へサ其の話は。高へサアそれは。三下りへ差かしながら川竹の、憂き節繁き中々に、年が明いての樂しみは、やがておの字の名を删いで、二日醉ひせぬ身とならば、素足も野暮な足袋となり、抓めるを常の此指に、絲針持つて物縫ひ習ひ、合肌着仕立て着せて見て、合殿御のたけに眞實が、ア、屆かばほんに嬉しかろ。そして斯うして何うしてと、儘になる身か何ぞの樣に、思ひ暮せし其中に、賴兼樣とおほけなき、二世の緣を結びしが、ア、仇な契りか情なや、別れの淵の泡沫も、あはれ果敢なき身の上と、涙は袖に槇の葉の、露重げなる風情なり。道へ南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、とても事に懺悔には、重罪も滅すると云へば、ありし廓の事共を、愚僧に話しめされぬか。高へさなきだに女は五障三從の重き罪、夫れさへあるに小夜衣、我夫ならぬ重ね夫、僞り飾りし身の罪を、そんなら懺悔致しませうか。道へ罪障消滅の爲に、詳しう咄して聞かせ候へ、南無阿彌陀佛〳〵。へ懺悔に罪も消

の多い身を竹の節にかけていふ
おの字　おの字を冠ける素人の女になる意
素足も野暮な　女郎は素足で粋であるが素人になると足袋を穿くので野暮に見えるのをいふ
おほけたき　勿體ないの意
二世の縁　夫婦約束、
仇た契　はかない契
淵の泡沫　大川で殺

えぬべし、懺悔に罪も消えなんと、露の此身を草枕、夜毎々々に變り行く、昨日の逢瀬今日の淵、濡れて寢る夜を酒事に、笑うて、合艱き日もあれば、泣いて嬉しき夜半もあり、蚊帳より外に紙一重、任せぬ身とて胸の苦を、云ふに云はれずぐる〳〵卷きの、それ其文の數、屆いて明日の仲の町、客を松虫、秋津虫、主を待つ夜は人こそ知らね、夜着を枕に鈴虫なれや、われも虫にはあらねども、殿御戀ひしと草葉にすだく、あはれとも不愍とも、云ふべき人は面影も、見えず見えずみ箒木の、〽無殘や高尾は世の人の、思ひをかけし報ひにて、罪障の雲立ち蔽ひ、めい〳〵もう〳〵らう〳〵たり。修羅の大鼓をうつゝなく、早時來ぬと夕まぐれ、こは口惜しやあさましやと立退けば、また行く先に炎々と、合焰に苦しむ身の業苦、獄卒惡鬼の笞に打たれ、山に登れば劍に貫き、合谷に沈めば紅蓮の氷に、白無垢かへつて唐紅、合血は瀧つ瀬や酒の浪、嘘の涙は焦熱地獄、仇に誓ひし誓紙の烏、鐵の嘴を鳴らし、兩眼目がけ

されたのでいふ
五障三從　五障とは梵天王にも帝釋にも魔王にも、轉輪王にも、佛にも爲れぬ、女の五つの障り。三從とは家に在つては父兄に、嫁して夫に、老いて子に從ふ女の道をいふ
紫雲靉靆　觀音出現の景容
紅葉の塚　西方寺に在る高尾の塚

て飛びかゝる。合追へど拂へど立ち去らず、震ひわなゝきたぢ〳〵、追ひ巡りてくる〳〵、苦しき思ひに魂きはる、道哲此處ぞと念珠を揉み、合南無廣大觀世音、おんあみりきや、ていぜいきやらうんそはかと、朝日の彌陀を唱ふれば、野分夜嵐目前に、忽ち紫雲靉靆し、花降りかゝる法の庭、紅葉の塚と夕映も、代々に其名や照らすらん。

【解說】此の曲は、天明二年八月江戸中村座の二番目淨瑠璃に、櫻田治助が書卸した新曲である。五代目市川團十郎の土手の道哲、三代目瀬川菊之丞の高尾斷魂で、頼兼に大川の三叉で殺された高尾の亡靈が、道哲の鐘の音に牽かれて顯はれ、懺悔をするといふ筋。出語りは二代目富本豐前太夫、同豬宮太夫、同豐志太夫、三味線名見崎德治、同仙調であつた。

百夜菊色の世中（檜垣又關寺）

平家 カヽリ〽五蘊假に形を成し（形成し）閻浮にかへる（通ふ）關寺や、人も咎めぬ老の身の、戀に迷ひし魂呼ばひ、ウタイ〽あしたに一鉢を得ざれども、求むるに能はず、色にかまけて此年月を、戀し〳〵と殿御を戀ひて、終に一夜の契りさへ、ゆるさぬ仲の情なや、ウタイ〽つひには老の鶯の、古枝にかへる、ウタイ〽道もなきとよ、我れと我身を白川の水はぐむ、〽姿恥かし影ぞなつかし、戀せし人を寢取られて、枕一つの物憂さに、弱ろぼひながら來りしぞや。恨めしや、恨みながらもいとしさは、なほ深草の花薄、露も起居に忘られず、これまで參り候ふぞや。

檜垣〽百年に一と年足らぬ九十九髮、我を戀ふらし面影に立つ。小町〽百年に一年たらぬ九十九髮。少將〽我を戀ふらし俤にたつ。ハテ合點のゆかぬ、此歌を口ずさみしは何者ぢや、ヤ、それに佇み在するは、それが

五蘊假に形を成し　五蘊は色、受、想、行、識の五つで美麗の色も我身の死と共に滅するを色空、身心に受納したものをも死と共に滅するを受空、戀慕恩愛も死と共に滅するを想空、人の成した行も自然に滅するを行空妄想妄念が起つても遂に滅するを識空といつて皆形が

殘らないといふ意
閻浮　この世の意
關寺　近江逢阪山の東にある廢寺
あしたに一鉢　鉢は僧の食物を乞ひ歩く器。乞食になつて朝は食物一つ得ないが、それを求むることが出來ないの意
白川の水はぐむ　後選集の檜垣の歌を引いたので落魄して老衰したといふ

し弱冠の砌、先帝仁明天皇御惱平癒の祈願の爲め、兄興風殿に附き參らせ、近江の國多賀明神へ參詣なす、頃は嘉祥三年文月七日、いまだ殘れる暑さ強く、路次の砂をも焙するばかり、その暑を避けんが爲め、所は江州關寺の門前にて、水やあると乞ひしかば、とある內より老女立ち出で、我に水を與へしその時の老女、最早や年經て十年あまり、よもやとは思へ共、生死のほど（存亡）計り難し、それかあらぬか身の上を、この興則に明かし召されい。檜〽そんなら夫をお忘れなう。少〽いかにも少將（興則）覺えて居る。檜〽ア、嬉しや〳〵、夫を覺えて居さしやりますからは、何しに身の上を包みませう、その時關の淸水を汲んで參らせし、檜垣の老女は、妾ぢやわいなう。少〽オ、それ〳〵思ひ出だすも一と昔、その時の檜垣の老女であつたかいなう。檜〽まだ其時はあなた樣は、侍從之助興則さまとて、モ可愛らしいお稚兒さま。少〽今は官位も四位の少將。檜〽あの藤原の興則さま。少〽そもじは今に年經れど、

意。(解說參照)白川は肥後國阿蘇より流るゝ川
九十九髪　白髪のこと。百より一を取ると白と云ふ字になる
弱冠　廿歳。元服をする年である
文月　舊暦七月
雲井の御方　宮中に奉仕する身分の高い人を指していふ
佛三昧　念佛を唱へて暮らすこと

檜〽其折からの檜垣の老女。少〽不思議にめぐり逢坂の。檜〽關の清水を掬びしも、少〽深い縁しで、兩人〽あつたよなう。少〽時に老女、尋ねたいは、アノ江州の關寺から、遙る〳〵遠ほい此廓へ、何ういふ事でござつたぞ、その譯は。檜〽サアそれは。少〽何うぢや。〽問はれて言ふも恥かしや、その文月に逢坂の、關の清水に影とめし、合月の雲井の御方を、ふつと見初めて戀ひ焦れ、此年月の物思ひ、翌をも知らぬ老の身の、佛三昧取り置いて、結ぶの神に手を合はせ、後生の爲めの念佛も、珠數にはあらで愚痴を繰り、せめて一と夜さ打ちとけて、心あかして語らうならば、それが未來の土産ぞや、情ぢや慈悲ぢや善根ぢや、我が戀叶へてたまはれと、水に皺よる涙川、白髪の雪や解けぬらん。少〽數ならぬ身の此少將、殊に當時は世を忍ぶ身の上、あるに甲斐なき某を、さまで執心との志は嬉しけれど、年にも應ぜぬ老女が願ひ、假初に詞を交はし、手に手を取りし此首尾を、初音の今日の思ひ出に、サア〳〵

早う關寺へ歸つて下されい。あれ〳〵、あれは慥か越しかたにて聞き馴れし、〽淺草寺の鐘の聲、八聲も告ぐる山かづら、あさまになれば恥かしの、森の木隱れよもあらじ。檜〽いや〳〵何のやうにあらう共、少將様のお傍には、此檜垣の老女が侍らにやならぬ。そなたは、何方へなりと行つて下されい。その古へは我とても、逢坂山の關寺へ、難くも人に捨てられしが、今又人を捨つるも戀、せめては老女が形見を遣らう。コレ〳〵これは、わしが手馴れし杖と笠、少將様ぢやと思うて、大事にかけて持つて行きや。小町〽こりやまたあんまりぢやわいな、身は關寺にありながら、年甲斐もなき横戀慕、言ひ交はした自らを、戀の山路へ捨つるのか。檜〽いかにも山は老女が住家。小〽昔にかへる秋もなく、少〽月の友人團欒して、檜〽今宵はそなたも獨寢しや。小〽女夫の中を更科や、檜〽時に取つての姥捨山、行かぬか〳〵行きをらぬか。二上り〽盛り老けたる女郎花、露の袂をしをたれて、合晴れて逢はれぬ因果同士、いつ

未來の土産　冥途への土産といふ意
善根　功德に同じ
執心　戀ひ慕ふこと
年にも應せぬ　齡にも似合ないの意
初音の今日　初めに老鶯に譬へた老女なので初めての首尾を初音に擬ふ
八聲　曉方の鷄の聲
あさま　淺ましくなること
姥捨山　信濃國更科郡に在る。古今集

に「我が心なぐさめかねつ更科や、姥捨山に照る月を見て」

言ひ交はした　夫婦の契りを交はしたのをいふ

堅い石山　堅い心を近江の石山にかけて云ふ

今宵の雲　檜垣の老女を雲に比ていふ

憂き人　戀を拒絶した少將を云ふ

置き手拭　髪の上に

か雲井に澄む月の、都の昔慕はしく、そなたの空とながめしか。ウタヒ〽然るに月の名所、いづくはあれど更科や、〽わけて添寢の明石潟、心も須磨の恨みさへ、堅い石山打解けて、曇らぬ仲と誓ひしを、今宵の雲に隔てられ、又も涙の雨催ひ、笠傾けて、伏し沈む。少〽コレ小町御前、思ひもよらず胸をいためて苦しうて、何うもならぬ、水一つたも。小〽あいあい。檜〽やこれ〳〵、我身には汲まさぬ〳〵、今も昔の影とめし、關の清水を憂き人に、いざ〳〵汲んで參らせう。三下リ〽置き手拭に前垂がけ、小桶かゝへてしやなら〳〵と、腰は柳か老曾の森か、箒木が、ありとは三重の抱へ帶、底澄む水を汲まうよ〳〵。ウタヒ むかふ釣瓶の水鏡〽なう淺ましや我と我が、身を苦しむる呵責の罪、水は忽ち炎となり、猛火の釣瓶に熱鐵の、桶もさながら三ツ瀬川、冥土の責めを眼のあたり、顫ひわなゝき、くる〳〵くる〳〵、あら堪へ難やと身を悶え、かつぱと伏すと見えけるが、此の苦しみも誰故ぞや、思ひも深き深草の、そ

手拭を二つ折にして載せるをいふ

老曾の森　近江の地名を老にかける

箒木が　新古今集に「園原や伏屋に生ふる箒木の、有りとは見えで逢はぬ君かな」

熱鐵の柤　地獄の苦役を形容していふ

三つ瀬河　冥途にある川の名を苦しみを見つに言かける

仇人　薄情な男の事

の仇人を戀ひ焦がれ、思ひを遂げぬ執着心、きづなに繋がれ纏はれて、刄にかゝりし亡骸の、魂魄是れまで來りしぞや。檜〽恨めしやなア、おことを深く思ひ初め、こゝや彼處とさまよふうち、立烏帽子とやらんが、邪慳の刄にかゝりしも、これ皆汝が故なるぞや、小野の小町とも添はさぬ〳〵、ともに奈落へ連れて行き、思ひ知らせん思ひ知れ。〽思ひは山のかせぎにて、招けど更に留まるまじ、さらば煩惱の犬となつて、七重の鎖は切れる共、未來永々生々世々、附まとひ行く玉葛、梢を凌ぐ　合　木枯しや、雨か木の葉か、ばら〳〵〳〵、合　さら〳〵さつと戀風山風、はやち風、昔を今に吹き返す、小野照崎や小町塚、江戸の名所と榮えける。

【解説】　此の曲は、後撰集雜の部に「筑紫白河といふ處に住み侍りける大貮藤原興範朝臣の（姥の家の前を）まかり渡るついでに、水たべんとて（姥の家に）立ち寄りて乞ひ侍りければ、水を持ち出でゝ詠み侍ける。　檜垣の嫗、年經れば我黑髮も白川のみづはぐむまで老いにけるかな」とあるのや、大和

物語の傳說などを本にして、檜垣を關寺の老女となし、小町少將の交情を嫉妬のあまりに亡靈となつて顯はれ、過ぎし世の戀を打ち明けて怨みを叙べるといふ筋に作り改めたもので、安永五年十一月、江戸市村座の顏見世狂言に市川團十郎の檜垣、瀨川菊之丞の小町、市川八百藏の少將といふ役割で、出語りは富本豊志太夫、同伊津喜太夫、同豊太夫、三味線名見崎德治、宮崎秀五郎で上演された淨瑠璃である。

執着心　戀に執着の深い心をいふ
きづな　斷つに忍びぬ愛情
奈落　地獄の底
煩惱の犬　戀に惱むこと
玉蔓　蔓草の絡らむ事を執着心に譬へていふ
はやち風　速手風のこと
小野照崎　下谷坂本に在る小野篁を祀つた小野照崎神社

全盛操花車（木やり、又花車）

〽さても見事え、合秋の錦の派手姿、今を盛りの花車、合曳けや先綱よい中の綱、色にや手頭の勢い肌。文七 カヽリ〽十七八や十六の、獅子の、木遣りに引換へて、三下り〽ヤア締めろやれ、よいさよい、これはのサ、よいさよい、これはのサ、よいやナ。〽よい〳〵、ヤレわつさりと〆め掛け、やれこれ、これはなこいへをしよ、と云ふちやアなんぐりかけ、何んでも此方のかた〳〵、やんれ打て〳〵、打つたるものには何々。〽皷、〽ヤレ太鼓に羯鼓に手拍子が、恭双六が、おん百姓、うしろばた田畑ナ、與三郎がお米搗杵ナ、碓、骨牌にや、なんりやうりんがこつくいか、近江の三味線舎人のぶちがナ鹿の角、しよこ〳〵打つのがけんぴき、またも打つのがナ鍛冶屋か。〽ヤレてつこの衆。〽コレちん〳〵からりが槌の音、打つたる狸の腹皷、正　月が節分の豆とてナ、ぶり〳〵にはかき

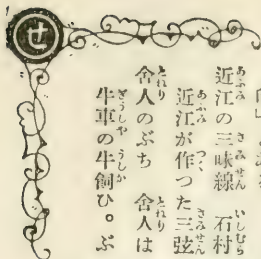
秋の錦　秋の野山の錦の様に美しい姿

花車　祭禮に曳き出す山車のこと

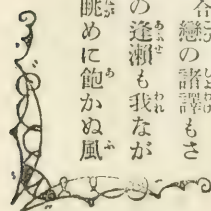
先綱　綱の先きを引つ張る人をいふ

中の綱　綱の中程を持つて曳く人達

勢ひ肌　江戸つ子の勢ひのいい形容。勇み肌に同じ

獅子の木遣　十六を受けて、四四を獅子にかける。獅子の木遣は男だが、

こゝでは若い藝者の勢ひ姿と云ふ意
うしろばた田畑『松の葉』に載せた木やり唄には「むしろ機に田畑」とある
なんりやうりんがこつくいか『松の葉』には「常ぜんが極印」とある
近江の三味線　石村近江が作つた三弦
舍人のぶち　舍人は牛車の牛飼ひ。ぶ

だま七種。〽ヤレ何故〳〵、〽押し寄せ、〽搔き寄せ、ほつとり〳〵叩いたナ、憎ちや打ちやせぬ、可愛しけりやこそ、お尻を些つくり叩いた。どつこいやれこれ、手が外れたか、堪るがもんではないによ、よい〳〵よいやな。〽よい〳〵よいやな。〽そよが締めかけ中綱ア。〽ゑんやゑんや、これはあれさのえ。〽ゑゝやりよう。　合上るり　初雁の連れて來つれて染めて濃き、合千草の野邊の花道を、浮きに浮かれて勇み來る。

クドキ〽手活の花を床の山、梅に鶯待たせて置いて、合さゝに一夜の仇心。〽松に小藤もうら紫の、誰にひぞりしかほよ鳥。合〽いつか紅葉の紅うつろひて、果敢なき戀は朝顏の、〽其日暮らしの女夫仲、粋な水仙室に寢て、椿と交はす手枕は、可愛らしいぢやないかいな。　二上り〽四季の眺めとなる花にさへ、ぢつと浮氣な八重一重、合戀の諸譯もさま〴〵に、あるが中にも仲の町、〽廓の櫻根曳して、戀の逢瀨も我ながら、廻り來る〳〵くる〳〵と、合まつに嬉しき廓の花、眺めに飽かぬ風

情なり。

【解説】此の曲は、大江戸の祭禮に花山車を曳く光景を描いた、勢ひのいゝ淨瑠璃で、文化元年江戸市村座の九月興行の大切淨瑠璃として並木五瓶が書卸し、二代目富本豐前太夫、同大和太夫、同和泉太夫、三味線名見崎喜惣治、同市十郎の出語りで上演されたものである。花道から舞臺にかゝる間に謠つた木遣りの件が眼目となつてゐるので、曲名を略稱して『木遣り』で通つてゐるが、頗る粋な節廻しが大江戸の昔を偲ばしめる。同じ曲名で常磐津にもあるが、これは櫻田治助の作で、本曲とは全然別趣のものである。

ちは鞣でゐる
けんぴき　痃癖のこと で按摩をいふ
てつこの衆　手古舞衆の略
ぶり〳〵　槌の如き形をした玩具
かきだま　正月玩ぶ毬杖の玉
七種　七草を打ち囃す音
仇心　浮氣な心
ひぞり　拗ねること
かほよ鳥　美しい鳥
戀の諸譯　戀の種々

新内全集

一の谷嫩軍記（一の谷）

組打の段

御座船　安德天皇の乘御の船
兵船　兵士の乘た船
延び給ふ　落ち延び給ふの略
須磨　攝津の海濱
後方は一の谷
打物　太刀のこと
蝶の羽がへし　打ち合ふ形容
もろ鐙　双方鐙をふんばること
群千鳥　千鳥が群を作つて飛ぶこと
虛々實々　互ひに

〽さる程に平家の一門、皆々船に打乘れば、御座船も兵船も、遙かに汀を延び給ふ。無官の太夫敦盛は、道にて敵を見失ひ、御座船に馳せ着きて、父經盛に身の上を告げ知らすことありと、須磨の磯邊へ出でられしが、船一艘もあらざれば、詮方浪に駒を乘入れ、沖の方へぞ打たせ給ふかゝりける所へ後方より、おゝい／＼と聲をかけ、駒を早めて追かけ來たり、やアそれへ打たせ給ふは、平家の大將軍と見奉る、まさなうも敵に後方を見せ給ふか、引返して勝負あれ。詞〽かく申すそれがしは、武藏の國の住人、熊谷の次郎直實、見參せん、返させ給へ。〽と、扇を上げてさし招き、暫し／＼と呼はつたり。敵に聲を懸けられて、何か猶豫

秘術を盡し、敵の實を避け虛に乘じて戰ふこと

しをらし　殊勝な

御運極まる　運が盡きたことをいふ

今生　この世

思ひ置くこと　思ひ遺すことに同じ

木石ならぬ　人間の情のあること

勝軍　源氏方が勝つたのでいふ

武者所　源氏の侍　平山武者所季重

のあるべきぞ。敦盛駒を引返せば、熊谷も進み寄り、互ひに打物抜きかざし、朝日に輝く劍の稻妻、駈け寄せ〳〵、丁々々、蝶の羽がへし、もろ鐙、駒の足並かつし〳〵、かしこは須磨の浦風に、鎧の袖はひら〳〵ひら、群れゐる千鳥群千鳥、むら〳〵パツと引く潮に、寄せては返り、返りては、また打ちかくる虛々實々、勝負も果てしあらざれば、コハしをらしと熊谷も、太刀投げ棄てゝ駒を寄せ、馬上ながらむんづと組み、エイヤ〳〵の聲のうち、互ひに鐙を踏み外し、兩馬が間へどうと落つ。すはやと見る間に熊谷は、敦盛を取つて押へ、詞〽かく御運極まる上は、御名を名乘り、直實が功名ほまれを現はさせ給へ。また今生に何事にても、思ひ殘す御事あらば、必ず達し參らせん、仰せ置かれ候へ。〽と懇ろに申すにぞ、敦盛御聲爽かに、詞〽ホ、ウ優しき心ざし敵ながら天晴勇士。かく情けある武士の手に懸り死せんこと、生前の面目。〽戰場に赴くより、家を忘れ、身を忘れ、かねて亡き身と、詞〽知るゆゑに、思

二心　源氏でありながら平家に心を寄せるといふ意

下司下郎　賤しい者

西に向いて　阿彌陀如來のゐます西方淨土

彌陀の利劍　佛の當てる劍

心に唱名　心の裡に南無阿彌陀佛を唱へること

玉のやうなる　綺麗な容顏の譬

日もくれ　日がくら

ひ置くこと更になし。〽去りながら忘れ難きは父母の御恩、われ討たれしと聞き給はゞ、さぞ御嘆き思ひやる、せめて心を慰むため、討たれし跡にて我死骸、必らず父へ送り給はれかし。詞〽われこそ參議經盛が末子、無官の太夫敦盛。〽と、名乘り給ひし痛はしさ。木石ならぬ熊谷も見る目泪に暮れけるが、何思ひけん引起し、鎧の塵を打拂ひ〳〵、詞〽この君一人助けしとて、勝軍に負けもせまじ、折ふし他に人も無し、一先づこゝを落ち給へ、さゝ早う〳〵。〽と、言ひ棄てゝ、立別れんとする所へ、後の山より武者所あまたの軍兵、詞〽ヤア〳〵熊谷、平家方の大將を組み敷きながら助けるは、二心に紛れなし、彼奴め共に逃すな。〽と、聲々に罵るにぞ、熊谷はハッとばかり、如何はせんと默念たり。敦盛卿しとやかに、詞〽とても逃れぬ平家の運命、こゝを助かり行先きにて、下司下郎の手にかゝり、死恥を見せんより、早く御身が手にかけて、人の疑ひ晴らされよ。〽と、西に向ひて手を合せ、御目を閉ぢて待

むこと
心消え　心がぼうと
　となること
薄手　かすり疵
惡人の友　善人は敵
　たりとも惡人の友
　には優ると云ふの
　意。謠曲「敦盛」
　より出づ
生害　自殺
順緣逆緣共に菩提
　老いたるものが若
　い者に先だちて死
　ぬるも又若いもの
　が老いたる者に先

ち給へば、痛はしながら熊谷は、御後に立廻り、彌陀の利劍と心に唱名振上げは上げながら、玉のやうなる御粧ひ、情けなや無殘やと、胸も張裂く氣怯れに、太刀振上げし手も弱り、思ひに掻きくれ打ちかねて、歎きに時も移るにぞ、詞〽ア、怯れしか熊谷、早々首を討たれよ。〽と、捻ぢ向き給ふ御顔を、見るに目もくれ心消え、詞〽伜小次郎直家と申す者、丁度君の年格恰、今朝軍の魁けして、薄手少々負ひたるゆゑ、陣屋に殘し置たるさへ、心にかゝるは親子の仲、それを思へば今こゝで討ち奉らば、さぞや御父經盛卿の、嘆きを思ひ過ぐされて、〽と、さしもに猛き武士も、そゞろ涙に暮れゐたる。詞〽ア、愚かや直實、惡人の友を棄て、善人の敵を招けとはこのこと、早や首討ちて亡き跡の、回向を頼む、さもなくば生害せん。〽と、すゝめられ、詞〽ア、是非もなし。〽と、突立ち上り、順緣逆緣共に菩提、詞〽未來は必らず一蓮托生、南無阿彌陀佛々々。〽首は前にぞ落ちにける。人の見る目も恥かしと、御

だつて死ぬのも、共に佛果を得ることが出來るとの意

一蓮托生　死んだら共に一つの蓮の臺に乘ると云ふ意

絶え入りし氣　死んだのと同じ樣な氣持を云ふ

宵の管絃の笛　宵に平家の陣中で管絃を催し、敦盛が横笛を吹奏したことをいふ

知死期　かねて定ま

首をかき抱き、曇りし聲を張上げて、詞〽平の方にかくれなき、無官の太夫敦盛を、熊谷の次郎直實討ち取つたり。〽と、呼はるにぞ、磯に伏したる玉織姫、絶え入りし氣も一筋に、夫を慕ふ念力の、耳に入りしかむつくと起き、詞〽なう暫し待つてたべ。敦盛樣を討つたとは、如何なる人か。なう恨めしや。せめて名殘りに御顏を、一目見せて。〽と、言ふ聲も、深手に弱る息づかひ、見るより熊谷御首携さへ歩み寄り、詞〽敦盛卿を慕ひ給ふは如何なる人。〽と、尋ぬれば、臨終の苦しき聲音にて、詞〽われこそは敦盛の妻と定まる玉織姫、御首は何處に。エヽもう目が見えぬ。〽と、撫で廻せば、詞〽ウムなに、お目が見えぬとかや。いとしや／＼、御首はコレこゝに／＼。〽と、手に渡せば、わつと泣く／＼しがみつき、膝に載せ抱きしめて、消え入り絶え入り嘆きしが、なうこれ敦盛樣、果敢ない姿になり給ふ、陣屋を出でさせ給ひしより、御あと慕ひ方々と、尋ぬるうちに源氏の武士、平山の武者所、われを見付

る死滅の時
蕾の花　若い身の人達を形容する詞
都の春より知らぬ身　都の春の美しさより外に知らない苦勞の無い人々だといふ意
天さかる　鄙の枕詞
なみ／＼ならぬ人々　浪を並にかけて貴族の公達や姬君をいふ
母衣　鎧の背後に負うて矢を防ぐ幌布

けて無體の戀慕、欺し討たんも女の業、この如く手にかゝり、二人が二人で悲しい最後、せめて別れに御顔が、見て死にたいと思へども、深手に心が引入つて、目さへ見えぬが悲しやと、又御首を撫でさすり、宵の管絃の笛の時、後にとありしお言葉が、今生の形見かや。この世の緣こそ薄くとも、來世では末長う、添ひ遂げてたべわが夫と、顏に當て、身に添へて、思ひの限り聲限り、泣く音は須磨の浦千鳥、涙に浸す袖の海引く潮時と引く息の、知死期と見えて絕え果てたり。熊谷は茫然と、どちらを見ても蕾の花、都の春より知らぬ身の、今魂は天さかる、鄙に下りて亡きあとを、訪ふ人もなき須磨の浦、なみ／＼ならぬ人々の、なり果つる身の痛はしやと、悲嘆の涙に暮れけるが、是非もなく／＼玉織の、亡骸を取納め、母衣をほどいて敦盛の、御死骸を押し包み、總角取つて引結び、手綱をたぐり結び付ける、鞍のしほ手やしを／＼と、弓手に御首携へて、右に轡の哀れげに、檀特山の憂き別れ、悉多太子を送り

たる、車匿童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに歸りけり。

【解說】　この曲は、並木宗輔作の『一の谷嫩軍記』(寶暦元年十二月豐竹座上演)の須磨浦組打の段を新内に直したので歌詞は殆んど義太夫通りである。一門に離れた無官太夫敦盛（實は熊谷の子小次郎直家の替玉）は須磨の浦邊を唯一騎落ち行くと、後方から熊谷次郎直實と名乘つて呼び返すものがあるので、引返して渡り合つたが、遂に組敷かれて、首を刎ねられる。勝名乘に驚いた半死の玉織姫が、首を搖して搔き口說くので、熊谷は今更ながら鬪爭の醜さを思ひ怱に無常を觀じて、出家する心になるといふのが略筋で、艷つぽいのを專門のやうにする新内節としては珍らしい語物である。

總角　紐のこと

しほで　鞍の前輪と後輪とに二ケ所づゝ着けて結ぶ紐

檀特山　天竺にある山。悉多太子の修行した山と傳へらる

悉多太子　釋伽にならぬ以前の名

車匿童子　悉多太子が出城の時、白馬に乘せて隨つて行つた御者の名

色事　戀愛事件
子飼　幼少から面倒を見て使ふ雇人。
しんとろとろり　油の如く交情の濃かなことをいふ。
祭文崩し　說經祭文の節
帳箱　帳場で使ふ引出しのある硯箱
蘆生　蜀の青年
肝膽を碎く　心配をすることを前の蘆生が邯鄲の里に枕して榮華の夢を見

妹脊の門松（お染）

詞へこれはこの間、大阪町々で御評判の高い色事の次第、この邊りで大きな聲では申されぬこと、一人娘と子飼の丁稚、締めて寢油しんとろとろり、節は即ち祭文崩し、上下に致して綴本が六文、この邊りで大きな聲では申されぬことぢや。へと、言ふも高聲町々のもの騷がしき大晦日質店の帳箱が蘆生が枕、肝膽を碎く久松思ひ寢の、夢驚かす初夜の鐘、フツト目覺まし、詞へオ、嬉しや〳〵、夢であつたか。したがあの賣聲は生玉で見た歌祭文、取りも直さずコリヤ正夢、あれもやつぱり善六めが拵らへて賣らすのか、引捕へて。へと、立上りしが、詞へア、いやいや、留め立てしたら身に覺えがあるゆゑにと人の口、エ、憎い奴といふも此方の得手勝手、へ所詮死ねとの今の夢、人をも世をも恨まじと、又今更に身の覺悟。なうこれ、久松々々と、思はず店へ駈け出るお染、顏

たことにかけていふ
初夜　午後八時頃
生玉　大阪高津にある生國魂神社
正夢　事實を夢に見ること
善六　油屋の番頭
別條　異變のこと
夢合　二人で同じ夢か符合するをいふ
札おこして　質の札をよこして置いたと云ふこと
元利　元金と利子

見合せて、詞〽ヤア久松、そなたの身に別條ないか。詞〽お前もお怪我は。詞〽そんならそなたも。詞〽お前も夢を、ハヽア。〽はツとばかりにめい／＼が、最後の夢の夢合せ、幾世の思ひぞ辛氣なる。潜り戸ガラリ、詞〽コレ久松殿、けふ晝、札おこして置いた布子下され。ソレ元利〽と、錢投げ出して受出す布子。詞〽ヤレ／＼嬉しや／＼、すんでのことに一張羅、遠い所へやらうとしたを、〽命があれは正月に逢うてめでたい忝ない。詞〽コレ兎角命が物種ぢや。〽嬉しやめでたや、春の初めにゆるりと逢ひましよと、いそ／＼歸る辻占を、お染は勇み、詞〽アレ聞きやつたか久松、先度も死なうとしやつたを、〽無理に止めて今日が日まで、永らへゐるも何卒して、一日なりとも夫婦ぢやと、言はれて死にたい、詞〽わたしが心、ハテ一寸延びれば、尋とやら、氣を浮々と持ちやいの。〽と、力付けても心根は、共にしをるゝ目に涙、涙ながらに幼な兒を、裸にしたか溫くもりの、冷めぬを持てど身は寒き、解わ

一張羅　一枚切しか無い着物をいふ
遠い所へ　流すこと
辻占　言葉占
先度　先日に同じ
一寸延びれば尋　少時間の猶豫も多少の便宜を與へると云ふ意
裸にしたか　子供の着てゐたものを裸にして質草に持つて來たのである
解わけがけ　輪の中に島田やらの髷を

けがけの女房が、詞へコレ丁稚殿、こんな小さいものは邪魔でもあろし、また値打もあるまいけれど、こなさんの呑込みで、どうぞ四百貸して下んせ。知らんす通り、こちの和郎の長の病ひ、親子三人がほんの居食ひ、正月が來たとて、樂しみもない娑婆世界、ア、否やの〳〵、いつそ死んでしまうたら、この苦はとんと助からう、ア、因果とぎちかは死金ます。へと、涙に交る水涕を、すゝり上げればこなたにも、身につまされて落ちかゝる、四筋の錢の目も分かず、渡せば戴きしを〳〵と、歸る姿を見るにつけ、どうで死ねとの辻占かと、又涙にご暮れけるが、詞へ申しお染樣、先度も言うて冗けれど、二人一緒に死なば心中、恩と情の御主人や、清兵衛樣へ義理立たず、私は何ご詰らぬ譯を、僞りながら書置して死んでしまうが申譯し、へお前は存らへ山家居へ、詞へ嫁入をなさるれば、親御樣へは御孝行、清兵衛樣のお顏も立ち、世間へぱツと立つ浮名も、人の噂も七十五日、そのうちには沙汰も止み、お前のお身も御兩

結つた髪
和郎 亭主をいふ
娑婆世界 世の中
四筋の錢 百文つつ
四筋で四百文
清兵衛 お染が嫁入
先の山家屋の主人
沙汰 評判
千部萬部 經文を千
巻萬巻讀誦する
忘
曲がない 情け無い
に同じ
姫御前 女のこと
殿御 音交はした男

家も、納るはつい今の間。へお馴染み甲斐に折節に、唯一遍の御回向も、外の千部萬部より、嬉しう草葉の陰よりも、お禮もお詫も致しますと、あとは言葉も泣入れば、お染は顔を振上げて、ソリヤ曲がない胴慾な。高いも低いも姫御前の、肌觸れるのは只一人、親兄弟も振り棄てゝ、殿御に付くが世の教へ。それにまだ〱悲しいは、ゆふべの風呂の上り場で、この腹帯を母さんが、見付けさんしてコレお染、この腹帯は何事ぞ。とうから様子知つたゆゑ、度々の強意見、父御の耳へ入れまいと、辛抱したがモウ叶はぬ、情けないことしてくれた。と、泣きしみづいてのお腹立。そなたに案じさすまいと、今まで斯うと岩田帯、隠してゐたが斯うした身で、どう嫁入がなるものぞ。一緒に殺してたもいのと、膝に打伏ししやくり泣き。久松ホツと太息つき、詞へ懐妊してござらうとは、露いさゝかも存じませぬ。さうしたお身にしたからは、千萬言うてもモウ叶はぬ。成ほど死なうと仰しやるも、へ無理とはさら〱思はねど、親

御様のお嘆きを、思ひやつて暫時のうち、何處へなりとも身を隠し、身二つになり腹の子を、成人させて下さるのが、一緒に死んで下さるより、百千倍の眞實と、あどない氣にも血を分けし、子と聞くよりも不愍さの、涙に涙うち解けて、凍る夜風に袖袂、打ち重ねたる除夜の鐘、心細くも告げ渡る。

【解説】此の曲は、明和四年十二月大坂豊竹座に上場した菅専助作『染模様妹背門松』の油屋の一節を取つて新内に直したもので、山家屋へ嫁入と定まつた油屋お染は、既に丁稚久松と契を結んで懐胎して居るため、久松と心中しやうと相談する。久松は我子を闇から闇に葬ることが辛いので、お染に存らへよと諭すといふ筋である。

風呂の上り場　風呂の脱衣場

泣きしみづいて　泣き沈むこと

岩田帯　受胎して五月目に腹に卷く帯

身二つになり　出産すること

成人　子を大きくすること

あどない　まだ子供〳〵しいこと

除夜の鐘　大晦日の晩に數を撞く鐘

初日松（御祝儀）

へ面白や、神も岩戸を明け初める、大門口の飾松、幾千代見草翁草、太夫といふも松の名の、君は姫松笑顔よき、惠比須白粉清らかな、初後朝の約束を、松の二葉はあやかりものよ、妹脊離れぬ相生の松、常は眠がる禿松、けふ正月の嬉しさに、雲なく明くる空色の、緑り若葉の小松より、心は洒落し水邊の、磯馴の松や濱松の、位備はる道中の、並木の松や野邊の松、彈く清搔や女松、好いたいとしい男松と、子の日の松のしつぽりと、しげるといふも春めきし、目出た揃ひの言の葉に、松の木男遣手まで、やはらぐ花松春風も、枝を鳴らさぬ御代の春、納むる床には壽福を抱き、全盛千秋萬歳樂、命を延ぶる樂しみと、通ひ廓の繁昌は船駕籠早めてサツ／＼／＼サツ／＼の聲ぞ樂しむ國の榮ぞ久しけれ

岩戸　天の岩戸
千代見草翁草　共に菊の異名
太夫　遊女の上級に在るもの
初後朝　新年初めての朝の別れ
あやかりもの　しあはせもの
禿松　小松を咏ずる禿にかけていふ
位備はる道中　廓の道中に太夫の氣品が備はつてゐることを賛めていふ

【解説】種々の松の名を読み入れて、遊里の初春の景色を叙した曲で、生硬でこじつけた文句が尠くないのは維新前後の作品の弊であらう。

御搔　遊女が仕ケ見世を張る際に弾く三味線の手
子の日　寝る意にかけていふ
しげる　廓の詞で寝ること。それを松の葉の繁るにかける
松の木男　妓夫
遣手　遊女を監視する老女
萬歳樂　雅樂の名
船駕籠　廓通ひの乗物を並ていふ

花衣いろは緣起（良辨杉）

ヘ愛し殿御と一期添ふならば、水も汲みませう手鍋も提げませう、さんま提げませう、提げませう、下髪も、今は在所のばらけ髪、ヘ山中左衛門尉義次は、妻子に迷ふ心より、故郷を嫌ひ都にも、止まらぬ足の濡れ草鞋、旅より旅に假住居、我が身を隱す志賀の里、弓矢に代へし鋤鍬や、仕慣れぬ仕業も習ふより、慣れて夫婦が牽く牛に、草籠付けて子を乘せて、野邊の仕事も苦にならず、水も汲みませう手鍋も提げませう。

詞ヘイヤ申し、こちの人、さつぱりとした野の景色、氣が晴れてよう御座んすの。詞ヘされば サ、三月は苗代時とて、畑に水かく世話も入らず、麥の赤らむまでは、百姓の肩休め、住所の閑で物參りする時なれど、こちとは新米百姓、人の遊ぶ時精出さねば、親子三人の口が養はれぬと、壁隣りの長三が意見。ヘ心得たりとは言ふものゝ、持ちつけぬ

一期　一生涯の意。
水も汲みませう　お前と一所にならば如何なる事でも厭はず働くといふ意
下髪　武士の妻は髪を結はずに垂下にしてゐたのでいふ
ばらけ髪　手束の油もつけぬ亂髪
故郷　甲斐國
濡れ草鞋　草鞋の底の乾かぬ事
志賀の里　近江の地
苗代時　稲の種をませ

田に播いて、苗を
育てる時
こちと　我等の意
新米　まだ其道に熟
せぬことをいふ
埒の明かぬ　はかど
らぬこと
三之助　息子の名
寶殿　我子をいふ
小督　左衛門の妻
義理も瓢簞も　義理
も糸瓜もに同じ
牛に乘る　百姓にな
つた事をいふ
いといと　可愛しい

鋤鍬、肩や腰を痛める許り、埒の明かぬ畑仕事、詞〽其方や俺が、此の體になつて、苦勞するも、三之助が可愛さ。ハテ錢金は湧物、此の子寶を儲けたと、思や、ホ、牛に乘つて心よいか、寶殿が笑ひ顏、マ一つ笑や。〽ア、つく〴〵と餘念なく、子にほださるゝ夫の有樣、見るに小督は涙ぐみ、山中左衛門義次とて、甲斐の國松江殿の御内では、二と下らぬお家の筋目、大切な御身を捨てゝ、手慣れぬ業をなさるゝと、思へば我身が恐ろしく、冥加なやらいとしいやら。それに付けても案じらるゝはお國の首尾。〽と、喃々悔めば詞〽ア、愚痴な〳〵。國の事を案じるは斯うならぬ先の事、侍を止めるからには、義理も瓢簞も要らぬ〳〵。〽馬に乘つた左衛門が、牛に乘る仕合せ。詞〽格式があれば恥にはならぬ、牛に乘つた此方の三之助、此父とは違うて、出世させにやならぬ。〽いといと、好きな竹馬に乘るかやと、抱き下せば女房が、袖に用意の腹がけ草履、履かすもいたいけ愛らしく、竹馬に乘るわい〳〵。詞〽オ、稚けれ

兒を云ふこと」

竹馬　二竿の竹に岐を作つて兩足で騎り、兩手で竹の上端を持つて歩く小兒の遊戯品

常の子　世間並の子

莊子が悟りし胡蝶の夢　支那の莊周と云ふ人が夢に蝶々となつて花に戯れた故事

柴の拵へ　柴を一束にして薪用に拵へる

どもアノ腰の坐り樣、常の子とは違うて親の種が恥しい。詞へヤコレ、種種と言やるにつけ、日映い程咲いた菜種、へ花には蝶が戯れる、こちとは愛兒に戯れる、蝶よ花よと寵愛も、果敢なき夢の世の中は、莊子が悟りし胡蝶の夢、思ひ合する許りなり。左衛門は牛引き寄せ、三之助を抱き乘せ、詞へ父は柴の拵へに、先に往つて苅つて置く、へ母と一所に後からと、草籠擔げ急ぎ行く、夫の後から追立てゝ、させいほうせい引く手綱の、細き畔道半町許り、行先右手の茂みより、サツと響くは山颪しの、風かあはやと振り返れば、年經る鷲の翅を鳴らし、一散に飛び下り、三之助を掻い攫かむ。へなう悲しやと取縋る、小督も共に大鳥の、羽打つて上がるを上げさせじと、止むるかひもあら悲しや、取付く片紐引切つて、母は大地へ大鳥は、雲井遥かに上がりけり。夫も周章て驅戻れど、翅無ければ詮方無く、あれよあれよと身を悶え、夫婦手をのべ足爪立て、躍り上がり飛び上がり、心も空に叫ぶ子の、聲も幽に遠山の、

雲や霞に隔たりて、行方も知らずなりにけり。

【解說】この曲は、弓矢を棄てゝ近江志賀の里に隠れ、農夫となつた山中左衛門が、或る日鐘愛の一子三之助を畑歸りの牛の背に乗せて家路を指して行く途で大鷲のために掠はれるといふ筋で、寛保二年三月、大坂竹本座に上場された三好松洛、竹田小出雲合作の操淨瑠璃『花衣いろは縁起』の鷲の段をそつくり取つて新内の節を付けたのである。鷲にさらはれた三之助は、江戸の陰隨派上人に拾はれ成長して玄恕上人となり、その法談の席で母子再會すると云ふのであつたが、後にはこれを作りかへて、三之助は奈良の二月堂の杉の木に落ちて來たのを救はれて僧となりて、良辨大僧正となつてから、狂うてたづねて來た母に再會すると云ふことになつた。――この曲は、富士松魯中が鶴賀から分離して、鶴賀の古曲を封じられた爲め語り物に窮した時、新内に作曲したものと傳へられてゐる。

させいほうせい　牛を追ふ懸け聲
片紐　小兒の着衣に縫つてある着け紐
雲井　雲の上の事
心も空　氣が轉倒すること
叫ぶ子　空で泣き叫んでゐる子供

男作出世員唄（白藤源太）

〽折から來たる庄屋の杢藏、案内もなくヌツト入る。女房見るより、詞〽コレハ〳〵庄屋さん、何と思うて今日のお出で、先づお烟草お茶上げんと、〽鑵子の下へさしくべる。杢藏はさながら智慧有り顏、分別らしく額に皺よせ、詞〽さてお內儀、今日來るのは外の事でもない。貴樣の夫源太のこと、ア、强う風聲が惡いぞや。親源兵衞の時分は、この金置村でも名ある百姓、婿源太の世になると、呑むやら打つやらありたけこたけ、到頭田地も賣拂ひ、その上喧嘩は好物もの、お蔭で我れ等も役目ゆゑ、袴の襴で銅鑼うつさうな。それ故今日の寄合は、兎角村の喧嘩は絕えず、源太を所に置かねば濟むと、村中が寄合ひ相談極る所をばこの佛性の杢藏、我が支配のことなれば、今一應意見して、聞かずば其の時兎も角もと、言うては來たが離かしき和郎故、俺が言ふも知つて

鑵子　茶釜のこと

さしくべる　爐中へ薪をさし燻べること

智慧有り顏　悧巧ぶつた顏つき

お內儀　人妻を呼ぶ尊稱

風聞　評判

袴の襴　袴の裾と云ふに同じ

寄合　大勢寄合つて評定すること

佛性　情深い譬

和郎　男をいふ

どら仲間　道樂仲間のこと
白藤仲間　白藤の連中といふ意
澁面　にが〳〵しい顔
聲作り　聲の調子を整へること
いちみの郡　夷隅の郡のなまり
邪人組　惡者の組
引んずり　引摺つて取ること
ゆがみ仲間　心の歪む不良の徒をいふ

はゐれと、恐うはないが氣味が悪い。どうぞ直るやうに言はしやれ。へと、言ふに女房氣の毒さ。詞へ成程お前の御親切、忝なう存じまする二人の子供を引付けて、度々意見を申せし故、この頃は喧嘩博奕もふつふつやめて居らるれども、今までつくせしどら仲間、急には人も言ひ止まず、詞へア、言はれな〳〵、ゆふべも隣り村で大喧嘩、誰ぞと聞けば白藤仲間。よく〳〵のことなれば、源太の身持を唄にまで唄ふぞや。文句も俺が覺えてゐる。よう聞かしやれお内儀。へと澁面作つて聲作り。東上總のいちみの郡、疋田源兵衛の總領娘、婿に白藤源太というて、相撲博奕や喧嘩が好きで、親の源兵衛が果てられし後、一家一門庄屋諸共に、意見するたび目を剝き出だし、叱り廻すが五月蠅いまゝに、詞へそれでそなたに話すぞや。へと言ひ捨て庄屋は立歸る。狐は人を誑かし、人は人をば慾の係蹄、かゝりて陥す邪人組、餓鬼のものでもひんずりの塗つて剝してこかし取る、ゆがみ仲間の總頭、源太〳〵と名に呼ばれ、

取裁き　仲裁をいふ
魂祭　七月中旬種々の供物を捧げ祖先の靈を祀るをいふ
しなだれかゝる　なまめいて倚りかゝること
命日　死んだ日
お茶湯　佛に供へる茶をいふ
飛脚　信書などを遠方に屆ける人夫
空うそふけば　空とぼけて洒あ〳〵すること

人も立てれば自から、相撲喧嘩の取裁き、濟まして歸る門の口、詞〽女房ども今戻つた。コリヤ魂祭りの御馳走か、我らも相伴致さう。〽と、しなだれかゝれば女房は、詞　あんまりぢやたしなましやんせ。昨日から家を出て、今戻つて面白さうに、今日は父さんの命日、あたり隣りの手前もある、チト佛のことにもかゝらんせ。〽と、言はれて源太大欠伸、詞〽何を言ふぞえ。死んだ親仁の位牌に向ひ、物言うたとて返事もなくお茶湯にもならぬこと。それよりも機嫌よう睦じく、寢物語の樂しみを草葉の陰で喜んでぢやと、此の中極樂から來た飛脚が話で篤くりと聞いた。　と、空うそふけば、女房おしゆん、詞〽呆れて物が言はれぬわいなう。そのやうな心から、今も今とて庄屋殿が御座んして、あんまり我儘過ぎるとて、村中が言ひ合はせて、村追放するとの談合、こちらの庄屋の情にて、一旦意見の上と言ひ延ばして御座んした。〽と、聞いて堪へぬ源太の惡虫。詞〽なゝ何といふ、この源太を追拂はうとは、テモ洒

落臭い畜生めが、ドリヤ魂祭りの御馳走に一と料理致さう。〽と、立上るを、女房取付き、詞〽さアノ〳〵、それが厭さに言ふことぢや。〽と、留めても留まらず振切つて、行くを縋つて、詞〽まアノ〳〵、コレ待たしやんせ、假初ならぬお上の掟、力業にてどうして行かう。〽さりとは聞えぬこなさんは、そのやうな無理な意氣地を立て、もしものことがある時は、二人の子供や私が身は、どうならうぞと思はんす、父さんが死なしやんして、今日命日に當るとて、香花手向ける心は無く、親の形見の田畑屋敷、皆放埒にさんしても、愛しと思ふ心から、三年この方こなさん覺えて御座んせう。意見がましい事とても、遂に一度も言はぬのは、ひよツと心に觸りつゝ、愛想が盡きたらどうせうと、それが悲しさ言はなんだが、却つて仇とこのやうな、悪い噂を聞くことも、親御の罰とこの頃は、心ばかりにくよ〳〵と、二人の子供を見るにつけ、喧嘩話を聞くにつけ、泣かぬ日とてはないわいな。糠に釘打つ私の意見、

を

村追放　村から追放する制裁

談合　相談

悪虫　腹の虫の悪いことをいふ

一と料理　料理をするやうに一と喧嘩することをいふ

お上の掟　村追放をいふ

放埒にさんして　遊蕩の爲めに失くして終ふことをいふ

糠に釘打つ　手答への無い譬

鬼を欺く　鬼をも挫ぐやうな荒くれ男をいふ

男伊達　喧嘩や博奕で日を暮らす生活をいふ

あながち　強て

斯うなつた　夫婦になつたこと

所存　考へをいふ

心一つ　意氣が投じること

卑しい身　武士が百姓に入婿になつたのでいふ

どうで用ひはなさんすまい、寧そ子供や私をば、手にかけ殺しその跡で、心任せにさしやんせと、夫を思ふ一筋に、涙は實の雫なり。〽鬼を欺く白藤も、道理と義理に搦められ、共に涙に暮れけるが、詞〽忝ない女房、なる程そなたの意見も聞かう。さりながら、この男伊達すること、あながち好むにあらず。博奕も人の知る通り、強い下手故この如く田地田畑賣代なす。素そなたと斯うなつたは、三年以前春の半ば、この金置村の相撲場にて、そなたの親源兵衛殿、いかなる所存ありつるにや、兎角娘と添はせたいと、何處の誰と詮議もせず、心一つで世話になり、それからそなたの情に絆され、今日まで浮々暮せども、心の中に忘れぬ大願、今までは包めども、二人の子までなしたる仲、語つて聞かせんそれがしは、相模の國曾我兄弟の家來鬼王新左衛門。詞〽エ、そのマアお前がこのやうな、卑しい身とは何故ならんした。詞〽されば／＼、音にも聞かん曾我兄弟、工藤左衛門祐經を、親の仇敵とねらへども、工藤は

音にも聞かん 噂にも聞いてゐるだらうの意

友切丸 名劍の名。

唐天竺 支那と印度の古名で遠い地の譬にひく

喧嘩を言ひかけ 喧嘩を仕掛けること

反り打つ事もなく 刀に反りを打たせて拔くやうな事を仕ない意

大惡無道の曲物 道に外れた大惡人

頼朝公より御預けの、源氏の重寳友切丸、何處ともなく紛失したる咎により、秩父の次郎重忠殿へ御預け、それ故敵討の願ひ叶はず、祐經今にも病死せば、兄弟は如何して、親の敵討つべきと、母上諸共泣いてばつかり、お氣遣ひ遊ばすな、我々兄弟あるうちは、唐天竺へも手分して、探し出ださん事よもあるまじと、弟團三郎と言ひ合せ、思ひ付たる弟は刀屋 我は又相撲博奕、只惡者に近付て、無理に喧嘩を言ひかけ、兎角脇差を拔かせる工風。今日までは幾千人の腰の物、手に取り見れども其れとも知れず。が此處に一ツの手懸りは、彼の惡者仲間の猪熊雷元、幾度喧嘩仕掛ても、遂ひに反り打つ事もなく、戯れ遊ぶ其の時も、暫しも放さぬ面魂、殊に力は人に勝れ、大惡無道の曲者め。聞さしに違はぬ彼が一腰、これさへあれば女房ども、子供を連れて相模の國、曾我中村へ立越えて、今の苦勞はさせまいぞ。へと、初めて語る物語り、聞いて喜ぶ女房おしゆん、さうとは知らぬ恨み言、私がやうな田夫もの、嘸

一腰　腰間の刀
田夫もの　田舎者と謙遜していふ詞
精進落も云々　精進の日が過ぎて魚類を喰べることのやうに精進潔齋が済んでから悠り娛しみたいといふ意
一休み　一と睡すること
刎ね出され　鼻つ摘みの意
先きを拂つて　前に立たせて歩行く意

お厭であろけれど、忠義とやらに身を窶し、二人の子まで出來たのは、ほんに不思議な緣と緣、話を聞いて今更に、勿體ないやら嬉しいやら、どうやらかうやら父さんの、精進落ちも待ち兼ると、莞爾と笑顔の愛らしさ。田舎に稀なる姿なり。詞〽イヤ女房ども、妹のお松昨日出がけに熱もあつたが、藥りでも飲ましやつたか。詞〽イエ／＼ゆふべから、ズント機嫌もよく、兄の源治と共晝寢。詞〽それは重疊々々、我れもそんなら一休み。〽と、枕引寄せるところへ、惡者仲間の刎出され、かねて企みし七人男、闇雲長介、虎斑の白九郎、小水の市八、嗅鼻三太、あいたし小介に、さすりの軍八、先を拂うて猪熊雷元、樽肴をば荷はせて、どや／＼どやと内に入る。猪熊傍へにどツかと上り、詞〽イヤ源太、ゆふべの喧嘩の渡り引き、先きの相手が謝つた。樽肴を持つて來た故、イヤこの無緣酒、要らぬと言うたりや、啞が辛子にむせたやうに、面ばつかり赤くして、吠面が不愍さに、マア俺か濟ましてやつたこの樽肴、迚

もの事源太に開いて貰はうと、皆が言ふゆゑ持たせて來た。〽と、聞いて源太が濟まぬ顏。詞〽ヤア小水、ゆふべの喧嘩の相手は我れ。割りに入つたはこの白藤、その時濟まさぬ喧嘩、市八我りやなぜ濟ました。但し源太を潰す氣か。〽と、言はれて小水迷惑顏。詞〽イヤ、ぢやに依つて源太殿に話しの上でと言うたら熊親方が言はれるには、俺が聞けば白藤が、手前は濟むと受合うて言はれた故、濟ます氣はなけれども、仕樣事なしに堪へました。詞〽ウムそんなら我りや濟ます氣は無いが、猪熊の名に恐れて。詞〽イヤ何さ。詞〽テモ濟ましたはうぬも腰拔け、この樽肴も汚らはしい、持つて歸れ。〽と、蹴飛ばせば、雷元傍へに立退いて、互ひに目配せ、思ひがけなく一時に、するりと拔いて切つて掛る。源太すかさず渡り合ひ、薙立て／＼切結ふ。素より源太が劍術早業武勇に如何で堪まるべき、皆散り／＼に逃げ失せけり。中にも雷元齒嚙をなし、詞〽エ、言ひ甲斐もなき蛆虫共、ヤア／＼白藤、〽日頃の我儘次第

渡り引き　結末の意
無緣酒　自分には緣がない酒をいふ
啞が辛子にむせたやうな　顏を赤くして物を言はない譬
吹面　泣き顏
割に入つた　仲裁に這入つたこと
俺れが聞けば　俺が扱かへばの意
目配せ　目と目で合圖すること
渡り合ひ　戰ふこと
齒嚙をなし　齒を食

ひしばつて残念がる光景をいふ
蛆虫共　人をさげすみ罵る詞
利腕　右の腕
逆どんぶり　逆さに投げること
大願成就　願が叶つたをいふ
曲物　怪しい奴
河津　曾我兄弟の父河津祐泰をいふ
空使ひ　褒美を遣らないこと
難儀をかけし　工藤

に募り、皆總村の言ひ合せ、おのれを殺せば我々が命助かる。さないとおのれも同罪と、退引ならぬ言ひ渡し、背中に腹は代へられぬ。最前持たせし樽肴、毒酒を拵へ來たりしに、運の強い大盗人。詞へ覺悟ひろげへと、切つて掛るを引外し、利腕取つて逆どんぶり、乘懸り、刀もぎ取り、見れば正しく友切丸。詞へハヽ、有難し〳〵、是れさへあれば大願成就、女房喜べ嬉しや。へと、喜ぶことは限りなし。源太雷元取て引立て、詞へこの刀盗み持つたるおのれも曲者、サア有樣に白狀せよ。言はぬとタツタ一打ち。へと、言はれて雷元おづ〳〵聲、詞へア、申しましよ、〳〵、我れこそは、工藤殿の家來近江の小藤太、主人の言ひ付け河津を討たば、望み次第褒美をくれんとの契約、討つての後は空使ひ、あんまり腹が立つた故、友切盗み駈落し、難儀をかけし我が軍法、命は御免。へと、聞いて尚々喜ぶ白藤、詞へそんなら愈々逃されぬ。己れが遠矢に射止めたる、河津が家來鬼王なるわ。詞　南無三。詞へ天命逃れ

ぬ觀念せよ。ヘと、スッパと切れば名作の、切つても離れぬヨロヨロヨロ、邊りの石に躓いて、二つに割れて失せにけり。コレ友切の威德ぞと、血押拭ひ差し納め、女房來いと二人の子供、背に負ふやら抱くやら、勇み〳〵て相模の國、曾我中村へと急ぎゆく。

【解說】此の曲の詞章は義太夫から取つたものとしては餘りに拙い。矢張狂言作者の手に成つた者であらう。作曲は例の富士松魯中といふ說があるが、古風な手の付けてあるところから見れば、或に其以前に出來たものではあるまいか東上總金置村の白藤源太といふ角力上りの百姓が、毎日喧嘩三昧に日を暮して村中の厄介者視され、遂には村議で追放の私刑に行はれやうとするので、女房が意見すると、實は我は曾我兄弟の家臣鬼王新左衛門で、兄弟の敵工藤祐經が所持の友切丸を詮議の爲め百姓に身を窶してゐるのだと本心を明かす處へ工藤の家來の近江の小藤太が猪熊雷元と名を變へて喧嘩を仕掛けに來るので、渡り合つて取つて押へ、名劍を手に入れ、喜び勇んで妻子を引連れ故鄕の曾我中村へ引上げるといふ筋で、喧嘩に擬して劍を試す處は「助六」の趣向とよく似てゐる

に不興を蒙らせること

軍法　策略をいふ

遠矢　遠方から射かける矢

南無三　あツ、しまつたと云ふ意

切つても離れぬ　斬られても首と胴とがくつついてゐること

曾我中村　曾我兄弟の屋敷のある所

若木仇名草（蘭蝶）

櫛屋口說の段

へ娥々たる玉顔紅粉を粧ふ、願はくは輕羅となつて細腰につかん、願くは明鏡となつて嬌面を分たん、雲となり、雨となる、楚王の戀、比翼連理は洞底の、驪山の夜半の私言、漢の武帝の傾城や、衒賣女色と說くからに、佛の國も唐國も、固い言葉は表向き、その內證は柔らかな、神の敎へし色の道、情商ふ見世々々の、格子と言へば野暮堅く、籬と呼べば優うて、粹な仕こなし當世の、役者の似面寫し繪や、浮世聲色身振師と、名に流れたる市川屋、蘭蝶といふ鳥ならで、此の櫛屋に巢を組みていつも聯と通ひ來る。船宿の提灯を、妓夫臺から聲かけて、詞へ松浦さんお出でかえ。お客さんは、オ、まだ木の田樂。へと、横手の籬へ顏さし

娥々たる玉顔云々　唐詩選にある劉廷之の『公子行』に、
的々朱簾白日映、
娥々玉顔紅粉粧、
花際徘徊雙蛺蝶、
池邊顧步兩鴛鴦、
傾國傾城漢武帝、
爲雲爲雨楚襄王、
古來容光人所羨、
況復今日遙相見、
願作輕羅著細腰、
願爲明鏡分嬌面。

紅粉　紅白粉

輕羅となつて　羅と

なつて美人の腰に纏はれたいといふ意

嬌面　美しい顔

雲となり雨となる　宋玉の高唐の賦に神女が楚の襄王と契つて歸る時に姿は巫山の陽高丘の岨に在り、且に朝雲となり暮には行雨となる、朝々暮々陽臺の下にすといつた古事

比翼斗理　翼を並べ

入れ、詞へモシ松浦さん、よう來たかこも云つてくんなんせんなう。東雲さん、何だ強い凝りやうさ。其の伊勢暦こいふ文の、御文體が拜みたいわい。詞へよう無駄を云ひなんすなう。ほんに今朝は遲くつて、かみさんに角が生えなんしたらう。詞へナニさ、遲い程首尾のよい性質さ。アノ福の神に角が生えたら、見世物に出して大金儲け、夫れぢや又奢られやすわえ。詞へ惡口ばつかり云ひなんす。此糸さんが待兼てゐなんす、早う二階へ行きなんし。詞へアイ／＼お忝け、待兼ねないが聞いて呆れやす。へこ、仇口惡口二階の口、階子上れば船宿が、詞へこれ若衆、ごうだ、ずつこ部屋へ入れ申さうか。詞へハイ、まあチットのうち此處にへこ、行燈さげて廊下座敷。詞へウム惡しくするな。お客が在原の業平こいふ色男か。詞へイエ／＼女中客で御座ります。ごうでも致しますから、まあお下にお出でなされませ。詞へイヤ／＼立ち次手に、直ぐに野郎の剝き玉子で、階老同穴。詞へマア／＼お待ちなされませ。モシ此

た鳥、木目を連ねた樹のことで交情の濃かな意

驪山の夜半　唐の玄宗皇帝と楊貴妃が驪山宮で睦まじく語らつた故事

漢の武帝　漢の武帝が李夫人を傾城の容色と賞へた甘泉殿の故事

衒賣女色　色道を禮讃する意

神の教へし　伊非諾伊非册二神の故事

糸さん、ちよつと。詞〽ハイ。〽と、其のまゝ走り來て、詞〽もし何のこつてござりんす、マア下におるんなんし。詞〽オ、痛いわえ。エ、此の氣違めが、サアかうごつさりと坐るが最後の介、客があらうが小便にも立たせまいぞ。詞〽そりやモウ、知れしさ。〽と云ふに傍から、詞〽オツトよし〳〵、よしの木〳〵、これからは差向ひの勝負だ。コレ若い衆貴樣も忙がしからう、わしも今夜はほう〳〵だ。詞〽アイ旦那、明日も又、いつもの時分お迎ひに。〽と、いふもそこ〳〵、こそ〳〵〳〵、二人は立つて下へ行く。跡に二人は拗ね合の、果しなければ蘭蝶は、物をも云はずずつと立つを、此糸は引とめて、詞〽コリヤ何處へ行きなんす詞〽何處へ行かうとお構ひなさんな。俺が身體で、俺が足で、向へでも隣へでも、好きな所へ行きやす。〽と、また立上るを引戻し、詞〽ホンニあんまり虫がようありんすにえ。詞〽アイお前に似てさ、そこらに毛虫のない、恐ろしい蛇蜈蚣、呑まれぬうちにモウ歸る。女房が松虫、さ

情商ふ　色を賣る廓のこと
役者の似面　役者の似顏繪をいふ
身振師　役者等の身振りをする男藝者
妓夫臺　女郎屋の暖簾口に設けた高い臺
松浦さん　後に出る東雲と共に女郎の名
木の田樂　木の芽田樂の略で、來ないといふ洒落

つばり線を螽蟖、あゝこゝなじよにんいげお〳〵め、紙に包んでおこゝひ來い。へさ、彼地へ蟬、いなご〳〵と蹴散らかす、身振は中車、高麗屋、市川流の口說なり。此糸は恨めし氣に、男の顏を打まもり、お前のさうした猾獺は、いつもの癖とは云ひながら、あんまり邪慳な心意氣、今更云ふも古けれど、四谷で初めて逢うた時、好いたらしいと思うたが因果な緣の糸車、廻る紋日や常の日も、新造禿に强請られて、呼んだ客衆の目を忍び、手管の咎め鞍替も、二所三所流れ行き、勤めする身も素人も、馴染重ねた女氣は、實に變りはないわいな。粹も不粹も戀路には、苦勞するのが慣ひぞと、言ふが中にも私ほど、世に味氣ない者は無し、親に添寢の夢にさへ、見も知りもせぬ人中へ、賣られ廓の憂き勤め、禿の中の氣苦勞は、眠る灯影に追ひ起されて、文の使ひや返事さへ、長い廊下の行交ひ、間夫の手引や合圖の手練、氣を紅裏の色に出て、遣手に抓められ叩かるゝ、その苦を拔けてやう〳〵て、見世へ出雲の神樣も、

伊勢暦　伊勢神宮から出る綴暦
角が生えんした　悋氣を起こす意
福の神　おたふく面を綺麗にいつた詞
お忝け　忝じけないといふ禮の挨拶。
女中客　女客をいふ
野郎の云々　男色を挑む洒落
しれしさ　知れてる事さの意
今夜はほう〳〵　今

片贔負なる緣結び、好かぬ客衆にいびられて、泣いて明かさぬ夜半とてもなし。それが中にも樂しみは、偶々逢へば翌る日は、姉女郎や朋輩に當て言云はれ身仕舞も、遲い〳〵とせがまれて、淚を包む振袖の、留めれば最早年增役、伊達も意氣地も負けまいと、氣を張る胸の癪つかへ、思へば〳〵男ほど、我儘らしいものはなし。無理な首尾して呼んだ夜もあちから恩に煙管より、詰らぬ事を言ひ募り、口說は翌も歸されぬ、仕方と知れどこちも亦、留めて苦に病む嬉しさが、嵩じて今の身の詰り、今日か翌かと云ふうちに、よい氣ならしいあて言は、聞えぬお人と縋り付き、恨み淚ぞ道理なり。詞〽さう云へばそんな物ぢやが、ひよつと奧の客めが粹な奴で、そなたの氣が變らうかと、コリヤ眞のことゝ受取つて詞〽お前もマア其れほど氣遣ひなら、チヨツト覗いて見さんせ。〽と、引連れて襖の隙間。詞〽アレあちら向いてる女中さん、私やあそこへ行くほどに、とつくりと見さんせ。〽と、暖簾押し明け此糸は、詞〽噓お淋

しうござんしたろ。〽と、傍に居寄れば、詞〽アイ、お前はお客が來たさうなが、蘭蝶といふお人かえ。詞〽アイ、イエ〳〵。詞〽そりや誰さんでも關はぬが、コレ此糸さん、お前はナア、お顏に似合はぬ恐ろしい恨めしいお人ぢやなア。斯ういうたら、あの女子は氣違ひか、とつけもないこと言ふと思はんしよが、私はノ、こなさんのお深間、蘭蝶どのゝ女房お宮でござんすわいの。詞〽エ、、アノお前が。詞〽サ、嘸吃驚さんしたろが、私が今日來たのは、定めし逢うて、存分言ふかと思はんしよが、そこをずつと取つて退けて、折入つて相談、とつくりと聞いて下さんせや。大方ぬしの話で、何も彼も聞かんして、知り拔いて居さんしよが、〽言はねばいとゞ堰きかゝる、胸の涙の遣るかたなさ。詞〽アノ蘭蝶殿と夫婦の成立ち、話せば長い高輪で、一つ内に互に出居衆。〽緣でこそあれ末かけて、約束堅め身を堅め、世帶堅めて落付いて、あゝ嬉しやと思うたは、ほんに一日あらばこそ、そりや誰故ぢやこなさん故、

夜は散々の意
拗ね合　氣儘勝手を言つて拗合ふこと
女房が松虫　女房が待つてゐるの洒落
緣を鋸蜥　緣を切るといふ洒落
おとゝひ來い　打捨る際いふ詞
蝗　いなご〳〵行け〳〵の洒落
中車高麗屋　中車は市川八百藏、高麗屋は松本幸四郎の事。

市川流　蘭蝶の屋號と市川流の荒事の意をかけていふ
四谷　新宿の遊里
緣の糸車　緣を牽くことを糸にかけていふ
紋日や常の日　紋日は廓の物日、常の日は平常の日
鞍替　甲の廓から乙の廓へ轉じること
味氣ない　詰らない
間夫の手引　情夫を案內すること。

大事の男を唆かし、夜晝となく引付けられ、商賣事は上の空、贔負で呼んで下さんす、馴染のお客茶屋衆も、來る度毎に又留守かと、愛想つかされ後々は、呼んで呉れても內證の、詰り詰つて妾が身を、賣つて渡した其金を、又こなさんに入揚げられ、嬉しからうか好からうか、腹が立つやら口惜しいやら、食付きたい程思うたは、今日まで日には幾度か、其恨を打棄てゝ、互の爲の心底話。詞〽コレ此處をヨウ聞かしやんせや。妾ぢやとて根からの素人でもない。藝者勤は女郞衆も同然、憂いも辛いもヨウ知つてゐるわいな。其れに今では勤の身、戀も意氣地も身につまされての談合づく、何卒蘭蝶殿と緣切つて、再び呼んで下んすな。〽とは言ふものゝ二人ながら此樣に、詞〽氣になつてゐる最中、耳にも入るまい聞分けまい。〽人の意見は惡しく聞き、堰かるればなほ募り、果は詰らぬ無分別。詞〽二人死なうと言ふやうになる事も有る習ひ。詞〽オヽ道理ぢや、道理ぢやが、妾が心にもなつて見て下さんせいなあ。〽蘭

蝶殿に身を立てさせ、小商でも始めさせ、人並相應な暮しもして、末々長う添はうとの、樂み計りに恥も世間も顧みず、身を沈めたる深川竹の憂き勤め、人には妾が好き好んで、賣られて來たの手切ぢやのと、(好き好んで賣られたの、いや淫ゐぢや、緣切りのため奉公ぢやのと)浮名立てら指さされ、口惜しうて悲しうて(口惜しうて悲しうて、腹が立つて〳〵、泣いてばつかり)涙に剝げし白粉の、顏を直して呼出しの、客を勤むる苦しさは、何のやうにあらうと思はんすぞいな。其辛さをばこれまでに、堪へ堪へた其代り、お前も今の辛さをば、堪へて切れて下さんせ。さすれば蘭蝶殿の身分も立ち、妾も苦勞した甲斐もあり、お前も心を入れ替へて、勤め大事にさんしたら、主人の喜び其身の出世、三方四方のよい事は、只こなさんの胸一つ、さあ思ひ切つて呼ぶまいと、一言(つい)いうて下さんせと、事を分けたる眞實を、聞いて道理に伏芝の、こるばかりになる思ひをば、涙の水も消し兼ねて、なほ燃上る胸の火を、

氣を紅裏　氣を揉むことを紅の帛類の紅裏にかけていふ

身仕舞　店に出る時の化粧をいふ

振袖　新造時代の振袖をいふ

年増役　一本立の女郎になつたをいふ

恩を煙管　恩を着せるにかけていふ

お深間　深く惚れ合つてゐる仲をいふ

出居樂　座敷を勤める藝人

商賣事は上の空　稼業に身を入れないこと

内證の詰り　家計が窮迫すること

心底話　心をうち明けた露骨の相談

深川竹の憂き勤　深川の遊里に身を沈めたことをいふ

呼出し　呼び出し茶屋をいふ

勤め大事　他の客に接して盛んに稼ぐこと

押消し、押消し、（押沈め〳〵）詞へ申しお宮さん、成程思ひ切りやんせう。詞へヱヽ何と言はんす、思ひ切つて遣らうとかえ。詞へアイ、段々のお話を聞いて、何ぼ果敢ない姿でも、これが思ひ切らずにゐられうかいな。何の〳〵誓文、重ねてふつゝり呼びやすまい。嘸これまでお腹立ち、堪忍して下さんせや。詞へ何のまあ、切れるに詫言が要るものかいな。オヽよう思ひ切つて下さんした。最早客にこそせまいけれど、兄弟分にして末々までの談合相手、これからがほんの頼母しづく、必ず〳〵健でゐて下さんせや。又近いうちに來てゆる〳〵と、たんとお禮を言やんせう。アヽごうやらそゞろに悲しうなつて、胸騒ぎがするやうな。へさ物が知らすか血の緣り、階子降りるもたよ〳〵と、力なく〳〵立歸る。隱れ聞いたる蘭蝶は、詞へコレ此糸。詞へオヽ蘭蝶さんか、定めし聞いて居さんしたらうが、モウお前には逢はれぬ、逢はれぬわいなア。へこれが今生のお顏の見納め、よう見せて下さんせ。へと、縋り歎けば蘭蝶

道理に伏芝　道理に伏すことをいふ

こるばかりなる　千載集に「かねてより思ひしことぞ伏柴の、樵るばかりなる歎きせんとは」

談合相手　相談相手

今生　此の世の意

よう見せて　よう顔を見せての略

百萬年のお命　壽命の長い譬

蓮座　極樂に在ると

は、詞〽オ、殘らず聞いて泣いてゐた。そんならそなたは愈々切れる氣か。詞〽あい切れねばならぬ義理づく。詞〽いや／＼そなたは切れる氣ぢやあるまい。死ぬる氣であらうがの。詞〽これが死なずにゐられうかいな。〽お宮さんへの義理立てゝ、この世で添はれぬ其代り、お前は後にながらへて、お宮さんと仲よう暮らして、百萬年のお命過ぎて後、未來は必ず妾と女夫。詞〽蓮座を分けて待つてゐるぞえ。詞〽イヤ／＼それでは宮への義理許りて、一緒に死なうと云ひ交した、俺への義理は何で立てるぞ、そりや聞えぬ／＼わいなう。〽そなたを殺して俺ひとり、世に長らへて人中へ、何と顔が向けられう。とてもながらへ果てぬ身を、一緒にやいのと縋り付き、抱き締めたる心と心、二人が命短夜の、鳥も告ぐるや鐘の音も、翌の浮名や響くらむ。

【解說】此の曲は初代鶴賀若狹掾の作で、『明烏』と共に新内の二代表曲として世間に喧傳されてゐる淨瑠璃である。翅蝶三郎といふ武士が零落して男藝者

いふ蓮の臺
心と心　心と心が溶合ふことをいふ
命短夜　命の短いことを夏の夜の明け易く短かいことにかけていふ
翌の浮名　心中する翌日の評判をいふ

となり、お宮といふ女房があるにも關らず、遊女の此糸に馴染み、稼業を顧みないので、女房のお宮は密かに此糸の許を訪れ、緣を切つて吳れと賴み込む。此糸は情と義理に絆かされて、餘儀なく蘭蝶と緣を切ることを約し、其後で心中しやうと約束するといふのが本曲の筋である。併し芝居に脚色された『紫頭巾』の方では、詮義の茶入を手に入れるために鞠瀨傳藏といふ敵役を初め、此糸まで殺して終ひ、此糸の首がお主の姬君の身代に立つといふ忠節づくめで結末を付けてゐる。本曲は代表的名曲だけに難かしく、下手な太夫には長丁場が持ち切れない爲めに、近頃では前半を省略して、大概お宮の口說の『言はねばいとどせきかゝる』から語り出して『翌の浮名や響くらむ』で語り納めてゐるのが多い。

歸咲名殘命毛（尾上伊太八）

へ賑や賑ふとこしなへ、(おとしなへ)いつも常磐の戯れは、その名も高き吉原と、下戸も上戸も分ちなく、流石に猛き武士も、昔の態に引替へて當世風の長羽織、黑の出立(黑打扮)に黑裏の、大盡くゝり袖口も、丸をば太くたゞ(だい)紋の、ぐつすり冠る覆面の、頭巾で隱す顏の綾、しやんと一腰なでがくの、角の取れたる衣紋坂、五十間道いそ／＼と、ずつと這入れば大門や、禿が迎ひ待兼ねて、君達並ぶ仲の町、繪にも及ばぬ全盛は、吾妻の色の大港、皆人心盡しける。廓評判とり／＼の、堺屋尾上は伊太八に、深い戀路の物思ひ、表座敷に只一人、差しうつむいて居たりしが、何故八さんは遲いやら、もしや心に妨けが、入りもやせんと愚痴心、心の廝排結ぼれて、ほどけもやらず恍惚りと、凭れ掛りし床柱、すや／＼睡る氣草臥。早や晝見世も引けごろに、廊下をガタ／＼

常磐の戯れ　いつも變らぬ全盛を云ふ

長羽織　着類と殆んど同じやうな長さの羽織で元文頃から流行した風俗

覆面の頭巾　頭巾に錣をつけて錣の端にボタンを付け額を覆ふ趣向で、異名を「何うもかうも」といひ、元文頃流行し、直き禁止されたもの

一腰なでがく　刀

を田樂の串に譬へた洒落で、なでがくは菜飯田樂の略語。
五十間道　衣紋坂から大門迄の道路
君達　花魁達をいふ
並ぶ仲の町　仲の町張りの情景
色の大港　遊女は元水邊の賣色生活なので、澤山集つてゐるのを港に擬していふ
麻桛　麻を卷きつく

堀の喜作と仇名さへ、世に知れ者の猪牙助が、尾上の傍へ走り寄り、詞〽コレ起きな、申し〳〵、〽と、揺すれば、詞〽オ、恐は。詞〽いや恐い事は何にもないがの、彼の八さんがお出で、知らせに來やした。〽詞エ、ほんにかえ。詞〽そりや〳〵、嬉しいか〳〵。詞〽あい、何故一緒に連れまして下さんせぬ。大門にかしくを付けて置いたのに。詞〽おつと言ふまい、如才はない。今仲の町で連れ衆が呼びかけ話をしてぢや。追付け此處へ御座んせう。少しも氣づかひ、〽ないわいな。斯ういうたなら叱らんせうかは知らねども。詞〽男が男に惚れるのは、少し衆道の氣味合ぢやが、アノ八さんのことならば、モウ〳〵玉の命も捨てやす。よくよくぢやと思はんせ。〽觀音樣へ願かけて、サア雉子を喰べますまいの。からいちご、サアサ何とせうか、どうせうかいな。詞〽ハ、、、、、ほんに心中仕損ひ、曝された者も見たが、女のよいばかりで、彼んな男は無かつた。斯ういうたとて必ず氣にかけて下さんすな。〽と、先

るかせ

猪牙助　何事も心得顔にふるまま輕浮な男を猪尾助と綽名するので、堀の船宿の者といふ處から猪牙船の緣で猪牙助と綴つていふ

かしく　尾上付の禿の名

連れ衆　友人

衆道　男色をいふ

からいちご　嘘を眞實のやうにいふ意

きを知らせる口占は、一杯機嫌に猪牙助が、氣さくに任せてベラ〳〵と、阿呆たら〴〵言ひければ、尾上は胸にひし〳〵と、釘打つ如く辻占が、もしや當りはせまいかと、心で心を取直し、案じるるこそ道理なれ。〽世の中の儘にならぬを浮世とは、誰が言ひ置きし言の葉や、絆し心の伊太八は、翌の浮名を包み兼ね、樣々胸の苦しみに、氣も拔け果てゝ浮か〳〵と、馴染の家も目に附かず、行き過ぎんとしたりしを、かしくは其の儘引き止めて。詞〽エ、性惡な、早う二階へ行かんせ。〽と、そゝり立てゝぞ入りにける。詞〽ソリや、八さんがお出で。〽と、喜作は機嫌に立騷ぐ。見るより尾上は寄り添ひて、今日は取分け色々と、言ふこと聞くこと、澤山ある。其の約束で今朝早う、來さんす筈ぢやないかいな。文にも言うて遣る通り、身受の談合極まらば、明日から見世を引きやんす、それに今まで私をば、一日待たせて置かんした、言ひ交はしたる言の葉も、厭なら厭と言はしやんせ、エ、さりとては邪慳な人さんと、男

曝された者　心中未遂者を日本橋で曝物にして非人に落した事をいふ
口占　豫言をいふ
氣さく　氣輕い意
阿呆たら〳〵　さん〴〵馬鹿口をきくこと
性悪　浮氣者と云ふ意
そゝり立て　やかましく急き立てること
氣難しく　病氣をい

の膝に抱きつき、人目も耻ぢず泣きゐたる。詞〽オ、道理さりながら、人の言ふこと聞きもせで、滅多に泣いて威すのか。少し俺も氣難しく、漸々と今朝枕を上げ、堀までは來たれども、顔付が悪いというて、喜作が所で一口飲み、元氣を直し此迄まで來た。詞〽サアそんならゆふべから歸らずに、何處ぞに泊つて居たであろ。サア言はしやんせ〳〵。詞〽なんのいナ、内からずつと。詞〽エ、嘘はつかりっ〽と、持つたる煙管振上ぐれば、遣手のさんが聞き付けて、詞〽又尾上さん、氣の短かい。〽と、もぎ取れば、猪牙助喜び、詞〽コリヤおさんどの、出來た〳〵、大事の兄弟を對王丸にするのかえ。コレおさんどの、金儲が強いかして、さつきから座敷に見えなんだな。詞〽いんエナ。今日は女郎さん方に頼まれて、觀音様から大師様。〽と、言ふを幸ひ、大願し奉る、芝愛宕上野が三兩大師、並びに笠守稲荷、洗足で百日家内安全、裸詣りの濡坊主とア冷たかろ。詞〽ハ、、、面白い浮いて來た、サアおさん、喜作、

ふ
堀　山谷堀の船宿
大事の兄弟　衆道に擬していふ戯言
對王丸にする　由良の港の千軒長者の山莊太夫が、人買から買つた對王丸といふ稚子を虐待して擲つことに譬へた洒落
女郎さん方に頼まれて　女郎達に代參を頼まれること
笠守稻荷　當時流行

一つ飲みや。〽と、ひらりと紙花二三枚、枕にあてゝ轉た寢の、話の中に高鼾、搖すれど起こせど他愛なし。喜作は遣手と睨めくら、詞〽コレおさんどの、旦那は寢る、尾上さんも淋しかろ、二文四文の腕押しでも仕よかいの。詞〽ハテ譯もない、明日の迎ひもあらうし、まう引四つも打つたぞや。詞〽オ、それよ、よう氣を付けて下んした。〽と、手を差出し指を折り、詞〽先づ二丁目の二人一座、角町のお屋敷衆、新町の九郎さん、京町の旅人衆、江戸町は、オ、こゝよ。〽何をいふやら後先のつまらぬ酒にふら〳〵と、提灯片手に引さげて。詞〽尾のさん、御寢なれ、おさん殿おやすみ、おさんばえ。〽と潜り半分明けながら、聲高々と

詞〽おいらは今から何うしたもんだ、斯うしたもんだ、何うしたもんだ、

(何うしたもんだ)しよんがえ。　足もしどろに出て行く。おさんはそこ〳〵片付けて、詞〽サア起しましてお床へ入れ、詞〽イ、エ矢つ張り斯うして置かしやんせ。詞〽私も行つて臥せりやしよ、お前もお休みな

した谷中の稲荷

裸詣りの濡坊主　職人の小僧達が寒中裸詣で水を浴びて濡れることをいふ

紙花　紙をひねつて祝儀のしるしに與へること

他愛なし　手ごたへのないこと

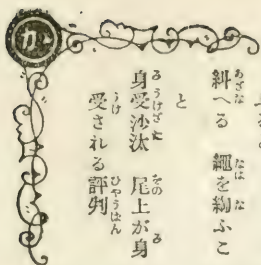
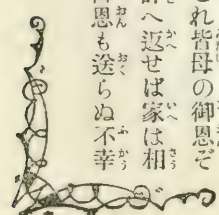
睨めくら　手持無沙汰の情景をいふ

二文四文の腕押　腕押の賭勝負をいふ

さんせ。〽と、どた／＼降りる箱階子、跡に尾上は伊太八が、顔つくづくと打眺め、詞〽私といふ者無いならば、かうした身にはならんすまい。親御さんの御勘氣も皆私が仕業のぞや〽逢初めてより一日も、烏の啼かぬ日はあれど、お顔見ぬ日はないわいな、繁々逢へばお宿の首尾悪しきは胸に知りながら、好いたが因果束の間も、側離るゝが彌増して、朝の歸りもまだ早い。モウ一服と引止めし、其言の葉が居續けと、しげりし故にお前の身、仇となしゆく悲しやな、許して下んせ八様と、手を合はせ伏拜み、思はずワツと泣出だす。詞〽コレやかましい靜にしや。詞〽ヤアお前はヨウ寢て。詞〽ハテどう寢られうぞ、先づ此處へおじや。と床の内、あたりの襖立て籠めて、暫し物をも言はざりしが、詞〽誠に古人の言ひ置きし、人界の榮枯は、糾へる繩の如く、水上の泡に似たり、この頃は夜の目も合はず、食事さへ胸を通さぬ身受沙汰。〽家に代へ親に代へ。詞〽身にも代へたるそなたをば、人手に渡すが口惜しさに、様

引け四つ　午前二時
二人一座　二人連の座敷をいふ
お屋敷衆　武士の客
九郎さん　苦勞人の洒落で通人をいふ
旅人衆　旅を渡り歩行く博奕打の事であるが爰では田舍者の意
おさんばえ　お去らばの訛りで歸りの挨拶
潛り　女郎屋の店の潛り戸

々才覺して見れど、押詰つたる金の事、誰に談合する目的も、內證知つたはそなた許り、生れ付たる商人さへ、今の世渡り過ぎ難い。ましてや昨日今日までも、武家で育つた俺が事、勘當受けて丸二年。〽僅な筆の命毛で、住み永らへる其日過ぎ、男の身でさへ生き難い。かうした勤めの其中で、物日節句も相應に、茶屋船宿への付屆け、遣手禿の仕着まで、表向をば俺が名で、皆そなたの才覺ぞや(くめんづく)送つて出やる肌薄な、姿を見れば胸一ぱい、昔の身ならどのやうにも、仕やうもやうも知つたれど、この身になつては一言の、言葉の禮より外はない。忝ないぞや嬉しいぞや。迚も此の身は埋木の、末の案じもそなたの爲め、今度の事が首尾してから、先きへ行きやれば玉の輿、我身の出世と喜ぶぞや。ふつ〳〵恨みと思はぬと、身を恨み泣き沈み、聲立てられぬ床の內。尾上はいとゞしやくり上げ、好かぬ事をば言はしやんす。いかに流れの身ぢやとても、心に二つはないわいな。假令妾が受出され、御新造さんの

おいらは今から　小唄の文句
足もしどろ　足元の定まらぬこと
箱階子　裏階子をいふ
居續け　歸宅せずに翌日も遊んでゐること
榮枯　盛んなると衰ふると
糾へる　繩を綯ふこと
身受沙汰　尾上が身受される評判

奥さんのと、人にかしづき敬はれ、上見ぬ鷲で暮らしても、厭な男に添寢して、朝夕氣兼をするよりも、やつぱり二人が手鍋さげ、手づから妾が飯炊いて、內の者よ、此方の人、翌日は何うして斯うしてと、言ふが樂しみ。詞〽妾や嬉しい。詞〽ハテ何時まで言うても盡きぬ事、何うで今宵は過されぬ。俺は覺悟をしてゐる。〽と、肌押脫げば白無垢の、思ひ詰めたる死出立。尾上は悲しさ嬉しさに、手早く簞笥押しあけて、共に着へる死用意。詞〽コレ尾上、わが身は女子のことなれば、合點が行くまいが、唐國蒼頡といふ人、初めて文字を作り、それより季子に傳へ、日本にては菅相丞道眞公、所持の一軸、故あつて先祖へ傳はる、これ無くては筆道の家立ち難き故、勘氣の節母の情けに盜み出し賜はりしは、他門より跡を繼がせず、我を返さん計りごと、これ皆母の御恩ぞや。せめて母への言譯に、この一卷人手に渡さず、親許へ返せば家は相續する。さりながら、お二人樣、幼少よりの御養育、御恩も送らぬ不幸

の罪、宥させ給へ。〳〵と、手を束ね、兩親傍に在ますが如く、詫び嘆くこそ道理なれ。尾上も共に居直りて、私は嫁でござんすと、言ひたい見たいお袋様、お心よしと言ふことを、主に疾から聞きまして、年が明いたら早う往て、私が親より大切に、仕やうと思ふ甲斐も無く、今宵死ぬるは何の罰。さりとては世の中に、私ほど因果なものは無し、遠國隔てゝこの廓へ、來たのは恰度七つの年、父様や母様も、少しは覺えて居ますれど、他に兄弟一門が、有るやら無いやら便り無く、不通になつた此身ぢやから、せめてお前の親御達、お傍で給仕朝夕の、お茶煙草にも氣を付けて、孝行つくそと思うたに、一度もお目に懸らいで、うつて變つた逆樣な、歎きをかけるのみならず、手向の水や香花を、お前方から受けるのは、よく〳〵の緣でござんせう。親子は一世と言ひながら、この世は僅か假の宿、長い未來で嫁娘と、御不憫がつて下さんせと、聲も立て得ず、口說き泣き、哀れにも又いぢらしゝ。伊太八淚押し拭ひ、詞へ

談合　相談
內證　懷中をいふ
筆の命毛　手習師匠をして生活してゐる意
物日節句　廓の行事ご特別の日
付屆け　纒頭を遣ること
仕着　衣服を遣ること
埋木　勘當されて逼塞してゐること
玉の輿　出世の譬
しやくり上げ　淚に

咽ぶことをいふ
流れの身　遊女の生活をいふ
上見ぬ鷲　贅澤三昧な事をいふ譬
白無垢　白無地の衣服で死装束
一軸　卷物
筆道の家　祐筆の家なのでいふ
手を束ね　掌を合はせて拜むこと
お袋様　母様に同じ
主　伊太八をいふ

愚痴云やる間に夜が明ける、國の親達朋輩へ、書置を仕やつたか。詞〽アイ認めて置きやした。詞〽ウム、俺も今宵と覺悟して、この一通を持つて來た。心で亭主へ頼み置き、親許へ此の一卷送り貰はん書置、ドレそなたのも一所に。〽と、置床の、上に置くのも此の世の名殘り、サア合十念を唱へんと、差向ひ手を合はせ、南無阿彌陀佛〳〵、南無阿彌陀佛〳〵と、用意の脇差するりと拔き、今ぞ最期と襟元へ、當つれどさすが愛着の、迷ふ心に女は態と力を付け、早う〳〵とせり立つれば、南無阿彌陀佛と一ト刀、ずつと通せば血は瀧津瀬、見るに男は遲れじと、刺通したる我が咽喉、死にもやらずに苦しみて、間の襖を押倒せば、隣りの座敷も目を覺まし、ヤレ心中よ斬つたわと、呼ばはれば、家内驚き驅け上り、上を下へと返しける。亭主はあわて、手負の傍へ立ち寄つて、詞〽先づ二人ながら傷は淺い。殊に急所を避けたれば、命には氣遣ひなし。皆騒ぐまい、騒ぐまい。サテ〳〵早まつたる御仕業、尾上が身受の

疾から　以前から

年が明いたら　年期奉公を濟ませたら

親子は一世　佛説に親子は一世限りの緣と云ふ

合十念　念佛を唱へ合ふこと

浮木の龜や優曇華の　隱れた吉事が現はれて世に出るたとへ

花の妹背　花のやうに美しい夫婦

沙汰　評判

客と申すは、お前が國の伯父御樣、密かに此の間お目に懸り、身受の金も受取つて、諸事は相濟み候へども、ちと仔細あれば、二人の者へは、此の事沙汰なしとの仰せ故、申さなんだは拙者が無念、お氣遣ひなさるゝな、本復次第に御祝言、直ぐに私が仲人。へと、言へば二人が喜び顔、浮木の龜や優曇華の、花の妹背の返り咲、浮世の沙汰を一と節の、筆に任せて書きとゞむ。

【解説】此の曲は、津輕の岩松藩の家臣で江戸詰祐筆役を勤めてゐた原田伊太夫が、吉原江戸町一丁目太左衛門店の遊女尾上に馴染み重ね、勤めが怠り勝ちになつたので永のお暇となり、養家にも居堪まれなくなつたので延享三年十二月十三日夜、遂に合意心中を企て、未遂に終つた事件を潤色し、伊太夫を伊太八と改めて鶴賀若狹掾が作曲したのである。難曲であり歌詞も長いので、今日では大概前半を省略し、「逢ひ初めしより」から始め「共に着替へる死用意」で打切り結末まで語らぬやうな傾向になつたのであるが、「明烏」「蘭蝶」と共に代表的作品の一つであるから、煩を厭はず全曲載せることにした。

苅萱桑門筑紫轢（石童丸）

高野山の段

八葉の峰　高野山内にあり。大塔の四方に廻れる峰を内の八葉といひ、壇場奥院の外に聳ゆるを外の八葉といふ。極樂の蓮臺なる八葉の蓮華に喩へたのである

源一水　一つの水上から澤山な川の流れが生ずること

大師　弘法大師

根ざしの父　生ませてくれた父

〽行空の、雲間に近き八葉の、峰に紫雲の棚曳きし、高野山と聞えしは、三面に山連なり、源一水にして萬水東に流れ、大師一犬に道を習ひ、開き始めし靈地とかや。あら痛はしや石童丸、かゝる難所をたど〱と、心も空に浮草の、根ざしの父は顔知らず、名のみ知るべに尋ねゆく、袖の涙ぞ哀れなる。思ひ高野の谷川や、弓手は岩間、馬手は天野の山颪、峰に烟りのひと結び、見上げて通る不動坂、踏みも通はぬ丸木橋、名殘り情けも横吹きの、嵐に木の葉散り果てゝ、心細道つく杖に、下りつ登りつ行く先を、問へど岩根の松影に、暫しやすらひ給ひける。　百年の榮耀は風の前のともしびと、悟ればわれも佛なり。煩惱菩提とあきらめて、加藤左衛門尉重氏は、苅萱道心と名を改め、佛法修業の山坂を、辿るも

後世のたよりかや。石童親子の奇縁にや、思はず傍に走り寄り、詞〽申し御出家さま、この御山に今道心のましまさば、教へてたべ。〽と、おりければ、詞〽コハ稀有がる小人かな、九百九十の寺々へ、毎日入りくる諸發心、きのふ剃つたも今道心、をとつひ剃つたも今道心、左樣に尋ね給ひては知れ難し、俗の時の名を言うて尋ねられよ。〽と、身の上の事とも知らず仰せある。詞〽さればとよ、尋ぬるは自らが父上、二つの年別れし故、お顔も覺えず、元は筑紫の松浦黨、加藤左衛門重氏樣。〽と、言ふより、詞〽さては我が子か。〽と、取縋らんとしたりしが、待て暫し、佛前にて誓ひを立てたる恩愛妹背、こゝぞと思ひよそ／＼しく、詞〽ウム年端も行かぬに遙々と、慕うて來たる心ざし、誠の父が聞かれなば、嘸嬉しくもなつかしく、飛立つ程に覺されん。さりながら、この山の掟にて、たとへ巡り逢うたりとて、名乘り合ふ事かつふつ叶はず、早々國へ歸られ、母御を大事にかしづくが、又一つの孝行。〽と、

弓手　左の方

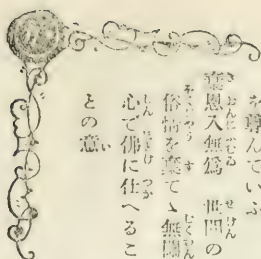
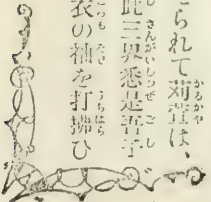
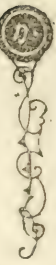
馬手　右の方

煩惱菩提　煩惱は迷ひ。菩提は迷ひを離れて悟を得ること

親子の奇縁にや　親子の緣で引きつけるものと見える

今道心　新らしく出家になつた人をいふ

稀有がる小人　奇らしい事を聞く子供かなといふ意

九百九十の寺々　高野山の寺の多いことをいふ詞
諸發心　佛門に歸依して頭を剃る人々
大内といふ者　大内義弘をいふ
攻め悩まし　攻め寄せて國を取ること
阿闍梨　碩學の老僧を尊んでいふ
棄恩入無爲　世間の俗情を棄てゝ無爲心で佛に仕へることとの意

言ひ教うれば、詞〽イヤなう我國は、大内といふ者攻め悩まし、母様諸共この山の、麓まで參りしが、〽悲しい事は母様が、旅の疲れに病うて、命のうちに只一日、父に逢はしてくれよと御嘆き、情けと思うて御在家、御存知ならば教へてと、目にもつ涙ハラ／＼と、抑へ兼ねたる有様に、詞〽われこそと名乘つて聞かさうか。ア、いや／＼勿體ない、師の御坊の警め。〽と、言うて遙々來たものを、知らず顔見ぬ顔が、どうなるものぞ不慙やと、胸にみちくる血の涙、こたへ兼ねて思はずも、わつとばかりに泣き給ふ。石童丸は目賢く、詞〽左程に歎き給ふのは、もし父上にはあらざるや。〽早う名乘つて給はれと、縋り歎かせ給ふにぞ、亂れ心の折節に、後ろの方の岩影より、師の阿闍梨の聲として、詞〽ヤアヤア苅萱、棄恩入無爲／＼の誓ひを忘れ給ふな。〽と、制せられて苅萱は、思上つて振返り、詞〽アさうぢや、迷うたり過つたり、今此三界悉是吾子何れをわが子と思ふべき、師の手前も面目なし。〽と、衣の袖を打拂ひ

今此三界悉是吾子　世の中の子供を皆我兒と同視して特に自分の子供と定まるものは無いといふ意

諸國修行　諸國を遍歷して佛道を研究すること

焦れ死　思ひ煩うて生命を絶つこと

張裂く　胸が張裂くる略で悲しさが溢れること

一萬座の護摩　一萬

打拂ひ、詞〽ハレ小賢しき小人かな。哀れを共に見棄てねば、我を父よと縋ること、汚らはしや忌はしや。おことが尋ぬる重氏入道、この山にはおはせしかども、諸國修行に出で給ひ、今は行方も知れざるぞ。急ぎ下山し母親の、病氣の介抱召されよ。〽と、つれなく言へど何處やらに殘る言葉のいやまさる。詞〽ナニ父上には行方も知れず、この山におはせぬとや。〽なう情けなや淺ましや。われはともあれ母樣が、焦れ死をなされうかと、そればつかりが悲しうて、あとへ戻るも戻られず、似た人にてもあるならば、敎へてたべとかきくどく、心ぞ思ひやられたり。共に張り裂く思ひをば、押隱して懷ろより、包みし藥を取出だし、詞〽これはこれ師の御坊の、一萬座の護摩を焚き、調合ありし妙藥、母御に用ひ看病あれ、來た道筋は難所にて、くたびれ足には叶ふまじ。こちらへ行けば花坂とて、平地も同じこと、馬もあり駕籠もあり、イザ／＼立つて行かれよ、〽と、心強くも引立てられ、石童丸は泣く泣くも、藥とあ

度の祈りの際焚いた護摩木の粉
藥とあるを力　藥と聞いたので急に力強くなること
心もとなさ　心配で堪らない意
引かるゝ緣　親子の血緣に引かれる事

るを力にて、押戴き／＼、是非も涙の泣別れ、迷ひの道を其處此處と、教へながらも苅萱は、心もとなさ思はずも、引かるゝ緣の友綱や、見えつ隱れつ慕ひゆく。

【解說】此曲は、筑前の城主加藤左衛門繁氏が、京都の禁裏守護時代に懇にした千鳥と云ふ女官を、側室として家に入れたところ、奧方牧の方との折合も惡からず、表面は姉妹もたゞならぬほど睦まじくゐたが、或日障子に映つた兩人の姿を見ると、兩人の頭髮が蛇となつて互ひに咬み合つてもつれ合つてゐる恐ろしさに、繁氏は忽ち發心して、家を棄て、妻子を棄て、側女を棄てゝ、行衞を晦まし、高野山に登つて苅萱と云ふ僧となつた。十年後にその事を聞いた一子石童丸が、母を勵まして遙々山へたづねて來る。それが此の山の段である。享保二十年八月、大阪豊竹座に上演した操淨瑠璃並木宗輔作「苅萱桑門筑紫轢」の一節を新內に節付したもので、作曲者は、中絕した富士松派を再興した名人魯中である。

差合　差し障りがあるといふ意

づか／＼と　忌憚なく言ふこと

假親しての御奉公　町人では御殿奉公が出來ないので懇意な武士が假親になり其の養女といふ格で奉公するのをいふ

味な處　妙な處からといふ意

問注所　裁斷所

密書　岩藤が惡事に

加賀見山舊錦繪（加賀見山）

草履打の段

ヘあと打見やり局岩藤、詞ヘアノ善六とした事が、わしの云うた事氣にもさへず、正直な生れ付き、ナント思はしやる、尾上殿、町人には珍しい氣恥しいあの善六、町人は卑しい者とサ感心した今の樣子、ヤコリヤこなさんにはチト差合ひであつたもの、オホヽヽ。おゝ妾とした事が、づかづかと氣の毒な、イヤコレほんに尾上殿、こなたの親元は金持なれど町人、假親しての御奉公、スリヤ今妾が言うた事、氣に障りやせぬか。ヘと、味な處から仕かける喧嘩、扨は何時ぞや問注所にて、密書を拾ひ置きし事、氣取つて今日の此仕儀と、思へばなほも外らさぬ顏。詞ヘコレハ又岩藤樣の痛み入りますお挨拶、ナンノマア私が、氣にさへますの何

關する秘密の手紙

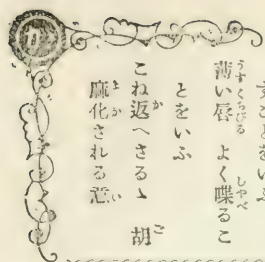
痛み入ります　恐縮する意

重い御奉公　中老を勤めて居るので重いといふ

不束　行屆かぬ意

柳流し　柳が風に靡くやうに、強く出ても輕く受け流すことをいふ

薄い唇　よく喋ることをいふ

これ返へさるゝ　胡麻化される意

ンノ彼のと、申す様な事が御座りませう。仰しやる通り町人の娘、親共がお出入の御縁を持ちまして、斯様な重い御奉公も、有難い此身の仕合せ、根が町人の私の事、さぞ不束な事許りで御座りませう。此上とても若藤様、憚りながら宜い様に、足らぬ事を御遠慮なう、お叱りなされてお指圖頼み上げます。〽と、柳流しのしなやかに、言ひ廻したる利發さよ。詞〽オウ何ぢや、町人の娘故、足らはぬ勝の勤め方を、妾に指圖してくれとかえ。オホヽヽ、おうつべこべ／＼と薄い唇ぢやなう。コレこなたの若い舌先で、これ返さるゝ妾でも御座らぬ。何のそもじの御發明で、妾が指圖を受けさうな事かいの。コレ、次手ぢやによつて言ひますが、こなたの親元は町人なれど金持、御屋敷のお金御用を勵みやるといふ。その用達し顔の高慢が、鼻の先にぶらついて、コレ此顔に見ゆるわいなう。上の事言ふではないが、金の威光は強ついものぢやぞや。其角とやらいふ徘諧師の發句に、コレ聞かしやれや。口切や汝を呼ぶは金

の事というて、此上とても金持面はやめにして下され、尾上殿。お役向はお中老、この岩藤は局役、お表ならば御用人格ぢやぞや。女子一通の事は勿論、萬一奥向へ狼藉者が斬入るか、又は盗賊などが忍び入る其時は役柄ぢや、女子ながらも御前の固め、打止める器量がなければ、イヤサ勤まらぬ奉公ぢやか、こなたも武家の奉公をさつしやるからは、薙刀の一手も心得て御座らうの、シテそれは誰に稽古さしやつたぞ。又お師匠さんの名は何んと言ひますぞえ。コレ／＼尾上殿、エ、こゝな人わいなう。人に許り口きかせて、こなたは耳でも潰れたか。へと、噛つけられて尾上は只、赤らむ顔を押し隠し、お恥しい事ながら。詞へその心掛は

詞 無いと言ふのか、ヤレ疎ましや氣の毒や、重い役を勤めながら、役向の勤め方を知らぬといふは、アノ何ぢやぞや、オ、ソレ、これがホンの祿盗人と云ふものぢや。イヤ知行盗人といふ者ぢや。盗人ぢや／＼、マ何んとさうではあるまいか。　と、卷くし掛けたる雜言に、無念の涙

そもじ　其方に同じ

用達し顔　屋敷の御金の御用は武士と對等の勢力が有るので高慢に見えると云つた詞

其角　元祿時代に江戸で有名な俳人

口切　舊暦十月茶の口切をやる茶の湯の會

お表　殿様の男の家臣の居る方を奥に對してをいふ

御用人　近侍の重臣

狼籍者　亂暴人
御前の固め　奥方を守護すること
打止める器量　打ち防ぐ手腕の意
薙刀の一手　武家奉公の女が第一に學ぶ表藝
疎とましや　嫌はしいとさけずむ詞
雜言　惡口をいふ
血の涙　口惜しい時の涙をいふ
刄物よごし　刄に血ぬること

保ち兼ね、齒を食ひしばり耐へける。詞へオ、泣かしやるか、チトこたへやう、口惜しからう。町人の娘ぢやとて、今では武家方の御奉公人、ほんにさうぢやわいなう。最前も言はしやるには、心づかぬ事有らば、御指南たのむと言はしやツたなう。どれ敎へてやらう。へと立上り、持つたる扇振上ぐれば、身を變はして打ち落す。手向ひなさば一と打と、懐刀拔き放せば、コレはと驚く女中達、尾上も今は堪り兼ね、共に拔かんと立寄りしが、ア、思ひ廻せば廻す程、大恩受けし御主人の、御先途も見屆けず、我身に過失有るならば、あとに殘りし親達の、御嘆きは如何ばかりと、耐へる辛さ苦しさは、胸も張裂く血の涙、身も浮く計り嘆きしは、傍で見る目も哀れなり。詞へ相手にならねば此の岩藤が恐ろしいか、又は怯れたのか、町人の娘故、刄物三昧は恐ろしい筈、オ、道理ぢや〳〵、そんならモウ納めませう。ホヽヽ〳〵こなたにかゝつて、これ見やしやれや、足袋も草履も砂まぶれぢやわい。イヤナニ尾上殿、

丁々 擲つ形容

此身の節々 身體の骨の関節をいふ

守り 草履を神佛の御符のやうに守として尊む意

大丈夫 男勝りの豪い婦人といふ意

辛抱な人 堪忍強いと驚嘆していふ詞

徒歩路拾ふ 往きは駕籠で來たのが歸りは氣散らしに徒歩うといふ意

茜 夕日が入際で空

この草履の汚れたのを、何んと拭いては下さらぬか。詞へアノ私に。詞へオイなう。詞へチエ、。詞へ厭か。詞へぢやと申してそれがまア。詞へフ、臆病者の腰抜に、刄物よごしをしようより、幸ひな此の草履。と、足に掛けたる土草履、尾上の頭丁々々。これはとばかり奥女中、氣の毒のあまり立騒ぐを、尾上は聲かけて、詞へア、コレ／＼、騒ぐまい女中達、岩藤様かこの尾上を、御意見の爲の御打擲、わしや有難うて有難うて、母さまの御折檻と。思うて此身の節々まで有難うて、詞へ忝い。イヤ申し岩藤様、生の親も及ばぬ御意見、有難う存じます。此上は武藝をも心掛けまして、御奉公を致しませう。又此御草履は、私が爲には御教訓の此の一品、申受けまして私が守。へと、懐中したる大丈夫、類稀なる忠孝に、流石の岩藤呆れ果て、口をつぐんで居たりしが、詞へウ、何ぢや。その草履を私に貰うて守にかける、アノ守に、テモ恐ろしい辛抱な人、意見したかひがある。以後はきつとおたしなみ、サ、行か

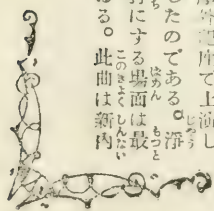
に茜さすことを顔にかけていふ

前後不覺　生體なく泣き崩れる光景

かゝへ引締め　扱帶をぎゆつと引き締めること

我身も消えて　自害するのを暗示していふ

う。へと、替草履、徒歩路拾ふも氣晴しと、歸る岩藤殘れる尾上、髮も亂れて我ながら、口惜しいやら無念なやら、顏は茜に急き逆上せ、耐らへ〳〵し溜め涙、一度にドツと伏まろび、前後不覺に嘆きける。數多の女中立ち寄つて、コレ〳〵申し局上樣、アノ憎體なお局の、氣質は常からよう御存じ、お腹立ちは御道理なれど、いつもの事ぢやと思召し、必ずお氣にさへられず、先づ〳〵屋敷へお歸りと、諫め立つれば泣く〳〵も、かゝへ引締め立上り、女心の一筋に、又思ひ出す口惜し涙、早寺々の暮の鐘、明日は我身も消えて行く、夕告鳥のなく〳〵も、打連れ館へ急ぎ行く。

【解説】享保九年松平周防守邸の奥向にあつた草履打ちの事實を、天明二年正月容揚黛が「加賀見山舊錦繪」の外題の下に脚色し、江戸薩摩外記座で上演し非常な評判を取つた。それをいつしか新内にも取入れて節付したのである。淨瑠璃狂言としては十段から成つてゐるが、岩藤が尾上を草履打にする場面は最も高調に達した場面で、當時の御殿女中氣質をよく顯はしてゐる。此曲は新内としては珍らしく高尚がゝつた曲である。

人毎に悪者　盗人の隠家なので来る人も〳〵皆が悪者だといふ詞

お瀧さん　五右衛門の女房で五郎市の継母

三上堅田　共に近江の地名

落雁屋　菓子屋

母さんの當り　母親の待遇

懇ろに酷ひ　大層に冷酷だとの意

胴慾　酷い仕打

釜淵双級巴（継子責）

継子責の段

へ暮らしゐる。来る人毎に悪者の、三上の百助、堅田の小雀、遠慮もなくズット入り、詞へエお瀧さん、縫仕事御精が出ますの。詞へコレハコレハ二人づれで、ようこそ。主は昼寝、何ぞ用なら言ひ置いて。詞へイヤサ、用と言うてからが商賣づく、コレこの小雀が在所、堅田の落雁屋に嫁入があつて、しつかりと土産、今宵躍り込む相談に、暮方から金藏が所へ寄合ひます。扨と雀よ、次手に今のを言はぬかい。詞へわれ言へ。詞へハテわれやア言ひに来たぢやないか。詞へそんなら餘の事でもござんせぬが、お瀧さん、昨日こゝへ五郎市殿が使ひに来て、今の母さんの當りが懇ろに酷い。詫言してくれてゝ、イヤモウ如才のない言ひやう、十一

異な事の挨拶　をかしなことを云ふと咎める詞

天下の法度　天下の禁令

懺悔　悔い改める事であるが、爰では讒訴の意

一蹴り　二人の言つた忠告を一蹴するをいふ

腹からぬ　腹を借りて生れて來なかつたと云ふ意

公事は判けた　訴訟

や二で思ふやうにはあるまいし。詞へコレ／＼雀どの、憎うて酷うしませうか。詞へサア／＼、それもあるてや。あんまり可愛いと胴慾が交じつて、繼子憎みになるもの。詞 ハテ異な事の挨拶、繼子を憎むが天下の法度か。こなた衆の所まで、懺悔を言うて行く息子、あんまり可愛うは御座らぬ。へと、一蹴り蹴られて、詞へウム道理々々。百よ、聞いて見ればお母さまの方が尤も相な。繼子憎むは世界の大法、兎角息子どのが腹借らぬがあやまり、公事は判けた、來い。詞へオヽ去なう。へと、差別知らずが燃える火に、焚付かうて立歸る。辛き親をば親にして、尚も機嫌を取る花香、愛想に酌んで五郎市は、しとやかに立出で、詞 申し母さん、お氣が盡きやうと思ひ茶を入れました出花一つ。へと、差出す。早や小雀が言ひしを根に持ち、詞へ何ぢや茶を入れた。そりや誰が頼んで、そなたの飲んだ飲みあまり、口塞げに持つて來たか。詞へあの勿體ない、何の飲み餘りて御座りませう。初穗を汲んで參りました。詞

詞〽ウム、初穂を飲ましてこの母を追出すのか、飲めなら飲まう、どれおこしや。〽と、捥ぎ取る拍子に情けなや、仕立てし布子にざんぶりと、掛りや繋がる親子とて、藍海松茶とぞなりにける。我が過ちを子になする、繼母性根を現はして、詞〽ヤイこゝな粗忽者、代りのない晴着、ようこのやうに仕をつたな。〽と、取つて引き寄せ太股を、指先強く二つ三つ、四つ目の紋の摘みぞめ。なう悲しやと五郎市は、逃げ廻り手を合せて、謝まりました今度から、嗜みませう堪忍と、詫る口元もおろ／＼涙。詞〽また泣くか吠えるか。〽と、聲はしたなき折からに、人の女房の上水を、呑みに廻る小鮒の源五郎、門口より差覗き、詞〽コリヤア又親子喧嘩でえすか。性懲りもない息子どの、笑止な和郎。〽と、座を占めて、詞〽コレお瀧さん、繼子の世話を焼かずとも、私しが言ふやうにならんせんかいなう。人にばつかり思はせて、氣強いお人。〽と、當擦する。詞〽また鮒殿、ちやう／＼とそんな機嫌ぢやないぞや。あつたら

の判決は定まつた　即ち何方が善い悪いがわかつたと云ふ意
差別知らず　無分別の者に軽侮する詞
燃える火　お瀧の怒りを譬へていふ
焚付かうて　薪を加へて益々燃えるやうにしたとの意
花香　茶の銘
お氣が盡きやう　魂が盡きるだらうといふに同じ

初穂　一番最初のことをいふ

おこしや　寄こしやに同じ

藍海松茶　いろ〳〵な色の斑點のこと

繼母性根　意地の惡いことをいふ

上水を呑みに　惡戯ふことを小鮒の名に因んで上水を呑みにと譬へていふ

小鮒の源五郎　堅田に住む惡漢

笑止な和郎　氣の毒

口にお風〳〵い。詞へサアその風に實が入つて、傍へ寄ると震ひ付く、機嫌直しに一寸こゝな。へと、手を取つて、無理に引込む太股を、プツ、り。詞へア痛、ア痛タ、、、こりやアノ繼子殿の相伴した。扨も手ひどい御馳走し。へと、顔をしかめて擦りゐる。へオ、よい氣味、傍に告手のあるのも構はず、好んで痛い目なさるゝ。へと、上手ごかしをコリヤなると、思うて何がな追從に、憎さ繼子を取つて引立て、詞へヤイ告手とはこの和郎か、目かりのないちよふッぽりどい、奥へ行つて貰はう。へと、酷いを馳走に蹴飛ばせば、五郎市ムッと目に角を、立て甲斐もなき親の前、詮方涙押かくし、泣く泣く奥へ入りにける。詞へサア見る人もなし、聞く人もなし、主のあるこなさんに、言ひかけるからは命づく、首を先へ投出さうか、胴から下を受取る氣か、彈み切つた御返事を。へと、しなだれ懸るをそッと外し、詞へ夫五右權門幸ひ宿にゐらるゝ。その通り申し聞かせ、きつと御返事致させん。へと、立上れば、詞へア、

な子供といふ意

口にお風　口が風邪をひくといふ意で戯言を冷笑す詞

プッツリ　抓めること

上手ごかし　巧に言ひくるめられるをいふ

コリヤなる　コリヤ出來るわいと獨り合點

目かりない　目が離されぬこと

主のある　亭主の有

これ〳〵、それ言はれてたまるものかい。よい〳〵さうあるからば、此方も意地づく、破れかぶれ、御大切に思召す、お連合のあくぞもくぞ、言ふ所へ行て申すおやまで、ドリヤお暇申す。〽と、ゆすりかけ、たつをお瀧は引止め、詞〽そりやこなさんも同じ仲間。詞〽サア、その仲間か言ふからは確かな證據、首投出して、と申すは此所。惚れかゝつてぞつこん火へ陷るも關はぬ氣、ナント應と言ふ氣はごんせぬか。詞〽オ、けうと〳〵。それそれ親仁の足音、アイ〳〵呼ばんす。モウそこへ、そりやこそ此處へ出てくるわ。〽と、威せばウロ〳〵うろたへるを、無理に押遣り押出し、晩に晩にと一寸逃れ、二寸伸びたる鼻毛の小鮒、内儀のごみに醉はされて、跡をも見ずして逃げ歸る。五郎市樣子聞きながら、聞かぬ振にて奥より出で、詞〽申し母さん、父さんのお目が覺め、夕飯上ろとおつしやる。私据ゑませうか。〽と、問ふも恐はぐ〳〵。詞〽オ、そりや私が仕ませう。その代りには縫仕事取置いて、あと掃いて、日暮に

ること
弾み切つた　キツパリとした意
しなだれ　戯れること
悪ぞもくぞ　よくない行ひを残らずぶさまけるの意
同じ仲間　同じ盗賊仲間といふ意
けうと　吃驚していふ詞
ごみ　鮒が泥や芥に酔うたやうに畑にまかれてといふ意

なつたら火を點し、門も締め、庭も掃き、使ひ自から風呂の水、言付けずとも汲んで置きや。子供使ふもエ、世話。へと、言ひつゝ奥へ入る影を、打ち眺め打ち眺め、恨み涙にくれけるが、あゝ思ひ廻せば我身ほど、親に縁なき者あらじ。眞の母さんある時は、父さんに氣兼する。今また父さん眞のなら、母さんが隔りて、よい事しても氣に入らず、外町より来る者まで、見侮つて足にかけ、蹴り踏んだり何事ぞ。この家に浮々暮すなら、まだ此の上に何のやうな、恐ろしい目に逢はうも知れず、何處へなりとも逃げ行かんと、表をさして駈出でしが、詞へほんの母さんの所は覺えず。へ何處をしやうと、立戻り、又駈出しては行先の、當ての無いのに引かされて、行きては戻り戻りては、巷に迷ふ幼子の、途方に暮れて居たりける。

【解説】此の曲は、元文二年七月並木宗輔が書卸して大坂豊竹座に上場した「釜淵双級巴」の操淨瑠璃の一節で、石川五右衛門の女房お瀧が、先妻の遺子五郎市に難癖を付けては責折檻するといふ筋を、新内に直して節付したもので、作曲者は四代目富士松加賀太夫から魯中となつた中興の名人である。

與話情浮名横櫛（源氏店）

〽江戸紫の二度染は、名のみゆかりの玄冶店、夜は往来の音絶えて、朧に照らす宵月夜、今を盛りに咲く梅の、白きに目立つ黒塀に、粋な見付の細格子、内ぞゆかしき糸竹の、音締も冴えし本調子、一中節〽名にし近江の八景を、筆のすさみに全盛の、此處にうつして三井寺や、暮れて花咲く鐘の聲、〽折から表へ二人連、顔の名代の彫青は、鳥無き里の蝙蝠安、少し遅れて足早に、来るは名うての向疵、顔はスッポリ手拭に、隠せど何處か成田屋の、與三と知らるゝ姿素振、肩で風切り来たりしが、慥に此處ぞと門の口。詞〽えてはこゝか。詞〽此の家よ。手前外に居や。ほんの小使取りだアな。堀を見越しの松の影、暗き所に佇めば、安は格子をガラリと開け、詞〽ヘイ、眞平御免なさえやし。〽障子をそろりと、詞〽ヘイ御新造さん、此間は大きに御厄介になりまして、有難う御

二度染　脚本の節を直して浄瑠璃に作つたからいふ

玄冶店　日本橋長谷川町の新道、その玄冶店を源氏店と直したので名のみゆかりと云ふ

細格子　細かい骨のきやしやな格子

糸竹　三味線

名にし近江　お富が浚ふ一中節の文句

蝙蝠安　地廻の遊人の名

名うて　名代の意

成田の與三　成田屋（八代目團十郎）の與三といふ意

肩で風切る　威張る形容

えて　目的の代物お富のこと

御新造さん　町家の妻女を呼ぶ敬稱

湯治　温泉場へ出養生に遣ること

御難　不仕合せで景氣がよくないこと

だれらあ　手持無沙

座います。〽と、云へばこなたは主のお富、詞〽オヤ、誰方え。〽と、三味線を傍へに差置き行燈の、火口差向け顔眺め、詞〽オヤ、お前は何時ぞやのお方、何しにお出で。〽と、尋ぬれば、詞〽へイ、又少しお願ひがあつて参りました。詞〽お願とはえ。詞〽外の事でも御座いませんが、友達が喧嘩をしまして、大怪我をしやしたから、まあ湯治にでも遣らうと思ひますが、いやもう御難で仕様が御座いませんから、御近所を少々宛お願ひ申して歩きます。ヤイこつちへ入れや。俺がだれらあなあ〽と、手拭を冠りし儘に片隅に、腰打ちかけたる無作法を、見て見ぬふりの流し目に、煙草輪を吹く長煙管、トンとはたいてさあらぬ體、安は小膝を撫でながら、詞〽エ、此の野郎でえ御座います。ヤイ御挨拶申しや。詞〽エ、何分御願申しやす。〽と、挨拶すれば。詞〽オヤ何の事かと思つたら、その事かえ。生憎く旦那も留守、又さう／＼は妾にも。詞〽そりやさうでも御座いやせうが、たとへ旦那が御留守でも、澤山の事

汰になる意。
小膝　膝と云ふに同じ
目に角立て　目を鋭くして怒る意。
隠し賣女　私娼のこと
勝負事　博奕をいふ
お上　政府、お役所
しがない暮し　貧しい暮らしのこと
お黿ぐるみ　柔らかい絹物を着て贅澤をしてゐる意
小本　人情本

ぢや御座いやせんが、どうにかして　おくんなさいやし。へ味に匂はす詞の端。お富はムツと目に角立て、詞へそれぢや何だか絡んだ云ひ様、妾の家で隠し賣女や勝負事の宿を仕やしまいし、何もお前方に斯う付け込まれて、無心を云はれる覺えは無いわねえ。詞へそりや、おつしやゝ迄もなく、そんな事がありや、お上が打棄つちやお置きなさらねえ。この内が、天秤棒を肩にかけ、しがない暮しをする所なら、てんで此麼ことを申しは致しません。お前さんなどは年が年中お黿ぐるみ、寄席や芝居へ行くより外、仕事と云つちや鐵瓶の、蓋をちん〳〵いはせながら、小本を讀むのがいゝしきで、結構な御身分、どうにかしておくんなさいやし。へと、わざとあたりへ聞けがしに、がなりたつたる恐もてを、居合はす手代の藤八が、あまりのことと聞き兼て、詞へいや〳〵申し、最前から默つて聞いて居りましたが、何を云ふも主は留守、せう事がないことぢやげな。處で私が扱かひませう。詞へ仔細らし氣に懐中より、百

扱ひ　其場をさばくこと
百錢　百文錢
不承して　我慢しての意
おきあがれ　馬鹿にするなの意
いけ容態　いやに容態ぶること
唐變木　分らず漢だと罵る詞
雪駄　草履の裏の尻に鉄を付けた履物
歷乎　立派な確かりした

錢一枚取り出し、紙に捻ねつて渡せば、安は受取、詞へ何だ〳〵、これが御挨拶か。詞へさア、少ないが不承して笑うて去んでなはれや。へ皆まで云はさず。詞へおきアがれ、扱かひだの挨拶だのと、いけ容態に吐しやがつて、百や二百の端した錢を、わざわざ此處まで貰ひには來ねエ。詞へそんなら此の錢要らんかい。詞へ要らねい、要らねい、あんまり人を馬鹿にするな、唐變木め。まご〳〵すると足つ骨叩き折るぞ。詞へこりや豪ウ六ケ敷なつて來た。恐や〳〵、此麼所に長居は恐れ、お富はん、どれお暇しへと、ねつき舞ひ、周章て奥へ馳け込んで、柱でこつつり、あ痛ちこ、額へ抱へて勝手より、雪駄片足に足袋かたし、履いてとツかは逃げ歸る。へお富は可笑しさ押隱し。詞へマア靜かにしておくれナ。近所隣へ聞えても、薄格好が惡いわネエ。私だとて、歷乎とした主のある身、何もお前方に彼れ是れ云はれる筋は些つとも無いが、兎やかう云ふも面倒な、是でも持つてお歸り。へと、煙草の箱の小曳出し、明

壹分　額銀の略、今の廿五錢

苦勞人　苦勞をして來てよく物の分る人

生云ふな　生意氣な口をきくなといふ意

連尺　背につけて重い物を負ふ器具

豪勢　大層な勢ひといふ意

氣勝者　勝氣の者をいふ詞

長らへ　生き存らへ

けて取り出す壹分一とつ、紙に拈つて投げやれば、安は這ひ寄りちよつと取り、詞〽コリヤ有難うござえやす。〽と、云ひさまひねくり、詞〽へ、、、これだからお内儀さんで無くつちやヤいけねえと云ふのだ。ナア與三、這がお内儀さんは苦勞人だ。これ見や一分下すつたぜえ。サアお禮申して歸らうぢやねえか。詞〽ウンニヤ厭やだ、歸らない。何んだそれつばかり、返へしてしまやナ。詞〽ヱ、、是れ生云ふな、ヱ、何故そんな事を云ふのだ。折角譯を云つてお貰ひ申したに。詞〽イヤサ、少ねヱから少ねえと云ふのだ。詞〽ソリヤまた何故だ。詞〽ハテ、たつた一分で、禮をいひ、貰つて歸へる場所も有り、たとへ百兩貰つても、默つて歸へれぬ所も在らア。おらア此處の家へ連尺付けて、背負て立つのだ。これから己が掛合ふのを、默つて聞いてゐや。〽と、尻引ん巻くり押し上り、坐はり込んだる權幕に、這がの安も呆れ果て、詞〽豪勢豪くなつたなア。〽と、口をつぐんでひかへ居る。詞〽モシおかみさんヱ、

の略

しがねえ戀　果敢ない戀といふ意

木更津　上總の海濱で、與三郎が半殺しにされて海へ投げ込まれた場所

谷七郷　鎌倉には扇ヶ谷、比企ヶ谷など谷の字の附いた名高い所が七郷あつた

押借　無理に金錢を借り入れること

白化け　白らばつく

お富さん。〽と、言へば此方は素知らぬ顔、與三はぢり〳〵摺り寄つて、詞〽コレサお富、久し振だなア。〽と、手拭取つて差し出す、顔に數ヶ所の刀疵。ぎよつとはせしが氣勝者、顔つく〴〵と打眺め、詞〽馴染でもないこなさんが、私をお富と云ひなさるは、詞〽見忘れたか與三郎だア。〽ヤ、、夢か現か幻か。詞〽どうしてお前はながらへて。〽と、云ふ顔ぢろり打眺め、詞〽しがねえ戀の情が仇、命の綱の切れたのを、どう取り留めたか木更津から、廻ぐる月日も三年越、江戸の親にも勘當受け、據所なく鎌倉の、谷七郷を喰ひつめても、面に受けたる看板の、疵が勿希の調法に、切られの與三と異名を取り、押借ゆすりを習ふより、馴れた時代の玄冶店、その白化けの黑塀に、格子造りの圍ひ者、死んだと思つたお富さん、無事で暮して居やうとは、お釋迦様でも氣が付くめえよ。よくも手前はながらへて、達者で居て呉れたなア。詞〽お前も無事で健な顔、ようまア見せて下さんした。〽と、縋り付いてぞ泣き

れて居ることにかけていふ

囲ひ者　外妾をいふ

磯めぐり　磯際を歩くこと

だんちふ　男女といふ事を與三の役の團十郎にかけていふ洒落

身の業　身の因果の意

庚申　叶へを捩つていふ

嬉しい夢を結ぶ　關係が出來た事をいふ

居たる。〽詞〽とは云ふ物のお前をば、生れもつかぬ傷者に、したも私の心から、さぞやお前の親御さん、私を恨んでござんせう。〽思ひ出だせば早三年、過ぎし彌生の汐干狩、浦の春風吹き誘ふ、浮氣の蝶を道づれに、外面白き磯めぐり、浪の花貝櫻貝、拾ふだんちふの其中に、水際のたつよい男、好いたらしいと思うたが、愚痴な心になり始め、迷ひ始めの胸の雲、照る日も曇る物思ひ、とても及ばぬ戀路ぞと、心で心をたしなめても、神の罰やら身の業やら、馬鹿らしい程忘れねば、野暮な様ちやが神いぢめ、佛なぶりも人知れず、好きな煙草も斷つた今、無理な願ひも庚申、庚申堂ぞ夢になと、せめて逢瀬の仲立ちと、嬉しい夢を結ぶ間も、覺めて果敢なき縁ぞと、悔み嘆くぞ道理なり

【解説】此曲は嘉永六年三月江戸中村座で、八代目市川團十郎のために瀬川如皐が書き卸した「與話情浮名横櫛」の源氏店の強請の場を改作して新内に作曲したもので、明治初年頃に鶴賀派で流布した淨瑠璃である。

道中膝栗毛（彌次喜多）

組打の段

〽都路は、五十路あまりに三つの宿、時得て花の旅烏、今は古巣を打ち棄てゝ、浮かれ出でたる心同志、男は裸百貫の、笠に同行二人連れ、心猿意馬のから尻に、乘つた姿は判じもの。ハイシイ道中膝栗毛、駒も勇むや春風に、枝を鳴らさぬ並木原、長閑けき空や賑はしき。建並んだる茶屋の軒、行かふ(往來の)道者を呼立つて、詞〽サア〳〵お休みなさい、〳〵、お中食のお支度をなさいまし。詞〽東海道四谷の名物、栄螺の壺燒をおあがんなさい。詞〽天窓までピン〳〵のぼる諸白もございます。詞〽四五日後に焚立ての御飯も、ござります。お休みなさい〳〵。詞〽お休み〳〵〳〵の、〽聲も白河馬の上、居眠る彌次郎兵衛目を覺まし、詞〽ア、眠い〳〵、馬子さん、モウ何時だ。詞〽ハア七つ過ぎだ。詞〽後の

都路　京都へ上る道筋
時得て　機會を得て
心同志　氣の合つた友達同士をいふ
花の旅　春の旅
同行二人　昔は遍路などの旅笠に同行二人何某と書いたものだ
心猿意馬　心の淫らなことであるが爰では單に馬のことをいふ
から尻　半量の荷を

負はせた道中馬
判じもの　判じ物の繪の略で今の漫畫のやうだといふ意
道者　神佛へ參詣の道中者を云ふ。こゝでは道中の旅人の意味に用ひてある
四谷　藤澤から平塚へ往く間の並木原
諸白　上品な酒
白河　白河夜船の意で居眠して知らないこと

馬はどうした、篦棒に遲いな。詞〽ハア今に來るだんべい。時にお前方昨夕神奈川泊りで、御女郎でも買つたと見えて、エラ居眠るな。詞〽オヽサ、昨夕神奈川の大黑屋で、遊者女郎を總揚にして、夜中騷いだ。詞〽ハアその隣り座敷に寢て居たかね。詞〽馬鹿いふな、眞の事だ。詞〽ハヽヽ、時にお前方は、お江戸は何處で、あに商賣だね。詞〽おうさ、問はれて何の某と、名乘るやうな町人でもなし、身は住馴れしお膝元、水道の水を產湯に浴び、おギヤアと泣いたが口惜しい位、鯱鉾を横に睨み、處は神田の八丁堀、栃面屋の彌次郎兵衛といふケチな野郎さ。詞〽ハアあんだはや、長くて早くて、チツトモ分らねえ。そして後から來る人はえ。詞〽あれかい、あいつは私の所の飯焚さ。詞〽ハア道理で顏かお玉杓子のやうだ、ハヽヽヽ。ヤレこの畜生め、今の先尿をこいて、又垂れるか、サツサと步め。〽馬は豆が好き、馬子酒が好き、載せたお客は女郎が好き。詞〽ハイ〳〵。〽轡の音も勇ましく、追立て來たる喜多

七つ過ぎだ　今の午後四時過ぎ

大黑屋　大きな女郎屋の名

總揚　買切にすること

問はれて何の某　幡隨院長兵衛の臺詞を眞似ていふ洒落

お膝元　將軍家の居城があるのでいふ

水道の水　水道の水で産湯を浴かしたといふ自慢の詞

鯱鉾を　江戸城の天

八が、馬子は後から聲立てゝ、詞へヤイ熊谷の次郎、待ちろ〳〵。あとの立場で玉織姫に頼まれた、疝氣の藥を買ふうち、エラ遲れたなア。詞へオ、無官の太夫か。早く、ふツぱれふツぱれ、旦那方はお江戸の衆だ、ゲンコやヂバのお酒代は、御如才ねえ、なあ旦那達。へと、言ふに喜多八けてん顔。詞へオイ馬子さん、貴樣達は今聞くに、無官の太夫だの、熊谷の次郎だのと言ふが、一向に解せねえ。一體マアどういふ譯だえ。へと、問ひかけられて、詞へオ、わからぬ筈さ。わしらア在所の鎭守樣のお祭に、毎年々々素人狂言ノゥしますが、今年は一の谷の組打がよかつぺエと相談が極り、わしが役が熊谷の次郎、あとの男が無官の太夫、玉織姫は庄屋の小旦那、あにが毎晩々々狂言の稽古しますが、田舍者は無器用で覺えられましねえ。そこで狂言の仕舞ふまで、熊谷の次郎よ、無官の太夫よと、お互に言ひますから、それでお前方に分らぬ筈さ。詞へハヽ、アそれでわかつた。そんなら貴樣が敦盛か。ハヽヽ、大笑ひだ

鯱瓦の家根に付いている鯱鉾をいふ
神田の八丁堀　今の神田新銀町
尿をこいて　馬が小便をするのを罵る詞
立場　馬や駕を立てる場所で休息茶屋をいふ
玉織姫　一の谷の組打の場に出る敦盛の許婚の姫
ゲンコやチバ　賃錢の符牒でゲンコが

敦盛が聞いて呆れる、まづい面だ。詞〽ハアこれでも田舎ぢや村一番の色男だ、ハヽヽヽ。詞〽ハヽヽ彌次さん聞いたか。詞〽ヤ聞いた所か大笑へだ。時に馬子さん、あの男も私も今度據所なく、上方へ抱へられてゆく江戸の役者だが、一の谷の狂言なら、チト稽古が仕てやりてえな詞〽ハアそんならお前方はお江戸の役者衆か。ハヽヽ大笑ひ、モシヤクシヤが聞いて呆れる。可笑しげな顔だ。あとの人は色は生白いが、薄間抜な顔付、またお前がのは日焼け年の南瓜のやうに赤光りだ。アハヽヽ、。詞〽おきやあがれ、田舎者はそれだから困るッてんだ。論より證據一の谷の狂言なんざあ朝飯前だ、なあ喜多八。詞〽違へねえ〳〵。幸ひ邊りは松並木、遙かに聞ゆる浪の音、馬の毛色も白栗毛、一の谷の狂言には、揃ひに揃ひし道具立、一番やつて見せてえな。〽と、聞いて二人の馬方ども、誠らしくは思はねど、見るは法樂道すがら、歩きながらの見物と、詞〽そんならやつて見せさつしやい。然しながら芝居の馬と違

五百文、チバが二百文

酒代　御祝儀

けてん顔　吃驚した顔をいふ

素人狂言　素人芝居

飯盛　宿屋女中から轉じて宿場女郎を呼ぶ詞

おきあがれ　默りやあがれの江戸詞。

朝飯前　容易なといふ意

見るは法樂　見るの

うて、生きてゐるからその氣で頼みますぞ。サア〳〵一の谷の狂言始り〳〵。と、おだてに乘地行きがけの、駄賃馬なる彌次郎兵衞喜多八、口から出任せ出鱈目文句。口三味線も今更に、引くに引かれぬこの場の仕誼、手綱かいくり聲張上げ、かゝりける所へ後方より、おゝい〳〵と聲をかけ、駒を早めて追駈け來たり、ヤアそれへ打たせ給ふは、平家の大將軍と見奉る。まさなうも敵に後を見せ給ふか、引返して勝負あれ。

詞〽かく申すそれがしは、武藏の國の住人、栃面屋彌次郎兵衞、見參せん。返させ給へ。〽と、扇を上げてさし招き、暫し〳〵と呼ばはつたり。敵に聲をかけられて、何か猶豫のあるべきぞ。喜多八駒を引返せば、彌次郎兵衞も進み寄り、互に打物抜きかざし、朝日に輝く劍の稻妻、駈けよせ〳〵、丁々、蝶の羽がへし双鐙、駒の足並かつし〳〵。かしこは須磨の浦風に、鎧の袖はひら〳〵〳〵、群れゐる千鳥むら千鳥、むらむらパツと引く潮に、寄せては返し返しては、又打かくる虚々實々、勝負

は無代の意
駄賃馬　駄荷を乗せて送る道中馬
まさなう　卑怯にもの意
打物　太刀をいふ
双あぶみ　両馬の鐙
むら〳〵パッと　千鳥の飛び交ふ光景
虚々實々　切り結ぶ手の激しさをいふ
いそうれ　いざ來れの意
深田　泥田をいふ
放れ駒　馬子の手を

も果しあらざれば、いそうれ組まんと駈寄るはずみ、ハット驚く二人が馬、跳ね立て蹴立て散々に、引けどしやくれどイツカナいかな、右手に小高き麥畑、小笹茅原踏み倒し、躍り上り飛び上り、二人は詮方情けなや、眞逆樣に喜多八を、深田へドウと跳落す。一生懸命彌次郎兵衛、鞍壺にしがみつき、その儘荒れ行く放れ駒、雲を霞と夕空に、跡追駈けて二人の馬子、行方知れずなりにけり。こゝに無殘や喜多八は、日も暮れ果てし深田より、漸々に這ひ上り、詞〽アイタ、、、恐ろしい目に逢つた。アイタ、、、踏み殺されぬが仕合せ。オ、寒い〳〵、彌次さんは何うしたか、眞暗闇だ。馬に乘つて迷子になつては、さつぱり方角が知れぬ。何處を見ても灯りは見えず、人通りはなし、山の中か知らん、ア、氣味が惡い。オ、着物は濡れる、腹は減る、寒さは寒し眞暗がり、ほんに意苦地はねえ。ア、恨めしいは彌次さん。斯うなる事の知らせにか、爲ずともよいに醉興な、馬から落ちる一の谷、これこそほんの彌次馬か

放れた馬　雲を霞　姿を見失ふことをいふ

鷺が鰌踏む　鷺が田の中で餌にする鰌を足で探りながら押へ押へする形に譬へていふ

棕櫚箒も鬼　立て掛けた棕櫚箒が鬼に見えることをいふ

六道能化　地藏の稱

衆生濟度　世上一切の人類を濟度して解脱を得せしめる

と、途方に暮れてゐたりしが、詞〽ア、いつまで云うても返らぬこと、爰に斯うして居るよりも、當てずつぽうに行つて見ん。〽と、闇の畔道うろ／＼と、鷺が鰌踏む探り足、何か手先きへ冷やりと、ハット飛退き身を縮め、詞〽ア何だか出た／＼、眞白で冷めたい物だ。ア幽靈だ／＼〽御免／＼とへたばり伏し、怖々ながら袖の下、そつと覗いて、詞〽何だこれは石の地藏樣だ、吃驚した。怖い／＼と思へば棕櫚箒も鬼とやら、イヤ申しお地藏樣、お前樣は六道能化、衆生濟度の光明放ち、極樂へお導きとの事なれども、其義は追つてお賴み申しますが、さし當つて眞闇がり、往還へ出る道が知れず、今が迷ひの眞最中、どうぞお慈悲にお導き下さりませ。又一つには行方知れぬ連の彌次さん。〽何處に何うして尋ねたら、逢はれる事ぞ逢はしてたべ。南無大慈大悲のお地藏樣、江戸を離れて昨日今日、初手から難儀品川と、覺悟で出たるぬけ參り、跡は野となれ山となれ、平氣な面の川崎を、越してそろ／＼旅の恥、掻き捨

こと
よみもくだらぬ　神奈川を假名と洒落て綴つて讀みも下らぬといふ
留め女　街道で旅人の袖をひいて泊を誘ふ女
新子　年の若い私娼
程よし　愛想のよいことをいふ
朝直し　翌朝玉を付けて小酒盛をする意
よい程ケ谷　好い加

てにする神奈川の、よみもくだらぬ留め女、お泊ならば泊られせ、お風呂もどんどと沸いて居ます。その上此頃江戸からお出た、新子の良い子の、程よし、床よし、御器量よしが、お寢間のお伽も致します。何んの彼のとておだてられ、烏渡呼んだる一夜妻、枕並べて睦言に、よい程ケ谷と夢さへも、結ばぬほどに明烏、可愛〳〵に朝直し、別れに立てし誓文は、千も二千も三千も、宿屋の飯に喰ひ次第、それから其處を戸塚はて、急ぐとすれど長の旅、又道草にぶら〳〵と、紫匂ふ藤澤を、出ぬけて乘つた歸り馬、昨夕の馬に引かへて、貧すりやどんと田の中へ、おつこち最上の遣上り、面も布子も泥まぶれ、此のまゝ此處に野宿より、外に思案は泣く涙、鼻と涎は出放題、くどき立て〳〵、泣くは五月の蟇晴間を這出る如くなり。斯かるところへ彌次郎兵衞、かねて用意の小提灯、取つて返せし田甫道、足に任せて尋ね來る。見るに喜多八嬉しさの、冷めたさ、寒さ、ひだるさに、飛立つばかり思へども、身はづぶ濡のど

減の程を程ケ谷の宿にかける

戸塚はと 疾つかはと急ぐを戸塚の宿にかけた洒落

歸り馬 平塚の宿へ歸る馬

昨夕の馬 前夜の宿屋の酌婦

貧すりやどんと 貧すりや鈍するをもぢらせる

ひだるさ 空腹をいふ

胸を据え 度胸を定

ぶ鼠、吹來る風に身も凍え、呼ぶ聲さへも胴慄ひ、齒の根も合はぬ風情なり。難なく此處へ駈け來り、二人は顏を見合せて、詞〽コレ／＼喜多八、爰で野宿は易けれど、行かれる丈けは行つて見ん。幸ひ是なる畑道傳うて行かん。〽諸共と、互ひに手早く身拵らへ、荷物も共に引抱へ、甲斐／＼しくも彌次郎兵衛、杖と笠とを喜多八に、しつかと持たせ傍を見廻し。詞〽木の根岩角踏外し、蹴つくな、ひよろつくな。〽と、漸々二人は土手の上、降りんと思へば吹き來る風、提灯消えて眞の闇、喜多八は胸を据え。詞〽野宿と覺悟極めし身の上、何か厭はんサア一緒。〽と、手に手を取つて一足飛び、ひらりと飛んだる膝栗毛、足に任かせて辿り行く。／＼

【解說】此の曲は有名な十返舍一九作の「東海道膝栗毛」の趣向を飜案したもの、作者は富士松魯中で、節付も無論自身である。藤澤から平塚へ往く途で戻り馬に乘り、馬子が村芝居で一の谷を演るといふので、己れ達は江戸のお役

者様だと自慢して、彌次郎兵衛と喜多八が組打の型を見せると、馬が荒れ出して喜多八は田甫に落され、彌次郎兵衛は馬と共に行方が知れずになるといふ滑稽場である。今日では大概喜多八が田甫へ落された處まで語つて、後半を省略するやうであるが、後半に喜多八の驚かせどころがあり、結末の芝居がゝりの遣取も面白いので、全部掲げることにした。

注

めることをいふ
膝栗毛　膝をもつて栗毛の駒にかへると云ふ意に出づ長の道中を徒歩であるくこと

草枕　旅寢のこと
三保が崎　駿河の江尻から海中に突出した松原
浮島が原　富士の麓の地で憂きにかける
吉原　駿河の驛次、五十三次の一つ
白酒唄　白酒賣が言ひ立てにうたふ唄で次の「富士の白雪」が其の文句
富士川　日本三急流の一、甲斐から流

道中膝栗毛（彌次喜多）

富士川の段

へ草枕、ゆふべ／＼に敷捨てゝ、かはる野山の八重霞、箱根を越えて故鄕は、山又山に隔たりし、富士を目先に三保ヶ崎、流石に旅は浮島が、原、吉原の名にし負ふ、白酒唄の拍子よく、富士の白雪朝日で解ける、娘島田は寢て解ける、解けたらどうするエ、解けて流れて行く水に、浪の花咲く富士川を、漲り落す高浪に、往來の人を留めけり。こゝに彌次郎兵衛喜多八は、のらりくらりと旅鰻かの唐人の川留に、烟草スパ／＼呟きて、詞へコウ／＼彌次さん、繪の付かぬめくり札のやうに、よく寢るなあ。何とこの川もいゝ加減にあきさうなものだ。詞へされぱさ、段々と旅人は多くなる、宿の手當は惡し、モウ／＼倦き／＼した。詞へ違へねえ／＼、コレ彌次さん、何と出來ねえ相談だが、川端へ行つて淸姫

をやらかしたらどうだ。詞ヘナニ清姫とは何の事だ。詞ヘソレお前日高川の淨瑠璃を知つてるだらう、オヽイ〱その船渡してたべ、早う早うと。詞ヘヤ此奴は面白い。そんならこゝで下稽古に、俺が船長になり掛合でやつて見やう。サア〱喜多八、始めろ〱。詞ヘ合點。ヘ着きにけり、早や月代もさしのぼり、隈なく見ゆる向の岸、小船舫うて船長が、笠傾けて眠りゐる。詞ヘ嬉しやこの川越え行かば、上方までに一のし。ヘと、聲をはかりに、詞ヘオヽイ、此の川早う渡して給べ、早う早う。ヘと、呼はるに、寢耳にびつくり彌次郎兵衛、目をすりこすり佛頂面。詞ヘ誰だ〱、早う〱とけたゝましう起しやあがる、たツた一人の船賃取るとて、この川留に船を廻せば、腕もたまらず、第一危いわい。川が明いたら渡してやる。詞ヘいゝや、川の明くのを待つならば、此のやうに息せき引張り頼みはせぬ。伊勢參宮から京大阪まで、ぶらりぶらりと行かねばならぬ者、チヤツと渡して下さんせ。詞ヘナニ上方筋へ行

れて駿河に入り蒲原の東を海に入る

川留　水嵩が増して激流になるので川を渡さぬこと

日高川の淨瑠璃　竹田小出雲、近松半二等合作（寶曆九年）の「日高川入相花王」で清姫が安珍を追ひ蛇體となつて川を越す筋

一のし　一氣に行けると云ふ意

佛頂面　佛頂上

人の画像のやうな顔で愛悄氣無い面
船を廻せば　船を漕ぐこと
なまくら者　怠け者轉じて道樂者
路銀　旅費をいふ。
苦しがり　貧乏人
尻くらい神田　尻喰ひ觀音を神にかけていふ
右や左り　乞食のいふ文句
薦かぶり　酒樽の薦を乞食の被る薦に

くと言やれば、今度江戸から來た二人のなまくら者、ヤそれならばなほならぬ。コリヤこの川留のうち有りたけの、路銀殘らず使ひ切らせ、行きがけから乞食させるのぢや。渡すことはならぬ。〽ならぬとツコ怒鳴る。これなう、それは胴慾ぢや。たとへこの川越したとて、そなたに損も難儀もかけまい。思ふ所へ早う行きたい。元より知れた苦しがり、江戸を出る時尻くらひ、神田の土地をこそ〳〵と、夜逃同然やう〳〵と、才覺したるこの路銀、使ひ果したその上は、右や左のお旦那樣、いかにお酒が好きぢやとて、薦かぶりも中くらゐ、乞食をしても大食ひ、少しばかりぢや食ひ足らず、餓死うよりの外はない。不愍と思ひ此の川を、越して下され、渡してたべ、慈悲ぢや、情けぢや、功德ぢやわいなう。これぢや〳〵と手を合せ、拜みつ詫びつ身を悶え、怒鳴り散らすぞ間拔けなる。詞〽あにやかましい頓痴奇野郎、叶はぬ事をぐづかはと、トコ吠えたり饒舌つたり、息筋張るので寢られぬわい。但し渡さにや餓死ぬ氣

かけていふ
頓痴奇野郎　間抜野郎に同じ
息筋張る　筋を立てヽ喧ましく罵ることをいふ
百尋千尋　川の底の深い譬
滅相　素的に美しいといふ意
間の唐紙　部屋と部屋の間を仕切つた襖
將棋倒し　將棋の駒が倒れるやうに重

か、コリヤ面白い。俺や今まで人間の干物を見た事がない。さらば人間の干物が所望ちく〳〵。詞〽と、喧嘩仕掛と見えにける。今は詮方難儀の場所。詞〽ホヽウ渡さぬとてこれまで來て、のめ〳〵江戸へ歸られうか。川渡らいで濟まさうか。〽この水底へ沈まば沈め、死なば死ね、念力通さで置くべきか。百尋千尋も何のものかは、渡つて見せんと身繕ひ、犢鼻褌しかと引き緊めて、川へザンブと、詞〽飛込まうと思つたが飛込めねえ。詞〽なぜ〳〵。詞〽どうして泳ぎを知らねえ。詞〽アハヽヽヽ大笑へだ、アハヽヽヽ〽と、笑ひのうちに彈き出す、隣り座敷の三味線に、耳欹てヽ彌次郎兵衛、そろりと覗く襖の穴、小聲になりて、詞〽コレ〳〵喜多八、マア滅相な代物だ。詞〽何だ彌次さん、女か〳〵。詞〽女どころか美しい、震ひ付くやうだ。詞〽ヘンうまく言ふぜ。詞〽うまい所か年増でも、新造でもお望み次第。詞〽コレ彌次さん、少し見せねえ。詞〽マア待て〳〵、この穴は今日一日俺が借切だ。詞〽コウ〳〵、そ

なつて倒れること
桑原　雷が鳴る時難を避ける呪文
世直し　世が善く直りますやうにと、地震や火事の時いふ詞
金切聲　甲高く金を切るやうな叫び聲
問屋場　驛路の事務を扱ふ所で宿役人が出張してゐる
目無鳥　盲目を譬ふ
市子　赤神子、梓神子などの轉化した

んな意地の悪い事を言はずと、拜むから少し見せねえ。詞〽マア待て待て。詞〽コレサ、少し見せて。詞〽マア待て。詞〽少し。詞〽待つた。〽と、引合ふ機み、間の唐紙押倒し、隣り座敷へ眞うつ向け、將棋倒しに轉げ込む、内には吃驚三四人、女の聲の仰山に、桑原々々世直しと、上を下へと喚きけり。亭主も驚き駈上り、この場の樣子合點行かず。詞〽お前方は何となされた。〽と、問はれて瞽女が金切聲。詞〽我等は三人ながら、目が見えましないから、何うした事か分らないが、雷樣と地震殿と、一度に落ちたと思ひやんしたよう。詞〽ア痛／＼、目こそ見えぬが鼻筋は、横の方へ通つて、よい鼻だと褒められた大事の鼻をすりむいた、ア痛／＼。詞〽コレおつえサア、わしはハア、又問屋場の馬が放れて、こゝの二階さアへ、鼠でも取りに來たかと思ひやんしたよう。ア痛／＼、額へ瘤が出來たア、痛／＼。〽と、目無鳥、口を揃へて囀れば、傍に聞きゐた女連、言はずとそれと市子がさし出で、詞〽私どもは瞽女さ

のて死人や生きてゐる者の口を寄せる怪行者の女
木綿襷　言ふにかけていふ
筬ばたき　煤拂に筬で叩くやうに塵を立てる意
向ふ　先方
尾籠　失禮に同じ。
五郎助ホー　梟の啼き聲
南鐐一片　二朱銀一枚をいふ
生口　生きてゐる人

ん達と道連れになり、泊り合せた巫子で御座ります。アノ二人が唐紙を押倒し、背骨の折れるほど打ちました。女と侮り馬鹿にして、詞〽濟まぬ、／＼と猛り立て、瞽女は尚更見えぬ目を、眞白にむき出し、きかぬ／＼と木綿襷、巫子は疊を筬ばたき、叩き立てられ兩人は、向ふへ疵を付けながら、痛み入つてゐたりしが、彌次は亭主に打向ひ、詞〽イヤモ、承りまして驚き入りました儀で御座ります。一體この者儀、生國よりよく存じ、確かなる者に御座候故、我等同道に罷り出で、貴殿方に一宿仕り候處實正也。然る所、此の者寢ぼけて小便に起き戸惑ひ致し、皆樣に尾籠なること推參仕り候段、何共申譯御座なく、是に依つて、誤證文奉公人請狀、ごたまぜ仍つて件の如し。〽と、言ふより市子は、詞〽晝日中、戸惑ひする馬鹿者が、何處の國にあるものか詞〽イヤモお疑ひは御尤も、此の男には取憑ものが御座ります。一體親が殺生好きで、親の因果が子に報ひ、梟と木兎と一時に取憑き、晝日中

の口を寄せること
車座　大勢圓陣を作つて座ること
押へつ　盃のやり取り
一拳　拳を打つて酒を賭ける
五勺の酒　當時の流行唄

少しも目が見えませぬ、時々木兎の鳴く眞似を致します。〽と、言ふより喜多八眞面目顏。詞〽五郎助ホウ〳〵。詞〽アレあの通り。詞〽五郎助ホウ〳〵。詞〽默らぬか、誠に困りきります。〽と、聞くより亭主おつ取つて。詞〽粗忽とあれば是非がない。皆様が不承して、然しながら少しでも疵があれば、膏藥代のその代り、江戸のお客様に南鐐一片はづんで、川留の慰みに、瞽女さんに何ぞ唄はせ、また市子さんには、お前の女房様か、又色女の生口でも寄せて貰ひ、それで双方仲直り。〽と、聞いて皆々氣もほどけ、丸く納る車座に、早や持ち來たる酒肴、さいつ押へつ盃に、飲めや唄へや一寸先きは、闇雲瞽女が高調子、巫女は鈴振る燗徳利、また代り目の、コラ押へはうるさい、一拳しよ。しめ〳〵よいやさのお廻り、醉うた、醉た〳〵、五勺の酒に、よい〳〵〳〵よい機嫌と、旅寢の憂さも何處へやら、流石に永き春の日も、忘るゝ酒の德ぞかし

【解説】此の曲は前と同じく魯中の作で、彌次喜多の兩人が吉原宿で川留に遭ひ、宿屋に泊ると瞽女や市子が矢張り川留で泊り合はせてゐるので、例の好色から種々な滑稽を引き起すといふ筋である。安政元年七月江戸中村座の夏狂言の二番目に三代目櫻田治助が脚色した「旅雀我好話」の外題で、中山市藏が彌次郎兵衛、中村鶴藏が喜多八で上演した膝栗毛が非常な評判で、今日義太夫や新内で語つてゐる膝栗毛のチヤリ場は此時出來たものだと云ふ。

市子　死人や生きてゐる者の口寄せを行ふ梓神子

下戸は知らぬ「醉醒の水の味下戸知らず」の句から取つていふ

手向山「此度は幣も取りあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵」（百人一首）

梓弓　市子の使ふ小弓

四大天王　持國、増長、廣目、多聞

道中膝栗毛（彌次喜多）

市子口寄の段

〽さあ〳〵、これから市子さんの口寄せの番だ、彌次さん先きへ。〽と汲み來たる、下戸は知らぬか水の味、市子が前に手向山、紅葉の錦縫箔の、帛紗解く〳〵梓弓。詞〽そも〳〵謹み敬つて申し奉る、上は梵天帝釋四大天王、下界には閻魔法王、五道の冥官。〽我朝は神の初め、伊勢に神明天照皇、内宮に四十末社、外宮に四十末社、雨の宮には風の宮、月讀日讀の御尊、天の岩戸は大日如來、出雲の國の大社、神の數が九萬八千七社なり。佛の數が一萬三千四靈の靈場驚かし、こゝに請じ奉る。詞〽この時此方の先祖代々の佛達、弓と矢の番ひの親、一郎殿より三郎殿番も替れ、水も替れ、變らぬものは、五尺の弓、一打ち打てば寺々の、佛壇に響く納受、ヤレなつかしや、よく水を手向けて下さつた、私が枕

の四つの天上
五道の冥官　地獄に在りて五道の衆生罪を裁判する冥官
番も替れ　死人の順番が代り合ふこと
枕添殿　連れ合、夫のこと
水を手向殿　彌次郎兵衛のこと
お袋　母をいふ
裏ほしや　裏地の布が欲しいといふのを怨めしやにかけていふ

添殿も出たかろけれど、この節は地獄の門番になつて、暇がないから私ばかり出申した。詞〽コウお前は誰だえ。詞〽ハア私は水を手向殿のためには唐の鏡だ。詞〽彌次さん唐の鏡とはお前のお袋の事だ。詞〽ナニお袋だ、お袋なんかに用はねえ、出直せ〳〵。詞〽ナニ唐の鏡に用がなくば、私はそなたの枕添だ。詞〽コウ符牒ぢや分らねえ。枕添とは何の事だ。詞〽彌次さん枕添とは、お前の死んだ嬶の事だ。詞〽ヤレ厚かましくも、よく水を手向けて下さつた。私はこなたのやうな意苦地なしに連添うて、一生食ふや食はずに、寒くなつても袷一枚着せたことはなし、單衣一つ、ア、ラ裏ほしや〳〵。詞〽堪忍してくれ、俺もあの時分には工面が惡く、苦勞仕死にしたが、殘り惜しい。南無阿彌陀佛〳〵。詞〽彌次さんお前は泣くのか、ハ、、、、こりや可笑しい、鬼の目に涙だ。ハ、、、。詞〽忘れもしない、其方は横根を踏出す、私は濕疹をかく。詞〽オ、サ、あんな困つた事はなかつた。思ひ出してもぞつとする、南

工面　家政、懐工合
横根　瘡毒の一種
子寶　子供のこと
脾胃虚　胃病で衰弱すること
日なし　毎日なし崩に拂ふ借金
店賃　家賃のこと
置き失くして　質に入れて流すこと
結構な所　極樂を指していふ
付け届け　回向料
長死をすると　長生をするに綟つてい

無阿彌陀佛〳〵。詞〽タツタひとりの子寶は、脾胃虚して痩せこける。米はなし、日なしはせがむ。大家さんからは店賃の催促。詞〽ア、もう〳〵言つてくれるな、胸が張裂けるやうだ。南無阿彌陀佛〳〵。詞〽それに私が奉公して、折角溜めた着物は、みんな置き失くしてしまひ、質は逆さに流れ申さぬ。詞〽その代り手前は結構な所へ行つてるだらうが、俺は今に苦勞が絶えねえ。南無阿彌陀佛〳〵。詞〽なに結構どころか、小さい石塔は建てゝくれても、寺參りはせず、付け届けもないから無縁同前、今では石塔も垣根の下になり、時々犬が小便をひツかける。ほんに長死をすると、色々な目に逢ひ申す。詞〽オ、尤もだ、堪忍してくれ、南無阿彌陀佛〳〵。詞〽その辛い中で、そなたの事は片時も忘れぬ。どうぞ早く冥土へ來て下され。軈て私が迎ひに來ます。詞〽ア、これ〳〵、飛んだ事だ、〳〵。遠い所から、必ず〳〵迎ひに來るには及ばねえ。詞〽言ひたい事は澤山あれど、あの世の使ひが繁ければ、彌陀の

ふ
あの世の使ひ　冥途から迎への使者
山の神　女房の異名
亡者　死人
玉屋がしやぼん　玉屋が莨の先から吹くしやぼん玉
川明　水嵩が引いて川を渡すこと
夜越　夜に入つて川を越すこと
一本ざし　道中ざし一本のこと
蟇皮　ひき蛙の背の

淨土へ歸り申す。詞へと、口寄が、冥土の途から暗闇の、恥をわざ〱明るみへ、並べ立てられ彌次郎兵衛、佛になつた山の神、死んで來いとはさりとては、あんまり酷い情けない。結構はツこの極樂より、勝手の知れたこの娑婆で、モウ百年もその上も、生きると覺悟極めしを、どうして亡者になられうぞ。俺やいつまでも死にはせぬと、零す涙は大粒に、玉屋がしやぼんの如くなり。折もザワ〱表の方、ソリヤ川明と夕空に、待ちあぐねたる人々は、各自に荷物杖笠と、騒ぎ立てられ詮方も、泣く〱立つて彌次郎兵衛、ちつとも早くと身拵らへ、喜多八聞くより、コレ〱彌次さん、晩にも知れぬこの日和、又留められては大難儀、かねて夜越しと存ずれば、川端へ參りし時、四十七騎のその中にて、竹森喜多八と名乘かけ、船賃出さぬその計略。へホ、、、天晴れ〱さりながら、一本ざしでは叶ふまじ、油斷大敵いかに〱。へ何さ〱、そこはぬからぬ喜多八が、手段の蟇皮をかう延ばせば、何方から見ても刀と見

える。今一本はお前の脇差、これをちよつくらチョツトかうさして、武士なんぞはどでごんす。詞〽オ、出來た〱。〽氣の毒ながらお前は小者詞〽荷物擔いで彌次郎兵衛參れ。詞〽ネエ。〽川端さして急ぎゆく

【解說】此の曲は前の富士川の段の下の卷ともいふべきもので、彌次郎兵衛が市子の口寄せで、死んだ女房に逢つて謝罪するところ等は抱腹絕倒すべき筋である。此の曲の行はれない前までは「膝栗毛」の淨瑠璃として劇場に脚色されたのは悉く義太夫のみであつたが、魯中の作出で、新内の「膝栗毛」が劇場を支配するやうになつた。最近では昭和二年二月新橋演舞場で坂東彥三郎の彌次郎兵衛、守田勘彌の喜多八で、尾上菊五郎が巫子に扮し非常な好評を博した。

やうに皺のある皮で作つた刀の尻鞘
武士なんぞ　武士でだちとは何うだとの意
どでごんす　何うでござるの意
小者　下僕に同じ
ネエ　下僕の返事の聲色

道中膝栗毛（彌次喜多）

安部川の段

〽鳥が啼く、吾妻をあとに都路へ、五十三次ゆく鹿島立、波靜かなる品川に、時待て咲くや二人づれ。〽神田々々の八丁堀、勇み兄いの栃面屋彌次に誘れた喜多八が、荷さへ内所の氣も輕く、來かゝり見れば船もなく渡しもゐぬの川端に、ほつねんとして佇めり。詞〽おゝ〳〵彌次さん、コりや大きな川がある、船もなし、どうして渡るんだらう。詞〽オツト喜多八、そこはこの彌次さんといふ孔明が付てゐるから、方寸のうちにありさ。ずつと落付てゐなせえ。時に貴公瀬踏して見給へ。詞〽どうして〳〵忽ち流されてしまはアな。詞〽もしお前が流されたら、俺ひとり江戸へ歸る分のことだ。詞〽オイ〳〵彌次さん、不人情もそこまで行きてえネ。何しろこの川には困るな。詞〽喜多八そこに心配は要らねえ。

鳥が啼く　東の枕詞

都路　京都へ往く道

鹿島立　旅立をいふ

八丁堀　今の神田新銀町

勇み兄い　職人肌の江戸つ子

荷さへ内所　荷が無いをかけていふ

ゐぬの川端　居ぬを犬の川端即ち犬が食べ物を探してぶら〳〵歩いてゐる状にかける

孔明　智恵者を喩へていふ
方寸　胸の裡をいふ
瀬踏　深いか浅いか試験に川を渉つて見ること
目無し　盲目をいふ
智恵袋　妙計を考へ付くこと
汀　岸の水際
お半長右衛門　お半が長右衛門に負はれて桂川を渉る浄瑠璃「桂川連理柵」の一節をいふ

ソレ後から来る人を先きへ渡し、その跡でこの彌次さんが渡ると言ふのだ。喜多公どうだ〳〵。詞〽此奴は奇妙々々。それぢやアこゝで一服やつて待つとしやう。〽烟草は辛苦を忘れ草、後へ遅れて杖つきの野道山道手を引いて、越えて目無しの二人連。〽わしが思ひは鹽屋の煙り、仇な浮名が立つわいな。詞〽コレおめくよ、大層な水音だよ。詞〽コレ父さま、怪我さつしやるなよ。詞〽案じる事はねえ、龜の甲より年の功だ。詞〽小石拾うて投込んで、浅瀬を計る水音に、こなたは浮む智恵袋。詞〽コウ〳〵喜多八、盲目が二人やつて来て、親仁が娘を負つて川を渡らうてんだ。娘の代りに負さつて渡らうぢやねえか。詞〽彌次さん見付かると不可ねえから止しねえ。詞〽なに關ふものか、二人とも盲目だ。噺き合ふとは白浪の、汀に脊を出す間も、遅しと負はれ彌次郎兵衛、難なく向ふへ渡りゆく。詞〽コレ父さま、未だかアよウ。詞〽アレ、われ何時そッちへ渡り返したゞ、タッタ今渡してやつたに。詞〽あに言つてる

だア。おら、さツきから、こゝに待つてゐるだに、早く渡してくらツしやれ、日が暮れると狸が出て來るといふぢやねえか。詞〽エ、仕方がねエ。待て〳〵今渡してやるから、又そつちへ戻るでないぞ。〽座頭は又も立戻り、脊を出せば喜多八が、手早く肩におぶツさり、舌を出すとは露知らず、獨り呟く目なし鳥。詞〽コレおめく、かうしてわれを負つて川を渡る所を人が見たら、お半長右衛門だと言ふであらうな。〽逢瀬嬉しき睦言に、結ぶ帯屋の軒も早や、詞〽コレ父さま、川の中であに吐鳴つてゐるだ、早く渡してくらツしやれ。詞〽アレ、われまだ陸にゐるのか。そんなら今俺が負つてゐるのはあんだんべい。詞〽大方狸だんべい。詞〽エ、こん畜生め、川の中でくたばツてしまへ。〽川の深みへ投込んで、座頭は二人手早くも、身繕ひして立上り、宿ある方へ急ぎ行く。跡に喜多八手をもがき、詞〽ア、彌次さん助けてくれ。詞〽喜多八そこは淺い、ソレこの棒につかまツて立て。〽立て〳〵〳〵、立て又次の旅人

逢瀬嬉しき　桂川の浄瑠璃の文句

立て又次の　扨て又次のを洒落ていふ

土左衛門　溺死者のこと

評判〳〵　見世物小屋の木戸口で囃す詞

深川竹　深いことに深川の苦界の勤めを云ひかける「蘭蝶」にある文句

半七さん　「三勝半七」の浄瑠璃にあ

るお園の口説き文句
相撲取を夫に「千両幟」の浄瑠璃にある稲川の女房の愚痴の一節
智恵満々　智恵が身體に一杯のこと
道行　男女の駈落に擬して二人が仲よく連立つをいふ

は、川の眞中へ投込まれ、あちらへヒヨロ〳〵、こちらへヒヨロ〳〵、とゞの詰りは土左衛門で御座りやす。詞へコウ〳〵彌次さん、人が川の中へぶち込まれて、苦しがツてゐるのに、見世物ぢやあるめえし、評判〳〵ツて囃すのは、あんまり非道いや。そりや聞えぬぞや彌次郎兵衛さん。へお前と私の其の中は、深川竹の憂き勤め、まして馴れ染めモウ五年、子までなしたる半七さん、相撲取を夫に持てば、共に消ゆるも厭ひはせぬが、四五年前に兩親に、不思議に逢うて嬉しやと、何を言ふやら埒もなく、漸々岸邊に這上る。詞へハヽヽ、智恵満々たる彌次さんの、眞似をするから、其麼目に逢ふのだ。詞へそんな事を言はずと、早く着物を絞つてくんねえ。オ、寒い、ハツクシヨ。詞へそれ見ねえな、風を引いたらうぢやねえか。サアサア早く道行と出かけやう。へ手を引合うて兩人は、宿を尋ねて急ぎ行く。

【解説】此の曲は「膝栗毛」の鹽井川で彌次郎兵衛喜多八が盲者を欺く筋を借りて安部川に直し、魯中が改作して新内の節を附けたものである。

道中膝栗毛（彌次喜多）

赤坂並木の段

關の東　箱根の關所から東、こゝでは江戸をいふ

都方　京都のこと

二川　周章を云ひかける、鷲津と吉田(今の豐橋)の間の小驛

岩穴の觀世音　二川の西北五丁の丘上にある岩屋觀音

御油の宿　三河の小驛で渥美灣に面する地

並木原　松並木の街

〽いでやこの、春の景色の麗かに、往きくるさの客人も、袖ふり映えて面白や。これはこの關の東に住む、喜多八、彌次郎兵衛と申す者にて候。扨もこの度都方を、一見せばやと思ひ立つて候。殊更けふも早や日暮れて、道を急ぎ候ほどに、宿を取らばやと存じ候。東路を、いつしかあとに三河路や、あた二川も打過ぎて、歩みに馴れぬ旅疲れ、物岩穴の觀世音、御燈の影もほの暗き、御油の宿をも出離れて、並木原にぞ着きにける。喜多八傍に荷を下し、詞〽ヤレ／＼草臥た、／＼。このまア彌次さんは何してぞ。〽と、あと先見廻し、詞〽ア、早く來ればいゝにな。あとの茶店で聞けば、この松原には惡い狐が出るといふ事だが、ア、暗さは暗し提灯は無し、何だか、うそ氣味の惡い事だなあ。〽この彌次さ

道をいふ
門止　宿々の川入口の門を閉ぢて通行を禁止すること
眉毛を濡らす　眉毛に唾をつけて眼を明かにする意
コン　狐の啼聲
作り聲　狐のやうな細い聲を出す意
錢一本　藁の緡に通した錢
ちよろめかし　人目を掠めて盗むこと
鹽井川　遠州の掛川

んはなぜ遲い。草鞋が切れたか門止かと、跡を見やりつ伸上り、眉毛を濡らす跡よりも、彌次郎兵衛は喜多八が、かねての臆病知つたれば、威してやらんと木隱れし、思ひ付たる狐の面、手拭の端引結び、顔へスツポリ引冠り、差足抜足後より、詞〽コン。〽と、一聲。詞〽ア、御免なさい、〳〵、惡い狐とは申しませぬ。誠によいお狐様と申しました。御免々々。〽と、言ふ聲は、歯の根も合はず、膝ガタ〳〵。彌次郎兵衛俄かに作り聲。詞〽やい。詞〽ハイ。詞〽やい〳〵やいのおんやらやいのやい。詞〽ハイ〳〵〳〵のオンハイハイのハイ。詞〽おのれは〳〵憎い奴、今日も今日とて駕籠舁どもの、錢一本ちよろめかし、酒肴を奢りし事、よもや忘れはしをるまいな。詞〽ア、申し〳〵お前様、よう御存知で御座います。あれはホンノ出來心、慾氣では御座いませぬ。詞〽ヤイ〳〵まだある〳〵。鹽井川では故もなき座頭の肩に負さつて川を渡り、剩さへ座頭の買つた酒肴を盜み喰ふ、アノこゝな横着物めが。詞〽

ア、申し／＼、その代り尻が割れて、その酒代はみんな私が拂ひましたから、その勘定は濟んでをります。詞へヤイ／＼吐かすまい／＼、まだある／＼。日坂の泊りでは、信濃越後の婆が所へ忍んでうせ、佛壇の中へおつこち、其の騒ぎをおのれが連れの、佛様のやうな彌次郎兵衛に塗りつけて、おのれはぬく／＼知らぬ顔、重々の不届き者、その代りにこれを喰らへ。へと、傍にあり合ふ馬の糞、枝に突ッかけ差出だせば、詞へエ、その馬の糞を私に、詞へおいやい。詞へエ、。詞へ厭か。詞へぢやと申してそれがまあ。詞へ食はねば連れ行く、サア行せい。詞へア、申し、／＼、私は子供の時分から馬の糞は不調法で御座ります。此の儀ばかりは御了簡。詞へ然らばこの以後、汝の連れの、彌次郎兵衛の申す事、何に依らず背きはせぬか。詞へハイ／＼。何も背きは致しませぬ。詞へウムそれならばこの荷物を汝が荷物と一緒にして、赤坂の泊り迄擔いで、行け。詞へエッ。詞へサア早や持て。詞へハイ。詞へ早や擔げ、何

の手前にある川

故もなき　縁故も無いと云ふこと

尻が割れ　發見されることと

日坂　金谷から西へ一里半計りの宿

佛壇の中へ落ち　二階の簀子天井を突抜いて階下の佛壇に落ちたことをいふ

佛様のやうな　温和いことの譬

不調法　嫌ひの意

赤阪　次ぎの宿

うぢ／＼　愚図／＼することと

面妖　不思議なといぶかるをいふ

九尺二間　棟割長屋をいふ

吸付煙草　女郎が格子先で吸付て出す煙草。降るやうなは、助六の白をきかせたのである

さし擔ひ　荷物に棒を通して二人で擔ぐことをいふ

をうぢ／＼するごいやい、行けと言はゞ行かぬかヤイ。詞〽ハイ只今參りますわいの。〽と、荷物取上げつくづく見て、詞〽ハテ面妖な、此の荷物は私が連れの彌次さんの荷物に似たやうな。〽と、恐々眺める姿素振。詞〽ヤアお前は親分彌次さんぢやないか。コウ／＼非道い目に遇はしたな。〽と、言へば彌次郎兵衛吹き出し、詞〽アハヽヽヽ、箆棒め、いかに臆病でもあんまりだ。アハヽヽヽ。詞〽コウ／＼笑ひ事ぢやあねエ、惡い洒落だ。只さへ恐い／＼と思つてる所へ、思ひがけなく後から、コンと言はれちやあ、どんな者でも吃驚するわ。詞〽サア／＼喜多八、早く赤坂へ行つて泊らう。詞〽モウこれからは二人連だ。恐い事も何にも無え。狐め出て見ろ、誰だと思ふ、お江戸は神田の八丁堀、九尺二間に城廓構へ、十二文で汲ませる水道の水で磨き上げた喜多八樣だ。吉原へでも行つて見や。あッちでも喜多はん、こつちでも喜多はんと、吸付煙草の降るやうな男だ。狐め出やアがれ。詞〽アハヽヽ、喜多八、そんなに

坂は照る〳〵　馬子唄の文句
卵塔場　墓場のこと
荷物解いて取出す　荷物を解いて雨合羽を取出すをいふ
筍笠　竹の皮で編んだ冠り笠
天秤棒　兩端に荷を付けて擔ぐ棒
づない日　非道い日に同じ意
有樣　事實をはつきりいふこと
肯かぬ　ゆるさぬと

力むと又今のコンが出るぞ。詞〽アア御免だ〳〵。何の恐いと思へば恐いし、恐くないと思へば尚恐い。こんな所に長居は恐れだ。〽さあ〳〵行かうと二人が荷物を、一つにからげてさし擔ひ、坂は照る〳〵鈴鹿は曇る。詞〽ウントショ。詞〽ドッコイショ。詞〽コリャ彌次さん、押してはいけねえ。マア〳〵待ちな〳〵。何だか向ふの方に白いものがチラ〳〵見えるが、あれはマア何だらう。詞〽ドレ何處に。詞〽ソレ藪の傍に。詞〽ウムあれは弔ひの提灯だ。詞〽ヘンうまく言ふぜ、また俺を威すのか。詞〽何の、よく見ろ。詞〽成程提灯だ〳〵、そんならこゝは卵塔場か。ア、氣味が惡い、〳〵。何だか首筋元からゾク〳〵する。エ、折惡うまた雨だ、忌々しい。〽と、呟き〳〵、荷物解いて取出す。身の毛もよだちてぼろ〳〵と、降り出す雨の足もとへ、チョコ〳〵〳〵と小坊主が、姿にも似ざる筍笠、徳利片手に歩み來る。それと見るより喜多八が、詞〽そりや出た〳〵〳〵、化物だ〳〵。彌次さん油斷せまいぞ。

云ふ意
せちがへ　責め付けること

〽と、ぶるぶる震へば彌次郎兵衛、詞〽しよほ〱雨の薄暗がり、德利をさげた小坊主、江戸で繪に見る一つ目小僧、打ちのめして化の皮、現してくれんず。〽と、幸ひあり合ふ天秤棒、腕に任せて打ちのめせば、詞〽あ痛、〱、父やい、誰やらがづない目に遇はせをるわい。〽と呼はり喚けば駈け來る親仁、此の體見るより彌次郎兵衛が胸ぐらしつかと取り、詞〽ヤイこの伜に何咎あつて、可哀さうに打ちのめした。サア有樣に吐しをらう。背かぬ、〽背かぬとせちがへば、喜多八見るより、コリヤ堪らぬ、許せ〱と一散に、後をも見ずして逃げて行く。

【解說】　此曲は「膝栗毛」中で最も劇的趣味の多いところから、舞臺上には屢々かけられてゐる。彌次郎兵衛が御油から赤阪並木へ掛るところで、同行の喜多八を威す滑稽場で、言葉が多く隨分難曲である。作者の鶴中は初め鶴賀派に在つて加賀八太夫と稱し、嘉永から安政へかけての名人であつたが、故あつて鶴賀を脫し、富士松を再興した。其れがため鶴賀派の淨瑠璃を語ることを禁ぜられてゐたので、新たに「正夢」「石童丸」「佐倉宗吾」等と共に此の「膝栗毛」を作曲して語り始めたのである。

咽喉の佛様　咽喉に凸出した骨、俗に咽喉佛をいふ
五合道斷　言語道斷の洒落
一升のお願　一生のお願の洒落
堪二升　堪忍しやうの洒落
三升　參上の洒落
四升言はず　しつかう言はずにの洒落
五升　後生の洒落
一分　今の二十五錢
九兩とは面白い　究

道中膝栗毛（彌次喜多）
卯塔場の段

〽彌次郎兵衛は狼狽聲、詞〽ア、申し〳〵、お前の子とも存ぜず、化物ぢやと思ひ違ひ、打ちましたは大粗相、眞平御免下さりませ。詞〽イヤ〳〵、聞かぬ〳〵。折角買うた五合の酒、雫も殘さずこぼしてしまひ、小さい者を酷たらしう、ようも非道い目に合したな。〽と、ぐツと締むれば、詞〽ア、申し〳〵、それでは咽喉の佛様が潰れます。少しゆるめて下さりませ。ア、五合の酒が零れたとは、五合道斷お氣の毒、代は私が出しますから、一升のお願ひ、堪二升とおつしやて下さりませ、屹度お禮に三升致します。四升言はずと御量見、コレ五升で御座ります。詞〽エ、此奴洒落どころか。詞〽ハイ〳〵お腹立は御もつとも、疵養生の膏藥代を出しますから、どうぞそれにて御勘辨。詞〽それならば赦してや

れらに九兩を洒落ていふ
地口　口合の洒落
間男代　むかし、姦通の謝罪金は七兩二分と相場がきまつてゐた
松の木見るやうな腕　腕の太いことの譬
了簡がならぬ　勘辨が出來ないこと
南無三　南無三寶の略、しまつたと云ふ意
氣もとつかは　氣も

る、サア金出せ。詞へハイ幾ら上げます。詞へオ、命代りには安いものだが十兩に負けてやるわ。詞へエ、飛んだ事をいふ、十六文の膏薬を、百貝つけても一分で餘る。二分に負けなせえ。詞へイヤならぬ。詞へ二分がならずば三分よ。詞へエ、駄目だ。詞へそんなら四分か。詞へエ、しぶとい、ならぬ／＼わい。詞へ申しそれでは出來ねえ相談だ。言ひ値ぢや高い。詞へオ、そんなら一兩負けてくれうわい。詞へエ、十兩の中を一兩負けて九兩とは、面白い地口だ。然し間男代でも七兩二分が當り前、マア知らずば半分値さ。詞へウム五兩に負けいか。ア、安いものだが負けてやるわ、サアその金渡せ。詞へエ、お前現金かえ。詞へ知れたことだ。詞へハイ只今勘定致します。コウト私が咽喉がお前の松の木見たやうな腕で、グット締上げた苦しみが四苦八苦、四九三百匁を五兩として、あとが八九七十二匁とすれば、お前の方から少々おつりが參ります。詞へヤさま／＼の痴言、もう了簡がならぬ／＼わい。詞へと、力に

息き／＼と云ふ意
經帷子　死人に着せる白布の衣服
角帽子　死人の額に當てる三角に折つた紙をいふ
野寺の鐘　田舍の寺の鐘の聲
ハクシヨ　嚔をいふ
御油の宿　二川と吉田との間の宿
お力落し　自分で落膽を慰める詞
とつくり　悠つくりに同じ

任せ引摑みグツと締むれば、〽ア痛々々、それでは死ぬる、／＼＼ウーム。〽と許りに息絶えたり。流石の親仁も吃驚し、詞〽南無三、此奴死んだわ。〽と、口に手を當て、これ幸ひと、彌次郎兵衛が帶くるくると引ほどき、スツポリ剝いだる丸裸、卵塔場よりとつかはと、經帷子に角帽子、手早く着せ代へ、詞〽サアこれでチツトは腹が癒た。膏薬代のその代り、〽着物荷物を引浚ひ、千松こいと手を引いて、足早にこそ立歸る。次第に更けゆく夜嵐に、連れて降りくる雨の音、野寺の鐘のかう／＼と、いと物凄き並木の陰、松の雫か潤ひの、ゾツト身に泌み彌次郎兵衛、息吹き返し起き上り、邊り見廻し／＼て、詞〽ハクシヨ、オ、寒い／＼、ヤ此所は何處だ。俺やマア一體どうしたのだ。エ、先づ御油の宿を離れて、喜多八を威してやらうと、狐の眞似をしたわ。それから小僧が來たを化物だと思ひ、打ちのめしたわ。喜多八は逃げたわ。そこで親仁に締付けられ、それから跡は何にも覺えぬが、はア此奴は夢か知

命日　死んだ日に同じ數字の日をいふ

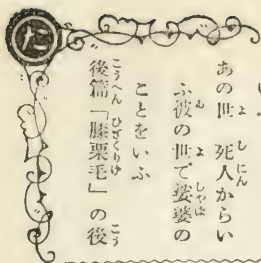
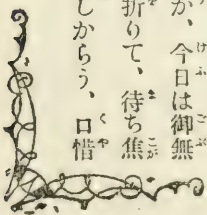
露知らず　露ほどもといふ意で、少しも知らぬこと

使ひの人　飛脚をいふ

かんぺい　からうの訛り詞

魂魄　死人の靈魂をいふ

あの世　死人からいふ彼の世で娑婆のことをいふ

後篇「膝栗毛」の後

らん。オヽ寒い〳〵、ヤア向ふに卵塔場が見える。ウムして見りや夢ではない。まアどうした事。〽と、撫で廻し、詞〽ヤア俺が着てゐるのはこりや經帷子、そして額に三角な紙が當てゝあり、ヤアそんなら俺や死んだか、エヽお力落しの事だなあ。そんならこゝは冥土の途かいやい。淺ましい、心細い身になつた。こんな事なら嬶にも、とつくりと暇乞もしやうもの。こんなに早く死なうとは、知らなんだ〳〵。冥土の途は暗いと聞いたが、ほんに眞暗だ。どうぞ極樂の方へ、ぶらぶら行きたいが、さうは行くまい。娑婆にゐるうち、念佛一遍申した事はなし。親の命日に肴を食ひ、嘘ばつかし吐いて、借りたものは返した事もなく、どうして〳〵極樂へは覺束ない。然し極樂の近所まで行きたいものだ。アヽ心細い〳〵。〽かうなる事とは露知らず、嚊や後にて女房が、今日は御無事の便りもあるか、明日は使ひの人もやと、日を數へ指折りて、待ち焦れたる甲斐もなう、死んだと言ふこと聞いたなら、嚊悲しからう、口惜

篇をいふ

一九さん　「膝栗毛」の著者である十返舎一九自身をいふ

ごたまぜ　混た〳〵と交ぜ合ふこと

三瀬川　交ぜ合ふ三つのものを冥途の三途の川にかけていふ

しからう、逢ひたかんべい、顔見たかんべい。なぜ逢はせては下さんせぬ。魂魄あの世へ歸るなら、今一度嬶の顔見たや。それまでもなく今此所で、俺が死んだら後篇に、嘸や一九さんが困るだらう。それも悲しゝ嬶も可愛し、心一つを二道に、冥土の途に迷ふとは、何の因果か情けなや。どうぞ今一度生き返り、嬶に逢ひたい見たいわと身を悶え、すゝり上げたる水洟と、涙と涎とごたまぜに、落ちて流るゝ三瀬川、末は漲る風情なり。

【解說】此の曲は前の赤阪並木の下の卷である。化物と間違へて小僧を打擲したので、小僧の親爺が飛出して彌次郎兵衛を締めるので、喜多八は驚いて逃出して終ふ。親爺は彌次郎兵衛がまつたく死んだと思ひ、衣類を脱ぎ取り經帷子を被せて去ると、夜中に彌次郎兵衛が正氣付いて、己れの姿を見廻し、眞實地獄に墮ちたものと思つて悲歎するといふ筋で、滑稽な中に悲劇も交るので頗る難曲とされてゐる。

浪枕浮名高橋（高橋お傳）

浪之助毒殺の段

へ寄邊の磯の横濱港、吉田町なる魚清が、情を頼む食客、人目恥ぢたる二階住居、お傳が晝夜の看病に、煎藥の持ち運び、降りる階子の出合頭、店先より入り來る二人、慾の熊鷹キヨロ〱目玉、損料貸の眼八と、日なし貸の烏の權平、お傳を見るより、ヤア見付けた〱、今日は留守とは言はさぬ〱。詞へコレお傳どの、こなた夫婦がこの間、根岸の里に居候、その時癩病醫者の桑原雷庵が口入ゆゑ、ツイ一日と貸した損料、二日三日と言ひ延ばし、揚句の果には沙汰なしで、この吉田町へ宿換で、鼬の道とはいゝ度胸、顏に似合はぬ太つ腹、モウこの上は損料の滯り、二月足らずで二圓餘り。詞へオヽこつちも貸金の、耳を揃へて勘定さつ

寄邊の磯　開港場なのでいふ
魚清　義侠肌の魚屋の主人の名
出合頭　双方より行き會ふとたん
慾の熊鷹　慾張を罵しっていふ詞
損料貸　料金を取って布團などを貸す商賣
日なし貸　毎日なし崩の約束で小金を貸す商賣
根岸の里　横濱の南

しやれ、サア〳〵どうぢや。〽どうぢやとせり立つれば、お傳は騷がず落ちつき拂ひ、詞〽御尤もには御座りますれど、御存じの夫の病氣、〽旅から旅の泊りにも、人目を恥ぢて歩みもならず、廻る因果は人力の、幌は外さぬ餓鬼病み車、山路の草津、海邊の熱海、乏しき旅費も使ひ棄て、旅籠の代もなくばかり、いつぞや伊香保の温泉で、旅は道づれ情ある、お方と見かけこの家を賴り、厄介者の夫婦づれ、小遣ひまでとは言ひ難く、詞〽勘辯次手にモウ二三日、お待ちなされて下さりませ。〽と、詫ぶれど聞かず猛り立て、詞〽やアその言譯の一寸逃れ、泣言聞いては渡世にならず、詞〽返すがならずば警察へ、これから直ぐに連れて行く、サアうせをれ。〽と、右左り、引立ち懸るを最前より、樣子を聞いたか魚淸が、二人の者を取つて突退け、詞〽やかましいわい。人聞きの悪い店先で、日歩や損料の聲高催促、こゝを何處だと思ふのだ、靜かにしろ。詞〽へい〳〵親方には濟みませんが、こゝの内の居候お傳どのに貸した

郊で今日競馬場のある地

口入　口添へ

鼬の道　往來をせぬこと

廻る因果は人力　癩病は業病ともいつて、因果な病、その廻り合はせを人力車の輪の廻ることにかけていふ

草津　上州の草津温泉

熱海　伊豆の熱海温泉

伊香保　上州の温泉
泣言　泣くやうに訴ふる詞をいふ
渡世　生業
居所勝負　會つた時に捉まへること
金札　紙幣のこと
惠比須頭の札　惠比須を描いてある壹圓紙幣
追從　お世辭をいふこと
子分子方　若い衆小僧をいふ
七所借　諸方から借

金ゆゑ、居所勝負で取立てるが、私どもの渡世柄、どこゝの遠慮はごんせん。さアお傳どの、何うする氣だ。へと、又立ちかゝるを魚清が、その金これでと投出す金札、二人は取つて顏見合せ、詞へ肴屋だけに惠比須の札、詞へ二人合せて三圓なにがし、詞へ貸さへ取れば長居は恐れ、モウお暇申しやす。詞へお神さんへもよろしく。へと、追從たらだら立歸る。お傳は面目投首を、もたげてそこに兩手を突き、詞へふとした御緣で病人の、お厭ひもなく夫婦ともに御厄介、お禮は言葉に盡くされませぬ。詞へ何んの〳〵、賴り少ないそなた衆夫婦、どこまでも世話を屆かしたいが、私も多勢の子分子方、知つての通りの暇なしゆゑ、心ばかりで行屆かぬ。然し二人位な厄介は、どうなりかうなり濟まされう、心配せずとゆる〳〵と、逗留して御亭主の、看病をさつしやれ。詞へそのお言葉に從ひまして、親方樣にお願ひは、只今助けて戴いた、借財ばかりか七所借、殊に浪之助の療治の手當も致したく、幸ひ故郷の知人が、

金をしたこと
故郷　上野沼田在
煎じ詰めたる胸　奸計を廻らしてゐることを藥を煎じてゐるのにかける
外に心を奪はれ　他に情夫をこしらへることをいふ
手籠　打擲されること
正夢　夢が事實になることをいふ
富岡の伊平さん　上州富岡の商人

當時東京に出府してゐるとのこと、それを賴つてお金の工面、ちよッと二三日東京まで。詞〽オ、行く氣ならツイ今から行つて來たがいゝ。浪さんは私がしッかと預つた。〽と言ひ棄て奥へ入りにける。あとにお傳は一杯に、煎じ詰めたる胸の中。藥携へいそ〳〵と、二階へ上り邊りを見廻し、スヤ〳〵眠る浪之助、崩れかゝりし顏さし覗き、詞〽モシ浪さん〳〵。〽と、搖起されて目を覺まし、詞〽ウム扨は今のは夢であつたか。詞〽エ、何ぞ夢でも見やしやんしたか。〽と、問はれてホット溜息を、つくづくお傳が顏打守り、詞〽さればいなう、私がこの永々の病氣に愛憎が盡き、そちが外に心を奪はれ、私を棄て置き家出したを追かけ、却つてその男に手籠に逢ひ、逆卷く波に打ち込まれ、水に漂ふ苦しみ最中、呼び覺まされて汗びつしより、もしこの夢が正夢に、なりはせまいかと私や案じられる。詞〽なんのマア私に限り、〽そんな不實があらうかい。遠い血筋の一家同士、晴れて許しの夫婦仲、その疑ひは聞えぬ。

野毛　横濱の町の名

ヘボン先生　當時横濱に居た有名な外國醫師

大妙藥　大層よく利く藥をいふ

胸に運びて　胸中でいろ／＼と段取を

考へる　考へることをいふ

枕杖　病人が枕を縦にして兩手をもたせ、其れを杖にして伸上ることをいふ

缺茶碗　心を掛ける

へと、恨み涙を浪之助、詞へア、謝まつた／＼。へ赦してたもと泣沈む。

詞へナンノまあ、女房に詫が要らうかい。疑ひ晴れたらお前と相談、いつぞや草津の湯治場にて、お惠みを受けし富岡の伊平さん、當時東京にお出でなされ、神田邊にお住居の由、お情深いお袖に縋り、御無心申してお金の工面、整うたら道次手、同じ神田に起廢病院といふのが出來、その院長の後藤昌文先生のお手當に預る人は、脱けた睫毛も再び生え、敗れた肉も皮を成し、全快をした者は幾らもあると、諸新聞にも載せてあり、野毛の湯屋での噂を聞けば、貧乏人が院長様に願へば、藥は施して下さるとのこと、聞いて飛立つ日頃の願ひ、その用かけて汽車で走つて行てくる程に、寂しかろが今宵一晩、辛抱して待つてゐて下さんせや。

詞へ何と言やる、私もかねて聞てゐた起廢病院へ入院のこと、所詮及ばぬ今の身の上、私やふッつりとあきらめてゐたが、その藥を施して下さるとは地獄で佛、一晩位の寂しいのに、辛抱して待つてゐる程に、今か

に缺けをかけていふ

なみ〳〵　一ぱいつぐこと

面差　顏つき

血潮の紅　咯血すること

縡切れ　死んだことをいふ

あらまし　概略と云ふこと

らツイ行て來てくりやるか、ア、嬉しい忝けない。〳〵と、我を忘れて喜び顏、哀れにも亦いぢらしゝ。お傳は藥瓶取出だし、茶碗を添へて、詞〳〵この藥は、最前雷庵先生に買うて貰うた、ヘボン先生新發明の大妙藥、こゝに置くゆゑ飮んだらいゝ。〳〵と、言葉殘して立上り、詞〳〵ドレ、そんなら行て來う。〳〵と、降りる階子の段取も、胸に運びて打頷き、心ありげに表の方、褄端折つて出て行く。後姿を枕杖、伸び上りつゝ見送る外面、手もとに觸はる藥瓶、妻が心を缺け茶碗、なみ〳〵注いで一口に、呑み終るよと見えけるが、忽ち心神惱亂し、面差變じて七轉八倒、虚空を摑んで苦しむ息と、一つに吐き出す血潮の紅。詞〳〵ア、苦しや。〳〵の聲洩れて、何事ならんと主の魚清、子分引連駈上り、それと見るより家内の人々、呼び活け〳〵水吹掛け、前後に取付き抱起せど、早や縡切れて泡沫の、哀れや消ゆる浪之助、そのあらましを今爰に、筆に任せて書き殘す。

【解説】上州前橋在生れの高橋お傳といふ毒婦が、明治五年に癩病患者の亭主浪之助を、横濱の花咲町裏長屋で毒殺した事件を、明治十四五年頃に富士松加賀太夫（明治廿五年十二月廿八歳で自刃した五代目家元）が潤色して作曲した新淨瑠璃である。

浮名初紋日（小七菊の井）

天命　天から定めてある壽命をいふ
目連尊者　釋迦の弟子で神通第一と稱せられた
蜂の子　蜂の巣のこと
通力　自在な神通力
上天　空の上
凡夫　唯の人間
羅喉羅　釋迦の子
山科屋　女郎屋の名を山にかけていふ
升酒屋　小賣酒屋
屋敷通ひ　屋敷方面

へ凡そ萬物の數定まれる天命あり、これを定業といふ。昔目連尊者産土の戰死を憐れみ、蜂の子に數人をこめ、通力を以て上天に隠す。佛とどめてのたまはく、やみなん／＼定業なりと。即ち軍果てゝ後、おろしてみるに、悉く蜂の中に死すっ その通力も定まれる、命の綱は引きとめず、まして凡夫の迷ひの種、佛ももとは若盛り、羅喉羅が母はありけらし。たが世に誰か踏み分けて、登る戀路の山科屋、名も菊の井と深い仲、僞りのなき本町の、升酒屋の小七とて、屋敷通ひの優手代、正月中は約束の、日數も重なる身の不首尾、人こそ知らね袖の海、深き情ぞ割なけれ。のたまく男の廊下より、割へ申し／＼旦那、これ御覧じませ。あすは十四日年越し、削掛、柳のもとのいつち太い所、かのお寶物に拵らへた。先づお二人を祝ひましよ。とん／＼とゝんとん、何が大金持の旦那

のお得意を受持つ店員

約束　女と逢ふ約束の日

袖の湊　涙に袖を濡らす喩へ

のたまく男　口軽に喋る精間

削掛　正月十四日の夕家毎に柳の枝を細々に削掛けて門口に挿す風習をいふ

いつち太い所　一番ふといところ

ちやに依つて、お名も大きし、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝとん〳〵とゝんとん、そこで彼の菊殿も大きなお仕合せぢや。ハヽヽヽ、これはちと無遠慮無遠慮。〽遠慮會釋も仲の町、鈴木屋からお見舞ひ、〽アイ内儀申しやす。御機嫌ようお遊びなされやせ。これは又お慰みにおげやす。詞〽アイ申し、きく様、お前様へもようくお心得申せとで御座りやす。詞〽どれどれこれは甘さうなもの、マア旦那より先へしよこなめやう。ハアてんてん甘くて〳〵どうもかうもならぬ。これはさ、ハヽヽヽヽさあ酒々銚子銚子盃、又わつさりと呑め〳〵〳〵。〽さあさ押せ〳〵船宿も、打ちこんじたる大騷ぎ、酒も螢が半分は、呑む頃にこそなりにけれ。少しは無理を容の癖、詞〽さあ菊の井これで一つお呑み。詞〽稀みんす、恐らしい、茶碗ぢや措きなんし。詞〽何故、お厭かえ。あげ手が悪いからあがらぬ筈さ、私どもでも相應に上つて下さるお方があるまいものでもないに、そんならおよし、サア見物に行かう。詞〽エヽモ馬鹿らしうごさん

すにエ。詞へアイわたしや馬鹿さ。利口なら揚屋で三味線ひきやす。詞へオツトよし、こゝをわつちが相の手で、津の國の〳〵、鼓が瀧に來て見れば、西へもちりから〳〵たんほゝ、東へもちりからたんほゝ、たつちりてん〳〵、申し上げます。何ぢや何ぢや。御門前に米が御座ります。何俵ある、昨日三俵けふ五俵。へヨイたゝたんほゝの花が咲いたとさ。末繁昌の千代の御神樂。へ太鼓末社の口車、廻りのよいも山吹の、花の光りに御機嫌を、とり〳〵取持つ仲直し、さあおやすみと手を取るやら、拗ねあふ片頰にそりやお笑ひ、ちようさや、ようさや、わい〳〵よいよい〳〵お仲、めでたうお床が納まつたと、皆々座敷を立ちにけり。早や更け過ぐる春の夜の、短き二人が命ぞと、餘所にはしぬる、三下りへ先の世で、人を思はぬ報ひにや、可愛と思ふ男の癖に、性の惡いに內からはせく。詞へアレあの座敷で心よう唄ふを聞くもこの世の名殘り、ほんに斯くなるしるしにや、この正月の二日にそれ、そなたの挿し櫛を挿

かのお寶物　陽物に似るをいふ
鈴木屋　引手茶屋の名
しよこなめ　摘み喰ひすること
さあさ押せ　艪を押す拍子をいふ
拝みんす　手を合して拒絶する詞
見物に行から　氣を拔きに廓廻りをする意
鼓が瀧　攝津河邊郡多田村に在る名所

太鼓末社　幇間や取卷等をいふ

山吹の花の光り　黄金の威光をいふ

ちようさやようさや　神輿を擔ぐ掛聲で拗た客の機嫌を取る意

先きの世で　餘所の座敷で彈く小唄

どうか好かねば　何うしても蟲が好かないことをいふ

身じまひ　化粧をして客に接する仕度

す拍子に、齒の缺けたも思へば、死ぬとの知らせであつたよノウ。詞〽さいなア、お前が常に心意氣に、內方の首尾が惡い、死んでくれ〳〵と冗談に言はんしたが、今宵はほんの事になつたわいな。〽ほんの心で來る客さんを、厭と思ふも無理なれど、どうか好かねば其の夜の辛さ。いとど戀しき氣をもみぢ、儘にならぬは勤めの身ぢやもの、ほんに浮世ぢやエ。あれあの唄を聞かしやんせ。儘にならぬは浮世とは、お前とわしが身の上を、唄はれたるも早や昔、朝な夕なの身じまひに、朋輩さん方てん〴〵に、好いた男の噂にも、わしがお前を言はぬ間は、客の座敷へ出てゐても、ほんに暫しもあらばこそ。他の勤めは彌增しに、思ひを深く染めこみし、肌着の紋に眞實の、噓でない氣をさとらんして、深い馴染となら柴の、燃ゆる思ひを冷酒に、押して止めたき朝ごとに、はて每日屋敷通ひする身なれば、どうで晚にも逢はれるもの、俺も居たいは山々と、それさう立派に言うて立たしやんす、そのお姿を見送つて大門口に

をするをいふ

肌着の紋　長襦袢に比翼の紋を染めるのをいふ

なら柴　ならない事を燃ゆるにかけていふ

曲りど　曲角の略

親方　樓主をいふ

内から　内所からの意

川竹　廓の生活をいふ

知死期　陰陽家は、人の生年月日によ

立別れ、お顏の見ゆる曲りどを、待つ氣になれど果しなく、最早や見えそなものぢやがと、伸び上るうち通らんす、嬉しやお顏と見交す間も、早や行き過ぎし面影の、見えぬ辛さにほんにまだ、言ひたい事があつたものと、また見る顏を待兼しに、一人客にて主さんが、不首尾な時は身づまりと、親方遣手に堰き堰かれ、逢はれぬやうになりしより、夜晝わかずくよ〳〵と、泣いて明かしてゐたわいな。互ひに思ふ念力が、屆いて幕から御座んしても、内から許して逢はせるを、喜ぶ間もなくお前の首尾、斯くなり果つる此の世では、よく〳〵添はれぬ緣かいな。便りに文を送るさへ、上の封じも念入れて、通ふ神かけ行末かけて、思ひも深き川竹の、流れ寄る邊の定めなや。定めなき世に定めある、知死期近づく身の哀れ。詞〽アイ早や三味線の音もやみ、外の座敷も寢入りばな、〽静かに用意と取出だす、此の白無垢の着衣初め、正月ものに引替へて、冥途の旅の晴小袖、去年の師走の無理わざと、ひとつ噂にならぬや

つて、其死期を前知すると云ふ
寢入ばな　寢ついたところ
白無垢　白無地の着物
着衣始　白無垢の着初を正月の着衣始に喩へていふ
無理わざ　遣繰をして正月の衣裳を拵へたことをいふ
二世の緣　夫婦の緣をいふ

う、褄も袂も帶と帶、結び合せし二世の緣、未來は一つ蓮葉の、臺に上る三つ蒲團、夜着引きかつぎ伏しにける。

【解說】此の曲は日本橋本町の升酒屋の手代小七が、吉原の山科屋の菊の井に馴染み、主家を不首尾となつたのを悲觀し、松が除れた正月の十三日の夜密かに山科屋に赴き、菊の井に死を打ち明けると、女も豫て用意の白無垢を取出し、共に冥途に駈落して、未來は夫婦と呼び交はすといふ筋で、作者は鶴賀若狹椽である。

流れの昔　遊女の身で逢つて居た時分をいふ

朽ちせぬ縁と縁　誓時逢はない伊左衛門に再會して縁が離れぬを喜ぶ意

相の山　唄の節の名

裲襠　遊女の被る上衣。身を打ちかけるを云ひかける

控へ綱　神佛が引つ張つてくれたの意

夕飯殿　夕霧を嘲弄していふ詞

廓文章（夕霧伊左衛門）

へ無慙やな夕霧は、流れの昔なつかしく、飛立つ心奥の間の、首尾は朽ちせぬ縁と縁、胸と心の相の山、間の襖の工合よく、明暮戀しい夫の顔、見るに嬉しく走り寄り、我が身を共に裲襠に、引まとひ寄せとんと寢て、抱きしめ締め寄せ泣きけるが、詞へ申し伊左衛門様、目を覺まして下さんせ、私しや病うてなあ。へ疾に死ぬる筈なれども、今日まで命ながらへしは、今一度逢はして下さんす、神や佛の控へ綱、コレなつかしうはないかいな、顔が見たうはないかいなと、搖起し〳〵、抱き起せば取つて突退け、詞へヤコレ、そこな夕霧殿とやら、夕飯殿とやら、節季師走にこなたのやうに暇では御座らぬ。七百貫目の借錢負うて、夜晝稼ぐ伊左衛門、こんな時寢ねば寢られぬ。邪魔なされな總嫁殿。へと、コロリと轉けて空鼾。詞へ身に覺えはなけれども、恨があれば聞きませう。イ

節季師走　歳の暮の押詰まつたこと

總嫁　賣女を輕蔑して呼ぶ。關西の淫賣婦

この體になつて　零落して紙子姿になつてもと云ふ意

春おぢや　春お出での意

年立かへる足駄　萬歳の唄の「年立かへる日」を洒落ていふ

侍蹴る　萬歳の「日

ヤ〳〵、寢させはせぬ〳〵。詞〽イヤコレ何とする。この體になつても、藤屋伊左衞門、今のやうに奧座敷の客に、踏まれたり蹴られたりする傾城に近づきは持たぬ。エ、こゝな萬歳傾城、萬歳ならば春おぢや。通りや〳〵。〽通りや〳〵、と言ひければ、詞〽ム、この夕霧を萬歳とはえ。詞〽オ、萬歳傾城の因緣知らずか。知らずば言うて聞かさう。武士の足にかけて蹴られるを、萬歳傾城と言ふぞや。〽誠にめでたうさむらひける。詞〽しかも足駄穿いて蹴るやら、〽年立ちかへる足駄にて、誠にめでたう侍蹴る。詞〽然し何も身過ぎぢや。おんなよい衆には蹴られても損はいかぬ。慾も知らねば身が立たぬ。〽慾若に御萬歳、年立返る足駄にて、誠にめでたう侍蹴る。詞〽町人も蹴る、伊左衞門も蹴る。蹴る〳〵。ア、コレ喜左、餅でも米でも早うやつて去なしやいの。〽と、譯も淚の棄て言葉、烟草引き寄せ吹く烟管、外らさぬ體にてゐたりける。〽夕霧淚もろ共に、恨みられたり喞つのは、色の習ひと言ひな

出度う候ひける」をもぢらせる
徳若に御萬歳　萬歳の文句の「徳若に御萬歳」の洒落
喜左　吉田屋の亭主の喜左衛門の略
餅でも米でも　萬歳に與へる風をいふ
水淺黄　水つぽい事と淺い心とをかけていふ
惡性　浮氣なこと
內方　お家の人々
楢の葉　なるといふ

がら、それは浮氣な水淺黄、派手な浮名が嬉しうて、人の譏りも世の義理も、白紙に書く文の傳て、返事取る手も心せき、口說の床のよしあしも、嬉しいにつけ悲しいに、つれて忘れた事はない。それにお前の惡性を、私しが案じは移り氣な、他にもしやと言ひ懸り、それが嵩じて內方の、首尾は不首尾と結ぼうれ、勘當の身と楢の葉や、兒手柏の二人が仲、暇乞さへ泣く許り、それから絕えて音信なく、この夕霧を去だ傾城と思うてか、眞の女夫ぢやないかいな。則くれば私も二十二、十五の暮から逢ひ懸り、儲けた子さへ早七つ、誠を言はばこの頃は、一門中の狀文にも、伊左衛門內よりと、書いても人の咎めぬ事、私に恨があるならば、こなさんにも恨みがある。去年の暮から丸一年、二年越しに音信なく、それは幾世の物案じ、それ故にこの病ひ、瘠せ衰へたが目に見えぬか。煎藥と煉藥と、針と按摩で漸々と、命つないで稀に、逢うてこなんに甘やうと、思ふ所を逆樣な、コリヤ酷らしいどうぞいの。私が心が變つ

にかけていふ。兒手柏の枕詞。子供まである意を通はせる
針　鍼を身に刺して療治すること
縫の玉霰　裲襠の刺繡の模樣をいふ
色香爭ふ如く　涙が刺繡の霰と同じやうに袖を彩る意
本腹　全快をいふ
眉を開くや　眉を扇にかけていふ

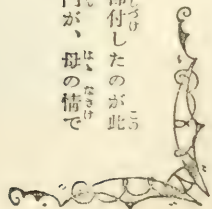
たら、踏んでばつかり置かんすか。叩いて腹が癒るかいな。コレ明日をも知れぬ夕霧ぢや。笑ひ顔見せて下さんせ。心強や胴慾な。氣強い心と喞ち泣き、空に知られぬ袖の雨、涙は縫の玉霰、色香爭ふ如くなり。〽かゝる所へ下女婢、遣手禿に女房も、競ひ懸つて喜左衞門、詞〽申し申し、伊左衞門樣、々々々々々、お前の親御妙順樣よりお人が參り、里の御子息樣も母家へお引取り、あなたも御勘氣赦りました。詞〽ほんにそれいな太夫さん、お前も身受の埒が明き、大抵嬉しい事ぢやない。詞〽ホホウ、これも此喜左衞門が精力で、本腹さして、〽見せませうと、家内が勇む勢ひに、つれて浮き立つ伊左衞門、喜びの眉を開くや扇屋夕霧、名を萬代の春の花、見る人袖をぞつらねける。

【解説】寶永七年七月(或は正德二年正月との說もある)近松門左衞門が大阪竹本座に書卸した『夕霧阿波鳴渡』を、安永九年十二月に並木十助と並木五兵衞が改作して『廓文章』と題し、大阪角座に上場した。それが今日行

はれてゐる「夕霧」である。その吉田屋の場を新内に直して節付したのが此曲で、扇屋夕霧のために遊興に耽つて勘當され藤屋の伊左衛門が、母の情で勘當を赦され夕霧と夫婦になると云ふ筋である。

八重霞浪花濱荻（お園六三）

新屋敷の段

へこゝも流れの島の内、花珍らしき新屋敷、夜は往來も途絶なく、軒に輝く懸行燈、仇名かしくの散らし書、それも誰ゆゑ秋鹿の、戀ゆゑ身をや沈むなる、おそのは此處に身を寄せて、住む甲斐もなき病ひの床、藥よ水よと氣を付けて、主の女房傍に寄り、詞へコレおその、先刻にから間もある、チト藥でも飲みやらぬか。けふは何日より飯もすゝまず、心持でも惡いかや。詞へほんに何から何まで、お氣を付けての御介抱、へあんまり冥加が恐ろしい。詞へ死んでも忘れは致しませぬ。詞へア、わつけもない。主親方と言ひながら、奉公しやるそなた衆も、親と思ひ子と思ひ、大事にするは此方ばかりか、どの親方も同じこと、皆共業ぢやな

島の内　大坂、宗右衞門町などの花街の在る所

新屋敷　島の内にある藝者屋町

身をや沈む　藝者稼業に身を沈めたことをいふ

冥加が恐ろしい　罰が當ると遠慮していふ詞

わつけもない　詰らぬことをとの意

共業　共に持ちつ持たれつの稼業ぢや

と云ふ意
お慮外　ぶしつけながらの意
ばら付て　亂れること
解櫛　齒の荒い梳き櫛
國太夫節　都國太夫の興した豐後節から出た淨瑠璃
角の芝居　道頓堀にある大劇場
道行　男女の道行場に使ふ淨瑠璃
佐の八　役者の名

いかいの。そんな事言はうより、精出して藥でも飲みや。温めて來やうか。詞〽イエ〳〵。詞〽そんなら飯は。詞〽イエ〳〵。詞〽オヽ、この子はいの、飯も進まず、藥も厭で濟むかいの。詞〽申し、お慮外ながら、棚の櫛箱ちよつとおろして下さりませ。この髮がばらついて、目の上が重う御座んす。眉も垂れたし、櫛の齒を入れたら、ちつとは氣合もよからうと思うて。詞〽オヽ、道理〳〵、そのばら〳〵では、鬱陶しからう。ドレ撫で付けて遣りましよ。〽と、氣輕に鏡臺取下し、心の縺れ解櫛に、油とく〳〵立廻り、詞〽コレおその、先刻に門を唄うて行た、國太夫節を聞いてか。詞〽ありや角の芝居の道行ぢや御座んせぬか。詞〽おいの、仇名かしくの散らし書き、それも誰ゆゑ秋鹿のと、語つたは佐の八がかしくの出端、二の替りが大きに當つて、それからかしく〳〵と町中に評判したが、今朝はほんのかしくがはたにだに、そばにかゝつた七郎助から起つたこと、思へば〳〵憎い奴。天滿での大悶め、そなたも旣にあい

出端　花道から舞臺にかゝる出の科
二の替　次興行
飯代の金　食料
笑止さ　氣の毒さ
清兵衛殿　主人の名
根ざしの悶め　悶着の原因
木を伐つて投出したやうな　さつぱりしたことをいふ譬
重井筒　近松門左衛門作(寳永四年)の『心中重井筒』をいふ

つが妾に、あゝ厭らしさうな事ぢやぞや。その時梶の長兵衛が、飯代の金算用せいと、やッつ返しつ、あんまり笑止さ。私が金渡して、そなたを連れて戻り、勤めせいでも大事ないと言うたれど、冥加のためぢや、夜ばかりなと出ませうと、出やると間もないこの病氣、主の手前も氣の毒なれど、男氣な清兵衛殿、根ざしの悶めまで聞き屆け、病ひのことは是非もない、隨分と養生させい。病ひさへ好うなつたりや、金儲けしてくれうぞいと、木を伐つて投出したやうな主の氣質は知つての通り。そしてマア、彼の六三殿は何うしてぢや。便りでもあつたかいのう。詞〽アイ、イエもう久しう音信も御座んせぬ。詞〽オ、便りのないがまし〳〵。總體勤めの奉公は、樂しみ無うては勤まらぬと、重井筒にある通り、皆それ〳〵の掛引あり。きなきなと氣を腐らし、ヒヨンな事などしてたもんなや。まだこの上に一月二月、寢やらうが、それを否とも言ひはせぬ。恥しいこと悲しいこと、必ず聞かせてたもんなよ。そなたの袷にせうと

ヒヨンな事　無分別なことをいふ
仕懸け　縫ひかけてゐること
本腹　全快
阿彌陀池　大阪西區北堀江下通の和光寺の境内にある楕圓形の小池で蓮の名所
人合の宜い　人づきのよい意
内儀　妻女のこと
今日の噂　かしくが入牢したのをいふ

思ひ、私が京の出店から、持つて下つた郡内縞、裏は紅絹の通しにして、この間から仕懸けてゐる。その間に本腹しやつたら、阿彌陀池の開帳へ、連立つて參ろぞや。〽と意見交りに手も口も、人合の宜い内儀なり。おそのは始終目に涙、夫の事にかきまぜて、今日の噂にいとゞなほ、明けて言はれぬ胸の闇、お梶は鏡臺引き寄せて、詞〽ドレわしも次手に撫で付きよ。〽と、櫛取上ぐる折こそあれ、かしくが母は蹌踉と、お松を連れて門の口、行燈目當に、詞〽申し〳〵卒爾ながら此家の、お園樣といふお方に、逢ひにまゐつた者でござんす。〽と、いひつゝ這入れば、おそのは目早く、詞〽是は〳〵天滿のお母樣、お妹御、懷かしや〳〵、よう尋ねて來て下さんした。〽と、いへど二人は答へさへ、打ち涙ぐむ其風情。お梶は何の氣も付かず、詞〽あの子は强い大病故、起ち居が不自由にござんする。傍へ行つて、〽お話なされと、立ち上り、詞〽テモ宵寢まとひの高鼾、お前も風を引かんすな。〽と、夫に蒲團打ち着せて、

卒爾ながら　失禮ながらの意
宵寢まとひ　宵から寢こむこと
仕だら　不しだら
仇事　もくろみが外れたこと
淺ましい死　刑罰の死をいふ
轉た枕　轉た寢のこと
お題目　南無妙法蓮華經をいふ
逆様な弔ひ　葬ひかしくの方が先きに

暖簾の内へ入りにけり。母は涙の風呂敷包み、お園が前にそつと置き、云はんとすれどせぐりくる、涙先き立つばかりなり。やゝあつて顏を上げ、詞へ娘かしくが今日の仕だら、聞かしやんしたであらうなア。なかなか今夜此方迄來られる樣なことぢやなけれど、今朝早々牢屋へ行て、姉妹親子の暇乞ひ、その中でも呉れ／＼云うたは六三殿とお前のこと、どうぞ命助かつたらと、思ひし事も皆仇事、淺ましい死を致します。是は朝夕身に着けて、垢付けた物なれども、私が矢張ながらへて、此世に居ると思召し、轉た枕の裾になと、置かしやつて下さんせと、よく／＼心にかゝつたやら、是ばつかりを申して居ました。嘸や迷ひにならうかと、年寄つて夜夜中、尋ねて來たもかしくが可愛さ。筐と思ひ一遍の、お題目でも朝晩に、申して遣つて下さりませ。へと、涙に咽び差出せば、泣く／＼おそのも押戴き、詞へア、忝いと云はうか、嬉しいといはうか。初めて逢うてお世話を掛け、身に引き受けての御厄介、賴母しい志、

死んで、年寄やお關が殘つたのでいふ

お明し　佛壇の燈明をいふ

抹香　佛前で焚く粉の香

上げまして　上げての意

堺屋　出逢茶屋の名

欠伸まぜくら　欠伸交りをいふ

明けて　出て居ることをいふ

貰うて　他から呼び

恩を受けたかしく様、此のやうな興の醒める果敢ない事が有ろかいなア。おふくろ様も此のそのも、逆様な弔ひ葬ひ、此お筐を見るにつけ、何の貴女は死にやさんせぬ。矢張此處に莞爾と、笑顔を見る樣な。へと、あやも涙の繰言に、お松も母に取り縋り、聲もえ立てぬしやくり泣き、他所の見る目も哀れなり。お松は涙押拭ひ、詞へ申しかゝ樣、何時迄いうてござんしても、果てしは有るまい。早う歸んでお明しにも、油を差し、抹香も斷れないやうに盛りたいわいなア。詞へオヽ尤もゝゝ、斯うお目に掛つたりや、姉が頼んだ願ひも叶ふ、お前は隨分養生して、健全にならしやんしたら、必ず尋ねて來て下さんせエ。未だ話したい事も有れど、年寄の夜道をかけて心が急く。詞へそんならお歸りなさるゝか、お松様怪我なされぬ樣に、手を引いて上げまして下さんせえ。お杖は有るか。詞へと、氣を付くれば。詞へア、ござんすともゝゝ。恰度姉がその樣に氣をつけて呉れました。へと、何に付けても思ひ出す、親子の仲の憂き

戻してくれとの意
幽靈が濱風に逢ふ　ヒヨロ〳〵して窶れた姿の形容
身仕舞　化粧にかゝること
水白粉　白粉の名
眉掃き　眉刷毛
合せ鏡　髪の具合を見るために二面の鏡を使ふをいふ
白無垢　白無地の袷
あげ衣裳　派手な上物の衣服をいふ
癇が立つて　病體ゆ

別れ、手を引き連れて立ち歸れば、居ながら見送るお園も共に、別れは後に知られける。揩れ逆うて來る丁稚の高聲、詞へ堺屋からで御座んす。その樣送つて下さんせ。へ亭主淸兵衛欠伸まぜくら、詞へそのは明けて御座んす。詞へイエ〳〵、久しぶりで馴染のお客、座敷ばかりでよござんす。どうぞ貰うて下さんせ。へと、言ひ棄て使は立歸る。詞へ申し申し旦様さん、私や行きたう御座んする。詞へハテえいわいノ。幽靈が濱風に逢うたやうな姿で、どう座敷が勤まるもの。病氣々々といふも外聞が悪いゆゑ、今のやうにいふたのぢや。それとも是非に行きたいか。詞へアイ。詞へハア如何樣寢て居やうより、氣が晴れたら宜からう。女房共堺屋から呼びに來た、送つて遣りや〳〵。詞へテモ病らうて居て飯もろくにいかぬ者を。詞へハテえいわいの。また氣が變ればそんなものぢやない。遣つて遣りや〳〵。詞へそんなら幸ひ、先刻に髪を撫で付けて置いた。身仕舞しやるか湯をとろか。へと、勝手へ行つて汲んでくる。

ゐやつれて見ゆるのでいふ
飲みさし　飲み殘りの酒をいふ
下にゐや　座つて居ろといふこと
大事ない身代　困らない身分のこと
餘程　大層に同じ
譯もない　つまらないと云ふ意
無分別　早まること
品に依つたら　相談づくのこと
おゑさん　お神さん

そのは鏡臺引寄せて、向ふ鏡も丸顔に、水銀粉を伸べてつく〴〵と、心の中に暇乞、涙は落ちて紅皿に、我や血を吐く眉掃きの、繊も頃も短夜に、合せ鏡の二つ櫛、亭主は烟草スッパスパ、詞へオヽえいぞ〳〵。ソレ新らしい白無垢出して、上はどれぞあげ衣裳着せてやりや。顔には癇が立つてある、衣裳でなと化さにやならぬ。帯もよいのを合點か。詞へアイ〳〵。へアイとお梶が取出すを、各手に立つて清兵衛も、烟管片手に、詞へコレ晝の飲みさしがあろ、持つておぢや、肴は要らぬ。へと、言ふ隙に、おそのは帯を引締めて、詞へ旦那さん、ちよつと行つて參じます。詞へマア待ちや、〳〵。久しぶりの門出口、祝うて行きや。へと、お梶が酌に一つ受け、サラリと飲んで、詞へおその獻さう。マア一寸下にゐや、〳〵。そなたは知らぬ事なれど、俺も元は大事ない身代、奉公人も多勢あつたれど、近年の不仕合せ、漸々白銀町の旦那衆のお世話になつて、今は京の出見世の外、大坂にはそなた一人、ヒヨツト死ぬるか駈落

と云ふこと
息を詰めたる　他へ洩れじと息を殺すことをいふ
すまぬ顔付　心配事のある顔付をいふ
佇み所もない　泊るところもないこと
鼻が見付た　察したのを誇つてこの鼻と自分を指していふ
生薬師　生佛と同じ意で上手な醫者をいふ

なぞしてたもると、餘程俺は迷惑。それでまあ養生のために遣りはするが、聞きやア六三郎といふ和郎も、强う難儀してぢやげな。誰しも若い時には覺えのあること。譯もない無分別な事をせずと、品に依つたら六三郎の顏も立て、ハテ大坂ばかりに日は照らぬ。なう合點か。貧乏しても清兵衞は男ぢや、粹ぢや。必ず俺を笑はすやうな未練な事をしてたもんなや。これをいふ許りぢや。サ客衆が待てゞ有ろ、早う行きや、早う行きや。詞〽アイ／＼そんなら旦那さん、おゑさん、行て參じます。詞〽オ、私なとちよつと送つてやろかいの。詞〽ハテ女房ども、よいわいの。こゝからは近い、獨り遣りや。詞〽アイ／＼獨りがよござんす。〽と、言ひつゝ、出づれば門口へ、泣く／＼來かゝる六三郎、詞〽おそのぢやないか。詞〽御座んしたか。〽ア、嬉しやと抱き締め、息を詰めたる泣いじやくり。清兵衞は上り口、兩手を組んで腰打ちかけ。涙ほろりの顏眺め、詞〽旦那どの、お前はすまぬ顏付ぢやが、詞〽ハテ我が抱への奉公

使ひ錢　小遣ひ錢

お祓に俄　六月の御祓祭に俄狂言をするをいふ

素振　擧動

渉るゝ方なき　行きわたり盡すことをいふ

押戴き　包を持つて額に當て感謝の意を表すこと

人、駈落させに遣るのぢやもの。詞〽エエそりやどうして。詞〽さればいやい。可愛と思ふ六三郎は、佇み所もない身の上、逢ひたうても逢はれはせず、我が身體は役に立たず、心中して死ぬる覺悟とは、この鼻が見付けたゆゑ、今のやうに智惠を付けて遣つたのは、六三郎と快よう添はせてやる合點。また暇乞の盃したは、大坂中で生藥師のやうに言ふ玄伯さま、今日も脉を御覽じて、所詮ようはあるまいとおつしやる。死なぬ先に一日なりと、女夫にしてやつたなら、モ心中する氣も止むであろ。間もないうちに大分金儲けしてくれた奉公人、錢金ではまんざら遣られず、故意と衣裳も着せ更へ、立派にして遣つたのは、賣代なしで使ひ錢にさゝうため。ア、追手をかけはせぬになあ、痛い足を引きずつて焦るであろ。氣を取のぼして一倍早う死なうと思へば、馴染の淺い者なれど、氣の柔かな女子、可愛いことぢやないかいの。俺はあんまり悲しうて、今年からお祓に俄する氣はもうない。〽と、涙脆きは粋の癖、目

をしばたゝく許りなり。お梶も共に袂を絞り、詞へほんに思へばいぢらしや。私も素振を見てゐるゆゑ、先刻のやうに意見すりや、泣いてばつかりゐたわいなあ。へと、夫婦あきらめ泣く聲を、立聞く二人は手を合はせ、洩るゝ方なき情の程、伏拜み／＼、思はずワッと聲をあげ、泣くを聞き付け、詞へアレ、誰やら表に人がゐるさうな。へと、立寄るお梶を押退けて、風呂敷包み引抱へ、門の戸引開け、詞へそれも形見ぢや持つて行け。詞へハア。へハット許りに押戴き、こけつ轉びつ走りゆく、心の中こそ嬉しけれ。

【解説】 此の曲は、寛延二年三月、淺田一鳥等が書卸した『八重霞浪花濱荻』の一節を新内に節付したもの、文句は義太夫通りで、お園六三郎の心中までの道筋に、かしくの入牢事件を搗き交ぜてある。常磐津の『三世相錦繡文章』(安政四年七月櫻田治助作)の福島屋の段は此曲を換骨奪胎したもので、今日では廂を貸して母屋を取られた形になつてゐる。

眞夢血染抱柏（花園平三）

へ伽羅は不斷の霧を炷き、月常住の夜見世とは、昔の人の見立かや。津津浦々の色里の、中に取分け吉原と、東に高き一と構へ、夜業ひゞく清搔の、音締いとしき笑顔よし、あいきやう町の鹿島屋の、花園がひとり客、深い星川平三とて、今宵もこゝに大一座、そゝりをうつゝ太鼓持、禿遣手や若い者、茶屋がしまらぬ仇口に、載せて押せ／＼船宿も、よい機嫌なる高調子、他の座敷の女郎も、知つた客衆と騒ぎをば、覗きに來るを呼込んで、さいた押へた合ひ賴む、下戸も上戸もちつとづゝ、過した上か下地から、根もない事も目に立つて、氣にかゝるのも兩方が、思ふ中なる小爭ひ、傍は騒げど肝心の、客も女郎も浮かぬ顏、口舌は何か白々しう、遣手のまんが取持つ挨拶、へこれは／＼平さん、花さん、此の賑やかなに口舌どころぢやござりますまい。サ、御機嫌直してお酒盛

伽羅は不斷の霧を炷き　山寺で僧に代つて霧が朝夕香を炷くといふ和漢朗詠集の句を反譯して廓で日夕伽羅の香ひがするといふ意

月常住の夜見世　前の後句「月常住の燈をかゝぐ」を綴つたので、常住は永久不滅の意

見立　比喩

清搔　遊女が見世を張る時節で彈く三

味線

あいきやう町　愛嬌と京町をかけていふ

そゝり　滑稽の意

禿遣手　禿は女郎が使ふ女兒、遣手は女郎を監督する老女

茶屋　茶屋の女の略

船宿　船宿の男の略

差いた抑へた　酒盛の光景をいふ

市松染　佐野川市松が好みの石疊の模

お酒盛。コレ／＼兄さん。〽オット心得こゝにある。幸ひ浴衣の市松染、上に引つ掛けうろ／＼と、探し出したる菅笠は、茶屋の喜助が思ひ付き、提げ烟草盆膏薬の、箱を片手に引提げて、詞〽萬能灸代これさ／＼、揉み和げて貼りまんしよ。灸代が膏薬、これさ、これさ／＼。〽と、呼立つる。詞〽ハ、、、是れは思ひ付き、飲める／＼。〽と、そゝり立ち、浮かせば二人もにつこりと、詞〽さあ御機嫌が直つたぞ。拍子を拔くな。〽と、太鼓が氣轉、衣桁にかゝりし紙子染、打着て出でし頭巾つき、兼好法師の聲作り、詞〽これは興がる坊主でござる。その興がるのがの字を澄んで、るの字を解略仕つれば、卽ち狂歌を詠みまする。ハテ斯うもござりまするか。鼠木戸ちいとも居立ちならばこそ、猫でも爪のたゝぬ大入。詞〽やんや／＼、これはほんに興がる坊樣、幸ひこの泡盛、旦那のお盃でサア一ぱい／＼。詞〽オット有難い。山出しの兼好、又斯うもござらうか。エ、敦盛を討つ熊谷に引代へて、泡盛を呑むくまがい盃

樣染
提げ煙草盆　鯨等で手を付けた煙草盆
萬能灸代　當時江戸市中を行商した藥賣の呼聲
紙子染　散らし書きの文字を紙子風に染めた浴衣
兼好法師　徒然草を著はした有名な歌人
聲作り　聲色
鼠木戸　芝居の入口に建てた格子木戸

詞〽ハアよう詠まれた。早速御太儀その口へ、ま一つおさへたよ。詞〽あり〳〵、又から引受けた所、どうも言はれぬ樂しみ、これをお釋迦の飲酒戒とは曲が無い。この飲酒戒で又一首仕つらう。エ、やよとは釋迦が無理如來、お仰れとも飲まんそんじやと矢鱈燗酒。詞〽ハ、、、いや面白い。只今の褒美として忝なくもこの船宿の長八が、持合せの大茶碗、貴樣へ差いた。詞〽何ぢや、この尊き上人へ、大俗の身として、その茶碗を差いたか。詞〽オ、差いたわ。詞〽差いたか。詞〽差いたわ差いたわ。詞〽咲いた櫻になん〳〵〳〵〳〵なぜ駒繋ぐ、茄子漬喰らうてお茶まゐれ。からりころり味噌するは、隣の臺所々々々々、オ、自慢ぢやないが、鰻一本手に持つたらば、天へも上がる〳〵、オ、それもよかろ、てと〳〵、てと〳〵〳〵〳〵コリヤ〳〵〳〵、イヤもし、花さん、平さん、御機嫌は如何に〳〵。〽と、眞面目顔。詞〽ア、さても〳〵面白い者共、どれ〳〵、その茶碗我等合ひ致そ。〽と、一つ受けるを花園聲

かけ、詞へコレ〳〵とめ治、注ぐな。詞へよいわい、注げヤイ、とめ治、注がぬかやい。エ、みかた見苦しい、花が贔負ばかりし居る。サアよい子ぢや、きり〳〵と注げ〳〵。詞へイエ〳〵飲ることはなりませぬ。詞へほんに可笑しい。常には飲りもなさらいで、今夜に限つて茶碗酒、コリヤ又味な事ぢやなう。詞へ何の味な事であらう。常には呑まねど、今夜は呑みたいから呑むのぢや。詞へム、それほど飲りたくば、尋常に上げませう。どれ其の銚子こちへ寄越しや。サ出さんせ。へと、ドブドブドブ。詞へア、こぼれる〳〵。詞へそれでようござんすか。詞へオツトよしな。へと、呑まんとするを引つたくり、廊下へ投出す茶碗酒、南無三浴びたと立騒ぐ。こちらは口舌の蒸し返へし、これはならぬと大勢が、何の彼のして御機嫌が、そりや直つたぞ拍つて置け、しやん〳〵。ま一つせい、しやん〳〵しやん、と口舌も納まれば、しらけ座敷をくろめる細工、いつそお床がまし〳〵と、ましくしやかへる太鼓の拍子に、汗水

居立ならばこそ　滿員で居立が能きぬことを鼬にかけていふ

やんや〳〵　賞詞

くまがい盃　熊谷は盃の種類の名

御太儀　御苦勞の意

あり〳〵　一ぱい注がれてあると云ふ意

飲酒戒　佛道で飲酒を戒めた掟

そんじや　損ぢやを尊者に洒落る

咲いた櫻に　小唄の文句
とめ治　禿の名
味な事　奇異の意
銚子　酒を盛る器
拍つて置け　手を拍つこと
一拳しよ　拳を打つこと
小兵衛　妓夫の名
夜番　徹夜の番
座敷〳〵の睦言　部へ屋々々で男女が語る私言
子も過ぎ　夜中の十

になる茶屋の喜助が口やめぬ、一拳しよ〳〵、一拳とんでき、覿面に取つて呑んだる足元は、よろ〳〵ふな〳〵船宿の、長八が述べる口上の、ハアイ御機嫌ようお遊びも、酒が言はせてしちくどう、わめき散らし立歸る。皆々歸れば遣手もそこら片付けて、引廻したる屏風のうち、詞へお靜まつたさうな。ア、草臥れた。コレ小兵衛どの、俺や翌の朝觀音樣へ參らうと思ふ。こなた夜番なら必ず早やう起して下さい。サアとめ治も來て寢や。南無妙法蓮華經。へと、欠伸しながら下へ行く。小兵衛も背ける行燈の、油つぎ足し燈心を、細う掻き立て下りる階子の音も澄み、夜もしん〳〵と更け過ぎる。されば夢は五臟の疲れ、七情の鬱するに依つてなすとかや。座敷々々の睦言も、やゝひつそりと靜かなる、夜嵐寒く吹き送る、鐘指折れば子も過ぎて、もう丑滿の憂しや世と、覺悟も清き白無垢を、對に二人が行道と、思案も若き若紫の扱き帶、切つて互ひの腹卷に、分くれど仲は分れまい。未來までもと手を取合ひ、

二時も過ぎ
丑滿　午前二時
白無垢　白絹の袷で死裝束に着るもの
養父の咎め　養父の制裁をいふ
上方　京阪地方
廓を出して　身受して女房にする意
宿世の惡緣　前の世からの惡い因緣
宥してたもと　許してたもを袂にかける
初會　廓で初めて男

顏見合せて涙ぐみ、物をも言はずゐたりしが、男小聲に言ふやうは、詞〽なう花園、そなたに馴染みて通ひたる、日數も重なる不埒の段々、養父の咎めにあひ馴れし、〽仲を引分け上方へ、上さうとある悲しさに、死なうと極めし俺が身と、共に覺悟の心ざし、忝けないぞや嬉しいぞや。今の誠を見るにつけ、日頃は仇と疑ひし、謎も本意も打解けて、死なば一緒の契ひの言葉、立て通せども通らぬものは、逢ふ度に廓を出して女房ども、こちの人よと言はれうとの、その言の葉は枯れ失せて、枯れぬ若葉の盛りのそなた、俺が手にかけ殺すとは、如何なる過世の惡緣ぞや、宥してたもと口に當て、忍び涙に暮れゐたる。女は兎角の答へなく、涙に暮れてゐたりしが、漸々顏を振上げて、それその悲しみは誰が爲す業、皆な私がさせまする。その御苦勞を露ほども、せめて私が身に受ける、事も叶はぬ勤めの身、お前と切れてわしとても、生きてゐられぬ身の上を、一緒に死ぬるが何のその、お前に着せる恩かいな。かう云ふかくの

女が會ふ夜をいふ
心引き合ふ　互に氣を引いて見ること
床の納まる　寢に就くこと
座敷を立ちし　他の客へ出ること
ほんの心　誠心
肌を放す　離れること
床の波　身を慄はして泣くのをいふ形容
どうぞと思ふ　好いた客をさす詞

繰言は、これまで歌や淨瑠璃に、語り盡くして古けれど、言はねば胸も晴れやらぬ、月日も忘れぬ去年の春、二人一座の初會の夜、まだ打ち解けぬ花の紐、心引き合ふ弓張の、月の宵よりどこやらが、好いたお人と思ふから、お前の遊びや言はんすこと、一つ〳〵に受取つて、それお前覺えが御座んしよがの、ほんに床の納まるまで、座敷を立ちし事もなく、しかも床へも朋輩より、早う行たとて嬲られて、惡口言はれし嬉しさは、どきつく胸の打付けに、恥かしい事厭ひなく、ほんの心で言ふ事を、お前はわざと憎らしい、逆らはしやんす面白さ。身に沁々といとしさに、肌を放すは厭なれど、内のお首尾と茶屋からの、迎ひを憎う思ひしも、無理な口舌で止めるさへ、馴染なき身と起き別れ、歸せし跡の床の波、夜晝變る客の中、どうぞと思ふは來もせいで、思はぬ客は來る慣ひ、大方お前も御座んすまいと、思へばいとゞ戀しうて、逢ひたう思うた眞實が、お前に通ひ通はんす、夜毎日毎の可愛さは、次第に積る富士の雪、

上方の親御　平三の實の親をいふ

未來の苦患　未來の苦しみをいふ

添はれぬ　夫婦になれぬこと

戀の淵　戀の深くなることを譬へていふ

目さへ當てられぬ　氣の毒で女を正視することが能きないといふ意

忍び泣き　聲の洩れることを憚つて泣

互ひの雪の袖かけて、長う誓ひし命をば、今宵死ぬるも先の世から、結びし縁とあきらむれば、悲しみ歎く事もなし。詞〽さりながらこなさんは、上方の親御樣達、さぞお名殘惜しうござんしやう。御兄弟樣御一家へも、言ひ置かんす事あらば、書置を認めて、又仰しやりたい事をも言うて死んで下さんせ。詞〽オ、優しい事をよう言やつた。上方の親達よりも、御恩の深い今の親御の事をさへ、思はで死ぬる不孝者、なんの書置どころであろ、そなたは日頃から孝行な人なれば、定めて親御の事が氣にかゝろ。詞〽いえ〳〵なんの氣にかゝろ。言へば言ふほど心の迷ひ、未來の苦患を重ぬる種、わしや死ぬるが嬉しい〳〵。〽どうでながらへ居たとても、添はれぬこの世を思ひ切り、一緒に死んで彼の世にて、長う添ふのが本望ぞや。早う殺してあとからと、聲を忍べば涙さへ、こぼさで作る笑顏の健氣さ。男は見るに忍び兼ね、その心中の誠をば、知つてはまりし戀の淵、身一つ棄てうと覺悟せし、この身と共に死なんとて、

くこと
心張り　しんばり棒の略、戸や襖の明かぬやうに抑さへ付ける諸具の名
しつらへ　設けること
刃の氷　刀身の氷の如く冷々と光るをいふ
その晨朝　尋常を晨朝にかけていふ
早迎ひ　夜明けに茶屋から女郎屋へ客を起しに來るをい

その潔よき形容、何處に刃が當てられう。俺やもう目さへ當てられぬ。これ忝けない、手を合すと、拜めばその手を押し戴き、さほど私が可愛いか、因果な者に馴れ染めて、思はぬ苦勞お嘆きを、かけるもみんな私が業、赦してたべと手を合せ、同じく拜めば、イヤわれゆゑと、袂を銜へ抱き合ひ、咽び入りたる忍み泣き。男はハツト涙を押へ、詞〽ハア迷うたり〳〵。斯ういふ中も若し人に、見咎められては一大事。〽と、邊りに在合ふ三味線箱、双六盤も取寄せて、唐紙襖に押かけ〳〵、誰が聞き付け駈け付けても、容易く入れじと心張を、とつくとしつらへ、イザいさぎよう心中して、未來の契りを急がんと、スルリと拔いて女の胸先、突通したる刃の氷、冷いやり冷や〳〵冷汗の、流るゝ血潮を押拭ひ、跡まで殘る死恥と、繕ひ直して見る夢の、覺める死骸の濕まり、遲れはせじとわれと我、咽喉をぐつと一ゑぐり、抉る苦しき曉の、夢か現か俯向けに、伏すは正しく正夢の、覺めての後の此の浮名、世上に響く明の

鐘、その晨朝によう死んだ。〱の心中沙汰。かうぞと告ぐる烏の聲、早迎ひの聲々の、騒ぎに二人は夢覺めて、添寢の床に顔見合せ、呆然としてゐたりけり。

【解説】 此の曲は、吉原京町鹿島屋の花園の馴染客星川平三が、放蕩の爲めに養家との折合ひが悪しく、養父は花園との仲を割くために上方へ上さうとするので、平三は仔細を打明けて花園に心中を迫ると、女も承諾し、互ひに死出の白無垢を着更へて、潔く氷の刃に伏して倒れると、それは口説の疲れが嵩じた三つ蒲團の上の夢物語であるといふ筋で、作曲者は初代鶴賀若狭掾である。

傾情音羽瀧（音羽丹七）

〽籬々で弾く三味の、いとし男にきた合の手よ、變る枕の可笑しさは、初手は互ひに客で逢ひ、それから後は色で逢ひ、今は親身の女夫あひ、倦きも倦かれもせぬ仲を、よしなき人の口の端に、かゝる憂身の我れ我れは、戀の闇路の晴間なき、雲井の人の言葉にも、戀は心の誠かや。儘禮の錦兵具屋の、音羽の瀧の流れとて、水洩らさじと丹七と、締めて寢た夜も今は早や、昔々の物語り、語るも涙聞く譯も、朋輩女郎口々に、詞〽申し音羽さん、お前はまだ顔の色が強う惡う御座んす。其れを押して見世へ出さんしたら、又惡うならうぞえ。たとへ何のやうに内から堰かれても、丹七様とお前の心にある。今日から浮々と浮いた顔見せて下さんせ。〽と、我身の上を思ひやる、女同士こそしほらしき。音羽は皆に手を合せ、詞〽嬉しう御座んす、お前方の何卒逢はせてやりたいと、

籬々　女郎屋〳〵といふ意

合の手　三味線の合の手を逢ひにかけていふ

変る枕　遊女の生活をいふ

色で逢ひ　間夫扱ひすることをいふ

よしなき人　つまらない人

口の端に掛る　色々に取沙汰されること

雲井の人の言葉　上

流社會の人の詠んだ和歌をいふ
襤褸の錦　襤褸織の錦で表具に多く用いるので下の兵具屋にかけていふ
内から　内所のことで主人からの意
氣苦勞　心配
起請の神樣　熊野大權現をいふ
淡島　淡島明神を看板として金錢を乞ひ歩るく物貰ひ
淡島大明神　紀州加

思うて下んす心でも、せめて一度は逢ふことも、ありはせうかと思へども、此月で丁度五月、〽毎日文を持たせて尋ぬれども、ほんに居るやら居ないやら、人の噂に善惡を、聞くにつけての氣苦勞が、胸につかへて此樣に、酒も通らぬ物思ひ、何處に何うして居るとても變る姿ぢやないわいなっ。あの人さんに流浪させ、それから一度も逢ひませぬ、と言うて起請の神樣へ、何う言譯が立ちませうと、差俯向いてゐたりけり。〽今日は人の身、明日はまた、我身の上と思へども、交せし事の有るなれば、昨日に變る有樣は、戀しき人に淡島の、姿となりて此處彼處、兵具屋が門の口、此處ぞと思ひ聲張上げ、詞〽淡島大明神、女子は針ばし粗末にせぬ功德。詞〽あれ〳〵音羽さん、面白い淡島が來たわいな。由來を唄はせ、ナント聞かうではござんせぬか。詞〽アイそりや面白う御座んせう。其淡島は何處に居るぞいな。詞〽あれ〳〵彼處に。詞〽コレ淡島え、上げましやう。〽と、互に顔を見合せて、詞〽ヤアこりやお前は卅七樣

太にある。裁縫の上達、緣結び、安産、下の病治等を祈願する神
由來　淡島明神の來歴
野暮ならぬ　見て見ぬ振をする意
裏かへし　二度目に遊びに登樓するをいふ
居續け　前日から遊び續けること
久離　緣を切つて久しく離るゝこと

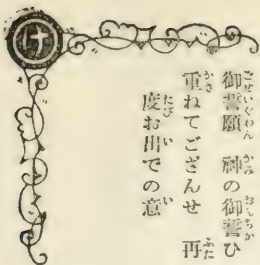
か。〽と、驚けば、朋輩女郎も野暮ならぬ、吸付煙草も我勝に、涙と共に語り合ふ。遣手の杉が聲高く、詞〽又一つ所へ寄合はずと、各自に離れてゐやしやんせ。エヽ癖の悪い。〽と、喚かれて、音羽は顏見て嬉しいやら、又悲しさが增したやら、言うて返らぬ事ながら、必ず明日は歸らんせと、言うたは二人が何時までも、逢ひ通したい心故、宵の返事に裏かへし、雨が降るとて翌日も、愛し可愛の數々が、積り積りし雪の朝、つい居續けが癖になり、其樣な姿になり振も、皆妾故に親と子の、久離も今は絕え果てゝ、いかい苦勞をさしやんすやら、僅か四月か五月に、強う窶れさんしたなう。病うてばし下んすなと、人目の關にうろ〳〵と、邊りまばゆき折ふしに、遣手の杉が、詞〽淡島もえい加減にしてやらしやんせ。見世の邪魔でござんす。通りや〳〵。〽と、言ひければ、女も顏を振上げて、詞〽コレ淡島さん、さぞ言ひ度いこともござんしやう。妾も聞きたいは山々。その言ひたいこの由來を言うて聞かせて下さんせ。

人目の關　他人の目に觸れることを恐れる意
通りや〳〵　お歸り〳〵の意
目交ぜ　目と目を働かせて意味を吞み込ませることをいふ
丑寅の御方　丑寅の歳の人をいふ
尾羽を烏　尾羽打枯らした意の洒落で零落した身をいふ
一門もなし　一文も

〳〵と、互ひに目交にかけて、素知らぬ顏してゐたりけり。笠傾けて淡島は、又高々と聲張上げ、詞〳〵忝けなくも紀州名草の郡、加太淡島大明神の、由來を詳しく尋ね奉るに、天照大神より第三番目の姫宮、針才女と申し奉る、神の御身なり。丑寅の御方は、御一代の御守り本尊、ほぞんかけたか郭公、八千八聲啼くと聞く。〳〵森の小烏われも又、尾羽をからすの羽ばたき、一もんも無し、一家も無し、梨の礫も無いお女郎に、この方少しも食い合ひなし。襟袖口も綻びの、綿さへ足にかゝりうど、今は互ひに見ぬ顏を、するが本實の通り者。詞〳〵長居は恐れお心も、優れぬやうなお顏つき、お暇申す。〳〵と、行かんとするを格子より、詞〳〵コレまあ待つて下さんせ。〳〵と、引留むれば。詞〳〵おつとコレ、大事のお宮が微塵になります。こりや私が商賣道具・勿體ない、汚れた手飾付けて貰ふまい。詞〳〵テモ仰山な。針箱のやうなもの、淡島ぢやの、お宮ぢやのと、コリヤ可笑しい。〳〵と、吹出せば、詞〳〵何が可笑しい。針箱の

なしに洒落る
梨の礫　返事のない意
食ひ合ひ　悔ゆる筋が無いといふ意をかけ構ひなしにかけていふ
かゝりうど　掛るを食客にかけていふ
通り者　通人の事
大事のお宮　首から胸へかけて吊り下げてゐる淡島明神の神體の箱をいふ
汚れた手節　女郎の

やうなお宮でも、此の神主が此の宮で、今日の日すぎを致す。何千兩と手入れても、傾城買といふものは、埒の明かぬもの、ほんに思ひ出すも腹が立つ、お暇申す。詞〽コレ待たんせ。詞〽放せ。詞〽イヤ放さぬ。詞〽エ、面倒な。〽と、振放し行かんとするを、詞〽コレ丹七樣。詞〽やかましい名を呼ぶな。詞〽そんなら尙呼ぶ丹七樣。詞〽コレサ拜む、シイ、白血長血の病の體は、さりとは不埒の御事なり。朝晩の起臥は、腰より下の病となり、眞實可愛い男に嘘をつくは罪となり、客への嘘はなんぼうも、救ひ取らんとの御誓願なり。淡島大明神。詞〽さても面白い淡島樣、コレ、又重ねてござんせ。〽人目を忍び朋輩の此里は、裲襠の脇に隱し入れ、軈て二階へ連れ行きぬ、後の名殘や惜しむらん。

【解說】此の曲は、丹波屋七郞兵衞（卽ち丹七）といふ商家の若旦那が吉原兵具屋の音羽に通ひ詰めた爲めに勘當され、淡島明神の鈴振りとなつて町々をあるき合力を受けてゐたが、或る日昔の戀が忘られずに吉原に足を入れ、

やうな淫な者の手を指していふ
口すぎ　生計
埓の明かぬもの　はか〴〵しくないと
拜む　勘辨してくれと謝る意
白血長血　共に子宮病の一種
なんぼう　幾何でもの意
御誓願　神の御誓ひ
重ねてござんせ　再度お出での意

兵具屋の格子先で、淡島の由來にかこつけて過去の愚痴を述べるといふ筋で。作曲者は鶴賀若狭椽である。此の曲は天明頃に出來たものであるが、その以前明和七年の秋江戸市村座に上場された長唄の『關東小六後雛形』(淡島)に、丹七が淡島明神の鈴振となつて廓に入り込み、音羽と戀を語ると云ふ所作事がある。それから此曲が出來て、次で安政六年四月江戸市村座で海老藏の追善興行の際、大切に『種々薩埵誓掛額』と題して、一つ家、五條橋と共に上演された富本の淨瑠璃で河原崎權十郎(後に九代目市川團十郎)が丹七、岩井粂三郎が兵庫屋音羽を勤め頗る評判であつたところから、急に流行して今日に及んだのである。

すめる世　仕める世を清める世即ち治まる世に云ひかける

追手　封印切の罪人忠兵衛を捕へんとする追手

飛脚問屋　人の音信を持つて遠方へ使する業の元締めで今日の運送店を兼ねたもの

古手買　古着買

節季候　年の暮に「せきぞろ」と唱へ

傾城三度笠（梅川）

へすめる世の、掟正しく畿内近國に追手かゝり、中にも大和は生國とて、十七軒の飛脚問屋、或ひは順禮古手買、節季候に化けて家々を、覗きのからくり飴賣と、子供に飴をねぶらせて、口を拐るや罠の鳥、網代の魚の如くにて、逃れん命は無かりけり。へ無殘やな忠兵衛、われさへ浮世忍ぶ身に、梅川が風俗の、人の目立つを包み兼ね、かり駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明かし、二十日餘りに四十兩、遣ひ果して二歩殘る。かねも霞むや初瀬山、餘所に見捨てゝ親里の、新口村にぞ着きけるが、詞へコレお梅、此處は御生れ在所、廿まで育つて覺えしが、師走の端に此の如く、諸勸進諸商人、春とてもない事、あれ彼處にも人が立つてゐる。野外れにも二三人、どうやら胸騷ぎがして來た。四五丁行けばほんの親、孫右衛門の家なれども、不通と云ひ繼母な

ながら戸毎に立つて錢を乞ふ者

網代の魚　冬期川中へ網の代りに木や竹を組んで魚を捕ること

かり駕籠　駕籠を借切つて梅川を隱すこと

二歩　今の五十錢

かねも霞む　金を鐘に云ひかける

初瀨山　大和の國長谷寺の在るところ

諸勸進　社寺の寄附

り。此藁葺は忠三郎とて、下作あてた小百姓、腹の中からの馴染、賴母しい男、へ先づ此處へと打連れ、詞へ忠三郎宿にか、久しうお目にかゝらぬ。へと、つッと入れば嬶と思しく、詞へ誰で御座るぞ。こちの人は、今朝から庄屋殿に詰められ、今は留守で御座る。へと、云ふ。詞へ忠三殿にお嬶樣は無かつたが、此方は誰でばし御座るぞ。詞へア妾も三年あとに嫁入りして、前方の知人は、どれがどうとも知りませぬ。ヤア實に皆樣は、若し大坂では御座らぬか。このあとの孫右衛門樣の息子忠兵衛殿と申すが、大坂へ養子に行て、傾城買うて人の金を盜み、其傾城連れて走られたと云うて、代官殿より強い御詮議。孫右衛門殿は、疾に親子の久離を切り、構はぬ事とは云ひながら、眞實の親子なれば、年寄つての氣苦勞。こちの人は馴染の事なれば、若し此邊をうろたへて、見付けられてはいとしい事と、内外へ氣を付けらるゝ。庄屋殿からは呼びに來る。寄合ひの印判のと、節季師走に此在所は、傾城事で煮えかへる。な

金を集めに廻る人
不通　緣を切つて音信不通
藁葺　藁葺屋根
下作　小作百姓
代官　村々の年貢公事などを掌る地方官
久離を切り　緣を切ること
印判　種々の觸書に承知の捺印する意
節季　歳の詰つた意
轉ての　忌はしいといふ意

ら轉てのお傾城殿や。へと、知らねば遠慮も無かりけり。忠兵衛ははつと思ひ、詞へア、如何にも〳〵、大坂でも其取沙汰。我等は夫婦連れにて、年籠りに參宮の志、懷かしさに寄りました。一寸呼んで來て下され、立ちながら逢うて歸りたい。大坂者とは云はずに賴みます。へと、云ひければ、詞へム、扨はいかう懇さうな、行つて呼んで來ませう。さりながら、鎌田村の御道場へ、京のお寺のお下り、毎日のお談議、先から直にお道場へ、參られたも知れず。燃えさしの下さし燻べて下されへと、襷がけして走り行く。へ跡の門口梅川が、ハタと鎖して掛金かけ、詞へこれはほんに敵の中、かうしてゐても大事ないか。へと、言ひければ、詞へ忠三郎と言ふ者は、百姓に稀な俠氣を持つた者、賴んで一夜逗留し、へ死ぬるとも此所、故鄉の土に身をなして、生みの母の墓所へ、一緒に埋れ嫁姑の、未來の對面させたいと、眼もうろ〳〵となりければ、それは嬉しう御座んせう。去りながら、妾が父さん母さんは、京の

參宮　熊野參り
御道場　說教場をいふ
お寺のお下り　京都の豪い僧侶が布教に巡回して居ること
燃えさしの下　焚かけた釜の下を言ふ
未來の對面　冥途で逢ふこと
目まひ持　頭痛がして目がくらむ意
竹櫺子　竹の櫺子窓
阿彌陀笠　後の方へ

六條の珠數屋町、定めしこの間より、詮議の人が行きつらん。日頃目まひ持ちなれば、何うならさんした事ぢややら。ま一度京の兩親に、一目逢うて死にたいと、膝に凭れて泣きければ、おゝ道理とも〱。われもそなたの親達に、聟ぢやと言うて逢ひたいと、人目なければ抱き合ひ、涙の雨の横時雨、袖に餘りて窓を打つ。詞〽あゝ又降つて來たさうな。〽と、西うけの竹櫺子、反古の障子の隙間より、見やる野風の畑道、うしろ簔吹に降る雨に、傾げて急ぐ阿彌陀笠、道場詣り打連れしは、詞〽アレありや皆在所の知つた衆、アレ〱あれに見えるが親父樣。詞〽あの綟子の肩衣が孫右衛門樣かいなあ。ほんに目元が似たわいの。〽それ程よう似た親と子の、言葉をも交されぬ、これも親の御罰ぞや。お年も寄り足元も弱られた。今生のお暇と、手を合すれば梅川は、詞〽妾は嫁で御座んする。夫婦は今をも知らぬ命、百年の御壽命過ぎて後、未來でお目に懸りましよ。〽と、口の中にて獨り言、諸共に手を合はせ、咽び入

仰いでかぶつた笠
肩衣　肩より背にかけて着る袖無し
百年の御壽命　生命の長いことを形容していふ
後生願ひ　今の世で善根を施して極樂往生を願ふこと
延べ　延べ紙の略。鼻紙にする小形の杉原紙
懇ろ　深切の意
つれ／＼　つく／＼に同じ

りてぞ歎きける。孫右衛門は老足の、休み／＼門を過ぎ、野口の溝の薄氷、滑るを留まる高足駄、鼻緒は切れて横樣に、泥田へがばと轉け込んだり。ハア悲しやと忠兵衛もがけども騷げども、身を顧みて出もやらず、梅川あわて走り出で、抱き起して裾絞り、詞〽申し親父樣、何處も痛みはしませぬか。お年寄のおいとしや、お足もすゝぎ、鼻緒もすげて上げませう。少しも御遠慮なさるゝな。〽と、腰膝撫でゝ勞はれば、孫右衛門起上り、詞〽何誰やら有難い。お陰で怪我もいたさぬ。若い女中のお優しい。年寄めと思召し、嫁子もならぬ御介抱。寺道場へ參つても、是、こゝの一心が邪慳では參らぬも同然、此方がほんの後生願ひ。ア、もう手を洗うて下され。幸ひ此處に藁もある。〽鼻緒は私がすげましよと、懷の塵紙を取出だせば梅川は、詞〽よい紙が御座んする。紙撚よつて上げませう。〽と、延べ引裂きし其手元、孫右衛門は不思議さうに、詞〽先づ此方は此邊に見知らぬお人ぢやが、何方なれば此樣に、懇にして

咽返り　涙で咽喉が
一ぱいになる
臥し惱み　病氣のこ
と
なんばう　どんなに
の意
連合　亭主のこと
詞の端　詞の容子合
をいふ
魔が差いて　惡心が
きざすこと
嫁御故　梅川を指し
ていふ詞
縄取　捕縛する役人
をいふ

下さる。へと、顏つれ〴〵と眺むれば、梅川いとゞ咽返り、涙は胸に餘れども、わざと色には出ださずして、詞へ我等は旅の者、私が舅の親父樣、丁度お前の年配で、恰好も其儘、外へするとは更々以て思はれず。お年寄つた舅御の、臥し惱みの抱きかゝへ、みやづかへは嫁の役、御用に立てば私も、なんばうか嬉しいもの。連合はなほ親御の事、飛立つ樣にもある筈。其紙と此紙と、換へて私が申し受け、連合の肌に付けさせ、父御に似たる親父樣の、筐に見せたう御座んす。へと、塵紙袖に押し包む、涙ぞ色に出でにけり。詞の端に孫右衛門、つく〴〵と推量し、道が恩愛捨て難く、老の涙に暮けるが、詞へム、此方の舅に此爺が、似たと云うての孝行か、嬉しいうちに腹が立つ。年更けた倅を、仔細有つて久離切り、大坂へ養子に遣はせしに、根性に魔が差いて、大分の人の金を過まり、揚句に所を走つて、此在所まで詮議の最中、誰故なれば嫁御故、近頃愚痴な事なれども、世の譬にも云ふ通り、盗みする子は憎く

勘當（かんだう）　子を離別する一種の制裁

痴呆者（うつけもの）　愚鈍者と同じ意

今參る（いままゐる）　只今も參詣したの意

如來樣（にょらいさま）　釋迦如來をいふ

御開山（ごかいさん）　お寺を開いた高僧

身を揉み　おもて向きに其處へ姿をあらはすことが出來ないので、蔭で身をもがいてゐるこ

う無うて、繩取が怨めしいとは此事よ。久離切つたる親子なれば、善いにつけ惡いにつけ、構はぬ事とは云ひながら、大坂へ養子に行て、悧發で器用で身を持つて、身代も仕上げた、あの樣な子を勘當した、孫右衞門は痴呆者、阿房者と云はれても、其嬉しさはどうあらう。今にも探し出だされて、繩にかゝつて引かるゝ時、好い時に久離切り勘當した、孫右衞門は出來した、幸福ぢやと譽められても、其悲しさはどうあらう。〽今から思ひ過ごされて、一日なりとも極樂へ、早う往生させてと朝夕に、拜み賴むは今參る、如來樣御開山、佛に嘘は吐かぬぞと、土にどうとひれ伏して、聲をはかりに泣きければ、梅川も聲を上げ、忠兵衞は障子より、手を出だし伏拜み、身を揉み歎き沈みしは、理とこそ聞えけれ。

【解說】此の曲は、寶永八年三月、近松門左衞門が、大阪竹本座の爲に書卸した操淨瑠璃の『忠兵衞梅川冥途の飛脚』の下の卷「忠兵衞梅川相合かご」の一節を其儘新内に作曲したもので、大阪淡路町の飛脚宿龜屋の養子忠兵衞

と
理なるほどと合點
させること

が、新町槌屋の梅川に馴染を重ね、飛んだ意氣張りから爲替の金の封を切りそれで梅川を身請して、實の親里である大和の新口村へ、兩人道行をして來ると云ふ筋。この近松の『冥途の飛脚』は色々に改作されて、正德三年十月には紀海音が大阪豐竹座の爲に『傾城三度笠』を書き、安永二年十二月には、菅專助、若竹笛躬等が、豐竹座の爲に『けいせい戀飛脚』を書き、更にそれを補綴したものが、今日歌舞伎や義太夫に一般に流行してゐる『戀飛脚大和往來』である。この新口村の道行のくだりは、古くから富本や常磐津や淸元の淨瑠璃に作られたものも澤山ある。何れも舞臺にかけられたが、新内の方は單に素淨瑠璃として語つてゐたものらしい。隨つて作曲の年代も詳らかでないが、或は魯中あたりの節付ではないかとの説もある。

二重衣戀占（花咲綱五郎）

〽その昔、天の浮橋のもとにて、あな嬉しとの睦言は、未だ二神の若盛り、その逆鉾の滴りの、積き固まる國津民、今に變らぬ色の道、源遠くその根深し、誠に六塵の境慾厭離しつべし。その中に彼の惑ひの一つ、止めがたきのみぞ、老たるも若きも何れ變らぬ戀衣、實に花咲は心にも、染まぬ男に受出され、淺草邊に圍はれて、ゐながら見ゆる觀音の、塔は五重か三重の、罪深い身のいとゞなほ、彼の人戀し床しいに、心浮かねば自から、通ふ男を袖に置く、露の涙の乾く間も、泣き暮すこそ哀れなる。女子供は寄合うて、つべこべ話すも人の噂、飯焚のお鍋が、詞〽コレおかねどん、おぬひどん、何とアノ御新造様のお患ひ、何時良うなる事ぞ。さして取かぶつてお臥るでもなく、只しく／＼とおむづかつてばかり、旦那様も此のやうに、女ばかりでは氣遣ひと、毎晩々々遠い處か

天の浮橋　神代に、天と地との間に架かつてゐたと云ふ橋

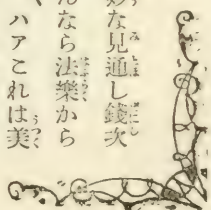
二神　伊弉諾伊弉册の二神をいふ

逆鉾の滴り　天の瓊矛を天上から逆さまに下して、引上げ給うた其したゝりが凝り固まつてをのころ島が出來た。それが日本の一部だと云ふ傳說がある

六塵の境慾　形を見る色塵、歌を聞く聲塵、身に所持せる香を嗅ぐ香塵、美味を食ふ味塵、肌に觸れる觸塵、前の五塵に對して善惡を起こす法塵の六つを六塵と云ひ、又六境と云ふ
其慾に迷ふこと
厭離しつべし　厭ひ離れるべきものだと云ふ意
彼の惑　色情をいふ

らお通ひ、然しお一つ所にお臥りながら、何もいたづらなされぬやら、アノ信心な旦那が、手水召すと直ぐに看經、どうも綺麗過ぎて合點が行かぬ。なんとまあ旦那衆の心は、おとなしいものではないか。…………………………〽と、顏を赤めて話しける。行く水と過ぐる月日と散る花と、遣ひ棄てたる身は元へ、何れ返らぬ世の中や。憂き勘當に逢ひ馴れし、彼の花咲を訪ねんと、身は占の裏表、町屋々々を聲高く、詞〽當家本卦の占ひ願ひ望みの考へ、手の筋見るは法樂。〽と、呼び歩く身は本町に、名高き中根屋綱五郎が、成れの果てこそ淺ましき。女子供聞付けて、詞〽何でも是れはよい慰み、呼び込んで手の筋見せ、嬲らうではあるまいか。詞〽コリヤよからう。〽と、立出でゝ。詞〽コレ占ひ。〽と呼び入れられ、上り口に腰打ちかけ、詞〽この法印が占ひは、弘法大師一子相傳にて、或ひは人相の善惡、失物、欠落、夢判じ、嫁入、聟取、勝負事、病人の生死、釜の唸り、犬の遠吠、猫の屋根歩き、鷄の宵啼き、烏

花咲　遊女の名
圍はれ　外妾生活
彼の人　綱五郎の事
通ふ男　旦那を指す
袖に置く　厚遇しない意と下句の露とにかけていふ
おむづかつて　焦れて泣くこと
遠い處　本宅の遠いことをいふ
看經　經文を讀むこと
法樂　錢は要らぬといふこと

の行水、年よりの歯みがき、若息子の看經するまで、奇妙な見通し錢次第、手の筋見るは法樂なり。〽と、饒舌りける。詞〽そんなら法樂から見て貰はう。〽と、腰元のおかねが出す手を打眺め、詞〽ハアこれは美しい手の筋、先づ器用筋と見ゆる。名を差して見せう、ム、お銀か。詞〽イエ〳〵。詞〽おりんか。詞〽イエ、おかねと言ひやす。詞〽ム、成程その筈、りんも銀も金ぢや。さて見た處が、此方の望みは、堺町が見たからうの。そりや笑を含んでぢや。詞〽さあ、わつちも見て下さんせ。詞〽エ、此のおなべどんは、おれが仕舞ひもせぬもの。詞〽オ、待つたり〳〵。さてと此方の年を當てゝ見せう。今いふから當つたら返辭をさつしやれ。ム、顔付から姿格好から、手の筋に合せて見れば、大方十五六七。詞〽アイ、七でござんす。詞〽七か、エいやと言はれぬものぢや。手の筋に年の數がある。サアおなべどん。どれ、これは汚い手ぢや。いかさま、おなべどんぢやな。その證據に顔が杓子ぢや。ハヽ、何と奇妙

本町　有名な大商店が軒を連ねる日本橋本町をいふ
法印　山伏、修驗者
見通し　判斷がよくあたること
腰元　小間使に同じ
堺町　芝居の在る所
堀つても叶はぬ　土を堀つてもの意で無益な譬
陰陽師　占者をいふ
お物師　お針をいふ
たんてき　眞實にの意

か。へそんならわしが願ひが、叶ふか叶はぬか、見て下さんせ。詞へム、これはチト難かしいが、それも叶ふすべならツイ叶ふ。叶はぬ事なら堀つても叶はぬ。マア何の願ひぢや。詞へアノ私が身の上。詞へア、それがどう知れるものか。世間の比喩にも、陰陽師身の上知らずといふ。詞へいかさま、これは尤も。へと、頷いてこそすさりける。お物師のぬひが思ひつき、詞へなう御新造様の御病氣占うて聞くまいか。詞へコリヤいかさま良い幸ひ。コレ坊様、これの御新造様、疾うからのお患ひ、考へて見て下さんせ。詞へやアこれは餘ツ程難かしいが、たんてきに占ひましよ。へと、懷中より、書物取出し押開き、算木を並べ、詞へしんかんじんはいひめいもん、ハヽこれは幾つばかりの人ぢや。詞へ二十四五でござんす。詞へム、何時からの病み付きぢや。詞へされば、床に就くといふでもなければ、何時とも知れず、マア二三年此の方。詞へオ、よし〳〵、ハア知れた。それはブラ〳〵といふ病ひぢや。神佛を信心な

されば。拙者が祈禱致したら早速宜うござらう。總體病にはそれ〴〵の神佛の受取がござる。まづ頭の病ひは愛宕山。胸の燃えるは淺間の明神。腰より下は穴八幡と子の聖。紺屋の病ひは愛染明王、若衆の病ひは南無地藏菩薩。熱病さますは比叡の山。番太郎なら根津權現。勤めの身なら蛸藥師。泣く子供には雨の宮。胴取ならば四三五六の明神。借錢乞ひには泣不動。嫁打ちならば南無釋迦如來と麻布の明神。皆それ〴〵の品に依つて祈禱致す。マア御新造樣にお目に懸り、樣子見てあげませう。〽と、いふ聲洩れて奧よりも、主の女は思ひある、氣は浮かねども彼の人に、もしや逢瀨の緣もがな。占ひ聞くも念晴しと、立出でゝ見る顏と顏。詞〽ヤアそなたは花咲。詞〽コレ〳〵、確かにそれと見通しの法印樣。滅多に麁想な事はあるまいが、考へ違ひもあるもの。急かずと私が身の上、樣子があらうと何事も、當り障りのないやうに、占うて下さんせ。さて〳〵不思議な占さんにお目に懸かり、嬉しや私が願ひ占うて貰

算木　易に用ひる陰陽六本の木
しんかん云々　震坎じんはいなどゝ、易の卦を出たらめに云ふ
プラ〳〵　横着と云ふ意を洒落る
神佛の受取　神佛の得意或は專門
愛宕山　高い個所と云ふ緣でいふ
淺間　煙の緣でいふ
穴八幡　女陰の緣
愛染明王　染めると

いふ字の縁
地藏菩薩　痔にかけた洒落
比叡の山　冷えるの縁語
根津權現　不寢の番の洒落
蛸藥師　吸付くと云ふ洒落
雨の宮　飴の洒落
胴取　博奕の胴を取ることをいふ
四三五六の明神　賽の目でいふ
念晴し　氣晴しの意

はうと、思へば胸が塞がる。〳〵と、隱し涙に暮れゐたる。詞〳〵お前樣がこれの御新造樣で御座りますか。ハテなうお病氣とは仰しやれど、達者さうに苦勞もなささうなお顏付き、皆の衆が合點いかぬがお道理。いかさま知れぬ人心、よもやこれほどの御病氣とは思はなんだ。エ、聞えた。金性に目が眩み、受出されたは福德か。テモ水臭い水性、定めて手足が冷えませう。これ八卦の表に書いたる木性も嘘。土性までも燒いて呑んだる火性が高ぶつたる顏付、エ、胸が燃えるでござりましよ。夜晝となく通ひ詰めたる、通ふ神の祟りがあらば、私が祈念祈禱して、さつぱりと除けを致して上げましよ。ア、手前が正氣なまゝに、人の言葉を眞實震の卦と思ひ、發上斷まされて上りつめ、親の勘中連受けて、當卦本卦を追ひ出され、モウ絶體絶命とは思へども、せめて今一度は逢ふも不思議、逢はぬも不思議と占算、利根相に女の言葉を、一代守本尊とはいかい痴け。ア、巽下斷巽下斷、微塵もゆこんは殘らぬ。〳〵と、涙もこぼさ

木性　起請にかけていふ
震の卦　眞にかけて云ふ
兌上斷　戯談と欺まされとにかけていふ
勘中連　勘當の洒落
本卦　本家の洒落
利根相　悧巧さうの洒落
いかい　甚だしいの意
巽下斷　損だの洒落
以上何れも易の卦

ぬ當言の、心ぞ思ひやられたり。女は顔を打ちあかめ、詞〽段々様子がある私が病ひ、差向ひに心を明かし、占うて貰ひたい事もあれば、なう皆の者観音様へ行て、伊織が能でも見て、日が暮れたら直ぐに馬道の伯母様へ寄つて遊んでおぢや。必ず家に氣遣ひせずゆる〳〵と、少々は泊つてなりともおぢや。詞〽アイそんならおぬひどん、おかねどん、奥山へ行て腹一杯、〽遊ぶが嬉しさ跡も見ず、駈け出し行くこそ愚かなれ。花咲跡を見送りて、ア丶嬉しやと側へ寄り、明暮戀しい床しいの、心が通じてお健な顔、不思議な所で悲しいお姿見ますると、抱き付くを突き飛ばし、詞〽ヤイおのれが腐つた眼にも、俺が姿が悲しいか。誰あらう中根屋綱五郎とも言はる丶身が、願人坊主同前の此の有様、これ皆おのれがすることぞ。〽不圖逢ひ初めし其の日より、一日逢はねば戀しうて、家に居るにも居られればこそ。堅い親仁や手代の目を、忍びて通ふ夜ばかりか、晝も宿へは歸らずに、上り詰めたる二階の階子、親に逆らうこの

の名である
伊織が能　小屋掛の能歌舞伎
奥山　今の淺草公園
願人坊主　說教節を唄つて錢を貰ひあるくチョボクレ坊主をいふ
身の上知らず　陰陽師身の上知らずの俚言を借りていふ
慾の熊鷹　慾張り者を罵る詞
夜鷹　下等な賣女を罵る詞

身の上、勘當受けしは一昨年の、夏の衣は薄くとも、互ひの契りは厚かましう、我さへ醜い姿をして、其方の方へは行かれぬと、逢ひたい見たい戀しいも、我身に恥ぢて自から、遠去かりたる其の中に、受出されしと聞いた時、腹が立つやら口惜しいやら、無念な命ながらへたも、おのれに逢うて此の恨み、言はう／＼と一筋に、思ひ付たる陰陽師、ほんに斯くまで騙さるゝ、身の上知らず、うか／＼と、死なずに居たが口惜しい。受出されて榮耀する、慾の熊鷹夜鷹め犬め、畜生めと、叩いつ踏んづ恨み泣き、頭巾も衣も投付け打付け、やつぱり元の厚鬢の、油氣もなき亂れ髮、言譯もなき風情なり。〽花咲涙の顏を上げ、コレ聞えぬぞえ綱五郎さん。お前に進ぜたこの身體、打叩かるゝは厭はねど、今言はんしたが眞實なら、そりやあんまり酷いぞえ。なんぼお腹が立つとても、眞から私が可愛いけりや、さう氣強うはならぬもの。言ふは今更過ぎし秋、初の一座の連の中、お前の姿振挨拶が、何うやら逢うて見たならば、面

厚鬢　鬢を厚く結ふこと
挨拶　應對ぶり
誓紙　男女の心が變らぬことを契る起請
親方　女郎屋の亭主
をいふ
夢心　夢中になつて逆上せてゐることと
増花　自分より美しい花。他の女のこと
色を稼ぐ　他所で遊ぶと推していふ詞

白さうな男ぢやと、ひよつと思ふと沁々と、好いた心が通じてか、私にお前が逢ひたいと、言はんす時の嬉しさは、飛立つ胸を納めた返事、嘘ぢやないかえ誠ぢやと、言葉の根をも押し晴れて、逢うた其の夜の面白さ。初手は浮氣で相惚の、指に互の名を彫り合ひ、後は眞實愛しうなり、疑ひ晴らす誓紙の數々、重なる中を親方が、堰けば一倍逢ひたさに、隱れて通ふ夜毎に、首尾して逢うて歸す夜は、其の移り香を其の儘に、抱いて寢てゐる夢心。逢はで戻せし其の時は、他へも寄りて増花の、色を稼ぐか厭やらかと、一人氣を揉み寢もやらず。ほんに浮世とあきらめて、なほ彌まさる物思ひ、勤めの辛さもこなさんに、添ひたいばかりに凌ぐぞや。それに久しう便りもせず、茶屋船宿へ日に千度、文言傳の返事も無く、恨み案ぜし折柄に、今のお人に受出され、此處で死なんとせしかども、此の世でお前に今一度と、思ひ苦しき明暮の、露忘れたる夜半もなく、泣かぬ日とては無いわいな。殊に今添ふ男には、初會裏會替へな

ほ來る度に、床で帶さへ解かぬ身を、受出されし今日までも、氣合が惡いと振り付けて、肌を觸れぬは神かけて、僞りならぬ證據ぞや。これほど心を盡くすもの、連れて退かうとは言ひもせず、今の言葉の胴慾さ。何の因果で其のやうに、氣強い男が私や可愛いと、人の聞くをも打ち忘れ、口說き立てゝぞ泣き叫ぶ。綱五郎も淚に暮れ、詞〽あゝ、謝つた。さほど深い心とは知らず、恨みの段々許してたも。その心を聞く上は、少しも早く連れて退き、添ひ遂されず捕へられ、屍は梢に曝すとも、此の世の本望、イザ來い。〽と、夕暮暗き宵闇に、紛れて出づるぞ危ふけれ。

【解說】此の曲は、本町の中根屋綱五郎といふ商家の主人が、吉原の遊女花咲に迷うて家産を蕩盡し、遂に陰陽師と零落してさまよひ步行くうちに、不圖淺草觀音附近の或かこひ者の宅に呼込まれ、婢女達の手相を占つてゐると、圖らずも、其處は花咲が落籍されて圍はれてる家とわかり再び戀の緒が

寢もやらず　寢られぬことをいふ

露忘れたる　少しも忘れたるの意

初會　初めて妓樓で男女が見ゆること

氣合　氣分に同じ

振り付けて　嫌つて閨の交はりを拒むこと

屍は梢に曝す　姦通の罪で仕置臺に首を曝すことをいふ

宵闇　月が出ぬ暗い宵の氣分をいふ

戻り、家の召使を悉く、外出させた留守中に、両人は手に手を取つて出奔し、情死を計るといふ筋である。作曲者は『明烏』『蘭蝶』等の代表的新内を作つた鶴賀若狭掾で、寶曆八年秋、官命で朝日と名乗る事を禁ぜられた爲鶴賀と改めた披露に、江戸森田座で鶴賀加賀太夫（後に新内）と共に語つた淨瑠璃である。

浮氣烏　遊客を譬へていふ
佛の戸帳　戸帳の裡の佛をいふ
井筒　女郎屋の名
撞木杖　丁字形の杖
太郎　亭主の太郎左衛門を略していふ
お目にぶらさがらぬ　お目にかゝらぬの意
無常風　葬禮歸りだから、亡者をきかして無常の風に誘はれて來たと洒落

雙紋刀銘月（お花半七、又、露時雨裳裾浪）

〽浮氣烏とそやされて、月夜も闇もこの廓へ、通ひくる〳〵黒衣、高慢寺といふ坊主客、お花に馴れし鶯の、法華經とも念佛とも、知らぬが佛の戸帳ぞと、井筒が暖簾撞木杖にてヒラリとあげ、詞〽太郎内にか。四五日お目にぶらさがらぬ。詞〽イヤこれは〳〵お珍らしや、何方風が吹いたぞえ。詞〽いや〳〵何方風でもない。今夜は所在の無常風、沙汰はないこと葬禮の戻りぢや。ちよつと寄りたし、心は急く、はてどうせうか斯う燒香場も、候べく候にやつて退け、引導も何言うたやら。ア、可哀や不愍や、今日の亡者もろくな所へは行きをるまい。これもお花への心中。〽と、雪の頰さき遠慮なく、髯口寄せて頰ずりは、山葵おろしに糞拔きの玉子、痛そな顏の痛々し。お花が浮かぬ顏つきに、主夫婦は氣の毒がり、詞〽コレお花、どうぞいの。お寺なら大黑、此處でアッサ

る
から焼香場　から仕
やらかの洒落
候べく候　投げ遣り
のこと
お花への心中　お花
へ心中立ての意
雪の頰さき　美しい
女の白い頰先をい
ふ
頰ずり　頰と頰と摺
り合はすこと
山葵おろしに煮拔の
玉子　柔かい茹玉子
を山葵卸で擦るや

り惠比須顔して見せましや。笑やいの。詞〽ア、これは太郎、お黙りお黙り。あれは我らに甘えるのぢや。あの腹立てる所がなほうまいぢやて。へ、、、嬶衆、二階へ連れておぢや。今宵はこちの妓衆を總揚げ、鰻二三歩燒かせに遣りや。〽南無阿彌陀佛と騒ぎ立て、皆々二階へ上りける。既に傾く宵月の、夜も早や四つ半七は、金の才覺ならずものと、茶屋には堰かれ親方に、見限られつゝ筒井筒屋の、格子の影に身を潜め、お花が便を待ちゐたる。こゝに誰とも白髪交り、金柑頭に無用の提灯、門口にてふつと消し、詞〽太郎左衛門さんお宿にか。花めが父西陣の九兵衛で御座る。〽と醉どれ聲の高調子。主見るより、詞〽やれ〳〵親仁來てか。さあ〳〵此方へ。〽に茶釜の前、坐るが否や太郎左衛門、額に皺寄せ、詞〽この程段々言ふ通り、そちが娘花がこと、そも〳〵小女郎の時分から、手形の表は丸十年、親方に損も掛けず、追付け年も明くぞや。なれども勤めの習ひ、小間物屋呉服屋紙屋で候の、煙草屋で候のと、買

らな慘酷な譬
大黒　坊主の妻
惠比須顏　笑ひ顏をいふ
娵衆　女郎達をいふ
總揚げ　樓中の女郎を殘らず揚げて遊ぶこと
四つ半七　四つ半(午後十一時)に半七をかけていふ
才覺ならずもの　工面がならぬを破落漢に云ひかける
茶屋には堰かれ　引

懸りの借錢が七八兩、その上親仁も行く〳〵は、あの子に懸る身でないか。ガラリ二十兩今一年切增し、居なりになれば借錢も先づその分、二十兩の金そなたが手取りに溜まれば兩爲めと思うて、色々と世話燒けども、かの刀屋の半七といふ虫が付いて、何の彼のと入れ性根、お花が一切呑みこめぬ。もうこの上は勝手次第、半七といふ職人の弟子、こゝら邊り拂ひさへ埒あかず、逆さに振うても三文なしは知れたこと。あのやうな極道と腐れ合うたお花の行末、流浪するは知れたこと。幼いから世話したなれば、良いことと聞くやうには御座らぬ。どうぞ意見でも召されぬか。壁に馬乘りかけては、明くべき埒も明かぬもの、前廣に手形せうため呼びに、へ遣つたと語りける。門口には半七が、聞けば無念さ悲しさに、格子の柱嚙みひしぎ、齒を食ひしばり忍び泣き。親仁は横手を丁と打ち、詞へさて〳〵苦々しい。親方樣に苦勞かけ、不孝者と申さうか。その刀屋め知つてをります。無賴者の大將、薦被りの下地。ヤイ花めは

手茶屋で斷られることをいふ
お花が便　お花が相圖をいふ
小女郎　禿をいふ
買懸り　現金でなく帳面になつてゐる買物の代金
手取り　全部收入をいふ
蟲が付いて　情夫が出來ること
入れ性根　知惠をつけること
三文無し　貧乏人を

何處に居る。用がある、こゝへ來い。引摺りに行て、お客前で耻かゝさうか。詞〽と、昔作りのつこど聲。お花は人目恥かしく、二階座敷もそこゝに、降りる階子もとつかはと、それと見るより、詞〽オ、父さんか。夜更けて何しに御座んした。〽と、傍へ寄れば押倒し、詞〽やい不孝者。親方さんのお話で、一から十まで聞き屆けた。半七といふ騙りめと、女夫にしては年寄つたこの親の鼻の下が干上るわい。二十兩といふ金が、天から降るか、地から湧くか。騙りめが挨拶バラリシヤンと切つてしまひ、年切増して奉公するか。厭と言へば分別がある。サアどうぢや。〽と、腕捲り、摑み付くべき氣色なり。聞く悲しさの遣る方も、涙に胸も塞がりて、暫し應へもせざりしが、詞〽なう父さん、朋輩衆は内證、客さん方の手前もある。さもしい事を言はんする。〽勤めする身の親達は、問ひ訪れの度毎に、可哀や親ゆゑ憂き苦勞、定めの年の明くまでに、屆いた男を見定めて、末の片付け心がけ、身を安樂にして見せい

譬へていふ
極道　働きのたい道
樂者
薦被りの下地　乞食になる下地
つこど聲　突慳鈍にいふ聲
とつかは　急ぐこと
鼻の下が干上る　生活が出來ぬこと
騙りめ　半七をさす
パラリシヤン　奇麗サッパリとの意
分別　考へに同じ
さもしい　淺猿しい

と、言はぬ親は御座らぬに、それに引替へこなさんは、節季々々にせびらかし、足らいでは又年切増し、思ふ男に添はせぬとは、あんまり酷い胴慾な。ほんの親より繼父は、なほ大事ぞと嗜んで、孝行つくす甲斐もなく、こなさんは私に微塵も憐れみが御座んせぬ。殺すなりと何うなりと、分別次第にしやさんせ。半七さんと緣切つて、勤めが片時なるものぞと、人目も恥ぢず聲をあげ、身を震はして泣きければ、詞〽ヤ吐かすな、〳〵。おのれを不愍に思ふから、この奉公はさすわヤイ。おのれを水仕飯焚奉公さしては、夏は夜の短いに、朝は星を戴き、冬は寒氣に閉ぢられて、手足には藥研ほどな胼皹、それが不愍さにこの奉公はさすわヤイ。難有いと思うて、冥加を知れ、冥加を。朝は晝まで寢る、結構なものは着る、甘いものは食ふ、なんとそれでも此の親が酷いか、憐れみがないかいヤイ。〽お花はハアッと泣出だし、かうした勤めの苦しみを、樂ぢやと思うて居さんすか。夜毎に變る憂き枕、客の機嫌のよしあ

定めの年　約束した年期

節季　歳の暮

せびらかし　強請に來ること

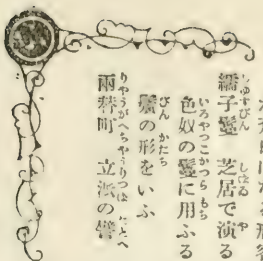
年切増し　證文を書替て勤めの年季を増すこと

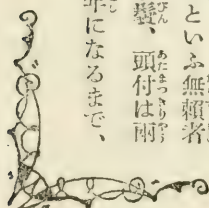
客を落さぬ　客が落ちないやうに手管を用ひること

無得心　わからず屋をいふ意

左團扇　右で猪口を取上げるといふ氣

しに、笑ふは結句泣くよりも、辛い悲しい數々は、ホンニ舟にも車にも。積むことだけはと辛抱に、客を落さぬ苦しみは、並大抵なことかいな。せめて今まで母さんの、達者で生きて居さんしたら、かうしたことはあるまいと、恨み嘆けば、傍若無人の繼父エセラ笑ひ、詞へアレまだぬかすか。盜人の晝寢もアテとやら。おのれが母に何の望みはなけれども、我を賣つて食はうため女夫になつた。今の言葉は誰が敎へた。それも半七の掏換めに習うたか。詞へソレその無得心のお前ゆゑ、かうした勤めするわいの。詞へヤ默りをれ。皆さん聞いて下され。他所の娘は奉公して請出され、親は左團扇で樂をする。おのれはそれと逆うて、タッタ酒なら一升か二升、どうぞ呑ましてくれろと言へば、底抜けぢやの、イヤ始終はどうでヨイ／＼ぢやの、イヤおれをせびらしやるの。こりや、何時ヨイ／＼になるほど酒呑ました。おのれは旨いものしたゝか食うて、一人の親の咽喉締める。親が無體か、子が不孝か、天道樣が正直ぢや。

樂な意
ヨイ〳〵　半身不隨をいふ
咽喉締める　苦しめる譬
九兵衛を取つて　九兵衛を取つて投げ付ける喩
急きくる顏の青疊　怒がこみあげて顏が蒼白になる形容
繻子鬢　芝居で演る色奴の鬘に用ふる鬢の形をいふ
兩栫町　立派の譬

そのベラ〳〵と饒舌る頰げた、蹴放して仕舞はん。〽と、武者振り付くを井筒屋夫婦、年のうちは此方の者、傷付けさせぬと引放す。詞〽思ふ男に添はれぬからは、いつそ殺しや〳〵〳〵。詞〽おう殺し兼うか。〽と競り合ひねぢ合ひ大喧嘩、破れかぶれと半七は、裾引ッからげ、井筒屋の庭へツカ〳〵、柄卷屋の半七と聲をかけ、九兵衛を取つて眞中に、ドツカと坐し、詞〽コレ親仁。そなたはお花か繼父、酢につけ粉につけ憎いは理り、コノ半七を掏換の騙りの强盜のと、いつ盜みした騙りした。此の半七の目からは、その方を人買と見た。もがりと見た。よしそれは兎も角も、お花は俺が女房、末は奉公仕舞うては、繼父殿で御座らうが、もがり殿で御座らうが、主のある女房分別して物言へ。〽と、急きくる顏の青疊、たゝき散らして詰め掛る。詞〽ウム刀屋の半七といふ無賴者はそなたか。ドレ顏見やう。ヤレ好い男、江戸元結に繻子鬢、頭付は兩栫町、內證は曾我どの、見せかけの力味措いてくれ。此の年になるまで、

肺毒散一服呑まぬコノ親仁、ゆすりは食べぬ。慮外ながら寛怠ながら、親の許さぬ娘を女房とは、暗闇へ行て盛相飯が食ひたいか。この娘を女房に持つには小判が要る、合點か。小豆粒ほどのこま金一つない態で、お花は俺が女房ぢや。アハヽヽ、餘りのことに臍が宿換するわいやい。生膽りとはそのこと、いつそ手をよう巾着切れ。家尻切れ。掏摸を、〽かはけと嘲けり。半七カッと急き上げ、詞〽オヽよう言うた。小豆粒は持たねども、小判といふもの持つてゐる。來年の給金二十兩渡すからは、お花は俺が女房。〽と、紙入より取出し、詞〽サア金出した、小判といふものに近付きになつて置け。〽と、眞向に投げ付くれば、詞〽アイタアイタ。〽金取り上げ、詞〽ヤイ半七、アノ娘はまだ五十年でも百年でも、頬に汁氣のあるうちは、奉公さして食はねばならぬ。二十兩ばかりの目腐れ金で、女房に持たうとは、ヤベつかつこう、ならぬわい。何處で盗んで失せたやら、後の詮議が矢釜しい、おのれに呉れる。〽と、投

曾我殿　貧乏のこと

ゆすりは食べぬ　ゆすりは受入れぬ意

慮外ながら　ぶしつけながら

暗闇　牢屋のこと

盛相飯　牢内で囚人に與へる盛切りの麥飯

こま金　細金。小粒の金銀のこと

臍が宿替　笑はせるといふこと

巾着切れ　掏摸を働けといふ意

家尻切れ　土藏破をせよと云ふ意
小豆粒　小さい銀貨
目腐れ金　少し計りの金のこと
ぺつかつかう　拒絕する動作
出入する　喧嘩すること
たぶさ　髻の根

付ける。詞〽いや金貰ふ好誼がない、おのれに呉れる。〽と、投返し、打付け〳〵摑み合ふ。お花はハット泣出す。太郎左衛門突立ち上り、詞〽コレ半七殿、お花はこちの奉公人、親仁と出入する氣なら、何處ぞ外でしたがよい。門には多勢人だかり、客の邪魔して貰ふまい。それ男共。〽ハッと心得若い者、向ふ鉢卷尻からげ、バラリ〳〵と立掛る。お花は譯も正體も、涙ながらに取付くを、ドッコイ何處へと押分ける、親仁を中に關守や、戀の隔てに胸の闇、雪駄片足に奈良草履、足には足らぬ半七が、たぶさ摑んで引出し、門口ハタと鎖しけるは、扨も是非なき次第なり。

【解說】大阪道修町の刀屋の手代半七が、石垣町の井筒屋の抱妓お花と馴染み、主人の金子を遣ひ込んで放逐されたのを、お花が同情して元祿十一年十二月、心中して果てた事件を、近松門左衛門が、其頃長町にあつた女腹切と綯交せて書きおろし、正德二年七月『長町女腹切』と云ふ外題で大阪竹本座

の操淨瑠璃に上演した。それを寛延元年江戸森田座に於て『露時雨愛染』の外題で、宮古路敦賀太夫が朝日若狭像（後の鶴賀若狭掾）と改名した披露に新内に節付して上演した。それを後に今の外題に改めたのである。

不斷櫻下總土產（佐倉宗吾）

宗吾住家の段

へ百乘の家には聚斂の臣を養はず、その聚斂の臣あらんより、寧ろ盜臣あれとは宜なるかな。されば佐倉宗吾郎、國民のため身命を拋ち、强訴の大望千辛萬苦、一心は据れども、せめて妻子に餘所ながら、暇乞をと獨旅、晝は人目を憚りて、急ぐ夜道の捗取らず、浮世の闇の儘ならぬ、眞間の渡りも打過ぎて、手古奈の沼の淺からぬ、雪踏み分けてやう／＼と、故鄕近く來にければ、幽かに見える我が住居、窓洩るゝ灯の細々と、變り果てたる日陰の身、突吹く風に胸躍り、思はず暫し佇みて。詞へ誠に人間の一生は、これに乘て置く案山子の如く、稻の實りしそのうちは、晝夜分たず人にも勝る功あれども、刈入濟めば火に焚かれ、それゆゑ古

百乘の家　國守の家　天子を萬乘の君、大國の主を千乘の主、小國を百乘と云ふ

聚斂の臣　重稅を課して民を苦しむる家臣

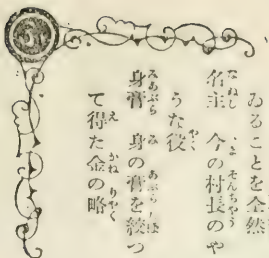
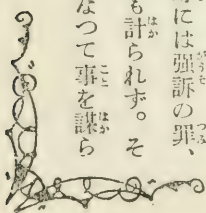
盜臣　主人の財を散じ動かす愚鈍の家來

强訴　正當の手續を履まない直接の訴訟

眞間の渡り　下總市

歌に詠ぜしも、山田守る、〽そうづの身こそ悲しけれ、詞〽秋果てぬれば訪ふ人もなし。わが身の上もまつその如く、圖らずもこの度の大難、わが身一つに引受くる、覺悟はもとより極めたれども、跡に殘せし女房の、長の留守中子供の介抱、一つには又わが身のこと、嘸や案じて待ちつらむ。〽と、心は急けど家內の樣子、いかゞあらんと差足拔足脊戶口より、覗けば妻は寢もやらず、物思ひげに灯に、叛けた顏の面窶れ、不愍の者やとせぐりくる、涙押へて門口より、詞〽女房ども、長々の留守のうち、嘸心勞にありつらむ。〽と、言ひつゝ入れば顏見て吃驚、詞〽ヤアこちの人戾つてか。〽待兼ねましたと走り出で、物をも言はず縋りつき、暫し涙に暮れけるが、やう／＼涙押し拭ひ、聞えぬぞえ我が夫、いかに男を立つるとて、國を出てから四月越し、梨の礫の音信も、泣き焦れたる妻や子を、思はぬ仕方ぢや胴慾な。酷いつれないお心と、思ひの丈けを口說き立て、恨み歎くぞ道理なる。詞〽ホヽウ其の恨みは理り

川の東北に在る
手古奈の沼　眞間の手古奈の社の邊にある沼
故鄕　下總佐倉在
日蔭の身　土地の役人から睨まれてゐるのでいふ
苅入　稻の收獲
そうづ　そほづの訛り、案山子のこと續古今集にある和歌の事
大難　領主の暴政に百姓達が騷擾した

ことをいふ
背戸口　裏口
面窶　顏が窶れたこと
せぐり　迫ること
心勞　氣骨が折れること
聞えぬぞえ　難面いぞやといふ意
思ひの丈け　思つてゐることを全然
名主　今の村長のやうな役
身膏　身の膏を絞つて得た金の略

ながら、そちもかねて知る通り、素とそれがしは肥後の國、熊本の產なりしが、仔細あつて國を立退き、當村佛頂寺の迎然和尙は俗緣の伯父なるゆゑ、〽この下總へ迷ひ來て、不思議の緣にて、詞〽この家へ入婿、舅殿にはこの世を去られ、及ばずながら名主の後役勤むれば、村の者より給金同前の役料受け、我々夫婦子供まで、皆安樂に暮すは、寒暑を凌ぎ働きし百姓の身膏、然るに上より年々の、用金課役取立の嚴しきゆゑ、或ひは子を賣り國を立退き、百姓の困窮見るに忍びず、かゝる時節は國のため、幾千萬の人の難儀と、身を粉に碎きいつぞやより、鎌倉（江戸表）のお殿樣へ度々の御訴訟申すと雖も、上に諂ふ惡人原の計略にて、かへつて我を無實の罪に陷いれ、命を取らんたくみ事。さすれば最早この上は、管領家（將軍家）へ直訴の外思案無し。さある時には强訴の罪、いよ〱重く、妻子にまでも如何なるお咎めかゝるまいも計られず。それゆゑひそかに戻りしは、夫婦親子の緣を切り、他人となつて事を謀ら

用金課役　年貢の税金や、割り當てられる賦役

鎌倉のお殿樣　當時は江戸といふを憚つて鎌倉といふ

管領家　將軍の番頭格

去狀　離緣狀

未來の男　死んだ男

火の中水の底　艱難する譬

哀れ切なる　思ひ切つて哀れなといふ詞

んと、認め來りしこの去狀、サアこれさへあれば、たとへ如何なる罪科に逢ふとても、そち達にはお構ひなく、この家へ聊か疵つかねば、未來の男へ申譯。〽さはさりながらこの日頃、子供の行末そなたの事、案じ暮らして一夜さも、コレ目を合せたる夜半もなし。恨みを晴らしてくれぐれも、わが亡き跡で子供がこと、賴むといふも胸迫り、あとは言葉も泣くばかり。女房ワッと聲をあげ、事を分けてのお言葉を、無理とは更更思はねど、愚痴な女の心から、夫婦は二世と聞くものを、夫の難儀を餘所に見て、長らへ居よとは、そりや情に似たる無理なこと。殊に三人四人まで、子までなしたる夫婦仲、お前ひとりが男ぢやと、世間の人に賞められても、跡に殘りし妻や子は、不心中もの不孝もの、臆病者と世の人に笑はせるのが本望か。火の中水の底までも、共に憂目は妻の役、夫に今更此去狀、見るも疎まし忌はしと、引裂々々歎きしは、哀切なる覺悟也

【解說】次の子別れの段の後に詳しく揭げてある。

今に始めぬ　いつもながらといふ意

一心決定　志を固く定めること

ぼんもタイ〳〵　坊にも下さいの意

包むに餘る　隱しきれないことをいふ

佐倉御領分　佐倉の殿の御領地といふ意で、佐倉は堀田上野介の領地

城付　お城附きと云ふこと

愛い奴　可愛い者よ

不斷櫻下總土產（佐倉宗吾）

子別れの段

〽夫も涙打拂ひ、詞〽ホヽウ今に始めぬそちが心底、コレ忝い嬉しいぞや。その心を聞く上は、愈々以て一心決定、片時も早く鎌倉（江戸面）へ出立せん。が、伜どもに餘所ながら暇乞、ソレ四人ともに起しめされ。〽と、夫の言葉。アイと返事はしながらも、これが親子の別れかと、思へばいとど立ち兼ぬる、心を心で取直し、やう〳〵子供の枕もと、立寄れば、兄惣平は起直り、父が前に手をつかへ、詞〽お父樣御機嫌ようお戻りなされて、おめでたう存じます。〽と、年端行かねど流石は總領、その間に源助喜八郎、詞〽お父樣お歸りか。おとなしう留守してゐました。サア〳〵お土產下され〳〵。〽と、何の頑是も三つ兒の、舌も廻ら

といふ意

門出祝ふ盃 出立を祝つて酒を呑み交すことをいふ

ちろり 少しばかりと云ふ意。それを酒を温むるちろりと云ふ器に云ひかける

田造 ごまめ鰯で、小殿原ともいふ

銚子鍋 酒を盛つて盃に注ぎ移す器

吠え面 泣き顔を罵しる詞

ぬ三之助、父が膝へ這上り、詞〽ぼんちタイ〳〵タイタイ。〽と、さも嬉しげな笑ひ顔。見る兩親は堪り兼ね、事譯知らぬ子供等が、今別るゝとも露知らず、喜ぶ顔を見る苦しさ。互に顔を見合せて、包むに餘る憂き涙、保ち兼ねたる有様を、子供は見るより、詞〽コレ父様、母様、何を泣かしやる。誰ぞ虐めてか。虐めてなら兄さん連れて行て叩いてやる程に、最う泣かしやるなや。〽と、わが袖で、顔拭はれて宗五郎、詞〽ハハヽヽヽ、もう泣きはせぬ。四人共に温しう、ヨウ留守してくれた故、是れはほんの嬉し涙ぢや。とりわけ兄の惣平は、年は行かねど總領なれば、言はずと知れたこの家の跡取、今此の父が言ふ事をよつく聞けよ。當所佐倉御領分、城付二百二十九ケ村の、その人々に此の父が、笑はれるが嬉しいか。但しまた賞められるが嬉しいか。サヽどうぢや〳〵。〽と、尋ぬれば、詞〽アイそりや、賞められるが嬉しう御座ります。詞〽ホウ流石は宗吾が倅ぢや。愛い奴〳〵。然らばこの父はな、幾千萬の人のた

おろ〳〵聲　悲しげにおろ〳〵泣く聲
物數言はねど　口數をきかないで意味が溢れると云ふ意
胸に釘打つ思ひ　胸に釘を打たれたやうに苦しい艱いといふ意
食ひしばる　齒と齒を固く食ひ合はせて口を閉ぢること
家の耻　家名に瑕が付くのを耻ぢる意
轉ばぬ先きの杖　用

めに、鎌倉（江戸面）のお殿樣へ、お願ひの筋あつて行くほどに、おとなしう留守しやうぞ。ソレ女房ども門出祝ふ盃せん。が、酒はあるまい水なりと。〽と、言ふに女房、詞〽オヽ、それ〳〵。今日は氏神樣へ、お前の身の上子供等が、行末願ふお神酒の餘り、ちろりあらう。〽とかい立つて、盆に上せたる銚子盃、肴に添へし田造の、行末願ふ小殿原、夫が前に差置けば、詞〽ホウめでたい、〳〵。サおさん一つ注ぎやれ。〽と、さし出だせば、詞〽アイ。〽と、答へて銚子鍋、手に取上げは上げながら、これが此の世の別れの盃、何にも知らぬ子供等が、跡でウロ〳〵しやうかと、思へばいとど胸迫り、手もワナ〳〵と慄へ出す。詞〽エ、未練者め。〽と夫が目使ひ叱られて、心沈めて注ぐ酒を、サラリと干して、詞〽サ惣平一つ飲みやれ。〽と、差出せば、手に受けながらシク〳〵泣き。父は見咎め、詞〽ヤア門出祝ふ盃を、何が不足で其の吠え面、不吉千萬たしなめ。〽と、言はれて惣平おろ〳〵聲、詞〽お父樣のお盃、

心に用心を重ねる　ことを譬へていふ

馬に乘り鎗を突かして　立派な武士になつてといふ意

あどなく　あどけないことをいふ

おとゝ　お酒のこと

取納め　盃を飲み納めること

殘りの六人　宗五郎と共に訴訟に鎌倉に赴いた總代の六人をいふ

諜者を附け　探偵を

難有うは御座りますれどな、鎌倉（江戸面）とやら遠い所へお越しなされば、何日お歸りにならうやら。ヒヨツとこれがお別れの、盃にならうかと、〽それが悲しい〳〵と、幼な心の孝行心。母は驚き、詞〽ウム扨はそなたは最前からの二人が話を、詞〽アイ寢た顏して聞いて居ました。申し父樣、どうぞ御用が濟んだなら、私ら不憫と思召し、〽早う戻つて下さりませと、物數言はねど胸に釘打つ思ひ。見やれば妻は身を背け、泣顏見せじと食ひしばる。かゝる健氣な子を棄てゝ、何と命が棄てられう。笑はゞ笑へ親子連、何處へなりと立退かうか。詞〽アゝいや〳〵今更逃げ走らば、妻子に迷ひし卑怯者と、我ばかりか家の恥、未來の舅へ言譯なし。〽と、亂るゝ心を押沈め、詞〽ハゝゝゝ、何を譯もない。最前母に言うたのは、アリヤ轉ばぬ先の杖と言ふもの、氣遣ひせまい。案じまい。今度鎌倉（江戸面）へ行た戻りには、馬に乘り鎗を突かして歸るである。〽と、子供すかしに言ふことも、心の覺悟ぞ哀れなる。流石童

入り込ましてゐることをいふ
詮ないこと　仕方がないと云ふ意
怯れは取らぬ　失敗はしないと自信する意
血の涙　血の出るやうな悲壯な涙
引かるゝ後髮　恩愛の情に牽かされて後ろに氣を取られること

のあどなくも、詞へそんなら嬉しう御座ります。そしてこの盃はエ。詞へそれは順々に指しめされ。へそりやおとゝぢやと喜ぶ幼子、三之助は母が持添へて、涙かくして取納め、妻は言葉をあらためて、詞へいつまで言うても盡きせぬ名殘。さりながら、お前を初め殘りの六人、もし戻つてゐやうかと、代官所より諜者を附け、日毎日毎に嚴しい御吟味。夜明けては人目に懸り、捕へられては詮ないこと。片時も早う御出立、早やう〳〵。へと、急き立つれば、詞へホウさもあらんとは我も覺悟。然らば萬事に氣を注けて、必ず留守を。詞へオ、合點で御座んす。妻子に心引かされて、モシ仕損じばし仕給ふな。へ然し大事の御身にて、暇乞に遙々と、お戻りなされし御心底、お案じ申すと勵ませば、ホ、言ふにや及ぶ、我とても、其の心底を聞く上は、詞へ怯れは取らぬ氣遣ひすな。子供ら達者で、女房ども、さらば、へと、許り立出づれば、父樣なうと右左、慕ふ我が子の顏形、見る目も昏む血の涙、弱る心を取直し、心強

く振捨ひ、見返りもせず二足三足、踏めど引かるゝ後髪、流石恩愛振返り、見れば見交す妻や子が、詞〽父様いなう。詞〽我夫いなう。〽と、呼ぶ聲に、〽オーイ。〽と、言ふも胸迫り、親子夫婦の憂き別れ、天も憐み給ひてや、又降りしきる白雪の、見えつ隠れつチラ〱と、塒離れし親鳥の、行惱みたるその風情、次第々々に遠ざかる。

【解說】此の曲は、下總佐倉の堀田領に起つた有名な暴政騒動を、嘉永四年八月、三世瀬川如皐が市川小團次の爲めに書卸し、『東山櫻莊子』の外題で江戸中村座に上演したのが好評であつたので、當時鶴賀加賀八太夫が或る事情から鶴賀を廢し、富士松派を再興し、富士松魯中と改めた際、これを義太夫から取つて新內に節付したのであつた。上の卷の宗吾郞住家は、領內二百二十九ヶ村の總代となつて江戸の藩邸へ門訴に赴いた佐倉宗吾が、意の如く埒が明かないので、愈々身命を賭して直訴する事に決心し、他所ながら妻子に暇乞の爲め一旦歸鄕し、妻子に後難が罹らぬやうに離緣狀を突きつけると、妻は拒んで死なば諸共と覺悟を示すといふ筋。下の卷は宗吾が妻や頑是ない子供達に別れを告げるといふ悲壯な場面である。

栴檀は二葉より　栴檀はまだ芽の出たての中から香しく楠は最初から佳い香ひを含んでゐるといふ。小さい時から豪い譬に引く詞
腹中を出て腹中を定むる　生れた時から腹が緊りしてゐる意
動かぬ國の教　昔から定まつた教
夢の世　人世の果敢

藤蔓戀の柵（早衣喜之助）

〽栴檀は二葉より馨しく、楠は嫩より名石を含むとかや。武士は腹中を出て腹中を定むるは、動かぬ國の教へかと、思へば夢の世の中や。堅い詞は表向、其内證は軟かや、情商ふ流れにも、深い心のあればこそ、花の菱の屋早衣に、絡む藤の屋喜之助が、夕暮毎の玉鉾を、人の噂の花川戸、戀のかけ橋四つ手駕籠、肩を揃ゆる衣紋坂、誰が云ひ初めし吉原と、實に繁昌の大門を、入りこむ人や仲の町、氣さくな茶屋の佐次兵衛が、詞〽サア〳〵旦那が御出で遊ばした。お連さんは何う遊ばしなされました。〽と、機嫌笑顔の女房が、奥へ伴ひ入りにけり。詞〽サア〳〵駕籠の衆、旦那が仰しやる、酒一つ。詞〽コレは有難うござります。コレ棒組よ、盃では面倒な、いつそ近付のこれがよい。〽と、ぐつと茶碗で引かける。酒の機嫌に山吹の、花の光りに氣も勇み、詞〽御亭様、お

世話になりました。旦那樣へもよろしく。〽ど、ひよろ／＼足で歸りける。籬々で彈く三味に、誰に見せうとて、紅かね付けうぞ、皆なお前へ心中立、おゝ嬉し、／＼。花さそふ、蝶は霞の野邊を待つ、日蔭の木々は花を待つ、人は情の夜すがらの、二つ枕の花を待つ、ほんに勤めは儘ならぬ。夏の夜の、蚊遣りの跡の假寢に、座敷々々も靜まりて、寢衣の儘に喜之助が、身は空蟬の心地して、消ゆる思ひの蚊帳の中、詞〽コレ早衣、今宵までは色々と首尾して來たが、最早來る事も叶はぬ。詞〽エ、そりや何故に。詞〽ハテ知れた事さ。常々そなたにも話し置く通り、親女房友達の、意見と義理に責められて、此頃は酒も通らぬ物思ひ。〽何うした因果な事ぢやゝら、今宵がそなたの見納めと、顏つくづくと打まもる。早衣淚に暮れながら、差込む癪を押下げて、詞〽聞えぬ事を言はしやんす。〽逢初めてから片時も、忘るゝ口とてないわいな。お顏の窶れを見るにつけ、お宿の首尾は如何やと、案じ暮らせし甲斐もなや。無

ないことをいふ

内證　裏面のこと

情商ふ流れ　廓の生活をいふ

玉鉾　道の枕詞。その道と云ふ意から通ひ路にきかせたのである

花川戸　淺草の町

四つ手駕籠　竹を四隅の柱とし、竹で編んだ駕籠。吉原通ひの町駕

衣紋坂　吉原へ入る口の坂

棒組　駕夫の合棒を云ふ
山吹の花　金のこと祝儀を貰つたのである
籠々　格子のことで女郎屋〳〵をいふ
誰れに見せう　嬉しまで唄の文句
二つ枕の花　同衾の樂しさをいふ
空蟬の心地　氣ぬけのやうに惚りする意、
首尾　都合をいふ

理は男の常なれど、言譯するは女子だけ、言うて返らぬ事ながら、お前に別れて早烏の、啼く間も生きてゐられうか。押して止めたき朝毎の、別れの無理なお言葉に、私が強く逆らはば、粹なお前のお心も、變らしやんすであらうかと、あのゝものゝに紛らして、歸す思ひは色絲の、結んで解けぬ悲しさは、人に知られぬ胸の中、泣いて明せし戀の闇、焦るゝ胸は淺間山、逢ひたい見たいは妹脊山、いつか女夫と待乳山、聖天様のお守や、苦勞をかけた九郎助の、お稻荷さんや其外の、廣い世界の神様の、願が叶うて嬉しやと、思うてゐたに今更に、添はれぬやうになつたとは、どうした薄い緣ぢややら、妾ほど因果な者はなし。五つや六つで兩親に死別れ、兄さん一人を賴りにして、朝な夕なの艱難を、泣き明かしたる月や日の、惠みも盡きて此の廓へ、賣られて來たは身の因果。西も東も知らばこそ、遣手に叱られ名代の、客衆に夜すがらいびられて、涙を絞る袖留めて、お前一人を賴りぞや。たとへ野の末山の奥、どんな

聞えぬ事　無理なことゝ云ふ意

早鳥　夜明の最初に啼く鳥

あのゝものゝ　當り障りの無い事を話す意

聖天樣　待乳山に在る

九郎助　吉原田甫のくろすけ稲荷

名代　花魁の名代に出ること

袖留めて　振袖を留める意で、新造か

貧苦も厭やせぬ。手づから妾が焚いて、樂しむも苦しむも戀、戀といふ字が爲すわいな。誠は辛抱一つぞや。可愛うて可愛うて、粹になる程愚痴になる。起請を守る約束の、神樣方も聞えませぬ。迚も添はれぬ仲ならば、一緒に殺して下さんせと、袖は涙の行潦。男も涙の顔を上げ、詞〽コレ早衣、人間は風の前の燈の如く、此の世は夢の假の宿、未來は同じ蓮華座。〽と、男の言葉に早衣は、嬉し涙と諸共に、詞〽草葉の下で父樣や、母樣も、嘸お嬉しう御座んせう。追つ付けお目にかゝるから、刃にかけし我夫を、必ず怨んで下さんすな。〽非業の死の罪咎を、閻魔さんが叱るなら、詫言をして下さんせ。祐天さんや釋迦さんの、よもや見捨てはさんすまい。お側へいんで朝夕の、お茶香花を氣を付けて、この世の罪を滅さん。詞〽南無釋迦如來祐天樣、助けて給へ、南無阿彌陀佛。〽此の世の縁は薄衣、遠寺の鐘の聲過ぎて、互に顔を見合せて、詞〽コレ早衣、今こそ最後の時移つる、妨げないうちに覺悟をせよ。詞

ら花魁に出世するをいふ
涙の行湊　涙の水が溜ること
風の前の燈　脆い譬
蓮華座　極樂にあるといふ蓮の臺
非業の死　普通の死やうでないこと
かげろふ電　刀がピカ〳〵光る形容
東雲　夜明をいふ
三つ蒲團　廓で用ふる重ね蒲團

へアイ、そんならお前も。詞へオ、覺悟はよいか。へと、用意の一腰拔き放せば、かげろふ電燈火に、險しくうつる夏の夜の、涙の雨の晴れやらぬ、早や東雲の亂れ鳥、血潮に染むる三つ蒲團、後の噂となりにけり。

【解說】此の曲は、安永二年藤枝外記と大菱屋綾衣と心中した事件を改作し、藤の屋喜之助といふ商家の若旦那が、吉原菱の屋早衣に馴染を重ね、互に思ひ思はれてゐる濃かた仲になつたが、喜之助には兩親もあり、女房もあるので、夫婦となる事が出來ないのを悲觀し、遂に二人は心中を企て蚊遣も細き夏の夜明に、果敢なく消えて仕舞ふといふ筋である。作者は鶴賀若狹椽と傳へられてゐるが、詞章の拙劣な點から見ても『明烏』や『蘭蝶』と同一の作者とは思へない。或は初代鶴賀新内あたりの作ではあるまいか。

生業　世渡りの職業
剃刀の刃を渡る　危ない譬。才三は髪結が職業ゆゑ、剃刀と云ひかける
一日所定まらず　得意を廻つて髪を結ひ歩行く所謂帳場髪結なのでいふ
三方　祝儀に使ふ器具。白木で作り三方に孔がある
幼の月代　幼ない兒の月代を剃る意
髪をしみ　幼兒が否

戀娘昔八丈（お駒才三）

城木屋の段

へ生業は、實に剃刀の刃を渡る、才三も今は主親に、棄てられ果てし髪結の、一日所定まらず、忙しさうにチョコ〱走り、下女のお菊が手に持つた、三方拭き〱、詞へオ、髪結どん、小僧どんを呼びにやつたに、ツイ來てくれたがよいわいな。詞へサ直ぐに參じませうと存じましたが、お向ふの幼の月代、何が彼の例の髪をしみ、やう〱しまうてタッタ今。そして旦那樣には、どちらへぞお出でなされますので御座いますかえ。詞へいゝえ、何處へも行きやなされぬが、今夜こちらのお駒さんに、聟さんが入るゆゑ、モ大抵忙しい事ぢやないわいな。詞へエ何とおつしやります。今夜内方のお駒さんに聟さんが、あのソリヤお前ほんとかえ。

やがつて髪を剃らせぬこと
内方　お奥といふ意
顔が直して　顔を剃ること
思案顔　首を捻つて考へるをいふ
性根　心の底
大事を抱へた　寶の詮議に身を碎くことをいふ
とつ置つ　彼是と思案の定まらぬこと
外らさぬ顔　何喰はぬ顔で

詞〽オ、この人わいの、何のそのやうに吃驚することあるぞいの。ほんにお駒さんもこなさんに顔が直して貰ひたい、早う呼んで來てくれいと言うてであつた。ドリヤ、〽知らせませうと入りにけり。見送る才三が思案顔。詞〽ハテ合點の行かぬ。これまでのお駒が親切、浪人の身を色々と、世話してくれた志、それに今夜の聟入とは、コリヤとうから性根が腐つてあるわえ。さういふ事とは夢にも知らず、騙されたが口惜しい。モウ此の上は破れかぶれ、言うて〳〵言ひ破らうか。ア、いや〳〵、大事を抱へたわが身の上、〽兎にも角にも世の中の、變り易いは人心、ハテマアどうがなと、とつ置いつ、胸はモヤ〳〵立つ居つ。お駒は下女が知らせをば、聞くと心は飛立てど、外らさぬ顔にて一間より、詞〽オ、髮結どん、先刻にから待兼ねてゐたわいの。〽と、後前見廻し、詞〽才三さん逢ひたかつた。〽逢ひたかつたと取縋る、譯も涙にちやもなき。取つて突退け睨みつけ、詞〽何んぢや逢ひたかつた。何のマアおのれが

引きしやなぐり　引き倒すこと

戀のいろは　初戀の思を文にしたゝめること

梅を一生斷つた　梅の實を一生喰べないと神に誓ふこと

談合　相談すること

腹が癒る　腹の立つたのが癒ること

堪能させてたべ　滿足させて下さいの意

忍び泣き　泣き聲の

俺に逢ひたからう。今夜聟の來る事も、何も彼も皆聞いて知つてゐる。見下げ果てたる畜生め。犬め、狐め、猫め。よう人を化したな、物を言ふも汚らはしい。〽と、胸倉取つて引きしやなぐり、踏んづ擲いつ、突飛し、睨み付けたる目に涙。お駒は顔を振上げて、詞〽思ひがけない今宵の樣子、〽聞かしやんしたら腹が立たう、嘸ぞ憎からう、去りながら、そりや聞えぬぞえ才三さん。お前と私がその中は、昨日や今日の事かいな。屋敷に勤めた其の中に、ふつと見染めて恥かしい、戀のいろはを袂から、そつと私が心では、天神樣へ願かけて、梅を一生斷つたぞえ。そのお蔭やら嬉しい返事、二世も三世も先の世かけて、誓ひし仲ぢやないかいな。今宵の事を知らせまし、問ひ談合もせうものと、待兼ねてゐるものを、あんまり酷い愛想づかし、擲いて腹が癒るならば、心任せにした上で、モウ堪忍をしてやると、言うて堪能させてたべと、男の膝に縋り付き、他處を憚る忍び泣き、眞實見えていぢらしゝ。〽表に繁き雪駄

他に洩れぬやうに秘かに泣くこと
繁き雪駄の音　雪駄ちやらつかせて人々の來る氣配をいふ
人こそあれ　此處へ人でも來るだらうといふ杞憂の詞
後の哀れ　後段に悲劇を演ずるのを洩らしていふ

の音、人こそあれと耳に口、後に〳〵と兩人が、奥と勝手へ別れ行く、後の哀れとなりにけり。

【解說】享保年間にあつた白子屋騷動を四十八年後の安永四年九月、松井貫四、吉田角丸が操淨瑠璃に仕組んで江戸外記座に上場した。歌舞伎劇に上演されたのは、翌安永五年の春江戸中村座で、當時の役割は、瀨川菊之丞のお駒、阪東三津五郎の才三、市川團藏の城木屋庄兵衛、大谷友右衛門の番頭丈八であつた。城木屋の荒筋は、評判娘のお駒が廻り髪結の才三と秘かに通じて、末は夫婦と語らつてゐたが、種々の手違ひから城木屋の家運が傾きかけたので、餘儀なく喜藏といふ持參金附の聟を迎へて店の整理をせうとの魂膽で、親達はお駒に因果を含めて、重に角に祝言だけ濟ませてくれといふので心ならずも承知すると、其の事を下女の口から才三が聞いてお駒の薄情を責めるといふのである。此の淨瑠璃が素晴らしく流行したので、初代鶴賀若狹椽が新内に移し取つて語るやうになつた。それが此曲である。

戀娘昔八丈（お駒才三）

鈴ケ森の段

〽急ぎゆく、人の身の棄て所とや名に古りし、鈴ケ森の仕置場所。青竹にて矢來を構へ、邊りに閃めく拔身の鎗、汚れの役人走せ違へ、科人今やと待ちかけしは、此の世からなる地獄の責、忌はしくも亦恐ろしゝ。哀れ見に寄る諸見物、あそこや此處に立ち集り、詞〽ナント、此の科人はモウ來さうなものぢや。俺は牢屋を引出すと、直ぐに通町へ駆拔け、それから河岸へ廻つて、以上四度見たが、扨々美しい娘、あれをコロリとやると言ふは、可惜ものぢやないかいの。詞〽イヤ〳〵何ぼ顏が美しうても、心が鬼ぢや。男を殺すと言ふ事が、何處の國にあるものぢや。詞〽ア、いや〳〵、さう一途に言はしやるな。女が男を殺すと言ふは、

身の棄て所　刑場に身を棄てるのでいふ
鈴ケ森　東京市外品川の宿外れの南に當る波打際の地
仕置場所　刑罰を施行する場所
矢來　青竹を菱形に組んで闌ひをつくること
拔身の鎗　鞘を拂つて穗先を現はした鎗
汚れの役人　刑場の

役人をいふ

哀れ身に寄る　仕置に行はるゝ哀れな罪人の光景を見物しに集まることをいふ

牢屋　江戸日本橋傳馬町にあつた女牢

通町　日本橋通り

コロリとやる　むざ〳〵殺すといふこと

間女房　姦通をいふ

諸手綱　戀と義理とで殺人罪を犯した

モ、よく〳〵堪忍のならぬ譯。間女房事であらうも知れぬ。〽と、噂とり〴〵口々に、詞〽あんまり待つて寒くなつた。鮫洲の茶屋で一ぱいしやう。さア〳〵御座れ。〽と、打連れて、皆々彼所へ走り行く。〽思ふ事、叶はねばこそ憂き事の、戀と義理との諸手綱、〽不憫やお駒は夫のため、かゝる憂目の縛り繩、顔さし入れる懷ろを、洩れて流るゝ涙橋。首に懸けたる水晶の、珠數の數さへ消えて行く、屠所の羊の歩みより、果敢なき身ぞと觀念し、力なくなく引かれ來る。代官堤彌平次お駒に向ひ、詞〽最前牢屋敷にて、役人中より申し渡されし如く、仔細ありとは言ひながら、假りにも夫を殺したる科は逃れず、重き刑にも行はるべきを、お上の御慈悲を以て死罪に仰せ付けらるゝ、有難く存じ奉れ。〽と、言渡せば顔を上げ、詞〽何事も皆私が心でかゝる身の罪科、露いさゝかもお上へ對し、お恨みは御座りませぬ。有難う存じます。〽と、覺悟極めし健氣さに、不憫と見やる諸役人、涙紛らすばかりなり。お駒

ことをお駒を乘せた馬の兩手綱にかけていふ

涙橋　品川から鈴ケ森に入る所に架けた小橋

屠所の羊の歩　屠殺所へ牽かれて行く羊の歩みの遲々として捗らぬをいふ

不愍　可愛想な

見せしめ　戒めの手本にしてと云ふ意

二世の契り　夫婦は二世の緣

は顏を振上げて、詞〽御見物樣、いづれも樣、夫を殺す大罪人、さぞ憎い奴、大膽者、淫ら者と皆樣の、お憎しみもあろけれど、〽言ふに言はれぬ譯あつて、夫殺しの科人と、死恥さらす身の因果、不愍と思し一遍の、御回向賴み上げまする。詞〽世上の娘御樣方は、此の駒を見せしめと、親の許さぬ淫らなど、必ず〱遊ばすなエ。〽可愛い夫へ義理立てば、兩親に歎きをかけ、又親々へ從へば、言ひ交した夫へ立たず、果ては斯うした淺ましい、此の世からなる劍の山、身を切り裂かれ憂き恥を、晒らすも定まる因緣づく、約束事と諦めても、二世の契りの其の人と、一世と限る兩親の、若しや群集の其の中に、見えはせぬかと伸び上り、伸び上りては竹垣の、透間がくれの人群に、眼も泣き腫れて見え分かぬ、心を思ひ諸見物、濡れぬ袂は無かりけり。

【解說】此の曲は矢張り前段の解說に述べた通り義太夫から取つて新内の節附をしたものである。お駒の情人才三は、以前は武士で、紛失した家寶の茶

竹垣　矢來をいふ
心を思ひ　胸の裡を察すること

入を詮議の爲めに髪結に身を窶して居るのであるが、其の茶入は城木屋へ聟に來た喜藏が隠して持つてゐるので、お駒の手で奪つて呉れと賴む。一方には番頭の丈八がお駒に戀慕して、喜藏を失きものにしやうと思ひ、毒藥を調達してお駒に勸めて喜藏に服ませやうとする。お駒は才三と夫婦になりたい一心から、遂に喜藏を毒殺する。丈八は戀の叶はぬ意趣返しに官に訴へたので、お駒は夫殺しの大罪人として入牢し、鈴ケ森の刑場へ曳かれる身となつた。さうして今や刑に行はれんとする時、喜藏の罪が露顯して、お駒は赦免となり、才三も茶入を手に入れて無事歸參が叶ふといふ筋である。假令夫殺しの大罪人でも評判の美人が將に刑場の露と消えやうとする凄艶な情景を描いた曲であるから、前段の城木屋よりも若い男女間には一層好評を博し、此の淨瑠璃の出來た當時は、市中至る處で眞似て唸つたらしく、『暗闇でお駒お駒に突當り』などといふ穿つた川柳なども遺つてゐる。

戀衣對白無垢（哥波義助）

〽待宵に、更けゆく鐘を數ふるは、飽かぬ別れの鳥よりも、いとど辛しと來ぬ文を、火箸につゝく占象も、來ぬと極(當)れば幾度も、消して仕直す待人の、來い〳〵來いを紙ありたけ、箒投げたり簪に、數へる疊の緣ぎはに、ちやうどあたりて表から、呼立てる間もあら嬉し、見えたさうなと立上る。所へ廊下をがた〳〵〳〵、詞〽池樣のおいでぢや。哥波樣々々々。〽と、大聲あげて鳴神や、どろ〳〵よろ〳〵踏む足も、猩々の夢介が、わめきにつれて座に直る、客は淺草淺からぬ、仲よい對のお雛樣、人形樣とあだ口々、哥波は打笑ひ、詞〽コレ夢さん、この頃は人形樣もどこにやら、よいお雛樣が出來たげな。モシ、それで今夜も遲いのかえ、エヽ憎らしい。詞〽アイタヽヽ。詞〽サア、いたか、そこにゐさんせ。詞〽ア、申し〳〵、もう口舌かえ、そこらを酒で芥子人形、

待宵に　新古今集の小侍從の歌に「待宵にふけ行く鐘の聲きけば飽かぬ別れの鳥はものかは」

占象　辻占の占ひにあらはれた象

箒投げたり　簪を用ゐる占算と共に、待人を占ふしぐさ

ちやうど　偶を丁度にかける

池樣　義助のこと

池野屋の頭字を呼

ぶ
猩々の夢介　酔て足元が亂れてゐる夢介をいふ
いたか　痛くばと居たくばとにかける
芥子人形　衣裳を付けたちひさな木彫人形を消しにかけていふ
浮人形　浮々することを水鉢に入れて浮く人形にかけていふ
おしきせ　客と遊女

わつさりと浮人形、ぴい〳〵や風車、くるり〳〵くる〳〵〳〵と吞んで廻そ。サア旦那、お始めお始め。おしきせが相濟んで私拜領、滿足。〽と、下地の酒に又四五杯、いつそ茶碗でぶつつけろ。若い衆遣さん、詞おさへかお手元、お合ひ致そと夢介が、廻らぬ舌で、ひよこすかと、〽もし旦那、昨日に今日は似ざりけりぢや。その様子といつぱ、勇士池様と二人一座で、深川邊へ吹かれ行き、お深間様にふかされて、ふかふかと糊賣婆の、ア、口が辷つた。へ、腐れな奴さ。大もて〳〵。それにマア聞いておくんなさりやせ。アノわつちに女房があるかと聞いたと思ひなさりやせ。イヤこゝは一番綾なす場と思つて、イヤ〳〵おら女房も何んにもないと言うたと思ひなさりやせ。そこで彼奴めがキッと受取つて、嘘ばつかりと言うと、私が顏をピッシヤリと食はしやした。イヤモウその痛さ、強い奴さ。それでもわつちも負けはしやせぬ。よつぴとい角力取つて、大勝ち〳〵。〽お相撲、西の片やに於て、詞〽てれつく馬

との遣り取りの作法の盃をいふ
遣りさん　遣り手のこと
ひよこすか　輕口
深川邊　深川の遊里をいふ
お深間樣　深馴染
綾なす　戯ふこと
よつぴとい　終夜
龜甲屋　女郎屋の名
口三味線　口で三味線を眞似る意
すまぬ座敷　穩かでない座敷の意

右衞門、…………けふの眠たさ。〽このマア色男には何がなる。鳴らぬ太鼓のどん臭い。イヤ酒臭い。問はず語りに口舌の種を卷き舌や、よろよろ〳〵、詞〽アヽイ醉ひやした。ヤア向ふの龜甲屋へチヨツと見舞うて參りやしよ。お暇申す方々よ。アヽイ、コレ〳〵若い衆遣り樂、旦那を頼む。又逢ふまでは、さらばだ。チチチン〳〵〳〵トツチントツチン〳〵〳〵、〽口三味線も不器用に、廻り兼ねてぞ歸りけり。すまぬ座敷を見て取る遣手、これはしたり哥樣、今の夢スが話を誠になされてお腹が立つなら、いつそお横に旦那も一緒、床は宵から取つてある、しつぽりとおしげり。〽と、皆々立つて下へ行く。跡は互ひに顏背け、暫しは物も言はざりしが、哥波は振返り、詞〽もし、お客樣。昨夜は嘸お樂しみ、お持てなされて面白かろ。そりやその筈さ、深川とやらの小さんとやらいふ結構なお女郎さん、面白なうては。わしやとうから知つてゐるぞえ。エヽほんに厚かましい。ドレお顏拜みやしよ。サア顏を上

げさんせ。ホウこりや泣かんすか、何が悲しい。但しはわしへ面目ないか。それ程小さんが戀しいか、エヽ。へ泣かしやんせ、〳〵。その泣く涙が深川へ流れて、小さんが汲んで呑みやれうぞ。ほんに言ふではなけれども、何處へ何うして行かんすとは、知つてゐるのに實らしう、くろめてわしを綾なすのか。此方さんの心意氣、さうしたものではないわいな。わたしが思ふ半分も、お前の心にあるならば、浮々欲りしも本望ぢや。とは言ふものゝ、根が好いたゆゑ色々と、愚痴な恨みに愛想が盡きやう。どの道から何ういうても、只こなさんか愛しい、悪う聞いて下んすなと、譯も涙の口説言、死ね死なうとの仲でさへ、疑ふ女の習ひにぞ、粹も惚れては野暮よりも、くだらぬ事いふものならし。男はほつと溜息つき、詞へア、如何にかうした勤めするとて、よい機嫌な事言やるの。昨日も話すそなたの事、此の間より段々と、友達を頼み親一門へ色々と言うて見ても兎角女房には爲せぬ、たつて女房にせうと言はゞ、子が一

夢ス　夢助の略

おしげり　廓詞で寢ることをいふ

お持てなされ　歡待されたことをいふ

ほんに言ふでは　ほんに、妬いて言ふのではの意

心意氣　心持に同じ

粹も惚れて云々　勤めをしてゐる苦勞人も、戀の爲めには素人よりも下らぬ愚痴をこぼすといふ意

家を出ては　家を勘當されてはのこと
とんと覺悟　ちやんと覺悟
白無垢　白の羽二重で作へた衣服
若氣　若い無分別の氣持をいふ
親方衆　女郎屋の亭主を指していふ
讀誦　經文を小聲で讀むこと
彼の世　未來をいふ
命毛　筆の穂先を二人の生命にかけて

人無いと思へば濟むと、とつてもつかず言ひ切らるゝ。今家を出ては一門へも友達へも、世間へもどうして立たう。又そなたを、〽女房に持たいでは、生きてゐても何樂しみ。かねてそなたと言ひ交せし、死ぬる覺悟に胸を据え、書置までも認めて、今宵限りのこの世の名殘、今はの際までそのやうに、疑ひ深い心では、未來の夫婦も覺束ないと、わつと泣けば、ちやつと押へ、詞〽ア、聲が高い〳〵。そんなら今宵にとんと覺悟を極めてか。ア、嬉しうござんす、忝ない。それでこそかねての本望、なんのまあ疑ふ心がござんせう。そんなら少しも早う死用意。〽お前もわしも新しう、仕立てゝ置いた白無垢を、共に着かへて死恥を、人に見せじとたしなみて、死ぬる若氣の哀れさよ。とてものことにわたくしも、親達や親方衆、朋輩達へも一筆づゝ、書置を殘したい。詞〽そのうちにこなさんは、二人の回向未來の緣、心靜かに讀誦を。〽と、涙しを〳〵取出だす、硯の墨の緣薄き、此の世を棄てゝ彼の世にて、長う添はうと

云ふ

見えもせぬ、先きを頼みの夜も更けて、心細くも書く筆の、命毛短かくなりにけり。

【解說】此の曲は、吉原津田屋の哥波と、馴染客の池野屋義介との戀を描いたものである。義介は放蕩の末、父から勘當の身となつたので、哥波と添ふことが出來なければ、寧ろ死んだ方がましだと決心し、一夜登樓して闌燈の下で女に意中を語ると、女も覺悟を決めて、共に死出の旅に赴かうと約束するといふ筋。作者は『蘭蝶』や『明烏』で名高い初代鶴賀若狹椽である。

子寶三番叟（御祝儀）

へとう〳〵たらり、たらりら、たらり、あがり、ららり。」へところ千代までおわしませ、われらも千秋候よ。鶴と龜との齢にて、幸ひ心に任せたり。」天津乙女の羽衣よ、なづともつきぬさゞれ石。」へ鳴るは瀧の水、鳴るは瀧の水、日は照るとも、絶えずとうたり、ありうどの、神代の昔二神の、彼の浮橋の初床に、天の戸鉾の長枕、しつぽり濡るゝお情の、露の雫とかたまりて、男の子郎島を生まんして、今秋津洲と廣まりしは、コレ子寶の三番叟」ひとさし舞はう萬歳樂。へおゝさへ〳〵喜びありや、喜びありや、わがこの所より外へはやらじと思ふ。いざやひとふし打ちあげて。へやら〳〵めでたよの若松樣よ」今年や世がようてナ、穗に穗が咲いて、黄金桝にて米量るションガイナ。桝に餘りて箕で量るショガイナ。面白や。へ池の汀に舩つけて、羯鼓篳篥拍子を揃へて、ヤツサ、

とう〳〵たらり　とう〳〵は鼓の音、たらりたらりらは笛の譜を眞似てうたふ

らゝり　禰家の躍々哩で「ハアこりやこりや」と囃す語

千秋候　永く仕へ申さうの意

天津乙女　天人

なづとも盡きぬ　撫でても減らない意

拾遺集に「君が代は天の羽衣まれに

きて、撫づとも盡きぬ巖なるらん」

二神　伊弉諾尊、伊弉冊尊をいふ

彼の浮橋　天の浮橋のこと

男の子郎島　をのころ島を洒落ていふ

秋津洲　日本の國

萬歳樂　雅樂の名

やら〳〵　以下長持唄

羯鼓鉦鐃　雅樂に使ふ樂器

いさをし　手柄

サツサ、サツサ乗込む浪風も、をさまる御代のいさをしと、祝ひ祝して舞ひ納む。

【解説】此の曲は語り出しを謡曲の『翁』の文句から取つて森嚴の意を傳へ、中頃から碎けて男女の情事を謡ひ、後段に婚禮の長持唄などを取入れて賑かに陽氣に語り納めるところは他の唄や淨瑠璃の「三番叟」に比して頗る瓢逸に作られてゐる。

入相の鐘　夕暮の鐘を入用の金にかける

夏の蟲かや　蛾蟲が火に入つて身を焼いて死ぬ事を長吉が訪ね來て殺されるのに譬へていふ

愛想も無し　好遇が出來ない意

布子　木綿の綿入衣

如才ではない　體裁を作つて言ふのではないといふ意

此中　先日もと云ふ

茜染野中隠井（梅の由兵衛）

へあはれなり、早入相の鐘故に、命取らるゝ長吉は、夏の虫かや燈火を、ともす時分に來かゝりて、姉様お内にござるかと、立ち入る弟は邪魔ながら、無情ならうも云はれず恍惚と、小梅へオ、ようおぢやつたの。何時見えても愛想も無し、布子の裏も染めて置いた。近いうちに仕立てやらう、如才ではない忙がしさ。へと、斷り云へば長吉は、姉の顔を打眺め、長へお前はいから痩が來た、心持ちでも悪いのか。但しは何ぞ苦になるか、煩うて下さるな。へと、いへば小梅は打悄れ、小へオ、姉弟とて能う言うて給もる。此中其方にも話した大切な刀、金渡さねば手に入らず、外へ遣つては一分立たぬと、主も私もいかい辛苦。これを思へばお主ほど、世に大切な物はない。云ふ迄はなけれども、随分奉公大事、親方のもの塵一本、粗末にせまい達へまいと、心願かけて勤めてたも。由兵衛

に同じ
大切な刀　主家の寶刀のこと
一分立たぬ　男が廢ると同じ意
不奉公　不忠を働いたと云ふ意
難義　零落してゐること
弟所へ行かぬ苦　弟が主家へ歸らないのを心配すること
平野　大阪の南郊で奈良街道の小邑

殿が其昔、不奉公した其罰で、今思はずも斯うした難義、其方もお使の戻りなら、早う去んで御返事云や。〽と、意見と共に行なしかけ、弟所へ行かぬ苦を、又も案じて居たりける。長〽イエ〳〵、私は晝から平野へ、爲換の金請取りに行つて、日が暮れたらば此處にでも、先にでも泊つて來いと番頭殿の云ひ付け、卽ち金もコレ爰に。〽と、首にかけたる小財布を、どつかり下ろせば小梅は愕り、小〽シテ其金は何ぼある。長〽小判で恰度百兩。小〽アノ此金がか、ム、澤山あるなう。有るところには有り餘り、子供の其方に持ち歩るかせ、何とも思はぬ身代に、半時でも成つて見たい。人が見るとつい取るぞや、見せるが目の毒、ちやつと首に懸けて居や。晝から出たら空腹からう、ドレ茶を入れて飯おまそ。〽と、立たんとすれば、長〽イヤ私が沸して食べませう、茶の有る所も知つて居る。〽と、かい立つて竈の下、焚きに行く影後ろ影、見送る姉は、あの金ならばせめて半分の、主は何うして遲いぞと、見やる表へ

半時　今の一時間
つい取る　出來心で奪取ること
飯おまそ　飯を上げませうの意
一荷の桶　二つの荷桶
明礬　色揚に使ふ薬
金の才覺　金の工面
研屋　刀劍を研ぐ職人。刀屋
先へ賣る　先方の客に賣渡すこと
勢でやつては　怒つた勢で談判に遣つ

うと〳〵と、一荷の桶に明礬の、筒や箒を看板に、我門までも箒や茜、金の才覺がてらには、日暮れて道も忙がしく、戻るやいなや、小へコレコレ由兵衛殿、西口の研屋が來て、刀の買手が俄かに出來、明日の朝迄買ひ取らずば、先へ賣るとの斷り、約束違ふと說破つても、兎角金づく金次第と、云ひ切つて行にました。へと聞くより恟り、夫賣らしてよい物かと、駈け出づるを、なう待つて下されと、引止めて涙ぐみ、小へ其勢でやつては喧嘩半分、なほ先に意地が立つ。破れかぶれにする氣か。と、押へ宥めて、小へ私が差し出た事ながら、元此刀は盜み物、こゝでの買手を吟味して、お上の沙汰にするならば、當分は金入らずに手に入る事もあらうか。へと氣を付くれば、由へ愚かの事を云ふ人、さう露顯に掛けられぬ仔細と言ふは、先達てお國より、詮議は古手屋の三ぶが方、盜み賣りしは、此方に目當てであるとの御諚、如何にも此方でも出所を穿鑿してみれば、盜手は奥樣の兄御、お國にござる伴七殿、捕へて見れば

ては の意

お上の沙汰　訴訟沙汰にする事

當分は　暫時の間は の意

露顯にかけられぬ　表沙汰に出來ないといふ意

お國　備前國表

古手屋　古着屋

捕へて見れば「盗人を捕へて見れば我子なり」の句を取つていふ

旦那へ立たず　旦那

我子も御同然の御兄弟中、奥樣は旦那へ立たず、旦那はお上へ言ひ譯立なく、切腹か阿呆拂ひ、其處を思ふて内證で、取戻し呉れ由兵衞、命の親ぞとの御頼み。お氣遣ひ遊ばすな、此月中に金拵らへ、お手に入れうと受合うた詞を反古に、賣れましたと何う言はれう。生きても死んでも御恩の旦那や奥樣が、お愛憐しい、女房。〽と、語れば共に涙ぐみ、小〽さうあれば道理、私も思はぬ罪作り、最前長吉が爲換百兩受取つて來ましたと、見せた時の其の欲しさ。他人の子ならば捥ぎ取つて、夫に遣つて喜ばせ、苦を休めて進ぜうにと、見ると思うた横着氣、此れを思へば何處やらで、娘殺して金取つたと、噂もこんな事であらう。〽と、懺悔話を聞き咎め、由〽何んと言ふ、長吉が金持つて來た。さうしてまう去んだか。小〽イエ〳〵道の用心を思ひ、今夜は此處に泊まつてゐます。由〽ム、〳〵よい思案、分けて此中は物騷な、明日疾うから行んだがまし。扨と何んしよかい、俺も明日渡部橋へ行て、ま一度無心言うて見よ。

へ申譯が無い意
お上　支配を受ける上の役所
阿呆拂　領地を追れる刑
横着氣　不正な心
よい思案　よい考へ
渡部橋　渡部橋附近に住む知己の略
上分別　いゝ考へ
一寸延びれば云々　少時間の猶豫も利便を與へると云ふ意
夫の氣休め　夫への

イヤ先づ當分手付を渡し、二三日繋いで置いて。小へオ、夫が上分別、一寸延びれば尋延びる、案じてすまぬは金事。へと、了簡付くるも夫の氣休め。由へなんと小梅、十二文呑んで寢よかいの。小へホンニいつそ夫もよからう、ドレ買うて來ませう。へと、小棚の徳利かい取つて、心急くまゝ足早に、辻迄行つて手に持ちし、容物見れば是れは花立、ハツと思ひ立ち止り、小へ何時にない此粗相、一本花の要る事が、へ出來はせぬかと、氣にかゝり、徳利を取りに戻らうか、先きで容物借らうかと、行きつ戻りつ聚樂の、町の横町思はずも、酒屋の方へ走り行く。由兵衛は門口の、繋金掛けて押入の、脇差そつと懷へ、隱して勝手を差し覗き、長吉來てか、炬燵に火もある、寒いに此方へと猫撫での、聲に引かれて、長へホヽ、お戻りなされしか、姉様何處へ。へと立出づる。由へイヤ女房は今使に遣つた。此處へ、へ此處へと片腕へ連れて行き、由へコレ長吉今のは有るか、持つてゐるか。長へ今

慰さめ言葉
十二文　酒一合の値段で轉じて酒の意
辻　四つ角
花立　佛へ花を供へる花瓶
一本花　凶事に用ゐる花
繫金　戸の樞に添へて鎖すのに用る環
脇差　小さ刀
猫撫での聲　故意とらしい柔しい聲音
大事にかけた　大切に取扱かふ事

のとはえ。　由へ小判々々は、懷ろにあるかといふ事。親方のもの、大事にかけたがよいぞや。へと、言ふに道は年足らず、懷の財布取出し、長へ金は此處に肌身離さず、首に掛けて居ります。へと、見せたが因果、そゝがみの立つほど欲しく、女房の歸らぬうちと脇差に、手を掛けてはちやつと引き、拔きかけては押隱し、心は早鐘、時の鐘、初夜か半時か煩亂の、亂れの刄拔きし折柄、女房小梅は門の戸を、叩いて私ぢやこゝ明けてと、言ふは慥かに姉が聲、待たんせ明けると長吉が、立つて行くを後から、急きに急いたる三刀四刀、ウンと仰向に反へる音、胸にこたへて門の戸を、引きしやなぐればかき金外れ、開いた口さへ塞ぐ間の、無いに狼狽由兵衛は、炬燵の蒲團を手負に被ぶせ、由へオ、、さゝゝ酒買うておぢやつたか。オ、早かつたなう。へと、言ふ聲も、齒の根も合はぬ風情なり。小へオ、遲いか早いか知らねども、見ればいから寒さうな。へ一つまゐれと茶碗さし出し、受ける人も注ぐ人も、共に慄うて一息に、

年足らず　年少者の分別が足りないことをいふ

そゝがみの立つ　ぞく〳〵する意

心は早鐘　早鐘を撞くやうに胸の動悸がうつこと

初夜か半時　八時か九時かのこと

引きしやなぐる　引き外すこと

開いた口　戸の口と人の口と兩方へかけていふ

ぐつと乾したる冷酒は、熱鐵を呑む思ひにて、五體に汗を流し居る。小梅は色め見て取れば、門口閉めて邊りを眺め、胸に滿ち來る涙をば、呑み込み〳〵聲搔き曇り、小〽コレ由兵衛殿、長吉はまう死に切つたか、息がするなら逢はせて。〽と、わつと泣き出す聲高しと驚き抱へ、由〽ムム扨は樣子を悟つたな。金が無ければ旦那樣や奧樣を見殺し、小の虫を殺して大恩報ずる今宵の仕詰、穩便にして吳れよ。お刀さへ取戻さば、弟の敵存分にならう女房。〽と、事を分け理を分けて、云ひ聞かすれば涙を押へ、小〽穩便にせぬ氣なら、直ぐに聲山立てるわいの。モ私さへ欲しやと思うた金、取るを無理とは思はねど、殺してとは餘り酷い仕方ぢや由兵衛殿。〽せめて死に目に逢ひたいと、駈寄つては抱き起し、小〽コレ姉ぢや、小梅ぢやわいの。嘸私共は憎くかろが、爰をよう聞いてたも。最前話した刀の事、外へ渡すとお國のお主御一家から、奧樣まで、どうお成りなされうやら。其方が死んで此金が御用に立つて、幾人

五體に汗を　身體中冷汗をかくこと
色め　樣子
小の蟲を殺して　輕い者を犧牲にする譬
存分にならう　腹の癒るやうに殺されやうとの意
聲山立てる　大聲を出して叫ぶこと
佛も及ばぬ慈悲　大層な慈善の意
小初瀨　大阪の南郊天王寺に近い地

ともなく命助かり、佛も及ばぬ慈悲なるぞや。お念佛申してたも。〳〵とすゝめ歎けば目を開き、長〳〵なう〳〵姉樣、私は斬られいでも、死なねばならぬ事がある。小〳〵そりや何故に。長〳〵さればいの、此中來た時段々の話、瘦せるも金故貧故と、聞いた時の其悲しさ。どうぞと思ふ心から、私や此金は盜んで來たのぢやわいの。小〳〵ヒヤア。長〳〵來ると進んじよと思うたが、親方の物塵一本粗末にするなとの御意見、どうも遣らうと得云はいで、見せびらかして居たわいノ。たつた一人の姉樣、何んぼ程孝行にしても、仕飽きは無けれども、丁稚のうちは自由にならず、盜んでなりと苦を助け、後では直ぐに身を投げて、最後は小初瀨の野中の井戸、私や來しなに死ぬる所まで見て來たわいノ。〳〵と、縋りつき、欷泣り上たる有樣に、小梅は身も世もあらばこそ。小〳〵其優しい志、聞けば聞くほどなほ悲しい。二親に別れてより、其方も私も難行苦行、まあ是程で年が明く、年は幾つと指を折り、數へ待つたる此姉が、連添

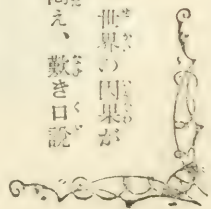
野中の井戸　釣瓶も無い古井戸

難行苦行　辛い事を釋迦が檀特山で難行苦行したのに譬へていふ

年が明　奉公の年期が濟むといふ意

釋迦でもよもや　釋迦は未來を透視するのでいふ詞

ふ夫が殺さうとは、釋迦でもよもや、マ御存じあるまい。世界の因果が固まつて、夫婦ともなり姉弟とも、生れて來たかと身を悶え、歎き口説くぞ道理なり。

【解説】此の曲は、元文三年十月豐竹座の操芝居に上演した原田由良助作、並木宗輔添作の『茜染野中の隠井』聚樂町の段の詞章を改竄して新内節に直し、鶴賀派の語り物としたのである。大體の筋は、大阪聚樂町の色揚職梅の由兵衞が、舊主の爲めに紛失した寶刀を詮議し、漸く其所在を知る事が出來たが、是れを手に入れる百兩の金に窮してゐると、女房小梅の弟長吉が主家の爲換の金百兩を懐中して姉夫婦を訪ねたので、由兵衞は忠義一途に心が狂ひ、女房を酒買ひに出した留守に長吉を殺して金を奪ふといふ悲憐の淨瑠璃で、由兵衞の出に一中節が取入れて澁く作られてゐる。

浮雲 浮々とした蕩心をふはく／＼した浮雲に譬へていふ

四つ手駕籠 四本の竹を柱とした粗末な町駕

揃うた肩と肩 肩の揃ふ駕擔を特に注文して吉原通を見得にした當時の風習をいふ

鷄がめかりせぬ 鷄が油斷たく時を唱ふこと

辛氣 艱い事を嘲つ

明烏夢泡雪（明烏）

上の巻 浦里部屋の段

〽夕暮毎の浮雲に、心を載せし四つ手駕籠、ほんに揃うた肩と肩、重き戀路も輕々と、かけると思ふ己が身も、かけられてゐる心同士、逢へば別れが思はれて、烏はさのみ憎からで、あの鷄がめかりせぬ、早く唄ふも客による、辛氣々々が差詰めて、胸の痞えも今は早や、押すに下らぬ揚屋町、五丁まち／＼噂ある、時次郎は山名屋を、堰かれて忍ぶ鷹の目に、かゝる憂身ぞ夜の鶴。吉原雀口々に、死んでしまへばほとゝぎす、冥途の鳥ときくものを、死なぬ先から先の世を、思ひやりたる淚川、心の底は人知らじ。夜見世仕度にそれ／＼の、部屋へ櫛箱、鏡立、仲のよい同士二三人、新造交り寄合うて、憂き身の上に取り交ぜて、客の噂も

詞

揚屋町　女郎屋の所在地

山名屋　女郎屋の名

鷹の目　恐しい遣手の眼にたとへる

夜の鶴　時次郎が浦里と兩人の間に子供のあることにかける

吉原雀　吉原を流してあるく素見ぞめきの客

新造　花魁の候補者で時には代理も行

數々に、夕べの口說此中の、涙話の溜息は、昔戀しといふもあり、いつもの事とは言ひながら、取分け今日の身拵へ、可愛いゝ男に見せるのが、羨しいといふもあり、新造子供あどけなく、詞〽今日は私は好かぬ客、約束でござんすが、何うぞ晩には來ぬやうに。〽と、觀音樣を拜んだり、呪ひもする疊算、來ると中れば置き直す、話の腰を可笑しさ堪へ、詞〽好いた、好かぬはまだ早い、馴染の一人づゝも取止めやうとはせず、人の名代に出るばかりが手柄ぢやない。〽と、姉女郎の一聲に、居舞ひして衣桁なる、小袖疊めばまた一人は、座敷掃くやら鏡立、片付け廻るぞ忙しさ。詞〽さあ〳〵モウ見世が出たぞえ、身拵らへが濟んだらば、早う出さんせ〳〵。〽と、遣手のかやが罵れば、皆一時にばら〳〵と、降りる階子の音絕えて、座敷々々も靜かなる、〽春雨の、眠ればそよと起されて、亂れ初めにし浦里は、何うした緣で彼の人に、逢うた初手から可愛さが、身に沁々と惚れぬいて、堪へ情なき懷かしさ、人目の關の夜

る
子供 禿をいふ
疊算 疊の縫目を算へて待人を占ふ
名代 名差しの女郎が差支がある場合に代理に客に出るをいふ
見世が出た 客を待つやうに見世飾が出來た意
亂れ初めにし 戀に心が亂れること
堰き堰かれ 兩人の戀中を邪魔されて

着の中、明けてくやしき鬢の髮、撫で上げ撫で上げ、詞〽なら時次郎さん、此のやうに堰き堰かれ、嘸氣詰りでござんせう。それを堪へて下さんすも、妾可愛いと思うてのお心ざし、嬉しうござんす、忝けない。〽と、抱き締むれば、イヤ俺ゆゑと引締めて、物をも言はず締め合ひて、跡は涙に暮れけるが、男涙をハラリと流し、詞〽いつまで斯うして居たとても、限りもなき二人が仲、長居する程そなたの身詰り、この程段々話す通り、國の親父の江戸表、地頭の方へ出だす金、二百兩は扨置いて、其外一門出入屋敷、騙り盡してこの有樣、〽そなたも共にと言ひたいが、愛しいそなたを手にかけて、何うなるものぞ存らへて、我が亡きあとで一遍の、回向を賴むさらばやと、言ひ棄て立つを取付て、あんまり酷い情なや。今宵離れてこなさんの、健でゐさんす其身なら、又逢ふことのあらうかと、樂しむことのあるべきが、死なうと覺悟さんした身を、如何な氣強い女子ぢやとて、何うして放しやられうぞ。かねて二人が取交

正面に逢はれぬをいふ
氣詰り　氣苦勞をいふ
地頭　領主のこと
そなたも共　お前も一緒に死なうと云ひたいがの意
手にかけて　手にかけて殺す意
回向　讀經して追福を祈ること
起請誓紙　末までも變らないことを契約した誓ひの書付

す、起請誓紙は皆な仇、何うで死なんす覺悟なら、三途の川もコレ此樣に、二人手を取り諸共と、何故に言うては下さんせぬ。妾を殺さぬお前の心、嬉しいやうでわしや厭ぢや。この程お前の顏形、窶れさんしたその折から、昨夜の床の睦言に、死期を愼む此白無垢、是程までに思ふもの、棄てゝ行かうとは去りとては、鬼より恐い御心、妾や遣りはせぬ放しはせぬ。殺して置いて行かんせと、男の肩に取縋り(喰ひついて)、身を震はして泣きゐたる。遣手のかやが聲として、詞へこの子供は灯を見ると眠るか。へと、聲はしたなく罵りて、詞へ浦里さん、浦里さん、チヨトお目に懸りませう。へと、呼び立つれば、浦里ハッと思へども、素知らぬ顏して、詞へ何の用で御座んす。へと、言へばかやが、ツコド聲。詞へ否他の用でも御座んせぬが、アノお前の客衆は、聞けば昨夜から居續けに御座んすげなが、若衆に問うても、何の客衆やら知らぬと言ふ。今の口説の臺詞も時次郎さんに極まつた。旦那が呼ばんす、サア御座んせ。

白無垢　死ぬ時に多く着る白無地の絹の着衣

この子供　此の禿の意

聲はしたなく　無遠慮に大聲で口汚なく罵ること

ツコト聲　突慳貪に言ふ詞の形容

旦那　樓主をいふ

白髪頭　知らぬといふ意を亭主の白髪頭にかけていふ

男ども　妓夫達をい

へと、浦里が手を取つて無理に引立つる。隣座敷に亭主持ち兼ね、髻を摑んでくる〳〵と手に絡み、詞へどうせ口では背かぬ奴。へと、罪も報も後の世も、白髪頭の顳顬も、張切るばかりのやら腹立ち、引立てゝこそ降りにける。後に多勢男ども、へあの客故にあの樣に、憂目に逢はしやる浦里さん、詞へ殊に懸も餘程あり、其れに隱れて二階へ上り、居續けなどとは太い奴。詞へ引摺り下して踏みのめせ。へと、總路の闇の暗がりを、無二無三に引出だし、踏むやら打つやらむしるやら、叩き据えられ是非も泣く泣く箱階子、やうやう傳ひ降りけるを、直ぐに表へ突出だし、門の戸ハタと鎖し固め、錠さす音ぞ嚴しけれ。

【解說】此の曲は、明和六年七月三日、江戸三河島近くの田圃で淺草藏前の伊勢屋の養子伊之助が、吉原の遊女三芳野と情死した事件を淨瑠璃に仕組んだもので、作者は初代鶴賀若狹椽である。此の淨瑠璃が初めて芝居に上演されたのは、弘化四年大阪大西の芝居で、出語りは鶴賀馬蝶であつて、大阪中

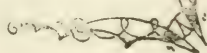
ふ

懸り　身持の遊蕩費

箱階子　座敷から階下へかけてある裏階子

門の戸　潜り戸

鎖し固め　戸を嚴重に締めること

の大評判であつた。江戸では八代目團十郎が時次郎、阪東しうかが浦里で勤めたのが最初であるが、當時新内では下卑てゐると稱して、清元延壽太夫に作曲させて語らせたといふ話がある。上の卷は山名屋の浦里と深く馴染んでみどりと云ふ子供まで出來た春日屋時次郎が、遣ひ果たして金の工面の惡くなつた爲、山名屋からは堰かれてゐるのを、密かに首尾をして浦里の部屋に忍んで來るのを、偶々遣手のお萱に見出されて、樓外へ突出されるといふ筋である。

雪吹雪　雪が風で散亂すること
是非もなし　責められても仕方が無いと觀念の詞
身代　財産をいふ
親懸　親の厄介になつてゐる身分
年切返し　借錢をして勤めの年期を増すこと
奉公　勤めのこと
見せしめ　懲戒の手本にすること
思ひ切れ　時次郎と

明烏夢泡雪（明烏）

下の巻　浦里雪責の段

へ嚴しけれ。内には亭主が浦里を、庭の古木に括りつけ、折節降り來る雪吹雪、箒おつ取り打つ音に、禿みどりが取付いて、詞へ申し旦那さん、モウ御堪忍なされませ。へと、嘆く禿も共縛り、浦里涙の顔振上げ、詞へ妾が身に是非もなし、みどりに何の咎あつて、あの子は赦して下さんせ。へと、言へば亭主も不憫さと、思へどわざと聲荒く、詞へこりやヤイ浦里、客を堰く事客の爲、女郎大切、身代が大事、あの客も未だ若き人、あまり繁々通はれては、親懸りなら勘當受け、主持ならば親方の手前、仕損なうは知れた事。この程年切返しもあの客衆ぢやとある。この上は心中か駈落か、身の行末までが不憫さ故、假令敵の末にもせよ、我抱

の關係を思ひ切れといふ略
責苦　折檻の苦しみをいふ
きのふの花　小唄の文句
主の居續　時次郎の居續けをいふ
味氣なき　つまらないといふ意
露の身　露のやうに脆い勤めの境遇をいふ
好いた男に　小唄の文句

へとなりし女郎、殊に禿の中より諸輩は人に優れたれば、他の子供と違ひ心を注けて育てしもの、何の憎い事があらう。此處をよう辨へて、思ひ直して奉公せよと、度々意見を加へても、夫を夫とも聞入れぬ、其苦しみも心柄、おのれが罪おのれを責むる、みどり奴もおのれが使ふ禿なれば、他の者への好き見せしめ。思ひ切れ、思ひ切る心なら、今でも繩を宥してくれん。コリヤやい男共、浦里奴を氣を付けい。〽と、言葉てゝ、奥の一間に入りにける。浦里跡を打眺め、涙に暮れてゐたりしが、詞〽お情あるお言葉なれど、これぼかりは何うも忘られぬ。おゆるしなされて下さんせ。未だ此上に何の樣な、悲しい苦しい責苦でも、妾や厭やせぬ。何うなつても思ひ切られぬ。いつそ添はれぬものならば、一緒に死にたい時次郎さん、殺して下んせ死にたいわいなう。三下り〽きのふの花は今日の夢、今は我身につまされて、義理といふ字は是非もなや。勤めする身の儘ならず、別れとなれば今更に、去なせともなき離れ際。

次郎さん　時次郎さんの略
譯知らぬ　戀の諸譯を知らないことを指す
欲りも强く　惚れ込みやうの强いこと
淡雪　薄く降つて解け易い雪
男はかねて　時次郎は豫めの意
一腰　刀をいふ
身を堅め　確りと身ごしらへをすること

詞へエ、此苦みに引きかへて、あの二階の三味線は、何日ぞや主の居續けに、寢卷の儘に引寄せて、互ひに語る樂しみの、今宵は引替へ今頃は、何處に何うして居さんすやら。兎に角添はれぬ二人が身の上、ア、味氣なき浮世ぢやなあ。三下りへ好いた男に私や命でも、何の惜しかろ露の身の、消えば恨みもなきものを。詞へコレみどり、嘸ぞそなたは悲しかろ、妾が憎かろ堪へてたも。惡い女郎に使はれて、思はぬ苦しみ堪忍しや。今宵に限りこの雪は、何の報ひぞ嘸寒からう可哀やなう。詞へいえいえ妾は寒うは御座んせぬが、次郎さんは彼のやうに、若衆に叩かれさんしたが、お前は口惜しう御座んせう、妾も悲しうてならぬわいなう。詞へオ、よう言うてたもつた。そなたまで其樣に、へ主を思うてたもるもの、妾が心を推量しや。何の因果に此樣に、愛しいものか去りとては、傾城に誠なしとは譯知らぬ、野暮の口からいきすぎの、粹の粹ほど欲りも强く、只懷しう愛しさの、愚痴になる程戀しいもの。假令此身は淡雪

足もそゞろ　足がわな〳〵震へること

蔦蔓　蔦蔓が木に生ひ纏ふやうに縄で縛られてゐるをいふ

雪に閉ぢられ　降積む雪に閉ぢ籠められて、鶯が谷の戸を出ることが出來ないことにたとへる

鶯の塒漂ふ　巣の中でうろ〳〵して懊惱する形容

と、共に消ゆるも厭はぬが、此世の名殘今一度、逢ひたい見たいとしやくり上げ、狂氣の如く心も亂れ、淚の雨に雪解けて、前後正體なかりけり。〽男はかねて用意の一腰、口に咬へて身を堅め、忍び忍んで屋根傳ひ、其れと見るより悲しさの、傳へて挑む松が枝も、今宵一夜の掛橋と、足もそゞろに定めなき。見るに浦里嬉しやと、悲しさ恐さ危なさに、飛び立つ許りに思へども、身は縛めの蔦蔓、降積む雪に閉ぢられて、詮方なくも鶯の、塒漂ふ許りなり。〽難なく下へ降り立ちて、二人が縄を切解き、〽コレ〳〵浦里、此處で死ぬるは易けれど、逃るゝだけは落ちて見ん。ツイ此塀を越す許り、幸ひこれなる松の枝、傳うて行かん諸共。〽と、互に手早く身拵らへ、みどりも共にと取縋る。可愛や此子は何とせん。オヽ心得たりとみどりを小脇に引き抱へ、甲斐々々しくも時次郎、松の小枝を浦里に、シッカと持たせて四邊を見廻し、忍び返しを引外し、梯子となしてさし下し、やう〳〵三人塀の上、降りんと思へど

忍び返し　塀の上に先きを削つた木を組み合はせて取りつけ、盗人の忍び入るを防ぐ柵

一足飛び　足をそろへて一思ひにひらりと飛ぶこと

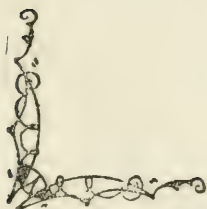
明烏　夜明に啼く烏をいふ

女の身、浦里は胸を据え、死ぬると覺悟極めし身の上、何か厭はんサア一緒と、手を取組んで一足飛び、實に尤もと頷きて、互に目を閉ぢ一思ひ、ヒラリと飛ぶかと見し夢は、覺めて後なく(なき)明烏、後の噂や殘るらん。

【解説】下の卷雪責めは、内證で時次郎を我が部屋に引入れたといふ罪で、霏々と降り積む雪中へ浦里を引据え、遣手と亭主が交々折檻するが、浦里が強情を張つて時次郎と切れると云はないので、今度は禿のみどりを責めて浦里を苦しめる。さうして、お爲ごかしに意見を加へて置いて、亭主は屋内へ引込むと、いつの間にか時次郎が塀を乘越して忍び込み、浦里と禿を助け、其儘手に手を取つて廓を走り出づるといふ筋で、劇的情調の横溢した場面である。

正夢　夢が現實になること

身すがら　其儘の形をいふ

中田甫　淺草田甫

抱へ帶　前で締める帶

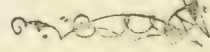
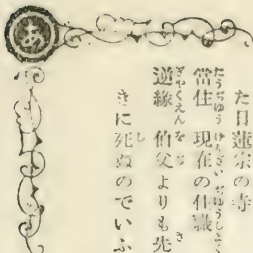
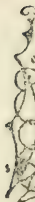
鐘は上野か　芭蕉の句から出た文句

芥子玉の頬冠り　芥子玉を染め出した手拭を消すにかけていふ

石原　隅田川の東岸の地で石にかけて

明烏後正夢（正夢）

浦里時次郎道行の段

〽忍び寢の枕二つを其儘に、取りも直さぬ正夢の、破れて現つ浦里は、廓を拔けし身すがらや、宵の口說の縺れ髮、取上ぐる間も中田圃、寢卷ながらの抱へ帶、人目に立つを時次郎、鐘は上野か淺草の、森を離れて花川戶、吾妻橋と手を取りて、二人が影のまた二人、月に映るを追手かと、氣を芥子玉の頬冠り、素足に辛き石原の、川邊傳ひに朧ろ浪、灯影幽かに歸り舟、唄ふ小唄のしめやかに、〽川竹の浮名を流す鳥さへも、番ひ離れぬ鴛鴦の、中に立つ月すご〳〵と、別れの辛さに袖絞る、ほんに辛氣な死神に、明日は無き名を竪川や、われから招く扇橋、此世を猿江大島の、森の繁みに辿り着く。詞〽コレ浦里、危うき場所をやう〳〵

いふ
川竹の　小唄の文句
川竹は廓を川にかけていふ
竪川　本所と深川の間を流るゝ川
扇橋　竪川沿にある深川の橋
猿江大島　竪川の上流の地
慈眼寺　猿江に在つた日蓮宗の寺
當住　現在の住職
逆縁　伯父よりも先きに死ぬのでいふ

逃れ此處まで來て、死ぬる今際の心懸りは、かね〴〵話す二百兩は、地頭へ納める年貢金故、親人へ御難儀かゝるは必定。また此一腰は小烏丸と名付け、凶事ある節は自づと聲を發する由にて、家に傳はる寶の一刀。これにて死すれば血潮に汚し、人手に渡る其時は、不幸の上の不幸の上塗と、認め置いたる書置を差添へ、アレあれに見ゆる慈眼寺の、當住は俗縁の伯父なる故、蔭ながら賴み置かば、死後には必す親元へ、確に屆かん。最後どころもあれなる墓場。〽とひ弔ひも御回向も、逆縁ながら血の緣り、他の千僧供養より、嬉しう二人が死出の旅。さはさりながら我故に、そなたも親に先立つ不幸、因果な緣とあきらめて、詞〽心殘りの事あらば、返す返すも言うてたも。〽と、流石亂れぬ男氣も、泣かぬ顏する目に淚。聞いて女は顏眺め、アレまた愚痴な今更に、妾が心も知りながら、果敢ない親の瀬に立つて、沈む苦界の浪枕、夜毎日毎に幾萬人、通ひ廓の其中に、ふと逢ひかゝりし初めから、仇と情の柵に、惚

詞

千僧供養より　他の千人萬人の僧の回向よりもと云ふ意

苦界　勤めの身

月日小車　月日の廻ることを車に譬へていふ

入黑子　遊女が二の腕へ客の名を入墨することをいふ

指切るも　女が男への心中立てに小指の先きを切ることをいふ

れさしたのも神樣の、結ばさんした緣と緣。友朋輩や親方の、氣兼に月日小車や、客へ手管の入黑子、誓紙書くのも指切るも、眞實男の可愛さに、盡す誠は誰とても、勤めする身の習ひにて、妾に限る事かいた。世にありたけの實情を、盡し盡して諸共に、死ね死なうとが眞になり、互に胸の疑ひも、晴れて未來へ夫婦づれ、何の心が殘ろぞと、笑顔に覺悟あらはせり。男は見るに忍びかね、詞〽其の潔よい心ざし、此身と共に消ゆる身を、夫程までに嬉しいか。詞〽嬉しうなうて何とせう。〽今見納めと顏と顏、白む東につく〴〵と、見交し〳〵抱き締め、盡きぬ名殘りに時移る。早や寺々の鐘の音に、ハッと心を取直し、見咎められじと立上り、いざや最期を急がんと、哀れ散りゆく若盛り、若紫のしごき帶、引きしめ〳〵煩惱の、繩に縊れて死なんずと、消える其の身の置所、其處か此處かと見廻す墓所、露に枝垂れる柳の枝、是ぞ佛の御手の絲、助け給へと觀念し、扱帶打ちかけ伸び上り、妙法蓮華經、妙法蓮華經、

潔い心ざし　潔白の胸の裡をいふ
寺々　本所深川邊は寺院が多いのでいふ
若紫のしごき帶　薄紫の扱帶をいふ
烏羽玉　闇の枕詞
朝嵐　曉方の風
妙法極意　法華宗の秘事
加持曼陀羅　佛の加護を願ふ呪文
經力法力　お經の力や祈禱の力をいふ

唱ふる聲も諸共に、既に斯うよと見上ぐれば、何處よりかは群がる烏、鳴き連れ〳〵羽を振ひ、二人が上に飛びめぐり、目先きも眩む烏羽玉の、闇はあらぬか分ちなく、斯くては果てじと氣を勵まし、追拂ひ拂ひ退け、石踏み外し縺れる途端、めり〳〵〳〵と柳の枝、折れて其の儘打ち重なり、消え行く霜や朝嵐、遂に果敢なくなりにけり。音に驚き寺中の人々、住持諸共馳け來り、それと見るより走り寄り、呼び活け〳〵水吹きかけ、數多手厚き介抱の、其甲斐更に無かりけり。其の間に見移る書置に、上人立寄り珠數おつ取り、妙法極意の加持曼陀羅、高らかに讀み上げ讀み上げ、死骸に授け給ふにぞ、經力法力忽ちに、不思議や二人は息出でたり。上人聲かけ、詞「皆騷ぐまい〳〵。是れなる若者は我が血緣、又此の一腰は彼が家に、代々傳はる小烏の名刀、聞きしに違はず、時次郎が最期を助けんと、群がり寄りしか、ハヽ有難し〳〵。若氣の至りと言ひながら、忠孝を顧みず、色情に命棄つるは、人道に叛けり。さるに依

小烏の名刀　三條宗近が作の古刀

非人に落す　心中の未遂者は日本橋に晒して後非人（乞食）の仲間に入れて終ふ當時の國法

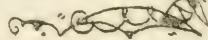
擅越　擅家に同じ

夫婦の語らひ　婚禮することをいふ

比翼塚　男女を合祀した塚

津々浦里　女の名を讀み込んで津々浦々の洒落

つて存命なる時は、非人に落す世の掟、恐るべし〳〵。幸ひなるかな山名屋は我が擅越、殊に信者の義にあれば、事穏便に取計らひ、兩親へ言ひ立て、時節を待つて夫婦の語らひ致させん。且又一旦絶えし二人が命、蘇りしは妙法の利益、劒の奇特、後の世までも傳へんため、しるしの石に建置かん。へと、仰せは實にも道理や、今に朽ちせぬ比翼塚、不思議の縁と津々浦里、語り傳へ、聞き傳へ、開くや花の時次郎、目出度き春をぞ迎へける。

【解説】此の曲は前の『夢泡雪』の後篇とも見るべきもので、廓を脱出た時次郎と浦里の二人が、深川猿江の慈眼寺まで辿りつき、住職が俗縁の伯父に當るので、秘かに後事を遺書して心中し、一旦絶命したのが、經文の功徳と所持した小烏丸の名刀の威徳で蘇るので、遂に夫婦の契を結ぶといふ、目出度い筋の淨瑠璃である。作者は富士松中興の祖と謂はれた四代目の家元富士松魯中で、新内の道行物として珍らしい曲である。

里空夢夜櫻（夜櫻）

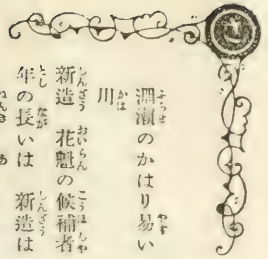
〽春の宵一刻千金の價は、實に色里の夜櫻を、眺むる袖にふりかゝる、花の移り香しめやかに、床しき人に大門と、神かけ此處に待合の、辻に浮名も今は我が、身の上田屋の園春が、深く成井屋淸吉に、今宵逢瀨の堰かれては、昨日に變る飛鳥川、深き心ぞ哀れなり。人目忍べば自ら、他處の噂も聽き耳を、起居に心置かれける。隣り座敷はとり〴〵に、浮氣盛りも新造の、年の長いは振袖を、留めると共に短夜や、見世が引けては寄合うて、面白いこと悲しいこと、客の噂ぞ姦しき。新造園梅、詞〽コレ皆さん、ひざ浦さん、お前はアノ股引屋の足袋吉さんのことばかり思うてゐなますが、イヤモウ緣は異なもの、アノ田舍の客人が、二三日中に園春さんを身受するといな。〽聞いてひざ浦口尖らせ、詞〽フウ、おや〳〵、おや〳〵、さうざますかえ。それはまあお仕合せ。詞〽否え

春の宵一刻云々　支那の蘇東坡の古詩から譯したので春の夜の情景を推讃したもの

大門　逢ふにかけて廓の入口をいふ

待合の辻　江戶町の四つ角の辻

逢瀨の堰かれ　女郎屋で金にならぬ客だと見ると仲を堰いて女郎に逢はせぬことをいふ

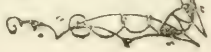
飛鳥川　大和にある

淵瀬のかはり易い川

新造　花魁の候補者

年の長いは　新造は年期の明けるまで大分長いけれど振袖を廢して留袖になると、卽ち花魁に出世する時分には、もう年期が短くなると云ふ意

深間　深く云ひ交はした客

居續け　前夜から殘つて遊ぶこと

否え仕合せ所か、彼の深間の清さんがある故、只泣いてばかり、モ傍にゐる私まで氣が揉めるわいな。詞〽そんならお客は居續けかえ。詞〽イエ〱今夜の客衆は初會ざます。詞〽フウ、おや〱、おや〱、さうざますかえ。コレサよしの木さん、さいかちさん、今の話を聞きましたかえ。モ私どもなら嬉しがつて行かうもの、又花魁方は違うたものではないかいな。詞〽オヽ、それにはこつちは大丈夫、受出さるゝ氣遣ひなし。間夫には壁にされる、やつぱり色氣より食ひ氣、お芋の燒いたが喰べたい。〽と、顏を赤めて、つべこべと、互に饒舌る有樣は、女護の島の如くなり。中には三味線引寄せて、憂きを慰む爪彈も、間夫に逢ふ夜は心の儘に、枕二つを一つに寄せて、嬉しや時は未だ夜半と、思へば告ぐる鳥の聲、早や三味線の唄も止み、座敷々々もひつそりと、春の夜の夢か現か床の内、二人は顏を見合せて、暫時は物をも言はざりしが、詞〽ノウ園春、そなたは他へ身受され、明日から見世を引くとのこと、聞

初會　初めて上つた客をいふ
間夫　情人
女護の島　女ばかりの島
爪彈　撥を用ゐず爪で三味線を彈く
見世を引く　客に受出されて席を去ることをいふ
あるに甲斐なき世の中に生きて居ても用が無いといふ意味
先へ行きやる　身受

の文にもその通り、用があるから斯う〳〵して、來てくれとありしゆゑ、見世のひけるを待兼ねて、頭巾の儘の此の有樣。〽親兄弟に見限られ、憂き勘當の今日までも、愛想も盡さずそれ程に、思うて給る心ざし、忝けないぞや嬉しいぞや。兎にも角にも俺が身は、あるに甲斐なきものなれば、心殘さず機嫌よう、先へ行きやるが身の出世。とは言ふもの丶去りとては、今宵別れて何時か又、逢ひ見ん事も片絲の、切れて果敢なき緣ぞと、後は涙にくれゐたる。女は涙の顏を上げ、エヽそれそのお言葉は何事ぞ。今更言ふも愚痴なれど、初會馴染の居續けに、お前の姿振り言はんす事、たとへ當座の浮氣にも、數ならぬ身をあれ程に、言うて下んすお心と、ひよつと思ふとそれからは、又の御見の待遠さ、首尾して逢うたその時は、千夜を一夜に重ねても、言葉殘りて明烏、可愛々々が積りては、まして雪の日雨の朝、お宿の首尾の惡いのも、氣の付かぬではなけれども、無理を言うての居續けが、今日に明日は尙更に、去なせ

されたい客の許へ行くこと
片絲　難いを云ひかける。撚り合はせてない絲
初會馴染　初めて登樓した晩から馴染となること
御見　御出でに同じ
去せともない　歸したく無いこと
譯も涙の　譯も無くにかけていふ
死は一旦　死ぬのは一度といふ意

ともない別れ際(離れ際)、それが高じてこのやうに、大事のお身を御勘當、もとはと言へば私から、宥して下んせこの上に、お前と切れて何樂しみ、私や覺悟して居りまする。お馴染甲斐に思ひ出し、可愛と思うて下んせと、女心のくど〳〵と、譯も涙の忍び泣き、いとど哀れや増さるらん。詞〽ホヽウ、その貞實の心ざし、何にも言はぬ嬉しいぞや。今宵に限るそなたの身、一人は殺さぬ俺とても、疾くより覺悟極めしぞや。詞〽オヽ、嬉しうござんす。詞〽ムヽ、道理。さりながら、常々そなたの話にも、年寄つた親達、今死んでは誰を賴り、親持つた身は同じことゝ、今更俺が斯く言へば、怯れたるには似たれども、死は一旦にして遂げ易し。ハテ命さへあれば時節を待つて親へも孝行、世間の義理も立つと言ふもの、一先づこゝを立退いて、逃れるだけは逃れて見ん。幸ひこゝにこの頭巾、俺が上着を斯う着せて、男姿に樣を變へ、アレ〳〵あの物音は茶屋の迎ひ、大一座の早歸り、あれに紛れて潜戸を出でん。狼狽へてゐ

茶屋の迎へ　引手茶屋の者が翌暁迎ひに來ること

大一座　大勢連の客

早歸り　曉方暗いうちに歸る客

荒けなく　男のやうた荒つぽい足音を立てること

スハ大門　出口の大門を關所に見立てゝ云ふ

虎の尾鰐の口　戰々兢々たる情景

五十間　大門を出てから衣紋坂まで

る所でない、必ず人に覺られな。へ、と、言へば女も身拵へ、降りる階子も荒けなく、男姿の紛れもの、こなたは多勢わや〳〵と、おさらば、さらばに難なくも、潜戸を出でゝサア來いと、僅か一丁半丁の、道が五里にも十里にも、迎ひの提灯先きに立て、よその後朝引代へて、頭巾眞深に二人連れ、心許すな關守の、スハ大門ぞ一大事、南無淺草の觀音樣、助け給へと觀念し、越ゆるは虎の尾鰐の口、遁れ出でたる五十間、逃げた〳〵の人毎に、見付けられじと足早に、日本堤を一筋に、倒けつ轉びつ行先の、夢は破れて明近き、鐘に噂が殘るらむ。

【解説】此の曲は成井屋清吉といふ商人の若旦那が、吉原の上田屋の抱妓園春に馴染み、放蕩が度を越えたので御約束の勘當となる。園春が我身故からと同情して、他に受出して呉れると云ふ客があつたのを、清吉に今迄通りに逢へなければ所詮生きてゐる甲斐が無いと心中の相談に及び、曉方の早歸りの客に紛れて二人は廓を脱け出すといふ筋で、作者は初代鶴賀新内である。

合羽がけ　道中合羽を被た風姿

通つて下さんせ　あちらへ行つて下さいと云ふ意

奉加　神佛に喜捨を賴むこと

胸のモヤ〳〵　思ひ煩らてゐること

面妖　おかしいぞと疑ふ詞

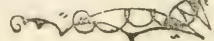
商賣筋の上手者　貴賤の客を多く取扱ふ女郎屋なので應對が上手である

鬼怒川物語（累身賣）

かさね身賣の段（上の卷）

へ案じゐる、折から表へ合羽がけ、所に見馴れぬ一腰も、派手な拵へ取なりは、流石それやと門口から、詞へアイヤ申し、ちとお頼み申しませう。與右衛門様とは此方様で御座りまするか。金五郎さんと言ふお方が、お前様にと承りましたが、一寸お目に懸りたう御座ります。へと、言へどこなたは耳にも入れず、詞へ通つて下さんせ。何ぢやゝら邪魔らしい、奉加どころかいなあ。私が所はアノ宗旨が違ひます。へと、胸のモヤ〳〵愛想なき。詞へイヤ左様な者では御座りませぬ。私は江戸吉原の女郎屋で御座りまするが、金五郎さんに御相談しかけました奉公人、金持つて來い、こなさんに待つてゐると被仰ましたが、ハテ面妖な。どち

手詰の難儀　差し迫つた急場の難儀

談合　相談を纏めること

顏のすまゐ　容の造作といふ意で容貌の美醜をいふ

半四郎　美貌で有名な四代目岩井半四郎が書卸しに此の累を勸めたので當込んでいふ

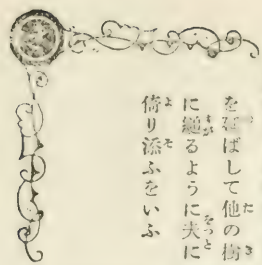
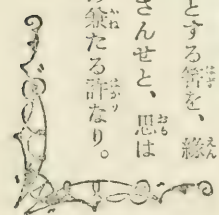
強い代物　大層な堀出物といふ意

年　廓勤の年期

らへお出でなされましたか、何卒お目にかゝりたいものぢやが。〽と、言ふうちフット氣の付く累、我身を賣つて百兩の、金調へる便りには、コレ幸ひと笑顏して、詞〽オ、私としたことが、粗相な事を申しました。どうで見える金五郎さん、入つてお待ちなされませ。詞〽ハイ／＼左樣ならばお邪魔ながら、ヤそんなら御免なされて下さりませ。〽と、知らぬ人にも取入るは、商賣筋の上手者。累は傍へ烟草盆、言ひ寄る機會に茶を差出し、詞〽イヤ申し、お前はアノ吉原の女郎屋さんで御座んすかえ。詞〽ハイ／＼左樣で御座ります。詞〽オ、、そんならお前に折入つて、お頼み申したい事が御座んす。と言ふは他の事でもない。夫が手詰の難儀につき、急に金の要る事があつて、身を賣りたいと言ふ人が御座んすが、今言うて今相談の出來るもので御座んすかえ。詞〽イヤモウそれは私が商賣づく、何時でも談合出來まする。そしてマアその本人の年頃はえ。詞〽さればいなあ、十七八で御座んせう。詞〽オツトよし／＼。

去にたい　歸りたい
得心づく　諒解を得ること
納戸　衣服調度を納め置く部屋
いそ〳〵　欣々として勇むこと
今の間　ちよつとの間にと云ふ意
塞がる思ひ　胸が一ぱいになること
こちの人　夫を呼ぶ言葉
添うては居ぬ　離縁すること

して何かた、顔のすまゐ立入の樣子はえ。詞へサア顔容風俗に、エ、ニア江戸で言うて見やうならば、歌舞伎役者の半四郎とやらに、ヨウ似てで御座んすといなあ。詞へそいつは強い代物ぢや、何卒私が方へ相談を極めませう。さうして金の望みは。詞へアノ百兩にさへ買うて下さんすりや、年は五年が十年でも、それに厭ひは御座んせぬといな。詞へイヤモウ、今の話の通なら、隨分百兩には買ませう。幸ひ金は、オ、こゝに持てゐる。相談さへ極つたら、直に連て去にたいものぢやが。詞へオヽそんならさうして下さんせ。エ、忝い。したが今言ふ通り夫のある身、へ互に得心づくの上、暇乞するその間、アレあの納戸で暫しが中。詞へそんなら必ず何もかも、コレ手廻し早う頼みます。へと、いそ〳〵として彼の男、納戸へこそは入にける。累は跡を見送りて、手詰の金の今の間に、つい調うて嬉しやと、思へば悲しき憂別れ、ア、これとても男のため、迚もの事に潔よう、夫に泣顔見せぬのが、別れるこの身の置土産と、氣を取直す一間より、何心な

勤め　女郎屋へ勤め奉公すること
いぢらしさ　可愛さうだと憐む意
埒もない　らつしもないに同じ。冗談ぢやない、下らないといふ意
兄の三婦　累の兄
暇の狀　離緣狀
蔦の葉　蔦の葉が蔓を延ばして他の樹に縋るように夫に倚り添ふをいふ

く出る與右衞門。顏を見る目も寒がる思ひ、押隱して傍に寄り。詞〽イヤ申し、こちの人、私やお前に願がある、聽届て下さんすかえ。詞〽改まつて女房ども、願とそりや何事。詞〽サア平素お前の言はしやんすには、鏡を見ると添うては居ぬ、暇を遣ると言はしやんしたが、私や其鏡が見たう御座んす。詞〽ム、何と言やるぞ。そんなら其方は暇吳いとサ言やるのか。詞〽アイ、今宵に迫つた手詰の金、勤めに遣つて下さんせ。〽と、わが顏容の變りしとは、知らぬ不愍さいぢらしさ。エ、まあ何の其顏でと、言ふも言はれぬ苦さの、胸に淚を呑込ながら、詞〽エ、埒もない。例へ何のやうな事があらうとも、そなたに勤奉公さして、兄の三婦へ立つものかいの。詞〽さいなア、それぢやに依つて暇の狀、暇下さんせ與右衞門殿〽とは言ふものゝ世の中に、女房は夫に去られまい、暇取るまいとする筈を、緣切られても嬉しいと、思ふ心を推量して、可愛と思うて下さんせと、思はずワツト聲立て、取付縋る蔦の葉の、袖に搦む憂き淚、止め兼たる許なり。

村の歩き　村の小用を達す使男

山名宗全　室町幕府の四職の一人であるが、實は江戸幕府の大老酒井雅樂頭をきかせて作つた役

御代官　年貢や公事を司る役人

今ぢや〳〵　直ぐ代官所へ來てくれと急き立てる詞

糊立　糊を付けてピンとさせて置く

鬼怒川物語（累身賣）

かさね身賣の段（下の卷）

〽折から息せき村の歩き、詞〽申し〳〵與右衛門樣、山名宗全樣から、繪姿を持つてお尋ねなさるゝ者がある、今御座りませと御代官の言付け、サア〳〵、今ぢや〳〵。〽と、せり立つれば、ハット許りに與右衛門が、重なる思ひは命を的、胸を据えたる魂の、一腰ぼつこみ立出づれば、詞〽コレ待つた、待たしやんせ與右衛門殿、先刻からも言ふ通り、必ず短氣を出して下さんすな。〽と、言ふ間も忩しく、詞〽サア申、疾う〳〵。〽と急つかれて、代官所へと出て行く。後影さへ名殘かと、見やる目に湧く雨涙、しを〳〵立つて押入の、冬の支度の綿入も、やう〳〵襟を合はせ物、離れ物とは言ひながら、かねてかくなる身と知らば、せめて不

針のみゝぞ　針の穴
欠伸まぜくら　欠伸交りのこと
ずる〳〵と　轉寢をすること
お内儀さん　他人の女房を呼ぶ詞
じやら〳〵　戯言をいふこと
眞實誓文　まつたく神に誓つて本當にといふこと
丁四郎　半四郎に對して輕蔑の意味で博奕の丁半の丁を

自由のなきやうに、洗濯物の糊立も、涙に濕る絲筋や、針のみゝぞの見え分かぬ、欠伸まぜくら納戸より、立出づる以前の男。詞〽ア、とんともう旅草臥れで、思はず知らず、ずる〳〵とやつて退けた。サア申しお内儀さん、暇乞ひも濟んだなら、ナント賣極めしませうかいな。詞〽オヽさぞお待遠に御座んせう。サアそんならその百兩の金渡して下さんせ。詞〽イヤもうそりやア何時でも渡しませうが、してその奉公人は。詞〽アイ私が事で御座んすわいな。詞〽エ、何をじやら〳〵と。サア〳〵氣が急きます賴みます。詞〽イエじやら〳〵では御座んせぬ。眞實誓文私が身を賣るので御座んす。詞〽エ、こなさんは、コレ何を言ふのぢやぞいの。ソレ先刻に言はんした半四郎といふ代物。詞〽さいなあ、私が事で御座んすわいなあ。詞〽ヤアこの人は氣が違うたさうな。そんなら何かえ、アノこなさんが半四郎かえ。詞〽アイ。詞〽イヤモウ丁四郎が聞いて呆れるわいの。これいの、こなさんのやうな者を誰がまあ、ホンに夜

もぢらせて洒落ていふ
夜鷹　辻に出る下等の賣女
厚かましい　面の皮の厚いこと、恥を知らぬと云ふこと
トット　恰度
ぐるり高　周圍の高いこと
チヨッポリ鼻　鼻の低い形容
横の方　横鬢の略
引抜鏡　旅行用の

腰にも伏しおる者はないぞや。詞へエヽそりやマア何でそのやうに。詞へ何で〱其のやうにも厚かましい。あんまり呆れて物が言はれぬわいの。ハハア貴様、コリヤ鏡見たことはないの。詞へアイ、ちと様子が御座んして、鏡見ることならぬわいな。詞へ如何さまさうであろ、〱。生れてから鏡見た事はあろまいの。コレこなたの顔の容體を言うて聞かすわ。トットまあ何おやあらうと、ぐるり高いチヨッポリ鼻、しかも反齒で、どうやら横の方に、チットばかり禿が見えて、その代りに跛と来てゐるわい。詞へエヽ。詞へヤ、エヽも凄じいわい。幸ひこゝに引抜き鏡、稀有怪訝な御面相、それとつくりと見やしやれ。へと、懐より取出し、やら腰立にさしつくれば、思はず初めて見る顔に、ハット吃驚まだ外に、人も居るやと見廻せば、我ならずして面影は、よもやと又も取上げて、見れば見る程情なや、コハそも如何に悲しやと、彼方たへうろうろ、此方へ走り、狂氣の如く身を悶え、鏡を發矢と打付けて、我身をど

懷中鏡。鬚を拔く時などに用ひる

怪有怪訝な　滅多にない不思議な面相と云ふ意

とつくり　悠つくり

確かりとの意

やけ腹立　中腹になること

聲をはかり　聲を限りにの意

化物　醜婦を罵る詞

お腥で腹癒よ　足で蹴飛ばして腹癒せをする意

うと打倒れ、聲をはかりに叫び泣き、哀れにも又いぢらしき。詞ヘエ、忌ま／＼しい暇費し、このやうな化物を、百兩は扨置いて、米一升にも買手はない。ヘと、呟き／＼立上り、せめてお腥で腹癒よと、泣入る累を蹴飛ばし、足を早めて立歸る。前後正體泣き崩折れ、顏も得上げず居たりしが、ア、思へば／＼恥かしや、斯ういふ私が顏ゆゑに、鏡を見せぬ夫の心、その顏もせず朝夕に、可愛がつて下さんした、お情過ぎて情なや、何故打明けて有樣に、言うて聞かして下さんせぬ。又姉さんも胴慾な。現在の妹を、これ程までに憎いかえ。かういふ事とも露知らず、今の今まで私が身で、縹緻自慢をしてゐたが、恥かしいやら悲しいやら、何面目に與右衞門殿、どうまあ顏が合はされう。せめて夫に同じ名の、鬼怒川へ身を投げて、死ぬるは未來で連れ添ふ心。とは言ひながらさつぱりと、思ひ切られぬ惚れた仲、死んだ跡では美しい、女中を女房に持たしやんしよと、それぱつかりが氣に懸り、よう浮まぬで御座んせう。

正體泣き崩折れ　正體も無く泣き咽ぶことで、無きを泣きにかけていふ

姉さんも胴欲な　姉の高尾もむごい人だと怨む詞

絶え入る許り　生命が絶えさうになること

沈む錘　身を投げて川に沈む時の錘

苅豆籠　豆を苅つて容れる脊負ひ籠のこと

可愛と思うて折節の、御回向積み上げますと、口説き立て〳〵、絶入る許り泣き盡す。沈む錘とあたりなる、苅豆籠を身のしづに、負はれ追はるゝ死神の、若し仕損ぜば身の恥と、見廻す傍に錆びもせで、研立て鎌は今宵置く、草葉の露と消えよかと、いとど哀れを添へにける。秋雨の音立歸る、夫の足音今更に、顔を合はすも恥かしく、見付けられじと吹消す行燈。詞〽オ、灯が消えてある。女房ども、累々。〽と、與右衛門が、すれ違うたる門の口。詞〽誰ぢや〳〵。そこへ出るのは累ぢやないか。〽と、言ふ聲跡に聞きさして、女心の一筋に、こけつ轉びつ走り行く。ハテ怪しやと思へども、あやも分らぬ眞の闇、跡を慕うて急ぎ行く。

【解説】此の曲は、初代櫻田治助が安永七年江戸中村座の秋狂言に書卸した「伊達競阿國劇場」のかさね身賣の段を新内に直したもので、今日では鶴賀派にだけ傳はつてゐる難曲である。仙臺侯のお抱力士絹川谷藏が故郷の下總

研立て鎌　研立てゝ
光つてゐる草苅鎌
あやも分らぬ　あや
めもわかぬに同じ
眞暗で物の模樣も
色目もわからぬこ
と

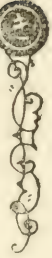
埴生村へ歸つて百姓與右衛門となり、船中で主君の爲に手にかけて殺した吉原の遊女高尾の妹の累を女房に貰ふと、高尾の祟りで美女の容顏が一夜で化物のやうた醜婦となつたので、與右衛門は執念の恐ろしさを感じて、累に鏡を見る事を堅く禁じ、鏡を手に觸れさせないので、累は飽くまで自分を美人だと信じ切つて居る。或日江戸吉原の花扇屋の手代が抱女を仕入に曲尺の金五郎といふ男を使つて此村に來り、與右衛門の家で其男を待ち合はせて居ると、夫が此頃金で煩悶してゐるのを聞き込んで居た累は、身を賣つて金を調達しやうと、其旨を手代に話すと、手代は累の醜婦である事を嘲弄して散々に辱しめるので、累は初めて鏡の面に映る己れの容姿を見て、急に過去の我身が耻しくなり、いつそ鬼怒川に身を投じて死なうと決心し、家を奔るといふ筋で、初演の役割は、累が四代目岩井半四郎、與右衛門が四代目松本幸四郎であつた。本文に『歌舞伎芝居の半四郎のやうに』云々といつた臺詞は、初演當時を當て込んだので、今日では尾上梅幸が得意の藝の一つになつて居る。

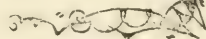
鬼怒川　下總羽生村にある川
川底暗き世の中　殺されて川の底に沈められた累の身の上を云ふ
めいめいてう　冥々鳥か。未詳
業を作りし　悪い行ひをしたこと
かみとは違ふ　神とは違ふ人間。そのかみを上總の上にかける
仇男　與右衛門のこ

鬼怒川昔噂（法印場）

〽鬼怒川と文字に書くさへ鬼怒る、川底暗き世の中の、人の心の愚かなり、めいめいてうの我とわが、業を作りし人柄も、かみとは違ふ下總の、埴生村なる仇男、鎌の刃に濺く母の、累の死靈の怨念は、夫與右衛門に殺されし、恨みを殘す恐ろしさ。一家一門とり寄つて、醫者よ護符よと心の丈けを盡せども、石に灸の仇煙り、結句瞋恚の業火にて、大熱病を苦しませ、見るも不憫の有樣と、皆々額を集めゐる。所の庄屋彦左衛門、見舞がてらにとば口より、詞〽今日は何と變ることもないかの。俺も強う氣の毒に思ふゆゑ、この頃江戸より本尊勸化のために下られた、奇妙院といふお山伏、横曾根村の草堂を旅宿となしてゐらるゝが、その加持祈禱のめいようさ。紙で拭うて取つたやうな奇妙院、これ幸ひと今朝立越え、手を束ね頼みしゆゑ、追付けこれへわせる筈、祈禱の用意。〽と、

と
護符　神佛の加護があると云ふ御符
石に灸の佐蠅　反應の無い喩へ
瞋恚の業火　死靈の怨みが火の如く燃えること
大熱　ひどい熱病
とぼ口　入口のこと
本尊勸化　佛像建立の爲に寄附金を募ること
めいようさ　不思議に效驗があると云

差圖して燈明洗米御酒德利、机の上に並べ立て、行者遲しと待つ所へ、何にも知らぬ奇妙院、柿の衣の皺伸ばし、ギヤアテ〱ハラギヤアテ、ハラソオギヤアテ、ボウジユソワカ、ハンニヤシンニヨと、さも横柄に座に付けば、彥左衞門を初め一座の者、兎角驗修の御法力、よろしく賴み奉ると、口を揃へて敬へば、詞へイヤそこら邊りの安爾宜や、巫女、事觸の手際には、中々行かぬ憑者でも、この法印が一と祈りで、早速に本腹致す。然しながら病人の肌に付けたもの、小袖にても袷にても一枚、また花がら燈明錢が三貫三百三十三文と、祈禱錢といふが十五匁、な、兎角信心と銀目と、澤庵の厭石は重いほど廻りが早い。それとてもこの方から强ひは致さぬ、御勝手次第。へと、珠數ことゞしく爪繰つて、詞へ先づ山伏といふ者は、山に伏すゆゑ山伏といふでも御座らぬ。また山の芋鰻になる功を積むゆゑ、山伏といふでもなし。もと山はさんの聲を以て、山王權現、ナント有難いことか。ま

ふ意
わせる　來られると
云ふこと
ギヤテ云々　經文を
口唱むこと
驗修　修行の積んだ
とおだてる詞
洒落臭く　生意氣に
勿體ぶること
安禰宜　へつぽこ神
主の意
事觸　鹿島明神から
出る豫言をする者
廻りが早い　驗き目
が早いこと

た山荘太夫などの、さんの字なり。ふしは背節、熊野節、この二つを以て山伏といふなり。さるに依つて形は牛角の如く鋭どに見せ、心の味はひは物事のだしになる程美味あり。さて又一と祈り、〽と刺高を押しもんで、頭の眞中より、詞〽じゆく〳〵、じよろり〳〵と汗を流し見知らすれば、どのやうな魔魍魎、惡鬼鬼神の魅れでも、ケロ〳〵とよく致し、近き頃も去る方の、名は申されぬが美しい花嫁子に、狐が六疋一度に憑き、小豆飯を一斗五升と、生豆腐を十八丁、ものゝ美事にしてやられ、まだ其の上に鼠の刺身が食ひたいの、イヤ油揚の濃漿が望みぢやと、あられもないこと言ひ、持扱ひてゐらるゝを、一と祈りでよく致した。その他猫の妄念にて、炬燵の上で伸びをなし、馬の魅れで跳ね歩く、恐らく我等が祈禱にて、ころりころり山椒味噌。〽と、味噌あげ口をきゝ散らし、後先きなしに饒舌りける。やゝあつて言ふやう、詞〽先づ病人見ませう。〽と、苦しむ菊が寢てゐる枕許へ近寄つて、詞〽コレ彥左

山莊太夫　由良の湊の長者、對王安壽の物語に出て來る强惡非道な人物
脊節熊野節　鰹節の名稱
刺高　算盤珠のやうに角の立った珠數
猯　狸の一種
魍魎　人を威す山や川の精
濃漿　濃い味噌汁
あられもない　ありさうもないことの意

殿、娘子の年は幾つぞ。詞〽今年十五になります。詞〽ウム病み付きはな。詞〽ハイ跡の月の十二日。詞〽ウム藥師如來の御緣日、十五は阿陀彌。〽と、懷中の書籍繰りひろげ指を折り、仔細らしき聲色にて、詞〽そも〳〵寶藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀と藥師は御夫婦と云々、卽ちこの病ひは一時も早く婿を呼び入れ、夫婦になりたいと、氣病に少し他に見込みあり。〽と、いふより彥左衛門は尤も顏、法印圖に乘り、詞〽ヽヽ何と〳〵、髮筋ほども違はぬ祈り、加持も藥も同じこと、神佛にもその役々、熱病さまし冷すには、〽京で名高き比叡山、溫まるには熱田の明神、頭の病ひは愛宕權現、若衆の病ひの祈りには、大慈大悲の地藏菩薩、足の病ひは子の權現、かるたの繪の付く祈禱には、麻生の明神釋迦牟尼佛。詞〽別してこの法印が得物に禮物は百疋、何時でも受取る。いで一と祈り。〽と、錫杖を振立て、刺高珠數を手に取りしが、詞〽イヤコレ夜伽の衆、その死靈は何時より見えますの。詞〽子の下刻

猫の妄念　猫の執念

馬の魅れ　馬が取りつくこと

味噌あげ口　自慢口

髪筋程も違はぬ　少しも間違無い譬

麻生の明神　遊ぶに洒落ていふ

錫杖　振れば鳴るやうに、頭に澤山の環が付いてゐる杖

子の下刻　眞夜中の一時

八つ　午前二時

より八つがかる時分、ガタ〳〵と家鳴が致し、北の方より火の玉が舞込み、その火の玉が菊が上へ冠さると、忽ち色も青ざめたる様の形が見えまする。詞〽ヤアそれは恐ろしいことで御座ります。そしてどうしますの。詞〽その容、髪を四方へパット亂し、口は耳の際まで割れ、目は眞鍮の如くに光り、そのまゝ道成寺の蛇の面の如くなるが、スックと立つて睨みます。詞〽ア、氣味の惡い詮索ぢや。もう其の話止しにし給へ〳〵。因果な所へ來合はせた、これは又どうしたものぞ。最早八つには程近し、これが逃げずにゐられうか。〽と、わなわな慄ひ出だせしが、詞〽拙僧は今晩宿に大事の用事あるを、ハッタと失念仕つた。こゝの御祈禱は明日の晩參りませう。何事も春永に〳〵。〽と、何を言ふやら埒もなく、草履片々足にかけ、跡をも見ずして逃げ戻る。風もの凄く吹き落し、物音次第にしん〳〵と、皆々覺えず眠氣づく、轉るやら倒れるやら、前後忘ずる折節に、憂きに恨みを累が死靈、いとすごすごと現れて、エ、恨

家鳴　家が搖れること
宿　旅宿のこと
埓もなく　捉まへどころのないこと
身の毛も悚立つ　身體が總毛だつてふるへ出すこと
浮べる聲　成佛したやうな嬉しげな聲
妄執の絆　斷ちがたき怨みの執念
過去の業　過ぎし世の罪惡の報ひを云ふ

めしや口惜しやと、吐く息火焰の如くにて、見つめて立ちしその形、身の毛も悚立つばかりなり。彥左衛門は男氣の、膝押し捲り肘を張り、詞〽淺ましや累、恨みあらば與右衛門をこそ如何やうにも苦しめず、娘の菊を苦しめる、子は可愛ゆうはないかい。〽と、言へば累は浮べる聲を上げ、それは御不審までもなし、與右衛門についてこの世から、苦しませたくは思へども、彼が心は恐ろしや、生きてゐる身を鬼怒川へ、沈める程の心ゆゑ、死靈の念の悲しさは、取付く便り荒磯の、浪の底なる妄執の、絆に引かされて菊に取付き、せめてもの恨みを言ふも、詞〽過去の業。お前に一つの御無心あり。納戸に置きし古葛籠に、〽魂は冥途へ縮緬の、黑き小袖の裾模樣、紅葉流しのついたるを、母が形見と取出だし、菊に取らせて、詞〽給はるべし。〽身は鬼怒川の柵に、かけしや袖の綻びも、母が手で縫ふ麻絲の、いと淺ましく息絕えし、詞〽藻屑の下の烏貝、かひなくなりし身の上を、菊が口より一遍の念佛申し手向け

なば、他人の千部萬部ぞと、受け喜んで露ばかり、苛責の苦をば免るべし。〽めぐる因果が輪とならば、胸の焔の火の車、引き轟かし恨めしき、與右衛門連れてわが落ちし、奈落の底へ沈むべし。エヽ口惜しや、腹立ちやと、言ふ聲庭の松風と、共に明けゆく山かづら、迷ふ死靈の恨みの蔓、語るも聞くも恐ろしき。

【解説】此の曲は前の『鬼怒川物語』の粉本である『死靈解脱物語』から着想を得て滑稽化したもので、原説は正保四年八月十二日下總國岡田郡羽生村の百姓與右衛門が顔の醜い累の許へ慾徳づくで入聟になり、難癖をつけて累を鬼怒川から突き落して殺して終ふと、後妻に生きた娘のお菊に累の怨靈が憑き、遂に祐天上人の教化の力で解脱するといふ筋である。是れを文化十二年八月江戸市村座で『累淵扨其後』といふ外題で鶴屋南北が尾上松緑（前名松助）の爲めに書卸し、百萬遍の場で得意の幽靈を見せたが、其れを更に洒落めかして新内化したのが此曲で、祐天上人の代りに法印を出し、更に其法印が恐れを抱いて逃げ出す邊は、新内氣分を遺憾なく發揮したものである。

御無心　御依頼

柵　水を堰き止めるために竹や木で造つたもの

千部萬部　經文の數をいふ

苛責　地獄の苛酷な責苦

奈落　地獄のこと

恨みの蔓　恨みが蔓のやうに絡んで離れないこと

浮世色餅　世の中は色氣で持つてゐるといふことにかけていふ

草餅　蓬の葉を搗き交ぜた餅

粟の餅　粟で拵へた餅

せはしない　いそがしいと云ふこと

草津の里　近江に在り。東海道五十三次の一とつ

鐵砲の玉行抜け　鐵砲の玉でも何んで

名物姥ケ餅（姥ケ餅）

〽浮世色餅さて草餅や、粟の餅こそ杵の音、ヤレせはしない。搗いて丸めし稼業は、〽草津の里に名も高き、姥ケ餅屋の繁昌は、商賣柄とてあへさかす、群衆は餅も千切られず、上下の旅人口々に、詞〽サア／＼休みやれ、／＼。東海道名物姥ケ餅、一つ食うて行くまいか。詞〽オ、よかろ／＼。イヤナニおばよ、餅をくんない。ナント飛んだ良エ餅だ、ノウ錢助。詞〽東海道一番の餅だから、良くなくつちや叶はねえ。詞〽オヤなに可内、手前は餅好きか。詞〽イヤモ餅でも酒でも鎌倉海道、鐵砲の玉行抜けといふ咽喉の工合だ、ハヽヽヽヽ。詞〽ナント錢助、あれはさて、やれコリヤどつこい、途方途徹もない良え餅だ。詞〽時にあれアノ姥を見い。あれはの、冥途の道の名代者、三途川の姥といふ和郎であつたが、近年あつちも不景氣で、今此の餅屋の奉公人、年に似合はぬ赤

も這人つて拔ける
といふ調法な譬
途方途徹もない　今
の流行語のとても
といふに同じ
あつちも不景氣　地
獄も不景氣の意
どえらう使はるゝ
酷使されること
逐電　出奔すること
赤前垂の品物　赤前
垂で品を扮る女
往來　往來の旅人の
略
梨の礫　便りのない

前垂、これまで人を飼いだ代り、今またどえらう使はるゝ。へこれも前世の約束か。と、面々土産に竹の皮、われも〳〵と珍らしがり、皆々買うて歸りゆく。あと見送りてお姥が呟き。詞へエ、何ぢやたう。人の心も知らず面白さうに、俺をば嬲てくさる、ぞめきくさる。とは言ふものゝ嘘でもなし。冥途の閻王の關を立退いて、私は此の家の奉公人、俺が育てた閻魔樣、若氣の至りと言ひながら、モ難有い地獄館を逐電なし、今この娑婆に在する由。へモ何卒巡り逢はんため、赤前垂の品物と、往來にお臀を抓られても、尻を擦つて暮らすのを、知らぬか聞かぬか閻魔樣、何處に居るやら飛んだやら、梨の礫も恍惚と、烟草のんでも烟管より、咽喉へ通らぬ薄煙り、人の來ぬ間に足伸ばし、案じ煩ふ折からに、へ箱根八里は馬でも越すにナアヨ、間がナ、遠けりやナアヨ、越すに越されぬナ大井川ぢやよナアエ。酒のナさの字はナアヨ、詞へエ、忌々しい畜生めだ。一日に一升の豆べエ食やがつて、荷を付けると面脹らしやあがつ

譬

箱根八里　馬子のうたふ追分節

ヨンボラ　よろぼひ歩くを罵る詞

馬だ〱　馬だ〱と吐鳴つて途を明けさせるをいふ

驛路の鈴　馬の頸に付けた鈴の音

じや〱馬　癇の高いあばれ馬

仁田山奴　半可通をいふ

糟野郎　やくざ者を

て、百ばかりの親爺が歩むやうに、ヨンボラ〱と。確かりと歩みやがれ。ハイ〱頼みます、馬だ〱。ヒン〱〱〱、〽驛路の鈴の賑はしく、追立て來たるじや〱馬は、この海道の仁田山奴、餅屋が門に馬曳きつけ、お姥をキツと見るよりも、駈寄つてしがみつき、詞〽コレ姥、逢ひたかつた。〽逢ひたかつたと泣く涙、どうつけなうて哀れなり。詞〽コレ姥、逢ひたうて〱、捜してばつかりゐたわいやい。〽と、甘えかゝれば振放し、詞〽ヤイこゝな糟野郎め。おのれが姥とはほてくろしい何の痴言、馬方づれに縁はない。〽と、突倒せばぶらさがり、詞〽エ、何のない事があろぞいやい。なんのない事があろぞいやい。俺はノ、冥途の主、〽閻魔大王。詞〽閻大ぢや〱、閻大ぢやわやい。詞〽やゝやゝ、ナニ。〽わしが育てた和子かいの。コレなう〱と取付いて、ためつ、すがめつ眺め入る。詞〽オヽ合點の行かぬは理。朕は冥途をしくじつて、詮方盡きて娑婆住居、元服もして髯も剃り、糟味噌を顏に塗つ

て日に干し付け、干瓢の八藏と改名し、やう〳〵大津にコレマ足を留め、へ八萬地獄の住居さへ、無頼漢ぢやと笑はれて、これが閻魔の有樣か。身にふりかゝる火の車、餓鬼や亡者を責めた罰、ほんに鐘つく劍の山、針の山、血の池へ陥つたら水がない。オヤベリ〳〵〳〵〳〵破れし紙の罰。詞へコレ姥、俺はノ、どえらう難儀をしたわいなう。詞へソレ〳〵見やしやれ、良藥は口に苦しと、年月この乳母が言うたを聞き入れず、今思ひ知らしやつたか。御先祖代々、何時からぬ地獄の支配、こなさんが去年七月十六日、釜の蓋の開いたその朝からのこなたの家出。扨こそ鬼ども手分けして、へ奈落、血の池或は叫喚、大焦熱、阿鼻、修羅、畜生、劍の山、一百三十六地獄、尋ね探せど、詞へマ、知れぬゆゑ、暗闇地獄のさぐり谷、燈心持つて竹の根を、掘つてゐた油屋の娘に、こなさんが惚れさしやつての、相傳の冠を賣拂ひ、飯椀に紐つけて、冠の代りに頭にきざらして御座つたを、コレ汁椀ぢやと思うてか。近年は人間

罵る詞
ほてくろし　太々しいに同じ
元服　成人して髮や形を改むること
大津　近江の驛次
良藥は口に苦し　諫言しても良い詞は耳に這入らぬ譬
釜の蓋の開た　盆の十六日のこと
奈落　血の池以下劍の山まで地獄の名所
燈心　燈油に浸して

あかりをつける物
相傳の冠　代々傳はつた金の冠をいふ
さざらし　冠ること
汁椀ぢや　知るまいの洒落
德本上人　文化年間紀州から江戸へ下つた淨土宗の名僧
小田原の今弘法　最乘寺の道了上人
俱生神　晝夜を分たず善惡の業を記錄する男神と女神

も後生を願ひ、信心に凝固まつてゐるその中へ、德本上人ぢやの、小田原の今弘法なぞが出て來ての、朝も晩も念佛ばつかり。〽南無阿だ〱、南無阿陀だん佛なまいだ。詞〽など丶皆極樂へ極樂へと引込み、そこで地獄はどえらう暇になつての、地獄は熱鐵かびる、火の車には蜘蛛が巣を張る、劍の山には草が生える、血の池は旱魃で、この夏は雨乞ばつかりしてゐるわいの。番頭の俱生神は、帳筆やめて屈託顏、〽業の秤は看板ばかり、かけて見る人ないゆゑに、淨玻璃の鏡は曇り、地獄の衰微とは、詞〽マ、妄な事ぢやぞや。地獄の衰微を直ほさつしやれ、あんまり地獄が困窮するゆゑ、青鬼の彥作は、何うもしやうがない故に、人形屋の看板に雇はれて行く。黑鬼の七兵衞は、鍾馗樣のお傳馬に取られ。されども、赤鬼の太郎作は忠義者、獨り殘つてあつちこつちとするうちに、虎の皮の褌が破れての、どうも體裁が惡い。近年は虎の皮がどえらう高うなつての、どうも仕樣がない。時に幸ひと山下の黑燒屋に釣つ

帳筆　閻魔帳へ書入れる筆
業の秤　罪の輕重をかけてみる秤
淨玻璃の鏡　亡者の生前の所業が其儘に映出さるゝ鏡
山下の黑燒屋　上野廣小路の黑燒屋
十王衆　冥府には閻魔大王の下に十人の王がある
虚假猿　山猿に等しいやうな人間
玉體　閻魔を尊稱し

てあつた、狸の皮を盗んで來て、それでどうやら、〽胡麻化せしぞや。とは言ふもの丶愛しやな、ほんに世が世であるならば、一寸出るにも十王衆、五色の鬼を供に連れ、姥も衣裳を着飾りて、お乳よ乳人と言はれうに、思ひもよらぬ娑婆住居、その美しい黑髪を、このやうに剃り毀ち、手足は娑婆の虚假猿ぢや。ほんに怪體な面付と、またさめ〲と泣きければ、閻魔は涙すゝり上げ、詞〽コレ姥、何にも言はぬ、詫つた〲。この上は其方へ言譯、矢橋の川へ飛込んでしまう。〽と、立上る。姥は驚き、〽コレ和子待たしやれいなう。詞〽イヤ〲死ぬる〲。詞〽コレ待たしやれいなう。詞〽放せ〲。詞〽これはシタリ、〽その荒くれない玉體を、なん〲たる河中へ、どうマア獨り陥められう。〽さてしもけふは極月、詞〽寒の入、祝うて進ぜる物がある。君にもそれをば食ひ給へ。物憂き世界の空腹を、免れさせ給へや。〽と、在合や戸棚の小豆餅、拵らへかゝれば嬉しがり、詞〽コレ姥、アレ〲烏の親が子に何

ていふ
極月　十二月のこと
鳥の親　先代萩の千松の詞「雀の親」をもぢらした洒落
ドッチョ聲　胴間聲
一膳　一人前のこと
たんのう　滿足すること
餅が高い　餅の代が高價の意
冥途　冥途の吉左右のよい便
見る目嗅ぐ鼻　共に冥途の探偵のやう

やら食はしをる。私もあのやうに早やう餅が食ひたい。〽と、鳥を羨む御心を、オヽお道理ぢやと言ひたさを、紛らす聲も震はれて、詞〽コレ和子、いつぞや冥途で敎へた歌、それを歌うて待たしやれ。〽と、言はれて閻魔はドッチョ聲。〽こうちの裏の醫者の軒に〳〵、犬めが三匹子を生んで、〳〵、一匹の斑めが言ふ事にや〳〵、詞〽コレ姥餅はまだかや。詞〽オヽ忙しない、今拵らへてをりまする。シテ和子には幾つほどお上りなされまする。詞〽コレ姥。〽七つ八つではまだ足らぬ〳〵。詞〽テモたんとお上り遊ばすな。コレ〳〵和子、こゝな家は十が一膳なれど、自からが最負ぶりで、十五づゝ入れて上げますぞえ。サヽ一膳でたんのう遊ばせ〳〵。詞〽イヤ〳〵コレ姥。〽一膳喰べてもまだ食へる、まだ食へる。詞〽おやお前さんはマア滅法界に澤山お上り遊ばすな。あんまり澤山お上り遊ばすと、腹が裂けるぞえ。サヽ砂糖も澤山かけてあるぞえ。サヽ和子お上り遊ばせ〳〵。詞〽コレ姥、此の餅食ふのかや。詞〽シ

な役人
左平次で　口を出すこと
四天王寺　大阪天王寺にある名刹
一宇　一つの御堂
合邦ケ辻　攝津住吉に近い地

イ高い、高い。詞へコレ姥、高いとは餅が高いかや。詞へいゝや聲が高い。障子の内には此の家の旦那、その旦那に知られぬ中、少しも早う冥途の吉左右。へ一緒にお供と言ふ所へ、見る目、嗅ぐ鼻現れ出で、ヤアヤア大王、冥途の歸參は叶はねども、地藏菩薩の左平次で、佛法最初の靈地なる、荒陵山四天王寺の西、邪魔にならぬ所に一宇を建て、閻魔の古跡を殘されよ。コレコレ〳〵〳〵〳〵、コレハさて、アレハさて、ドッコイソッコイ見る目どの、それは此方の思ふ儘、その後はこの嗅ぐ鼻、三途川の姥ことは、この草津にて餅を商ひ、長き渡世を致されよ。と、殘る方なき御差配。今に殘りて天王寺、合邦ケ辻閻魔堂、江州矢橋の姥ケ餅、謂はれは斯くとぞ知られける。

【解說】此の曲は閻魔の乳母が草津名物姥が餅の婢女に雇はれてゐるところへ、これも地獄が不景氣で出奔した閻魔が馬士に姿を變へて馬を牽いて來て、解逅し、姥が餅を御馳走になつてゐると、見る目、嗅ぐ鼻が現はれて、天王

寺の合邦ケ辻に閻魔堂が建立されたと知らせる筋の滑稽ものである。作曲の年代は詳かで無いが、文句の中に德本上人云々の當て込みが有るところから推定すると、家慶將軍が歸依して淨土宗が盛んであつた文政年間の作曲で、作者は魯中か宮古太夫であらうと思はれる。

關取千兩幟（千兩幟）

稻川内の段

へ出でゝゆく、跡に稻川双手を組み、思案に暮れて居たりしが、詞へ段段日限りの切れた後金、親方が催促するも、九平太めが皆仕業。兎角鐵ケ嶽を抱込んで、彼方の身受を延ばして貰ふより外はない。と言うても一筋繩では行かぬ奴、抱込む仕やうは。ウム、最前鐵ケ嶽が言葉の端、太夫が身受は俺次第、魚心あれば水心あり、ア、こりや、今日の相撲を振つて遣らざなるまいわいのウ。それ〱、あれと俺とが立合ふこそ幸ひ、美しう振つてやり、彼奴に勝を讓つて置いて、その上で退引させず、賴むが近道上分別。へとは言へ名取の鐵ケ嶽、詞へどう魂膽してなりとも、投殺さにやならぬ贖の相撲、言はゞ一生懸命の、大事の相撲を金ゆ

出てゆく　鐵ケ嶽が土俵で爭はうと言ひ捨てゝ歸つて行くことをいふ

後金　太夫を身請の手附に渡した後の殘り金

親方　新町の大阪屋といふ遊女屋の主人

九平太　相手方の侍

鐵ケ嶽　稻川の相手で九平太に味方の力士

太夫　錦木太夫

魚心あれば水心　先方が好意を表すれば此方も好意を表するの譬

相撲を振つて　相撲にワザと負ける事

名取　名代の意

魂膽　工風を凝らすこと

摩利支天　力士が信仰する神。武士の守本尊のやうになつてゐる

相撲冥加　角力運をいふ

ゐに、〽振つてやる稲川が、心の中の切なさ汚なさ。摩利支天にも見放され、相撲冥加に盡きたかと、(思ひ廻せば廻すほど、空恐ろしさ口惜しさ)、思はず拳を握りつめ、身を震はして男泣き。始終立聞く女房が、涙かくして、詞〽オ、こちの人とした事が、先刻から飯こしらへて待つてゐるのに、此處で上るか、奥へ据えやうか。〽と、何氣なければ素知らぬ顔。詞〽イヤモ、飯なら食ひたうない。ほんに相撲から呼びに來た。ドレ行て來う。〽と、立上がれば、詞〽そんならもう行かしやんすか。コレ稲川殿、ソレ髪が强う亂れてあるぞえ。人中へ見苦しい、結うて上げう。〽と取出す櫛箱。詞〽イヤ／＼結うてゐたら暇がいる、ツイ撫で付けて置てたも。詞〽オ、お前もマアこんな髪して行かしやんした事はないが、イツソの事何もかも言うて聞かして下さんせぬか。詞〽ヤ言へとはそりや何を。詞〽さいなア、お前の心のナア、それ縺れ髪、撫で付けて置かうより、イツソさつぱり、〽言はしやんせぬかと。詞〽言ふこ

据えやう　膳を据えやうの略
櫛箱　櫛を入れて置く箱
縺れ髮　髮の毛が亂れてゐる事。それを胸の亂れてゐることにかける
鬢のほつれ　鬢の毛がはら〳〵下がつてゐること
夫の胸　苦しい胸の中
氣色　氣分に同じ
あんだら　阿房とい

といなあ。詞〽イヤ言ふまい〳〵、何ぼ私に言へと云やつても、多寡が女の手業、言ふたら大方惚れが出やう、ツイ撫で付けて置いてたも。〽と、かたへに直れば女房も、押しては言はぬ縺れ髮、鬢のほつれを撫で付ける、櫛のむねより夫の胸、寫して見たき鏡立。詞〽サアよいか、見やしやんせ。〽と、向ふ鏡の蓋取つて、寫せば寫る顏と顏。詞〽申し稻川殿。色も青ざめそしてまア、口の中も潤んで、どうやら氣色の惡さうな顏付き、もう今日の相撲へは斷り言うて行かしやんすな。詞〽何をあんだら盡すぞい。何時はともあれ今日の相撲は、鐵ケ嶽にこの稻川、初日の出ぬ先から、町中が待つてゐる晴の出合、何でも鐵ケ嶽めを、土俵の砂へ埋まにや置かぬ。詞〽イヤ〳〵そりや嘘ぢや。今日の相撲は、鐵ケ嶽に振つてやるお前の心。〽と、言ふ口押へて、詞〽コリヤ聲が高い。スリヤさつきにからの樣子殘らず、詞〽アイ一間で聞いて居りました。僅かな金に手詰つて、難儀さしやんすが私や悲しい。イツソこの譯親仁樣へ。

ふ意味

砂へ埋めにや　投げて負かすこと

人にたゝかれ　前段で鐵ケ嶽に打擲される事をいふ

禮三様　稻川の最負客である若旦那

水の出端　若い意氣の潑剌としてゐる譬

命生害　自殺する事

千日に苅つた萱　一日で焼いてしまふやうに折角の骨折

詞へたはけめ。それ言ふ程ならこのやうに、人にたゝかれ踏まれはせぬわヤイ。昔氣質の親仁様、打明けて物言ふと、禮三様へ意見の何のとやかましい。若いお人の水の出端、もし命生害になつた時は、千日に苅つた萱ぢやわやい。アノ危な事でさへなくば、工面の仕やうもあらうに、僅か二百兩や三百兩の金ゆゑに、大事の相撲を振つてやらざなるまいと思へば、腑甲斐ないやら口惜しいやらで、俺やこの胸が裂けるやうなわヤイ。詞へオヽ、道理で御座んす、道理ぢや／＼。へさりながら、それ程の大事のこと、連れ添ふ女房に隠さんす、お前の心が聞えぬぞや。相撲取を夫に持てば、江戸長崎や國々へ、行かしやんしたその跡の、留守は尚更女氣の、獨りくよ／＼物案じ、惚れた女子はありやせぬか、悋氣な心は出やせぬかと、思ひ過しの胸の中、推量して取縋り、恨み涙に時移る。早や追々の呼使ひ、詞へ申し土俵入でございます、早うおいでなされませ。チヤツト／＼。へに稻川が、悄然々々として立上れば、詞へも

うお前は行かしやんすか。詞へオヽ鐵ケ嶽を抱込んで、工面の通り行きや格別。詞へもしも行かねば、詞へ絶體絶命、これが暇乞にならうも知れぬ。さらば。へとばかり一聲を、跡に殘して出でゝゆく。詞へコレまあ待つて稻川殿。タツタ一言云ひたいこと。へと、見れどもあとは雲霞。詞へコリヤかうしては居られぬ所、夫の命に關はる勝負。へ私もこれから相撲場へと、帶引しめて夫の跡を、慕うてこそは。

【解説】此の曲は、明和四年八月大阪竹本座の操淨瑠璃に、近松半二、三好松洛、竹本三郎兵衛等が合作で書卸し、同六年江戸森田座で、歌舞伎に上演した義太夫物を新内に直したのである。上の卷は贔負の若旦那禮三が馴染の太夫を落籍けする金に窮して困つてゐるのを、稻川が知つて其の才覺を引受けたが、禮三の競爭相手に市原九平太と云ふ惡い侍があつて、其の侍方には鐵ケ嶽が付いてゐるので、丁度鐵ケ嶽と自分が取組む相撲割なのを幸ひ、故意と鐵ケ嶽に負けてやり、それを恩に着せて鐵ケ嶽を味方に付けやうと思案を廻らし、悄然と場所入をするといふ筋で、女房のクドキの個處などが聽かせどころである。

が無駄になること
江戸長崎　遠方へ巡業に行く例
呼び使ひ　角力場からの使
土俵入　力士が大勢中入前に化粧廻を締めて土俵に上り圓陣を作つて祝ふこと
工面の通り　計畫通りのこと
暇乞　永の別れの意
雲霞　姿の見えない形容

關取千兩幟（千兩幟）

相撲場の段

〽行く空に、響く櫓のとうからと、打ちしまうたる太鼓より、鳴渡つたる稲川と、鐵ケ嶽との角力割、表にベツタリ貼紙も、張裂く木戸口押合ひ、へし合ひ、早や土俵入事終り、相撲の數々取盡し、中入前ぞ勇ましき。〽東西々々、道頓堀宗右衛門町北野屋七兵衛様急用でござります。チヤツト木戸までおいでなされませ。〽又も呼出す力士の名乘り、入代へ〳〵勝負も、今一番と夕日につれて、詞〽西稲川々々、東鐵ケ嶽々々々々。〽と、名乘り上げられ四股踏鳴らす鐵ケ嶽。こなたは尚もしよげ鳴の、悄然々々上る土俵の上、スハ千番に一番の、相撲と力む幾萬人、靜まり返つて見物す。詞〽片や稲川々々、こなた鐵ケ嶽々々々々。急くまい急く

とうから　櫓太鼓の鼕々と鳴る音

打ちしまうた　太鼓を打ち揚げたこと

角力割　取組のビラ

北野屋七兵衛　女郎を周旋する家の主人

チヤツト　早くと云ふ意

四股踏む　片足を高く揚げて廣く張り力をこめて勢ひ強く地を踏むこと

しよげ鳥　悄然とし

てゐることを鳥に見立てゝいふ
千番に一番　大事の勝負をいふ
東西〱　見物を制する詞
諸差　兩方の手を下手に差しこむこと
ほぐし　解くこと
どよみ　歡呼の聲の轟きひゞくこと
打出し　閉場太鼓を打ち出すこと
もやくや　煩悶
味なこと　不思議な

まい、ヤツ。〽と、引いたる行司の團扇、直ぐに付入る鐵ヶ嶽、ズット兩腕差込ます、元より覺悟の稻川が、既に危うく見えたる所へ、詞〽東西々々、進上金子二百兩、稻川樣ひいきより。〽と、聞くよりグッと稻川が、初めの氣色何處へやら、鐵ヶ嶽が諸差を、ほぐして土俵へ引くりかへし、力士の如く突立てば、詞〽よいや。詞〽よいや。よや〱〱。〽と、數萬人、一度に立つて手を叩き、どよみを造る鬨作る、櫓太鼓も打出しの、表に人の山なせり。次第〱次第に散る人の、中に紛れて息せきと、駕籠をかゝせて北野屋七兵衛、來かゝる向ふへ稻川が、胸のもやくやさつぱりと、我が家へ歸る戻り足。詞〽ヨウ〱關取出來ました。〽と、跡から尾いて來る人に、見付けられじと駕籠片寄せ、七兵衛が素知らぬ顏、詞〽ヨウ〱關取、さて〱今日は強いお手柄。詞〽オヽ七兵衛殿見てであつたか。詞〽見た段か〱、どうやら取口は惡かつたが、引繰返したその強さ。詞〽イヤも今日の相撲はチト譯があつて、強う取難か

こと
張合　勢ひがつく事
纏頭　祝儀に與れた
　金のこと
垂れ　駕に垂れてゐ
　る簾をいふ
勤めに行く　遊女に
　身を沈めて苦しい
　勤めに赴くこと
まめ　壯健の意
お內儀　お神さんの
　こと
內は歎き　駕の中で
　歎き悲しむをいふ
入相　日の暮方

つたが、味な事が張合になつての。詞へ味な事とは二百兩の纏頭か。その纏頭やつた旦那殿が、幸ひこゝにぢや。逢うて禮を言はしやれ。へと、垂れを上ぐれば、詞へヤツ、わりや女房。詞へ稻川殿。へわしや勤めに行くわいな。詞へ隨分まめでゐて下さんせいなあ。詞へそんなら今の二百兩は。詞へコレ關取、お內儀の勤め奉公、心ざしの二百兩。詞へ女房ども、何にも言はぬ忝けない。詞へサア〳〵駕籠の衆遣つて。へと、北野屋が、氣轉利かせて駕籠の垂れ、內は歎きに暮近く、入相告ぐる鐘もろとも、別れ別れに行く末は。

【解說】此の曲は、前の稻川內の後を承けた續きで、稻川の女房が夫の名譽のために、身を賣つて二百金を調達し、贔負よりとして稻川に贈ると、折ふし相撲場では稻川と鐵ケ嶽の取組最中で、危く稻川が土俵を割らうとしてゐる處なので、此の新たな聲援を耳にすると、急に攻守の態度を一變して、逆に鐵ケ嶽を投倒すといふ筋。結末に稻川が女房の駕に逢つて別れを惜しむ個所は捨て難い情景である。

言の葉草の露深さ　菅原道眞が露の歌を詠んだといふ露天神が近所にあるのでいふ

木枯し　冬吹く風

かせ世帶　生活の豐かで無いことを云ふ

樂屋　歌舞伎の樂屋

とりなり　風姿

伏見常磐　子供の手を引いてゐるので伏見の雪に行迷ふ常磐御前に見立てた詞

千日寺名殘鐘（三勝半七）

三勝緣切の段

〽この廣い大阪に、住む所さへ長町と、言の葉草の露深き、裏の木枯し吹きそらす、美濃屋と書きし日印の、暖簾の文字は太けれど、細き烟りのかせ世帶、浮名にふれし三勝が、娘お通が手を引いて、樂屋戻りのとりなりも、伏見常磐に異らず。親平左衛門立出でゝ、詞〽オヽ、三勝戻りやつたか。イヤモ今度そなたが座元の芝居、昔の靜御前の法樂の舞ぢやと大評判、それで昨日も言うたに、何故娘お通を連れて行きやるぞ。肝心の太夫に子があると言うては、見物の見込がない。コリヤ坊よ、明日から伴いて行くなよ。詞〽俺やそれでも母樣が留守なら寂しい。詞〽あれ聞いて下さんせ。なんぼでも聞くこつちや御座んせぬ。詞〽イヤ三勝、

座元　座頭の意

法樂の舞　靜御前が鎌倉八幡で頼朝の爲めに奏した舞

なんぼでも　何う言ひ聞かせても の意

しをらしい　優しい情のあると云ふ意

女中　女の方と云ふ意

つぎ〳〵　袖無し羽織のこと

おこして　寄越して呉れたの意

間違うて　行違つて

このお通が着る物は何時拵へて着しやつたぞ。詞〽さればいなあ、聞かしやんせ。世にはしをらしいお方もあるもの。十七八な女中が、此の門を通つて、此の子を見ては可愛がり、人形遣つたりあやしたり、此のつぎ〳〵も後の月、おこしてで御座んした。詞〽ハテなウそれはしをらしい。何故呼込んで禮いやらぬ。詞〽さあ私もさう思うてはゐれど、留守のうちばつかり、間違うて逢ひませぬ。したがこの二十日ほど、根から見えぬげに御座んす。それで此の子が、伯母さんがお出でんと言うて、毎日門に待つてゐます。詞〽ハヽヽ、坊めが又人形してやらうでの悍い。〽奴ぢやと打笑ふ。詞〽イヤ父さん、半七様は見えぬかえ。詞〽イヤ沙汰はなかつた。詞〽又この半七様でもあるぞ。今日見えいでは濟まぬ事、よもや如才はあるまいが、内の首尾でも惡いか。〽と、心に懸る思ひ草、物案じの體見るよりも、詞〽ハテ用があるなら見えるであらう、その間に俺も一休み、坊主も來い。〽と、手を引いて、一間の内へ入る跡へ、

の意
根から　些つとも
してやらう　貰はう
と思つての意
悍い　油斷のならぬ
の意
踊子　今でいふ藝子
で、當時の女歌舞
伎に出演する女を
指していふ
草で育つた　田舍の
草深い中で育つた
と云ふ意
梅の色よい「浪花津
に咲くやこの花」

四十路餘りの女房が、用ありさうに表口の、暖簾の家名に小頷き、詞〽はいチト御免なりませ。〽と、ずつと入り、詞〽こなさんが踊子の三勝殿といふのか。ツイ逢うた事はなけれど、五年この方聞き及んだ三勝殿、私や大和の五條、茜屋の半七が母で御座る。詞〽エヽ。〽と、吃驚、詞〽あのそれは。〽と、言はんとせしが氣味惡く、ウロ／＼するを見て取つて、詞〽イヤコレ三勝殿、もしや此方を恨みに來たかと思はしやらうが、更々さうした心はない。〽草で育つた大和の女子も、梅の色よい浪花の女郎も、色に迷ふは、詞〽同じこと。私やこなさんに禮言ひに來ました。あの見る影もない半七に絆されて、何ぼの出世も目に懸けず、可愛がつて下さると、陰で聞いてどの母でも、嬉しがるまいやうはない。殊にお通といふ子まで儲けた三勝殿、健めな顏見て嬉しい。〽と、餘念なければ氣も落着き、詞〽半七樣の母御さんとて、サッテも強い御するほう。さう御存じの上からは、何を隱さんやうもなく、〽眞實ほんの母

の和歌から來て、梅は浪花の表象である
何ぼの出世　幾何も出來る出世
御するはう　褒め過ぎたお言葉の意
君傾城　遊女の意
歷々　身分のいゝ人を指していふ
無心　お賴みに同じ
流れの仇夢　遊女と客がほんの一夜のはかない契りでさへの意

様に、逢うた心と打解けて、底意渚の海士小舟、漕ぎ終せたる如くなり。詞へイヤハテ、世の中に、君傾城を歷々が、嫁にするもある習ひ。ア、互に好いた同士、半七と夫婦にして、睦じい顏見るならば、老行く末の樂しみと、明暮思うてゐまする。へと、聞いて飛立つ嬉しさに、手を合すればその手を取り、ア、思ふこと儘ならぬこそ浮世なれ。詞へ私やこなさんに無心があつて來ました。へと、言葉のうちより、詞へこれは如何な。賴むの無心のとは他人向き、どのやうな仰せでも、叛かぬが嫁の役。へと、言ふ顏見るより涙ぐみ、詞へ近頃無心な事ながら、半七と緣を切つて下され。詞へエヽ。へと、吃驚、詞へあの半七樣とかえ。詞へオ、如何にも。詞へイヽエ〳〵そりやならぬ、私しや厭ぢや。へ一夜流れの仇夢も、別れは惜しき人心、まして馴初め拔ら五年、子までなしたる半七樣、炎の中に暮さうが、あなたを退いて片時も、浮世の日影が見られうか。酷い、情ない、胴慾な、別れと言ふ字は聞いてさへ、胸に沁々

炎の中　艱い苦しいことの譬にいふ
祝言の日　婚禮の日
得心せず　承知しないこと
素守　貞守とも書いて空閨を守る意
取戻す　娘を取戻すこと
氣のかた患ひ　神經衰弱のやうな病
ひのく　地名か
辛抱ぢや　艱い處ぢやといふ意
了簡　思案して下さ

悲しいと、恨み涙に暮れゐたる。詞〽オヽ悲しうなうて何とせう。〽さりながら、此様が云ふ一通り、聞いて下され三勝殿。詞〽アノ半七には、お園というて許嫁の女房がある。呼び取つてもう三年、祝言の日を極めても、此方と深い半七、いかな事得心せず。〽同じ内に住みながら、遂に一言物いはず、詞〽親爺殿の腹立ち無理でもなし。嫁の親の方からは、大事な娘を素守にして、癲狂ひする半七、婿には取らぬ取戻すと、やつさもつさの一悶中。〽それを苦に病み、お園はとうから氣のかた患ひ。詞〽聞いてもゐてでござらうが、二月あとから、〽此ひのくに出養生。日増に重る病の床、見るも悲しさ、いぢらしさ。せめて一日夫婦にして、此世の念を晴らして遣りたさ。義理と情に詮方なく、子まで有る二人が仲を、縁切りに來た此様が、心の中を推量して、詞〽思ひ切つて見て下され。可愛がらしやる半七を、不孝者といはさうと、孝行者と云はさうと、コレ此邊が辛抱ぢや。〽了簡をして下されと、語るも涙、聞く涙、

れの意
つど／＼　つく／＼に同じ
氷の劔　苦しい譬
我と我身に暇乞　死を決したの意
ついした譯　ほんの戯れの交り
お二人樣　兩親を指していふ
あかぬ別れ　厭きないで義理に迫つて別れること
思ひの修羅　思ひが亂れて苦しむこと

共に思ひの淵ならん。三勝はうろ／＼と、退くも苦しき稻舟の、否とも云はず胸迫り、涙に咽び居たりしが、つど／＼母の詞をば、聞くに思ひの結ぼられ、解けぬ氷の劍をば、呑込むつらさ、せつなさを、堪へ涙の玉の緒も、切らねばならぬ縁ならば、逢うての上でとやせんと、心一つに責められて、何とか胸を極めけん、我と我身に暇乞ひ、咽ぶ涙の顏を上げ、詞へ申しお袋樣、ふつつり思ひ切りました。詞へヤアすりやアノ半七と、縁を切つて下さるか。へと、問はれて何も泣じやくり、何は兎もあれ私が退けば、半七樣の御名も出ぬといふ事は、よう知りぬいて居りますれど、ついした譯の仲でなし、五年此方馴れなじみ、子まで設けて何時しかに、去年より今年は深うなり、今日は昨日に增す思ひ、神や佛の御意見でも、思ひ切るせのあらばこそ、親にも子にも我身にも、代へていとしき殿御をば、不孝といはせしお園樣の己が身や、お二人樣のお嘆きが、あなたのお身にかゝるのが、私や悲しうてならぬ故、あかぬ

阿鼻焦熱　地獄で亡者が苦しむ所
八寒地獄　氷を以て苦しむる八種の地獄
分く方もなき　譯が分らなくなつた意
退いて下さる佛　三勝の承知した溫しい心を佛に譬ていふ
此鬼　鬼のやうになつて緣切を迫つたのでいふ
しどろもどろ　心の

別れをいたします。思ひ切らうと思ふ程、戀の罪咎思ひの修羅、胸の煙は阿鼻焦熱、八寒地獄の淚の面、今身の上に責められて、分く方もなき三勝が、心の中の切なさを、推量してたべお袋様、私や義理づめになつたかと、目元うろ〳〵髮亂れ、ワツと許りの喞ち泣、目も當てられぬ風情なり。母も淚に暮れながら、詞〽オ、道理〳〵。退いて下さる佛より、〽退かしに來た此鬼が、心の中の苦しさを、推量して下され。〽と、互に顏を見合はせて、わつと泣入る計りなり。詞〽ア、何時まで云うても同じこと、モウ去にまする。〽半七とこそ緣は切れ、孫のお通もある事なりや、心はやつぱり嫁姑、患はぬ様にして下され。禮とては云はねども、今から朝晩此母が、此方の壽命を祈ります。ア、苦しみの世界やと、行かんとするを、詞〽ア、申し、おつうに一寸逢うてやつて下さりませ。〽爺様や婆様の所へは何時行く事でござるやと、逢ひたがつた幼心、詞〽せめてツイ顏なりと。詞〽ア、イヤ〳〵逢ひますまい。緣切らして

悩亂と足元の亂るゝことをかけていふ

去ぬるさへ悲しいに、〳〵孫の顔を見るならば、尚悲しうてなりますまい。惨い、強い鬼婆ぢやと、云うて聞かして下されと、互の涙繰り返し、見送る涙、行く涙、しどろもどろの憂き別れ、泣き別れてぞ、立歸る。

【解説】 大和五條生れの茜屋半七は、商用で大阪へ上つた時、不圖した縁で長町の踊子美濃屋三勝と馴染み、お通といふ女の兒まで儲けたが、半七にはお園といふ許嫁の女があるので、三勝を迎へることが出來ず、半七は自暴自棄になつて放蕩するので、半七の母が心配して、密かに三勝の許を訪れて、泣く泣く緣を切つて呉れと賴むのが此曲の筋である。元祿八年十二月七日大阪千日寺にあつて此筋に似寄つた心中を、同十五年に道頓堀の岩井半四郎座で脚色して上演し、其後寶永五年豊竹座で紀海音が改作して『蓑屋三勝二十五回忌』といふ外題で上演した義太夫物を、更に新内に直したもので、今日義太夫で流行してゐる『艶容女舞衣』は安永元年十二月に出きたもので此の『名殘鐘』よりは新らしい淨瑠璃である。

宮本豐前掾

宮本節の一派を開く

宮本節の歴史

一

宮本節は、宮本豐前掾によつて創始された江戸淨瑠璃である。

豐前掾は本名を福田彈司といひ、初名を宮古路小文字太夫と稱して、豐後節の始祖宮古路豐後掾の門人であつたが、元文五年師の豐後掾が病歿したので、更に豐後掾隨一の高弟である文字太夫に就て技を磨いた。然るに文字太夫一派には志妻太夫、造酒太夫などといふ先輩の脇語りが控えて居て、容易に擡頭することが出來ないので、延享四年文字太夫が、宮古路を改めて關東と名乘り、更に常磐津と改めて常磐津節を興した際、一旦常磐津小文字太夫と改めたが、翌寛延元年八月遂に文字太夫と分離し、宮本豐志太夫の名の下に宮本節なる一派を樹立した。

翌寛延二年正月、改めて掾號を鷹司關白家から受領して富本豐前掾と名乘つた。當時大名中の通人として洒落本にまで其の名を謳はれた雲州松江の城主松平宗衍（隱居して南海）侯は、彼れがために「年曾嘉例壽」（長生）の新曲を與へて新興の前途を激勵した。

更に筑前掾を受領す

寶暦二年中更に筑前掾を受領し、晩年（寶暦十二年）には豐前掾を廢して專ら是れを用ひて居つた。

明和元年十月二十日四十九歲で病死し、江戸淺草北松山町專修院に葬つたが、明治四十三年市外王子に改葬した。

二

二代目家元

豐前掾の歿後は、高弟の大和太夫が立語りに進み、伊津喜太夫、常太夫等が脇語りとして覇を唱へて居たが、明和三年、實子の午之助が十三歲の時、豐志太夫の名稱で、二代目家元を相續し、同年七月江戸中村勘三郎座の盆興

鶴の丸と櫻草の紋所

行に初舞臺で出演し、『文月笹一夜』の下の卷の立を勤めた。此折ではなかつたらうが、松平不昧公から「七重八重野邊のにしきや櫻草」といふ句を祝つて賜つたので、初代の鶴の丸の紋所を櫻草に改め、替紋を銀杏鶴懸追結一輪櫻に作つた。

安永六年正月豐志太夫を豐前太夫に改めて、中村座の初芝居に『花珍哉東小原女』を語り、文化十四年十一月嵯峨御所から掾號免許を得たので、翌文政元年正月から父の如く豐前掾と改號した。

劇場音樂としての富本の全盛時代

此人は天稟の美音で、劇場などの出語りにはいかにも適して居たので、舞踊劇に富本が最も多く用ひられたのは、此の人の全盛時代が一番で、有名な『其俤浅間嶽』等も、其の美音に依つて滿都の好劇家を陶醉させたと傳へられてゐる。

初代齋宮太夫の功績

この二代目豐前掾時代が富本の最も全盛期で、それには脇を語つて居た初代齋宮太夫の功績が與つて力を成したからである。

初代齋宮太夫は、初め伊津喜太夫と稱して初代豐前掾の門人であつたが、二代目が幼弱の頃から斯流の後見として脇を語り、安永六年二代目が豐前太夫と改名すると同時に齋宮太夫と改め、寛政六年剃髪して延壽齋となり、同九年更らに延壽となつて享和二年五月十八日七十六歲（或は七十三歲）で歿した。

延壽齋と改名

二代目齋宮太夫

二代目の齋宮太夫は寛政九年其の師の延壽の前名を襲ひ、寛政十一年立語りに昇進したが、其の師と異つて覇氣に富んでゐたから、文化八年に家元と衝突して不和となり、一旦廢業したが、翌九年の秋再び肩衣を着けて、中村座の九月興行に、豐後路清海太夫の名で出勤し、中村歌右衛門の『舌出し三番』の地を語つた。

清元節の創始

豐後路と稱しても等しく富本節であるから、苦情は八方から湧出して迫害したので、文化十一年遂に富本を離れて、清元節なるものを創始した。延壽太夫から、晩年剃髪して延壽齋となり、文政八年芝居歸りに刺客のために不

三代目家元

慮の死を遂げたのは、即ちこの二代目齋宮太夫であつた。

三

二代目豐前掾は、文政五年七月十七日六十九歳で歿した。實子が無いので、嘗て五代目瀨川路考の兄の豐太郎を藥の上から養子に貰ひ受けたが、養父に先き立つて文化十三年十八歳で夭折したので、文政六年二月更らに日本橋人形町の鬘屋善八の伜で十四歳になる善太郎を養子に貰ひ受け、文政八年十一月午之助と改名して三代目家元を相續し、市村羽左衛門座の顏見世興行に、『顏楓色夕映』の立を勤めた。

豐前太夫と改めたのは文政十一年で、市村座の彌生興行に『更名櫻の盞』といふ披露の淨瑠璃を上演した。嘉永四年三月豐前掾を拜領したので、同五年實子の豐紫太夫に豐前太夫を讓り、安政六年隱居して更らに寶珠翁と改め、明治九年五月七十二歳で病歿した。

四代目家元

四代目の家元豊前太夫は、弘化二年正月豊紫太夫で父の脇語を勤めたが、嘉永五年父が豊前掾と改むるに及んで四代目家元を相續して豊前太夫と改め中村座では阪東彦三郎、市村座では市村羽左衛門、守田座では市川海老藏が披露の口上を述べた。

富本中興の名人

此の四代目は富本中興の名人で非凡の藝才を有つてゐたが、當時は分家の清元が擡頭期で、古典的な富本が、江戸人士から漸々倦かれかゝつて來たので、昔日の全盛を挽回することが出來ず、明治二十二年九月脚氣を患つて六十七歳で歿した。

四

五代目家元

五代目家元を相續したのは四代目豊前掾の實子で、幼名を玉次郎といつた豊前太夫であつたが、明治十三年八月二十歳で夭折したので、驥足を延ばすことが出來ぬ中に櫻草は萎れたのである。

六代目家元

六代目家元は四代目の豐前掾が、一度隱居して豐州といつたが五代目歿後相續者として適當な者が見當らないために、再び乘り出したので明治十五年十一月新富座の舞臺で『田面雁露手枕（たのものかりつゆのたまくら）』を勤め、五代目尾上菊五郎が披露の口上を述べた。

此の六代目で富本は一段落を告げたやうに思はれ、其の後二十五年間といふものは、家元を相續するものが無かつた。

七代目家元

さしも全盛を誇つた富本節の流れも、明治の中期に及んでは、すつかり凋落してしまつたので、明治三十一年の春富本節の三味線彈であつた名見崎友治が、八方奔走の末、其の祖父が先代の藝を喜び、其の家に寄遇せしめたといふ緣故から、骨董屋の榎本某の次男清久を、豐志太夫の名の下に九歲の身を以て、七代目家元を相續させた。さうして同四十二年六月豐前太夫と改名した。

五

富本節の三味線

富本節の三味線彈としては、初代豐前掾の合方として宮崎忠五郎が立を勤めてゐたが、二代目豐前掾時代には名見崎徳治となり、鳥羽屋里長も常磐津と懸持で勤めてゐた。

名見崎と鳥羽屋

名見崎も鳥羽屋も初代は長唄の三味線彈きとして稀代の名人であつた。名見崎は松平出羽守から、其の撥さばきの巧妙なこと恰も浪の崎に寄るが如しと賞賛され、國音が相通じるので名見崎と家名を稱へたのである。鳥羽屋里長は、常磐津の名曲『關の扉』、『戻駕』、『山姥』等で非凡な節付を現はした名手で、富本の作曲の上品であるのは、斯ういふ名家の幇助があつたからであらう。

佐々木市四郎

この二家と共に立てを彈いた者に、佐々木市四郎がある。文字太夫の立三味線として名人の聲名他流を壓した佐々木市藏の門弟で、豐名賀一派の脫退

組に加入して師に背き、常磐津を離れて富本に入つたが、この人は家元をあまり彈かず、專ら齋宮太夫を彈いた。

里長の弟子で二代目里長と改めた里桂、里夕、三保崎兵助等は富本の三味線彈として現はれて居るが、時に常磐津と掛持して出入したので、純粹の富本としては名見崎一派より外は見ることは出來ないやうである。

六

名見崎德治の二世は元祖の門人安治が襲ぎ、三世は初代宮崎忠五郎の後裔である二世忠五郎が相續した。

四世は常磐津兼太夫の子兼藏が、三代目豐前太夫の推擧で一時襲名したが、三世の養子八五郎が成人するに及んで、五世を讓つて、自分は名見崎得壽齋と改めた。

六世德治は、友治事吉野萬太郎といふ人が繼承したが、五世の遺族から苦

情が起つたので、先師の隱居名の二世得壽齋と改め、專ら富本節の復興に盡力した。然るに明治三十三年宗家と不和となり、一旦廢業したが、同年五月有志の後援の下に、新たに名見崎流を樹立し、家元となつた。丁度常磐津の三味線から岸澤が生れて、不和の結果、岸澤派として常磐津の別働隊をこしらへたのと酷似してゐる。

現在の富本豊前

今の富本豊前は四代目家元の門人で本名を阪田らくと稱へ、師の歿後、一時廢業してゐたが、二世得壽齋が名見崎流の旗擧をなした時、一派に加つたので、中川愛氷氏が得梅の名を選んだ。其後七代目家元として豊前太夫が立つに及んで、改めて宗家に走り、名取となつて豊鶴と改め、明治四十二年九月新派を樹立して、其の家元の認可を受け、富本都路と名乘り、大正に入つて豊前を襲名し今日に及んでゐる。

而して今日では斯道に於ける唯一の老師匠として仰がれ、七十一歳の老軀を以て娘の都路と共に專ら門下を養成し、衰滅に歸せんとしつゝある江戸音

樂の復興に全力を盡し意氣の健氣さを示してゐる。

新内節の歴史

一

豊後節の流れ

新内節は常磐津節と同じく、寶永享保時代に流行した豊後節から胚胎したものである。

宮古路豊後掾によつて興された豊後節が時の官憲から迫害され、風俗壞亂の名の下に禁止の厄に會つたので、豊後掾の門人達は、師の歿後處世上の爲めに等しく去就に迷つた。一旦汚辱を蒙つた宮古路の看板では、將來の發展上に面白くないといふのが同門達の衆口一致するところであつた。

富士松薩摩掾

そこで最も早くこの看板の塗直しを行つたのが、宮古路加賀太夫であつた。機を見るに敏なる彼は、延享三年に富士松薩摩掾と稱して、一派を樹立した。さうしてこの薩摩掾の門下には敦賀太夫、加賀八太夫といふ鬼才が轡を並べ

てゐた。

敦賀太夫は通稱を高井庄兵衛といつて越前敦賀の産、幼少江戸に出で、御家人の家に養はれたが、放蕩の結果、養家を棄てゝ宮古路加賀太夫の弟子となり、師が富士松一派を立てた時、彼も師と去就を同じくして富士松と改めた。

然るに師の薩摩掾は、同門の常磐津の元祖文字太夫と併稱される大人物ではあるが、其の語るものは、豐後掾の遺作か又は義太夫畑の借り物を傳へるといふのみで、一歩進んで新作に手を付けやうといふやうな意氣も無く、その性質も晩年は、『質屋になり、一とせ盜人に千五六百兩取られても跡の困らぬ身上』(幸野茗談錄)といふやうな處世家であつたから、天才肌の敦賀太夫とは何うしても意氣が合はなかつた。

二

鶴賀若狭掾

鶴賀新内

敦賀太夫は寛延元年遂に師の許を離れ、獨立して朝日若狭掾と名乗り、其旗擧披露に江戸森田座に出勤して『お花半七』を語つた。然るに朝日の名は幕府の禁ずるところとなつて封じられたので、更に鶴賀若狭掾と改名した。

この若狭掾は又文才にも長じ雅號を大木戸黒牛と稱し狂歌にも知名であつたから、『明烏夢泡雪』『歸咲名殘命毛』『若木仇名草』『傾情音羽瀧』『戀衣對白無垢』『二重衣戀占』『仇比戀浮橋』『浮名初紋日』『眞夢血染抱柏』『二重衣扇屋染』等等、その語るところは總て自作自曲といつていゝくらゐであつた。

さうして相弟子であつた加賀八太夫が非凡な藝才を有つてゐることを觀破し、何卒自流に加入して客分として盡力せられんことを懇請したので、加賀八太夫も止むを得ず富士松薩摩掾を脱退して、鶴賀姓を冒し、鶴賀新内と稱した。

この新内、文才こそ若狭掾に比して乏しいが、天稟の美音は到るところに持て囃やされ、遂に鶴賀一派を新内節と呼ぶやうになつた。これが卽ち今日

の新内節の始祖である。

畢竟若狹掾は廂を貸して母屋を取られたやうなハメになつたのであつた。

新内は若狹掾よりも四歳の年長で、安永三年六十一歳で歿し、若狹掾は天明六年七十五歳で歿した。

三

若狹掾には男子が無かつたので、娘のおこんが鶴賀二世を相續し鶴吉と稱し、歿後更らに其の娘のおつぢが二世鶴吉となつて三世家元を繼承した。

新内の方には男の子があり、加賀吉から加賀八太夫となつたが、何故か新内の名義は相續しなかつた。

二世新内を名乘つたのは、鶴賀加賀歳又は若歳といふ盲人であつた。

三世新内は通稱を彥次郎後ち吉右衛門といつた人が襲名したが、此の人は初め加賀歳の名を繼ぎ、島太夫、加賀八太夫の名を經て新内を相續したので、

更に豐名賀蘭太夫、出雲太夫、或は都路加賀太夫、津留賀文彌等等と變名し、文化から文政へかけて熾んに活躍した人であつた。

これ等の事情を綜合して推定すると、若狹掾と新内との關係は、初代限りで、二世以後は全然互ひに別々な行動を取つて活躍したのである。

然るに一方には、更に鶴賀若狹太夫なるものが、文化の末年頃から跳梁して二世を經てゐる。

今日傳はつてゐる新内系譜などでは、此の若狹太夫は二世鶴吉（つぢ）の門人貞之助なるものが、四世家元を冒し、其の長男貞次郎が同じく若狹太夫を相續して、五世鶴賀の家元を襲つたとしてある。併しこの說はなほ疑問の餘地がある。

鶴賀若狹太夫

又一方には若狹掾の師である富士松薩摩掾の後繼者には、其長子吟太夫が二世となり、更に其の子の吟中が三世となつたが、事歴の傳ふべきものを聞かないから、さして名人でも無かつたらしく、のみならず、この三世で其の

吟太夫、吟中

家は中絶して仕舞つた。

四

加賀太夫改め魯中

こゝに天保末期の鶴賀派に四代目加賀八太夫を名乗つた非凡の天才が顯はれた。三世家元(鶴吉のおつぢ)の娘と通じた科で、同派を逐はれた爲めに、吟中以來中絶した富士松一派を再興し、加賀太夫と名乗つたが、後に魯中と稱した。

新内節中興の祖

此人が新内節中興の祖と仰がれた名人魯中で、『正夢』『彌次喜多』『石童丸』等等其他數曲の新作があつた。文久元年六月六十九歳で歿したが、此人に二人の男子があつた。

長子を島太夫と稱し、次子を富士太夫といつたが、長子は故あつて江戸を失踪した爲めに、次子が富士太夫から五世加賀太夫を相續した。

五世加賀太夫

この加賀太夫も父に劣らぬ名人で、『高橋お傳』『花井お梅』『赤垣雪の別れ』

「沼津」等の新曲に手をつけて當時の藝界に一頭角を現はした人であつたが、明治二十五年十二月十日三十八歳で歿した。巷説によると兄の島太夫が二十三年目に瓢然として薩摩から歸京し、富士松の家名を相續せんと主張して我意を振つたので、小心の五世は病となり、終に自刄したとも云はれてゐる。

六代目家元

五世の高弟である現時の七世家元加賀太夫、當時の津太夫は大に島太夫の措置を憤つて、其の不德を鳴らしたさうだが、既に家元を失ひ、血緣のものとては女子あるばかりであつたので、遂に島太夫が魯中となり、六世家元を繼承した。

しかし是れ等の不德事件が祟つたか一向に東京では人氣が無く、遂に再び諸國を流浪し同二十九年名古屋地方で四十五歳で歿したと傳へられてゐる。

薩摩常と花園節

なほ幕末頃には、右の人々の他に通稱薩摩常といふ芝神明前の茶屋岡本の主人が吾妻路富士太夫と名乘つてゐた。市村羽左衛門が贔負にしたので、其の庇護で市村座へ出勤し、默阿彌作の世話狂言に現はれる新内は大概この薩

七世加賀太夫

摩常の出語りであつた、

　然るに當時あまり振はなかつた鶴賀派の嫉妬するところとなつて公事沙汰に及び、敗訴となつたので吾妻路の姓を剝奪された爲めに、花園宇治太夫と改めたが、間も無く病歿した。先年一部の智識階級の間に一寸騷がれた花園一聲は此の一派を繼承したのであつた。

五

　現今の新內では何といつても富士松加賀太夫が、斯界を代表してゐる。加賀太夫は通稱小林文太郎、安政三年京橋南鍋町に生れ、七十二歲の老齡である。初め富士松志賀太夫の門に入り、後五世家元加賀太夫の內弟子となつて津賀太夫といつたが、六世歿後七代目家元となり、加賀太夫と改めて今日に及んだ。壯年の頃は九本の聲を出したといふだけ、無類の美音は、延壽太夫と併稱されて各派一流の士と伍しても遜色を認めない。

吾妻路宮古太夫

富士松紫朝

鶴賀派

加賀太夫の實弟吾妻路宮古太夫も又當代の語り手である。初め鶴賀若秀の門に遊び、鶴賀小秀太夫と稱し、直太夫となり、轉じて加賀太夫の三味線を勤めてゐたが、明治四十四年頃吾妻路を再興して家元となり、宮古太夫と改めた。

近世の名人には大正五六年頃物故した富士松紫朝を逸することが出來ない。筑後久留米の人で、四世魯中の門に入り、後に紫朝と改め明治初年頃から、二十五六年頃まで、寄席で人氣を博してゐたが、加賀太夫とは又別種の趣致があつた。

鶴賀派では、升六といつた鶴賀齋が女ながらも非凡な手腕を持つてゐた。今日では實子のまんが母の名跡を繼いで、一方の雄として氣を吐いてゐる。

鶴賀派の家元は一時中絶したが明治四十年に歿した築地の三熊によつて再興され、歿後は妻女鶴吉の後見で、實子が大正六年中に鶴賀若狹掾を襲名したが、其手腕は未知數に屬してゐる。

岡本流は二代目鶴賀新内の門人鶴賀八尾太夫が、後に岡本宮古太夫と名乘つたのが最初で、二代の家元は初代宮染で、次ぎが市川鯉昇といつて三崎座の座頭を長く勤めた女役者の宮染で中絶したが、大正十二年加賀路太夫が富士松派を分離して岡本文彌と改めて岡本流を再興した。

文彌は文筆に長じ、敏才あり、古來の淨瑠璃に慊らずして、『金澤情話』『酒中日記』『秘藥紫雪』其他數曲の新作を發表してゐる。

其他の老練家には富士松派に松老、同島太夫、同富士太夫あり、鶴賀派に鶴賀若狹老、同加賀八太夫、同妻太夫あり、女流の名手としては岡本宮染（文彌の母）を第一として、富士松佐賀尾、鶴賀吉之助、富士松加賀吉等等が數へられる。

富本及新内全集索引

富本之部

い

幾菊蝶初音道行……三
徒髪戀曲者……九
色法印……六九
色かへぬ……一〇二
一度清容を見て……一六一

は

母育雪間鶯……一六
春夜障子梅……二四
花川戸身替の段……三〇
俠客形近江八景……一二八
梁特が愚痴には……一五四
花車……一七二

に

拙筆力七以呂波……四三

ほ

蓬萊宮……四五

と

歳朝嘉例壽……四六
豐國が筆に……七二
鳥が啼く……九六
道成寺道行……一一八

ち

長生……四六
ちらし書仇命毛……四九
長作……一五四

お（を）

乙姫……四三
お菊幸助……四九
老松……五四
お浦新三……五六
お菊幸助……八八

お三輪……九八
落人の爲かや……一四二

か

加賀のお菊は……四九
神樂獅子……一五五
神樂囃して……一五五

た

忠信……三
田面雁露手枕……五六
逢模樣吾妻八景……五八
玉川……九六
高尾懺悔……一六一

そ

そもそも松の……五四
其俤淺間嶽……六三
染幟菖蒲彩色……六九
柳絲戀苧環……九八
袖藏る……一四六

つ

月柳廓髪梳……七二
月は程なく……一一八

な

茂懺悔睦言……七四
流れは常に……七四
七重咲浪花土產……八五
浪花土產……八五
名酒盛色中汲……八八
那須野……九三

む

蟲賣……一〇二
昔男ありけり……一〇八

う

梅が香を……八五
梅川忠兵衛……一四二

く

草枕露の玉歌和……九六

鞍馬獅子……一三〇

や

山姥……一六

ま

松風……九
松島や……九
簾々に佇みて……六九
より／＼連理の橋……一〇二

け

稽古娘……八五

ふ

冬編笠の……二四
深窓の振袖……八五
鼻松椎の……九三
船の高尾……一一三

こ

戀と忠義は……三
小いな……三八
小ぎく……三八
戀風の……三八
戀をする身は……九八
艶容錦繪姿……一〇八
碁盤忠信……一四六
五蘊假に……一六五

あ

雨の降る夜は……三〇
新玉の……四六
あさま……六三
あはれ古を……六三
扇賣高尾……七四
嵐の誘ふ……一三〇

さ

小夜更けて……三八
咲く花の……八八
澤紫色水上……一三三
咲初花振袖……一一八

さても見事え……一七二
き
君が代の……四五
聞き馴れし……九六
木やり……一七二
ゆ
夕霧……二四
雪解松操徽……一一〇
行方定めぬ……一二〇
め
女婦酒替ぬ中仲……一三〇
み
身替お俊……三〇
道行念玉蔓……一三四
道行戀飛脚……一四二
し
四面峨々たる……一六
新萬歳……七二
新お七……一〇八
茂り生ふ……一一三
十二段君が色音……一四六
十二段……一四六
新曲神樂獅子……一五五
新曲高尾懺悔……一六一
ひ
日の本は……四二
檜垣……一六五
も
百夜菊色世の中……一六五
せ
關寺……一六五
全盛操花車……一七二

新內之部

い
一の谷嫩軍記……一七七

一の谷……一七七
妹背の門松……一八四
愛し殿御と……一九一
石童丸……二二七
市子口寄の段……二六九
いでやこの……二七八
急ぎ行く……三八二
出でゝ行く……四五〇
稲川内の段……四五〇

は

初日の松……一八九
花衣いろは縁起……一九一
花開平三……三一八
花咲綱五郎……三四二
早衣喜之助……三七三
春の宵一刻千金……四一九

に

賑や賑ふ……二一六

ほ

法印場……四三四

と

道中膝栗毛……二五一
鳥が鳴く……二七四
とう／＼たらり……三九二

り

良辨杉……一九一

お（を）

面白や……一八九
お染……一八四
男作川世貝唄……一九三
折から來る……一九五
尾上伊太八……二一六
凡そ萬物……二九六
お園六三……三〇七
音羽丹七……三二八
お花半七……三五三

夫も涙打拂ひ……三六七
お駒才三……二七八

わ

若木仇名草……二〇五

か

娥々たる……二〇五
歸咲名殘命毛……二一六
苅萱桑門筑紫轢……二二七
加賀見山舊錦繪……二三三
加賀見山……二三三
釜淵双級巴……二三八
累身賣……四二四
累身賣の段(上の巻)……四二四
累身賣の段(下の巻)……四一六

よ

唄話情浮名横櫛……二四四
寄邊の磯の……二八九
夜櫻……四一九

た

高橋お傳……二八九

そ

その昔……三四二
宗吾住家の段……三六三

つ

露時雨襲浪……三五三

な

浪枕浮名高橋……二八九
浪之助毒殺の段……二八九

ら

蘭蝶……二〇五
卵塔場の段……二八四

む

無憋やな……三〇二

う

浮名初紋日……二九六
梅川……三三四

浮氣鳥と……三五三
寄波義助……三八六
梅の由兵衛……三九四
浦里部屋の段……四〇三
浦里雪責の段……四〇九
浦里時次郎道行の段……四一四
姥ヶ餅……四四一
浮世両餅……四四一

え

江戸紫の……二四四

く

組打の段……一七七
暮らしゐる……二三八
組打の段……二五一
草枕ゆふべゝ……二六一
廓文章……三〇二

や

彌次喜多……二五一
彌次郎兵衛は……二八四
八重霞浪花濱荻……三一七

ま

繼子責……二三八
繼子責の段……二三八
眞夢血染抱柏……三一八
雛々で……三三八
待宵に……三八六
正夢……四一四

け

源氏店……二四四
傾情音羽瀧……三三八
傾城三度笠……三三四

ふ

富士川の段……二六一
二重衣戀占……三四二
不斷櫻下總土産……三六三
雙紋刀銘月……三五三

薩摩戀の柵……三七二

こ

これはこの間……一八四
御祝儀……一九九
高野山の段……二一七
小七菊の井……三九六
こゝも流れの……三〇七
子別れの段……三八七
戀娘昔八丈……二七八
戀衣對白無垢……三八六
子寶三番叟……三九三
御祝儀……三九二
この廣い大阪に……四五八

あ

あと打見やり……一三二
安倍川の段……二七四
赤阪並木の段……二〇八
あはれなり……三九四
茜染野中隱井……三九四
明烏……四〇三
明烏夢泡雪……四〇三
明烏後の正夢……四一四
案じゐる……四二四

さ

さる程に……一七七
榊屋口說の段……二〇五
草履打の段……二三三
さあ〳〵……二六九
佐倉宗吾……三六三
里空夢夜櫻……四一九
三勝半七……四五八
三勝緣切の段……四五八

き

伽羅は不斷の……三一八
嚴しけれ……四〇九
鬼怒川物語……四二四

鬼怒川昔噂……四三四
鬼怒川と文字に……四三四

ゆ

行空の……二二七
夕霧伊左衛門……三〇二
夕暮毎の浮雲に……四〇三
行く空に……四五五

め

名物姥ケ餅……四四一

み

都路は……一五一

し

白藤源太……一九五
舊屋敷の段……三〇七
城木屋の段……三七八
忍び寝の枕二つ……四一四

ひ

百乗の家には……三六三

せ

栴檀は二葉より……三七三
関取千両幟……四五〇
千両幟……四五〇
千日寺名残鐘……四五八

す

すめる世の……三三四
生業は……三七八
鈴ケ森の段……三八二
相撲場の段……四五五

冨本及新内全集索引 終

昭和二年五月二十五日印刷
昭和二年五月三十一日發行
昭和四年六月三十日改訂五版發行

日本音曲全集
富本及新內全集
定價金一圓八十錢

編輯者　中内蝶二
　　　　田村西男

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行人　小川菊松

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷人　川崎佐一

東京市神田區錦町一丁目一九
電話神田　〇四七一・三二二七
　　　　　二三九六・四〇三九
振替東京六二九四
發行所　誠文堂